SD

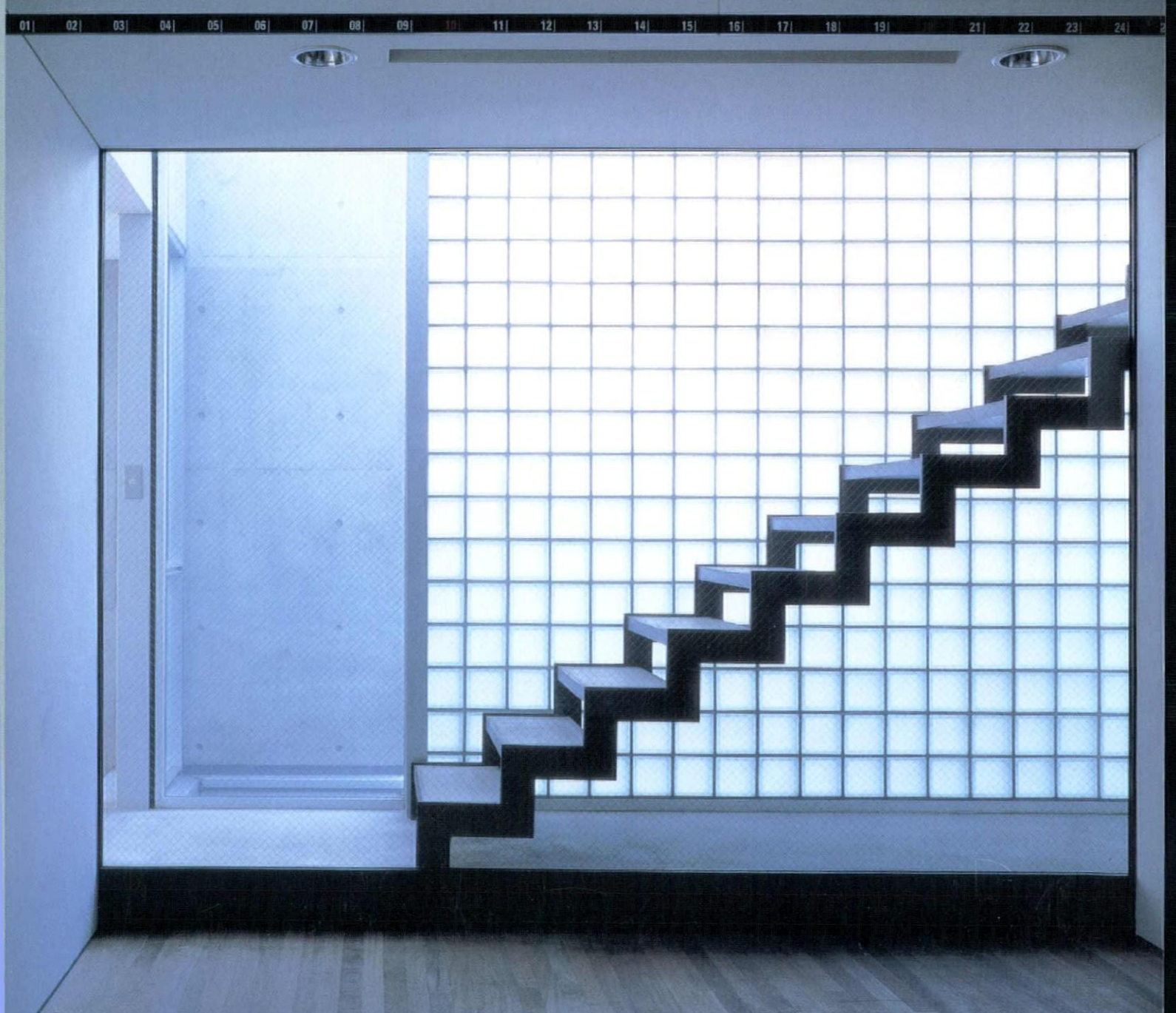
9809 Space Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第408号1998年9月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

特集

ディテールが創る風景：
細部に宿る美と技巧
The Landscape of Detail: Its Art and Techniques

飯田善彦建築工房
小川晋一都市建築設計事務所
KAJIMA DESIGN
岸和郎+K.ASSOCIATES
竹中工務店
谷口建築設計研究所
槇総合計画事務所
宮崎浩／Plants Associates
渡辺明設計事務所



Monthly Journal of Art and Architecture

KANDENKO









大切なのは、
何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TTNet 03(4431)2111

快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事■外線工事

東光電気工事株式会社

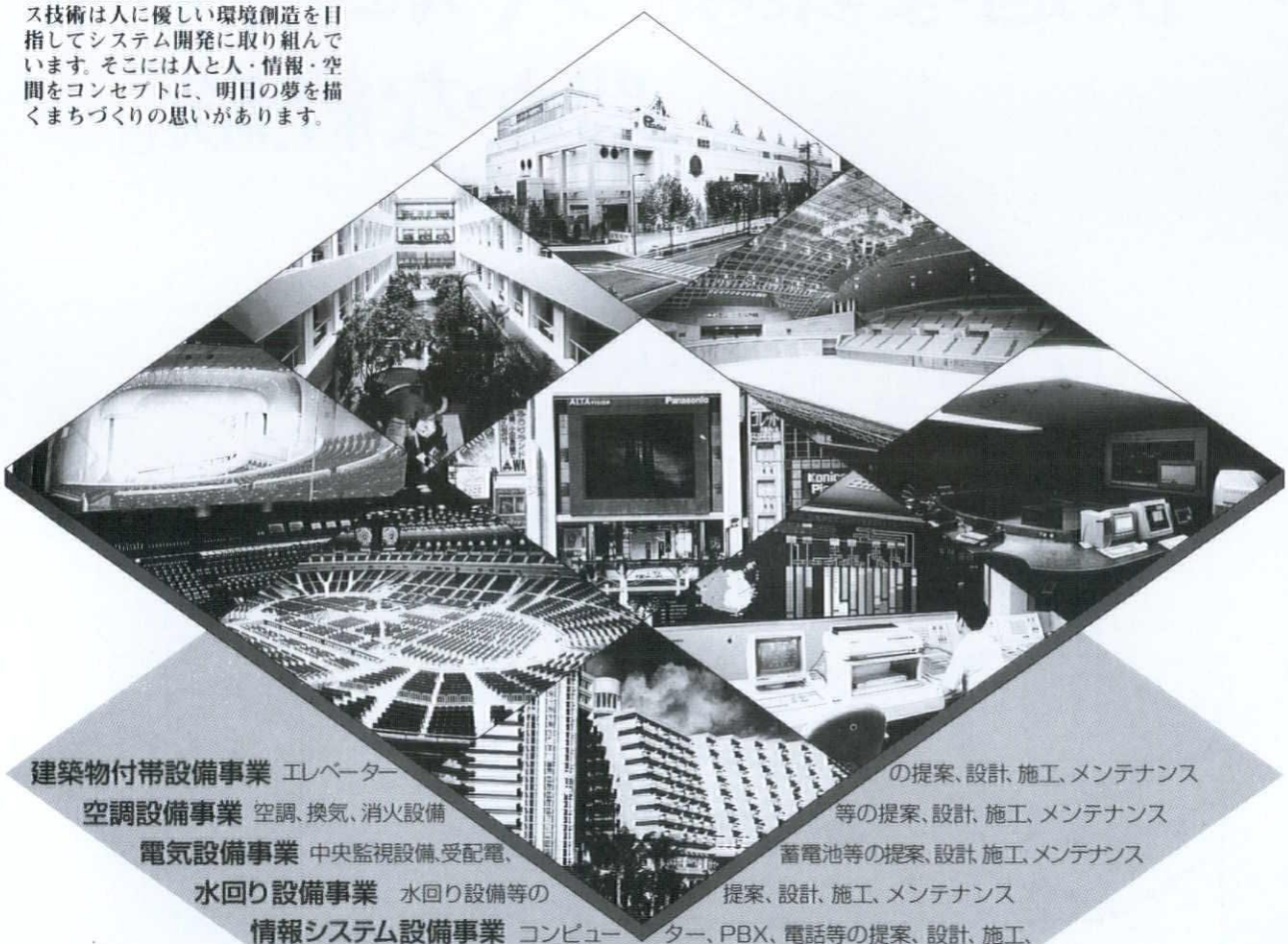
本社　〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5　TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター　の提案、設計、施工、メンテナンス

空調設備事業 空調、換気、消火設備　等の提案、設計、施工、メンテナンス

電気設備事業 中央監視設備、受配電、　蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

水回り設備事業 水回り設備等の　提案、設計、施工、メンテナンス

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。

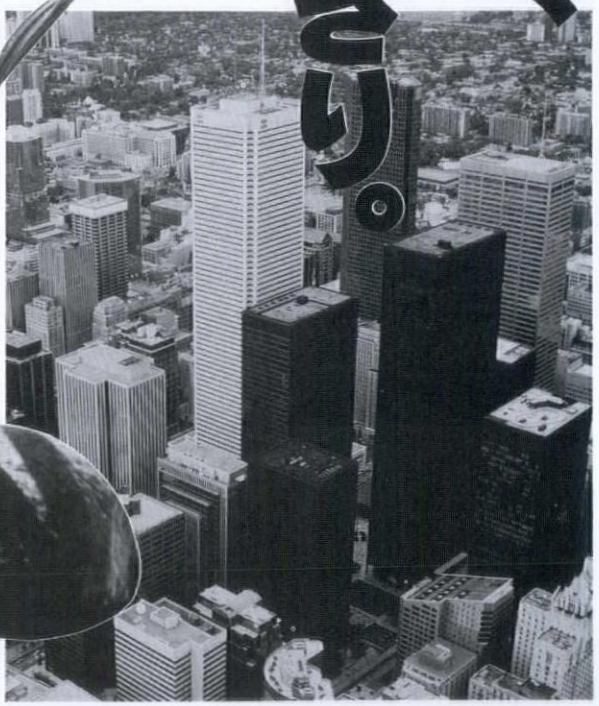


AV&CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM



この世に雨の、降るかぎり。



自然が私たちに雨と光を与えてくれる限り、
今日もどこかで新しい生命が芽生えます。
私たち日新工業の防水材料も、
人々が快適な暮らしを望む限り、
建築と共に今日もどこかで生まれています。
多様化する都市空間の生活環境づくりにおいて、
日新工業はつねに新しいトレンドを見据え、
時代のニーズにフレキシブルに応える
防水材料・工法を開発しつづけています。

アスファルト防水　合成高分子シート防水　塗膜防水　改質アスファルト防水　土木防水　シングル葺き

マルエス S 日新

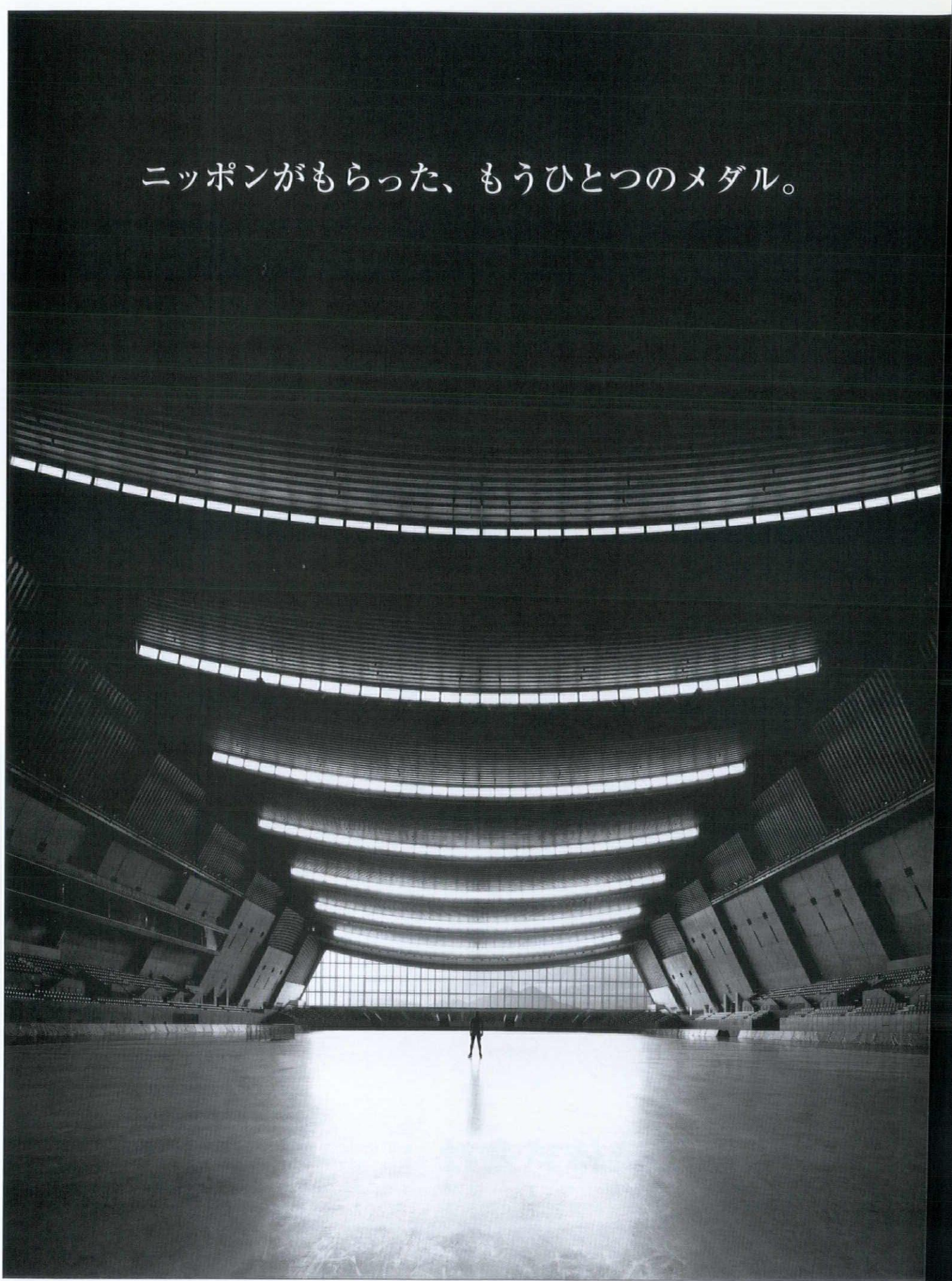
総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部〒103-0005/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

札幌 ☎011(281)6328(代表)　名古屋 ☎052(933)4761(代表)
仙台 ☎022(263)0315(代表)　金沢 ☎0762(22)3321(代表)
大宮 ☎048(642)5811(代表)　大阪 ☎06(533)3191(代表)
東京 ☎03(5644)7221(代表)　高松 ☎0878(34)0336(代表)
千葉 ☎043(227)9971(代表)　広島 ☎082(294)6006(代表)
横浜 ☎045(316)7885(代表)　福岡 ☎092(451)1095(代表)

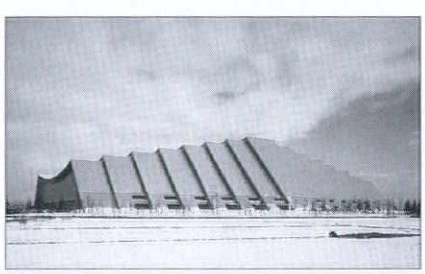



ニッポンがもらった、もうひとつのメダル。

数々の感動が生まれた。その舞台になれた。それだけで、十分幸せでした。でもその舞台のことまで、
見ていてくれた人々がいたのです。そのことが、とにかくうれしかった…。

ナガノのスピードスケート会場として、一躍その名が知られるようになった、「エムウェーブ」。
先頃、この建築が、世界の著名建造物が名を連ねる「英国構造技術者協会特別賞」を受賞しました。
この賞は、シドニーオペラハウス、ポンピドーセンター等、過去３０年間でわずか５６件というごく少数の建築・
土木作品に贈られてきた、「建造物の金メダル」といえるもの。日本からは、初めての選出となります。
評価の対象となったのは、ドームとは逆に真ん中の下がった、「木造吊り屋根構造」。Mの字が連なる
ようなデザインの中に、「空調負荷を少なく」「音響効果を優れたものに」「結露や露垂れのないように」等々、
最高のスケート競技の実現を願う、わたしたちの思いの丈が込められています。
でも実は、この構造、スケート以外の使い方をするときには、もっと威力を発揮します。なぜなら、真ん中が
下がっている分、空間の容積が小さくなり、気持ち悪い残響もないので、アリーナ全面を使うときはもちろん、
区切って小さく使うとき特に有利なんです。

建築とは、「建てること」ではなく「使われること」。わたしたちはそう考えています。だからこそ“M”ウェーブは、
“S、L兼用”にこだわってつくりました。これから長い時間を経て、いろんな人に使われ愛され続けるエム
ウェーブがそこにあるとしたら、それこそが、金メダルより価値があること。受賞後もその信念は変わりません。



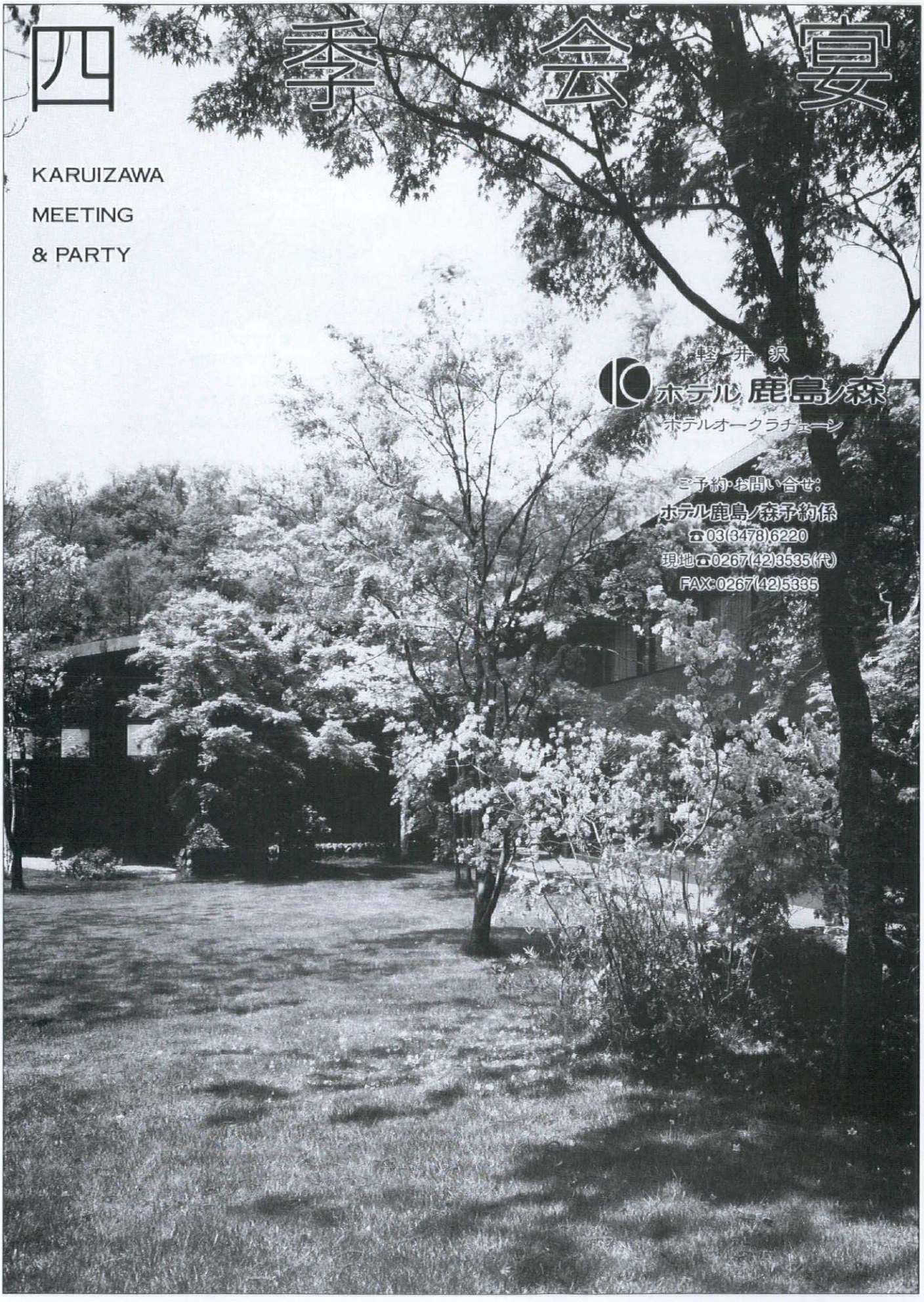
長野市オリンピック記念アリーナ「M wave（エムウェーブ）」
設計：久米・鹿島 ほかＪＶ　施工：鹿島 ほかＪＶ

エムウェーブは、日本建築史上初めて、『英国構造技術者協会特別賞』を受賞しました。

ある日、
その発想に
人は集まる。

鹿島

東京都港区元赤坂 1-2-7 tel.03-3404-3311 〒107-8388
http://www.kajima.co.jp/


四季会宴
KARUIZAWA
MEETING
& PARTY
軽井沢
ホテル鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン
ご予約・お問い合せ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

〔客室&施設〕

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した2,000㎡の"ガーデンプール"。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル〈3F〉。ガーデンプールの一角に設けられたガーデンチャペル〈5F屋外〉。厳粛な神殿(八幡殿＝やひろでん)〈3F〉。●最大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプのヘルスクラブ"ジ・イースト"。●都内初のホテル直結型多目的ホール"イースト21ホール"。

〔レストラン&バー〕

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル

HOTEL East 21 TOKYO

地下鉄東西線『東陽町駅』より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

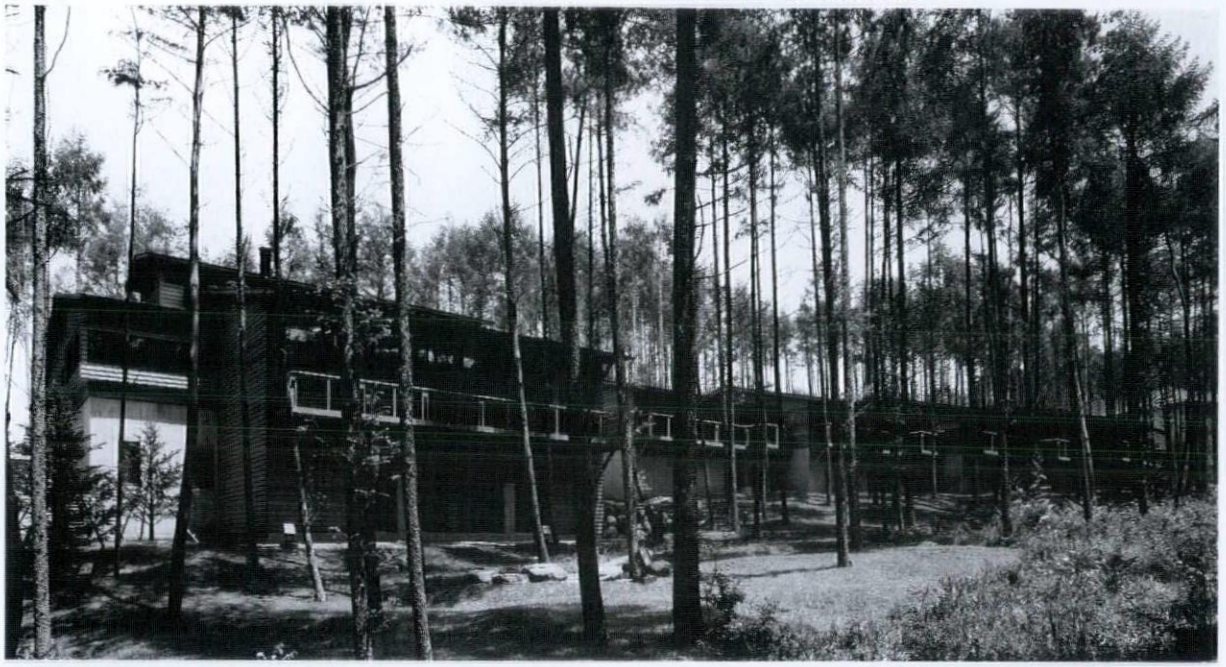
ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683㈹ FAX 03(5683)5775

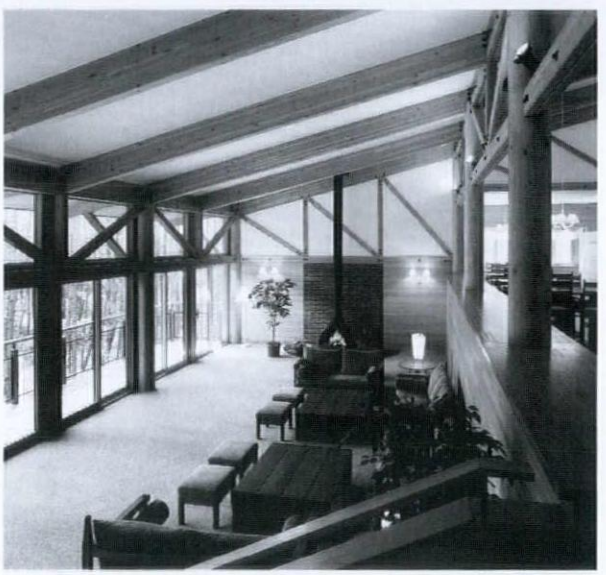


大興物産の海外建材シリーズ

No.6　木製品(ツーバイフォー,集成材)







大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

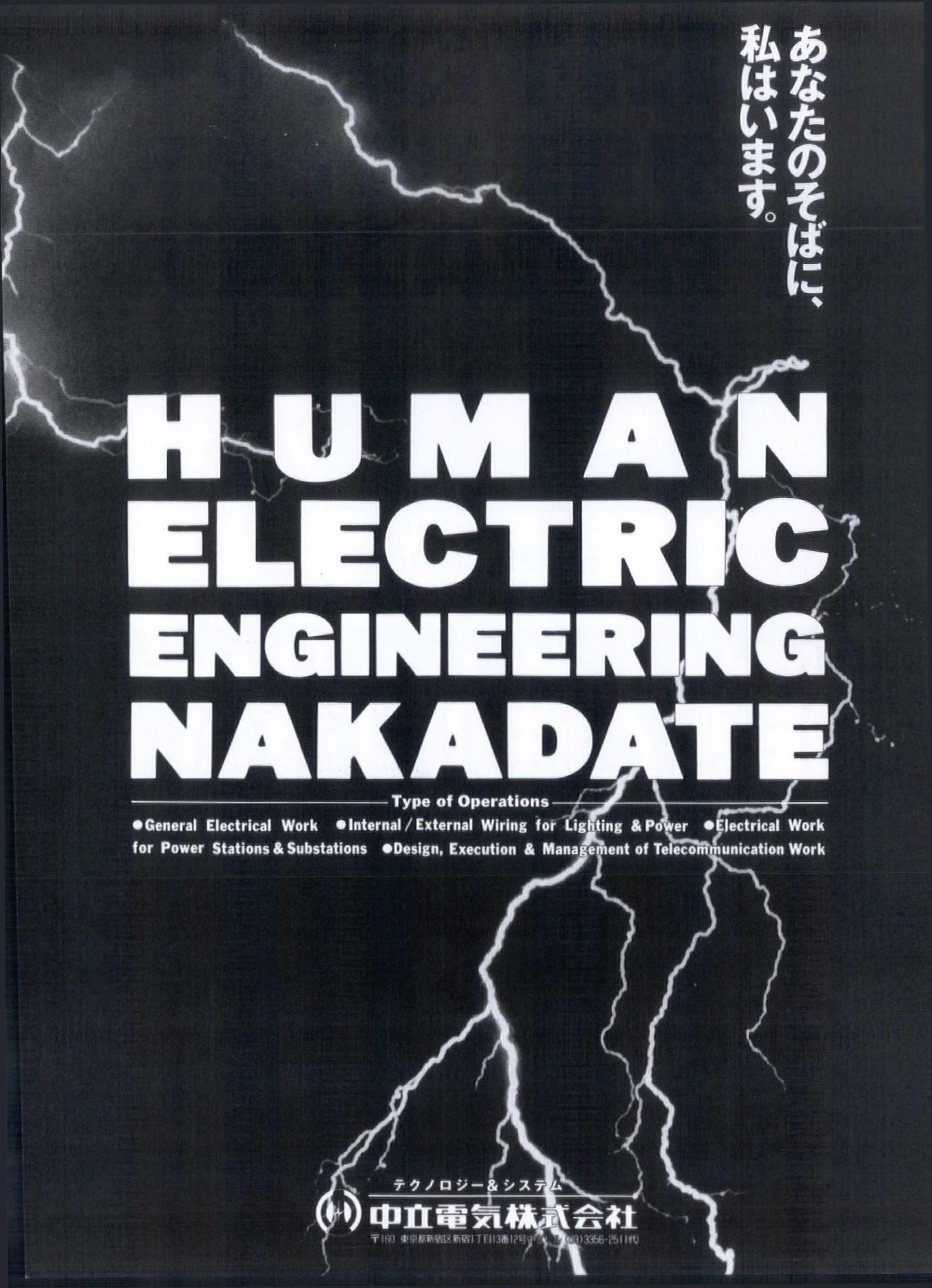
お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ　**大興物産株式会社**

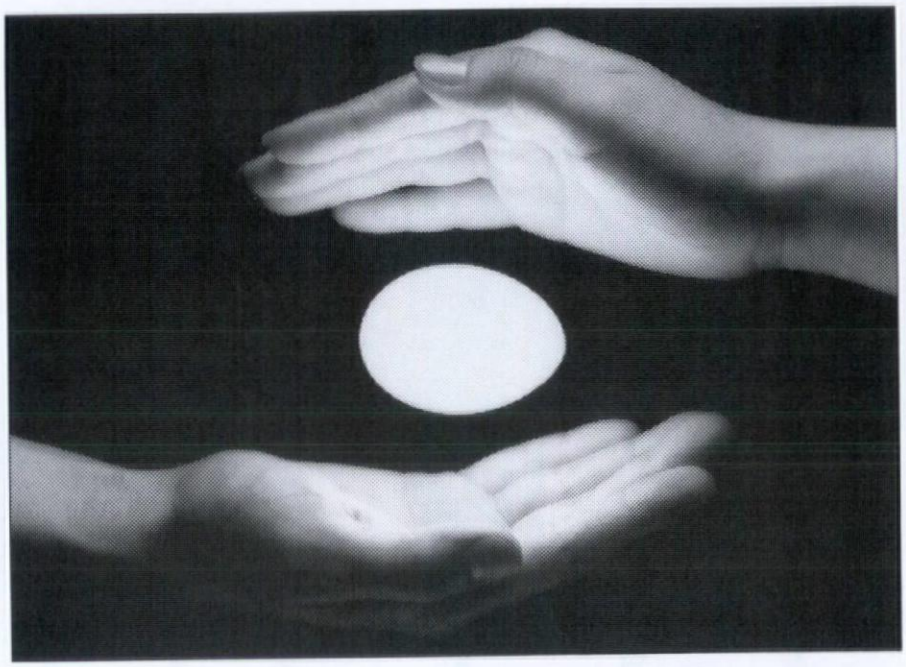
本　社　〒107-8307 東京都港区元赤坂1－6－4 安全ビル

本　社	☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719	シンガポールオフィス	☎65-3440590　FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248		
大阪支店	☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270		


あなたのそばに、
私はいます。
HUMAN
ELECTRIC
ENGINEERING
NAKADATE
Type of Operations
●General Electrical Work ●Internal / External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work
テクノロジー&システム
中立電気株式会社
〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号
TEL (03)3356-2511㈹

SANKEN
ENVIRONMENTAL ENGINEERING

設備は手にとって選べません。
だから……



大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式會社

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町1-35-8 TEL.03-3667-3431

信頼と確かな技術で未来を築く

大栄電気株式会社

代表取締役社長 伊藤 赳

本　　社　東京都中央区銀座3−7−10　TEL03(3562)0311(大代表)　FAX03(3562)0300
支店営業所　大阪,名古屋,北海道,東北,北関東,東関東,神奈川,浜松,神戸,四国,中国,九州,沖縄

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。



いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

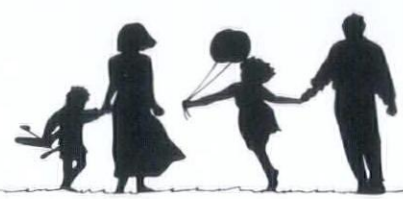
先端技術で、システムする。
TOENEC
株式会社 トーエネック
本　店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06) 305-2181

YUME 夢 TRONICS

夢×技=∞

無限大

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が出会う時
私たちのフィールドは
無限大です。



何時もあなたの街で、お会いしている クリハラ。

私達の生活環境に必要な電気設備・エネルギー情報通信・環境の分野で企画、設計、施工、保守にわたる一貫したシステムで事業を展開しています。

創業1919 あなたの街でお会いしています
K 栗原工業株式会社
本　社／〒530-0017 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(313)1101
東京本店／〒105-0012 東京都港区芝大門1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

より快適な水環境をめざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18　TEL.(03)3452-7441大代表　支店／札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋　事業内容／給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号＋消費税、送料込み）

SDバックナンバー常備店
［東京］
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店（神田）
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
［大阪］
旭屋書店本店
柳々堂 06-443-0167
［札幌］
旭屋書店 011-241-3007
［横浜］
有隣堂本店 045-261-1231
［京都］
大龍堂書店 075-231-3036
［大学生協内書店］
東北工業大学　東京工業大学
法政大学工学部　早稲田大学理工学部　関東学院大学

9609　デンマーク・モダンハウスの最盛期　1988円
デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴー・ハウス、ヨーン・ウッツォン、他［山上の都市と塔の家――イエメン：都市と住居の形態学］文＋写真＝芦川研究室

9610　中世の光と空間　1988円
フランス中南部のロマネスク建築を紹介。ル・トロネ修道院、他。写真＝堀内広治、文＝羽生修二、他［ふたつの都市考〈近代都市と芸術展〉〈未来都市の考古学展〉］［97の椅子プロジェクト］

9611　栗生明　2548円
彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳冒険館、カーニバル・ショーケース、他。［田窪恭治のサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト3］

9612　SDレビュー1996　1988円
第15回SDレビュー誌上発表。ユストス・ビザール＋ペーター・ルーゲ、高橋昌巳、城戸崎和佐建築設計事務所、他［伊丹潤の近作より：石彩の教会、木の教会、土の教会］

9701　葉祥栄：カリステニクス　3059円
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス、他

9702　木を生かした架構と空間　1988円
木の性質を生かした国内外の25例を紹介。金山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口衛、今川憲英［アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より］アジアの都市・建築の現在、未来を問う。

9703　ミニマル・スペース・アーキテクチュア　1988円
ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ポーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他［東京国際フォーラム］写真＝堀内広治

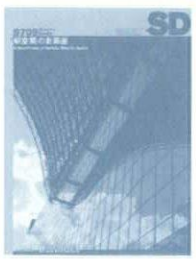
9704　拡張するデジタル・デザイン　3059円
コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、勝幡正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他

9705　アフラ＋トビア・スカルパと「ベネトン」　2000円
アフラ＋トビア・スカルパによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＋インタビュー＋写真＝豊田博之［都市ビサとカルマッシの仕事］カーサ・ムーティ、ヴェルディ劇場修復計画など

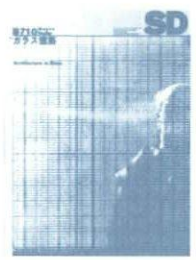
9706　柳澤孝彦：劇場の空間構成　2000円
新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三　対談＝川向正人×柳澤孝彦［装飾を排したフォルムデザイン――スウェーデンのグッドデザイン展より］

9707　加速都市・香港　2000円
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクーングラフィックス、浅川敏、江頭慎、他　監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光　文＝松田直則

9708　R.ヴェンチューリ＋D.スコット・ブラウン　2447円
日本での処女作（メルパルク日光霧降）を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他［岐阜県営北方住宅プロジェクト］談＝磯崎新



9709
駅空間の新曲面
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、鵜飼孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司　写真＝大野繁
2000円



9710
ガラス建築
光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他
3000円



9711
隈研吾
ポストモダン以降の建築における言説を続けてる隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。慰霊公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン。対談＝槇文彦×隈研吾
2800円



9712
SDレビュー1997
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所＋佐久間達也＋楠瓜宏直＋重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤穣、他。［光と色が彩る空間――チェコのガラスアーティストたち］写真＝鈴木豊
2000円



9801
SDレビューの15年
これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出展作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝槇文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉眞琴＋鈴木了二＋栗生明＋小嶋一浩
2800円



9802
都市へ向かう透明性：スイス・ドイツ語圏の建築
スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク＆ド・ムロン
2200円



9803
表層革命再考：チェコ・キュビズム-ロンドキュビズム建築
現存するプラハのキュビズム建築を撮り下ろし写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。［香山壽夫のドローイングと空間］文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木恂、青木淳
2000円



9804
次世代のマルチ・アーキテクトたち
30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナリーズ、みかんぐみ、他。［デスクトップ・コミュニティ］
2000円



9805
空間演出の最前線
建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村綿平、新宮晋、他。［カーロとリベラの家］ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン
2000円



9806
風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦
「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木葉二、ブレイスメディア、三谷 徹、登坂 誠、他。
3000円



9807
シーラカンス
彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品：吉備高原小学校、大阪市水上消防署、（仮称）外ヶ岡交流拠点施設、他。論文：原広司、土居義岳、インタビュー：山本理顕
2600円



9808
光のデザイン・ヴォキャブラリー：LPAの仕事1990-1998
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。
文＝磯崎新、面出薫
2500円

SD

現代の建築家、ハードカバー・シリーズ

鹿島出版会がホームページを開設いたしました。
SDをはじめ、当社で出版している書籍の検索が出来ます。是非ご覧下さい。

Address: http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

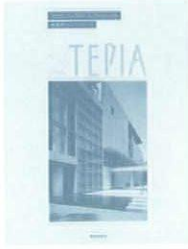
3090円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磨ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。維陣Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円



槇事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館（TEPIA）というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。槇文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新❸ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖アキラ館、吟雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井晟嚴。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

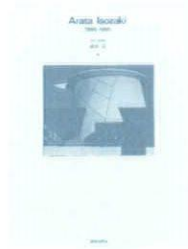
3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新❹ 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティームディズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディアム、［蝶々夫人］舞台美術、他。

4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒俣宏、宇佐美圭司、他。

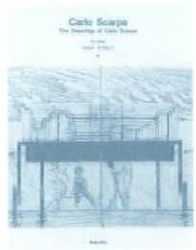
4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

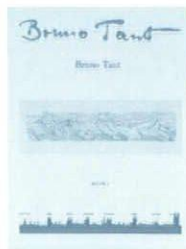
3500円



槇 文彦❷

槇文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



安藤忠雄❸アンビルト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅠ、Ⅱ、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変移する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

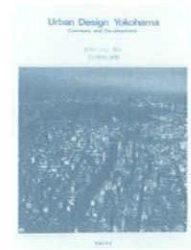
3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザール一その歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン｜横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、槇 文彦×養原敬×小澤恵一、他。

5000円

9809 Space Design

スペースデザイン 第408号
1998年9月号
都市・建築・芸術の
総合誌

SD

5 特集
ディテールが創る風景：
細部に宿る美と技巧

6
対談：
全体を創る部分／部分を導く全体
宮崎 浩×赤坂喜顕

10
現代建築ディテール巡礼
建築家が細部に込めた寡黙な意図を探る

12
NSP Building
宮崎 浩／Plants Associates

20
成城の住宅1996
渡辺明設計事務所

28
東京自転車健康保険組合会館
竹中工務店東京本店

36
豊田市美術館
谷口建築設計研究所

44
東京会場東日本研修センター
KAJIMA DESIGN

52
GLASS HOUSE
小川晋一都市建築設計事務所

60
山口大学医学部創立50周年記念会館
岸 和郎 + K. ASSOCIATES

68
風の丘葬斎場
槇総合計画事務所

76
川上村林業総合センター森の交流館
飯田善彦建築工房

84
細部へのまなざし
現代のディテール・
マイスター達が描く情景と
射程

86
石を読む
石のまち、香川県牟礼町で
見た「石達人の極意」
和泉正敏／石のアトリエ

90
型を極める
アルミ押出し材に宿る
クラフトマンシップ
新日軽

94
スティールに息づく
寡黙な美
宮崎 浩／Plants Associates

98
Transscale Matrix／
トランススケール・
マトリックス
小川晋一都市建築設計
事務所

102
ディテール写真館
写真家がとらえた
桂離宮の細部意匠
文+写真＝岡本茂男

110 連載：森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考 9. 月見 森島紘史
112 SDレビュー1998：展覧会開催のお知らせ
114 展覧会レポート：ミラノ国際家具サロン——SETSU ITO展より 宮城志信
115 ニュース：「生きた」かたちの発見 伊藤 節
117 展覧会レポート：バレエ・リュス、あるいは漂流者たちの類希なる邂逅の場 五十嵐太郎
118 展覧会レポート：「新世紀末都市——東京」展——東京新世紀from東京世紀末をふりかえって 若松久男
120 展覧会レポート：世紀末の決算——建築の20世紀展をめぐって 飯島洋一
122 書評
124 メトロポリタン・ライブラリー 港 千尋
127 新刊紹介
128 海外レポート：[バーゼル] 古いものと新しいもの——バーゼル市立劇場増築計画コンペティション1997 久野靖広
131 海外レポート：[香港] 郊外化した香港 萬谷健志+鄧 天斎
132 海外レポート：[リスボン] リスボンEXPO'98にみるポルトガル現代建築の動向 戸室太一
134 森ビル・都市デザインコンペ'98：作品募集
136 お知らせ

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子　高木伸哉
大野由美　飯塚りえ
高森和志
制作協力：久世健
勅使河原馨／guild
(有)シンクス
アドバイザー：伊藤公文

発行人：平田翰那
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107-8345 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
http://www.kajima.co.jp/
group/publish/index.htm

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174-0056 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

特別定価：2,300円
[本体2,190円]

年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み

表紙：NSP Building
表紙写真：北嶋俊治
表紙デザイン：小泉均

9809 Space Design

Monthly Journal of Art and Architecture
No.408
September 1998

SD

5 **Special Feature:**

The Landscape of Detail:

Its Art and Techniques

6
Discussion:
Parts that Create the Whole/Wholes that Lead to Parts
Hiroshi Miyazaki and Yoshiaki Akasaka

10
Pilgrimage to Details in Contemporary Architecture:
Studying the Details Architects Endow with Tacit Purposes

12
NSP Building
Hiroshi Miyazaki/Plants Associates

20
House in Seijo, 1996
Akira Watanabe Architect & Associates

28
Tokyo Bicycle Health Insurance Association
Takenaka Corporation Tokyo Main Office

36
Toyota Municipal Museum of Art
Taniguchi and Associates

44
Tokyo Marine Oyama Training Center
KAJIMA DESIGN

52
Glass House
Shinichi Ogawa & Associates

60
Memorial Hall in Yamaguchi
Waro Kishi + K. Associates

68
KAZE-NO-OKA Cemetorium
Maki and Associates

76
Kawakami Forest Club
Iida Archiship Studio inc.

84
Perspectives on Detail:
The Scenes and Trajectories of Today's Masters of Detail

86
Reading Stones:
The Secrets of the Stoneworkers of Mure-cho, Kagawa Prefecture, the Town of Stone
Masatoshi Izumi

90
Perfection of Form:
The Craftsmanship to be Found in Pressed Aluminum Materials
Shin Nikkei Company, Ltd.

94
The Inconspicuous Beauty Abiding in Steel
Hiroshi Miyazaki

98
Trans Scale Matrix
Shinichi Ogawa & Associates

102
Photographic Gallery of Detail: The Mastery of Detail Captured by Photographers at Katsura Detached Palace
Text+Photo=
Shigeo Okamoto

110 The Okoshi-e of Hiroshi Morishima: Forms of Japanese Tradition in Paper
9. Moon-viewing — Hiroshi Morishima

112 SD Review 1998

114 From the Exhibition:
From the Milan International Furniture Salon, Setsu Ito Exhibition — Shinobu Miyagi

115 News:
Discoveries of Living Form — Setsu Ito

117 From the Exhibition:
Ballets Russes: Place of the Chance Encounter of Nomads — Taro Igarashi

118 From the Exhibition:
"Finise Polis-Tokyo" Exhibition Review — Hisao Wakamatsu

120 From the Exhibition:
Fin-de-siecle Review — Yoichi Iijima

122 Book Review

124 Metropolitan Library — Chihiro Minato

127 Book Information

128 Topics Abroad:
[Basel] Something Old, Something New — Yasuhiro Hisano

131 Topics Abroad:
[Hong Kong] Suburbanized Hong Kong — Kenji Mantani+ Tan Tin Chai

132 Topics Abroad:
[Lisbon] Trends in Contemporary Portuguese Architecture Seen at Expo '98, Lisbon — Taichi Tomuro

134 Guidelines for Entrants:
Mori Building Urban Design Competition '98

136 Announcements

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Kaoru Teshigahara/guild
Digital Studio SINKS
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm

Printed in Japan

This Copy: ¥2,300
¥30,000 a year
¥50,000 two years

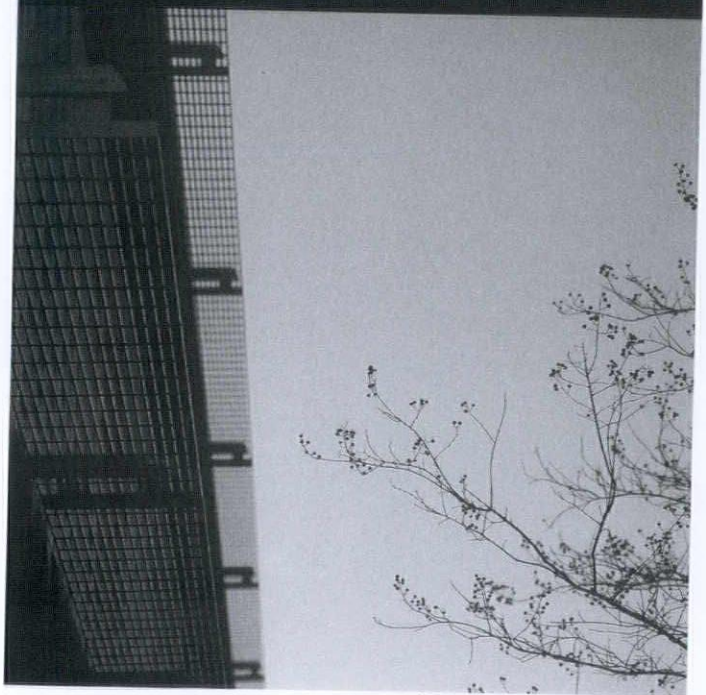
Order Form: Page144

Cover: NSP Building
Cover Photo: Toshiharu Kitajima
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

特集

ディテールが創る風景

細部に宿る美と技巧



〈成城の住宅 1996〉　渡辺明設計事務所

対談

全体を創る部分／部分を導く全体

宮崎 浩×赤坂喜顕

ディテールを考えるとき、そこにどのような空間を実現させることをめざし、細部と全体を関係づけるのか。ふたりの建築家が、常日頃想い描いているディテール観を語ってくれた。



ものづくりの出発点

宮崎：私は槇事務所に入りたての20代の頃、まだ何も知らない段階で現場に行ったら、その時現場担当だった竹中の設計部の人との話で「宮崎さんは外形さえ描いてくればいいですよ、なんとでもなります」と言われたのがものすごく印象に残ってるんですよ。思い入れさえ描けば表現はできるはずだと言うんですね。それがディテールなのか、納まりなのかわからないんだけど、そういうことを初めての現場で教育されたんですね。悔しい思いもありましたが、竹中の設計部の人の「思い入れればできるんだ」という一言に教えられた。実務的な教育はまさにそこですからね。例えば施工者と打ち合わせる時に、どうやってつくり込むのかという方法についての打ち合わせはすごかったですし、本当に学ぶ所は多かったですね。今でもその人とはおつきあいしてますけど。

赤坂：私も設計部へ行くまでの最初の何年かは現場で施工を担当してました。現場に出ている時に躯体図を描いたりして、最初から製作の現場に立ち会いながら自分のディテール観みたいなものをつくっていったんです。宮崎さんと同じように具体的な生産の現場から入っていったという意味ではディテールに対する構えは早かったんじゃないでしょうか。社会へ出てすぐの経験で、設計者が描いた図面をさらに生産工程に落としていく図面を描いてたわけです。入社してから1年間は見習い社員で、2年目に現場作業員をやり、本格的に設計を始めたのは3年目からです。その体験が今のモノに対する考えをつくっていったということは言えますね。そういう意味ではアーバン・デザインから始めて、徐々にスケールが小さな建築のデザインへと進み、最後にモノのデザインという過程を辿った人にはディテールを考えることは大変なんじゃないかな。一般に言う、いわゆるメディア・アーキテクトたちは、基本的には建築の品質は保証していませんからね。彼らの仕事を見ていると一過性のものだという感じがありますね。メディアに載るのも情報としての建築としてみれば必要かもしれないけど、それはいずれ時間が淘汰していく話ですから。そういった意味では、モノから建築全体を見ていくという発想の方がオーソドックスで強いはずですね。他にも今の流行として、見かけのディテール、例えばミニマル・デザインのディテールというのがありますが、実際は問題が多いんですよ。目地なしの壁にはクラックはできるし、水切りがないと水がダラダラ流れていくし、そういう建物が平気で雑誌に載ってるわけです。それがディテールかというと、自戒の念を込めて言えば、全然違うわけです。バブル期のデコラティブで過剰なものに飽きてしまった反動が、より少ないもの、よりわかりやすいものにシフトしただけであって、ディテールやモノに対してみんなが本質的なまなざしを向け始めているのかどうか私は疑問なんです。今は、ただ時代の気分をシミュレートしているだけに過ぎない気がしているんですが。例えばたまたま大学で教えていて、学生たちが設計の課題で朽ちた鉄のような模型をつくってきても、本当に鉄に興味があるかというとそうではなくて、朽ちてるという表層現象だけが好きだから茶色に塗ってるだけであってね。その点、われわれがやってきてることは単に時代の反動としてだけではない正当性をある程度はをもっているのではないでしょうか。

宮崎：そうですね。それはわれわれが育った時代もよかったと思うんですね。施工レベルでもモノづくりに対して熱心でしたよね。設計者も現場もメーカーも。つくることに関してコストを含め今と変わらず厳しい時代でしたが、つくっていこうということに対してかなりの人たちが熱意をもってたので、いい時に現場に出て、一生懸命やればなんとかなるということを体で覚えたんだと思います。私は槇事務所に約10年間スタッフとしていたんですが、影武者として槇さんの建築をどうやったら表現できるかということを第一に考えてやってたわけです。自分自身の思い入れも当然強くありましたが、彼のイメージする全体像をいかに建築の性能を含めて実際の建築レベル、ディテール・レベルに落とすにはどうあるべきかというのが担当者の責任だと思ってたんで、それをずっとやってたのがいい経験だったなと思いますね。またその時にめぐりあった人たちも良かったと思うんですよ。

赤坂：宮崎さんはクオリティのレベルで最初から厳しい目をもってやってこられてますよね。今は施工サイドがレベルダウンしていて、図面を描けない、ものを知らないということがよくある。本来、一番オーソドックスで当たり前なことをやろうと思っても、それが生産のレベルでできないくらい問題が大きくなりかけてる。その辺に対する危機感はありますね。

ディテールというのは、ある原理を知れば、それの応用だと私は思っています。それがスティールであれアルミであれ木であれ、ある原理を応用していく過程で新しいディテールが生まれてくると思うんですが、最近の人はマニュアルでしかものを考えなくなってる。漢字もワープロのキーボードを押すと出てくるでしょ。それでは自分で漢字が書けなくなってしまう。同じことが生産の現場でも、建築家のクリエイティブなレベルでも出てきていて、これはちょっと問題かなという気がしてます。

学生時代に私は自分で模型をつくったんですよ。手伝いを使わないで、かなり精密な模型をつくったんですね。小さいころから模型づくりが好きで、白い紙でつくったピン角の模型をそのまま具現化したいというのが長年の夢でしたね。だから私の建築の原風景は実は模型なんですよ。模型をそのまま実際の建築としてつくってしまうというのはすごくコンセプチュアルなんですよね。ディテールはあるんですけど、一見見えにくいディテールになっていて、その傾向が今も続いてますね。それをどうしてつくればいいかということを現実の生産体系の中で試行錯誤してきたわけです。最初につくり出してしまった自分のものが原風景となり、実際にそれをつくってみたいと思っていたら今のようになってたという感じですね。

宮崎：たしかに、赤坂さんのディテールは表に出てこないで、消し込まれていますよね。ディテールを消し込むというのは勇気がいるもので、自分でも色気を出した時はだいたい失敗しています。また、時間がなくて詰めの甘い時も逆に語り過ぎのディテールになってしまうことが多いような気がします。


赤坂喜顕

……ディテールというのは、ある原理を知れば
それの応用だと私は思っています（赤坂）

色もディテールですよね。色あいというか質感というか、
光り具合とか、その辺りまで含めて……（宮崎）


宮崎浩

素材表現とディテール

宮崎：例えば石や鉄といった一見重い素材でも、表現として軽くもできるし重くもできる。ここの石はどういう表現をしたいかという時に、その場の石のあり方を追求するわけですよね。石だとこうなります、鉄だとこうなりますというルールは基本的にはないということなんですね。私が現場に出た最初の頃は、建築が決まってから仕上げや素材を決める。そしてその素材をどのようにして使えばいいんだというような決め方をしていたんですけれど、最近はかなり早い段階でこの素材でなければいけないんだという感じがすごくあります。フローリングという素材ひとつでも、昔はフローリングで選ばなきゃいけないという前提から、そこのイメージに合ったフローリングを何とか探し出そうとしていたんでが、最近は「ここの床は木を使いたい」と思った時期に、質感を含めて木の素材のイメージはかなり強く持っていることが多いですね。

コンクリートでもその素材感にはかなりこだわっていますけれども、コンクリートだから重量感があるとか、一元的には考えてないです。コンクリートでも非常に重量感があるものと、表現として軽いコンクリートというものは構造的にも今は無理をしなくてもできるし、そのように見せるためのディテールも当然あるわけです。素材そのものを見せるわけではなくそれを使って建築をつくるわけですから。同じ素材を使っても建物ごとに当然使い方は違うものだと思っています。

赤坂：そうですね。宮崎さんは素材を抽象化して表現しないで、わりにストレートに素材感を出してるけど、私の場合は全くアブストラクトな空間をまず考える。私は模型をそのままつくりたいと思っているので、最初は素材感を出さない設計をやっていたんです。10年前になりますが、初期の作品については、壁はもちろん白なんですが、サッシュも白だったんですよ。サッシュまで白くするのは相当な覚悟が必要でしたね。当時はポストモダン全盛の時代で、そんな建物は今まで日本にほとんどなかったから。そのあと〈R-90 竹中技術研究所〉では、素材感ではなく納まりということを意識してやったのは、スケールの広い外空間に対しては目地をつけずにスーパースケールで構えて、小さい密実な空間に対しては目地を切っていくことや凹凸をつけたりして、ヒューマンスケールを出すことを試みました（図版1）。素材感ではなく、形と納まりにこだわって、空間と対話しようとしたんです。

ある大きなガラス面については、垂直の水面と同じ考え方なんですね。空気と呼び合う形で目地のない壁面をイメージするんです。だからサッシュはないんですよ。

また、サッシュをちゃんとつける場合もあるんですよ。その時は壁面も彫刻をして陰影をつけたりして、できるだけスケールの小さく感じられるインティメートな空間をつくろうとしてる。これは、例えば中庭という親密な空間のプログラムに応じた方法なんです。

そのあと自分の中に変化があって、素材や色に対してもいろいろトライしてみたいと思いはじめました。〈東京自転車健康保険組合会館〉のファサード（図版2）では、都市に対してある働きかけをしようとしてるんです。白と黒のマリオンが一枚のガラスをはさんで内と外を交互に支持して連続し、空間に微妙な視覚的波動を与えようということです。積極的に街にかかわろうとすると、どうしても材料が前面に出ますよね。それまでは白い材料だったのが新たに黒を導入してくる。また、均一で平滑だった壁面が奥に入ったり前に出たりしてくる。多様な素材や色を使って積極的に世界に働きかけようかと思って、徐々に材料を少しずつ増やしていこうかと思ってます。

宮崎：そういった意味では色もディテールですよね。色あいというか質感というか、光り具合とか、その辺りまで含めて。例えば壁面に本磨きの大理石を張りますよね。そうすると壁面が外の風景もみんな拾っちゃうんですね。でも完全に水磨きにすると映り込みはなくなるんだけど、逆に汚れるんですね。だから壁面に大理石を使いたければ水磨きと本磨きの間で、照明器具も拾わずに映り込まない、外の風景も映り込まないけど、掃除の時に拭けるというのを少々面倒でもやりたいですね。同じ石でも面のちょっとした仕上げの違いで、まったく表情が変わってきますから。

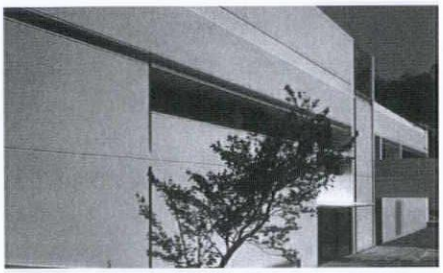
赤坂：それも光という要素が入ってくるからでしょうね、光もディテールだし、光と光を受けたものがディテールとも言えるし、石の仕上げ面に照明器具が反射して見えるか見えないかとかを含めて、全部ディテールをつくっていくことですよね。つまり、ディテールを考えることは総合化のひとつなんですね。

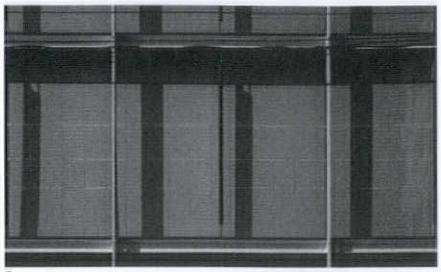
ところで宮崎さんの作品は仕上げがメタリックな感じが多いですね。木を使ってもそうですね。思考が都会派なんでしょう。「インダストリアル・バナキュラー」と槇さんが言ってましたが、その系譜を宮崎さんも継いでおられるから、都会派なんでしょうね。だから田園につくっても都会的に見える。逆に私は国籍を問わず、抽象指向ですから、都市的に見えるとか田園的に見えるとかいう印象を意図的に避けているんです。そういった意味では作り方がちょっと宮崎さんとは違うかもしれないですね。

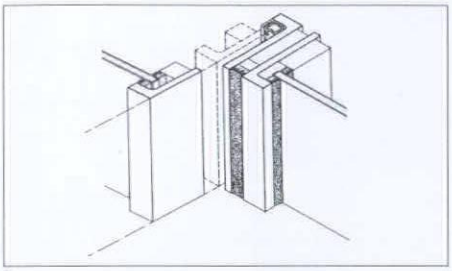
製品開発としてのディテール

宮崎：〈NSPビル〉ではスティール・サッシュの検討を始めてから竣工するまでに2年かかりました（図版3、6）。関係者の人件費を抜くと、ほぼ製品としてはいけていると思いますが、開発そのものにかける時間というのは、この建物のためにだけに開発したわけじゃなく、製品化を前提としてますから、ものすごい時間がかかってます。一般的にはひとつの製品を開発するのに2、3年はかかるでしょうね。この建物に使いたい、あの建物に使いたいという現場単位の特注ではない使い方を前提としてつくっているので、色々なことを検討する必要があるのかもしれない。また、今のうちの事務所で設計している規模の建築では、単独の現場単位のコストでは開発は到底不可能だという中で何とか完成できたのは、その製品の可能性を理解できたメーカーとうまく知り合えたからだと思っています。開発費も含めて、設計事務所だけのレベルでは無理な点が非常に多いですから。

既製品の開発って、現場ごとの特注よりも精力が要りますよね。ある時期からこれが既製品になるとすると、だれでも使えなくては


1


2


3

いけない。自分たちがやってる現場だと現場監理も含めて施工者、設計者が見られるんですが、既製品になった段階では、だれがどう使うかわからない。その中で最大限の能力を発揮しなくてはいけないということですから性能やディテールには慎重になりますよね。

話は変わりますが、サッシュの断面って絶対に見えないところなんですよね。でもその中の見えないところも自分なりの思い入れってあるんですよね。ここにある赤坂さんの使ったサッシュをみると、その辺りもしっかりしていて（図版4）、見ているだけでうれしくなりますね。

赤坂：そうやってメーカーと協働で仕事をして、お互いを鍛え合っていくことを建築家がやらなければならない。それを宮崎さんがやっておられるんですね。そうして日本の建築文化の底上げをしていく必要があると思います。ミースが生まれた当時のドイツの土壌にしても石の産業がしっかりしてたから、あのような偉大な建築家が育ったわけですね。アルミの型材でもデザイナーが進んで開発していかなければならないけど、そこまで積極的にメーカーと協働でやってる人は意外にいないんですよ。ほとんどがゼネコン任せでしょ。ゼネコンを通じてメーカーとやるけど、最近はゼネコン自身が少しずつだめになっている。本当に生産現場を鼓舞していくデザイナーが増えてこないとだめなんですよね。

私は初期の作品からいくつかの既成の型をずっと応用して使っていくという方法を採っています。基本的には新型はできるだけ起こさないでやっているんです。

宮崎：私は最初のころは型を起こすのが楽しくてしょうがなくてね。ああしたい、こうしたいという思いで、たくさんつくってたりもしましたけれどね。最近はそういうことは少なくなりましたけど。

昔はアルミで型を起こすなんていう犯罪的に時間とコストがかかることだったわけですよね。ある時期からダイスの加工が自動化されて、逆に、既成の型を加工して使うんだったら、新たに型にした方が楽だという時代がきたわけです。最初の頃はアルミサッシュというのは既製品をどう切って組み合わせるかという、スティールメーカー的な発想だったのが、ラインが充実してくると、ある程度の量があったら型を起こしちゃえという時代になりましたものね。それが得意なメーカーとやる時には型を起こす方で考えるし、型を起こすのを外注するような企業の場合には既製の型を加工して利用するというような取り組み方を私はするようにしています。

部分と全体

宮崎：建物の規模によっては、200 分の1ぐらいの模型でスタディすることが一番いい場合があると私は思うんです。例えば1万m²ぐらいの建物だったら200 分の1でつくったイメージ模型がそのまま建築になるといいなと常に思うんですけど、スケールアップしてつくっていくと、模型自身が存在感をもってきてしまうんです。100 分の1とか50分の1でスタディしていると、あれ、こんな建築だっけ、という寂しさがあって、たまに200 分の1で見直してるということが多いですね。そういったスタディをしてる時には、ディテールを最初から考えているわけではないんですよ。この空間をどうしたいかというのがわかってくるかどうかが問題なんですね。それからがディテールの問題だと思っています。ディテールを決める時も私の場合は場当たり的なんですね。ここはどう納めなくてはいけないというのは基本的にはないんです。各現場でも各建物でも。これは自分の体質で簡単には絶対に変えられないと思います。全体像が見えない限り、手摺りでもサッシュでも、何にもできないですね。自分でつくってるサッシュや金物で建築全体がつくれるとは思ってないですから。

赤坂：ディテールというのは非常に細かく、具体的なものですよね。それは「図」じゃなくて「地」だと私は思ってるんですよ。断片の集積がひとつの地となってこそ空間が図としてわき上がってくるもんだから、例えば全体の中にいろいろな部材があるけど、その部材は孤立はしてないんですよ。それらを総動員して空間を援護すると認識した上じゃないとディテールはできない。だから何もないディテールもあるんですよ。ディテールだけが孤立してあるわけじゃなくて、「地」として全部ディテールは消えている。それは「図」ではないディテールが総動員されて空間をしっかり形づくっていく。

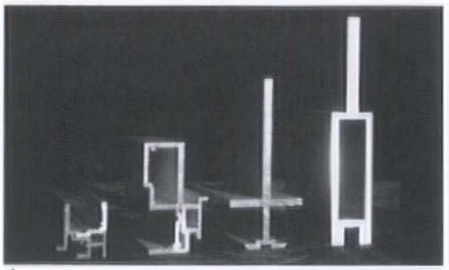
例えばスティール・プレートの曲げ枠ですけど、私はよく見付け20mmでチリ5mmとってボードをぶつけにするんですけどね。ふつう見付け25mmで曲げてボードを差し込みにするとチリが10mmにならざるを得ないんですよ。そうすると空間がアブストラクトしない。見付けを20mmの曲げでやると、どうしても角が曲がるんですよ。そうするとボードは差し込めないから、チリ5mmでぶつけるの。その20mm、チリ5mm、足して25mmね。通常25mm、チリ10mm、足して35mmね。つまり問題は総体なんですよ。足して25mmという見かけが重要なの。部屋に4カ所あるだけでも空間が変わるんです。その空間が25mmの見付けで10mmのチリでできるかというと、絶対にできないんです。これがディテールの力だから、その力をどう使うかは空間のプロポーションによって異なるわけですよ。余談ですが、住宅ですと私はチリは1.5mm なんですけどね。

宮崎：そういうのは現場にのめりこんでないとわからないですね。同じ話をすると、私は曲げ枠だったら一般的には縦枠15mmの上枠25mmでやってるんです。曲げの場合はちょっとプロポーションを変えて、できれば角出しで。チリは10mmです。フラットバーだと、壁とのチリは3mmでやってる。その3mmのチリというのは基本的にゾロであるという意思表示です。

赤坂：わかります。オフィス・スケールでは3mmはゾロに見える。住宅は3mmじゃゾロに見えない。住宅はもっと小さいから、1.5mmまでもっていかないとゾロに見えないから。

宮崎：その枠のチリが5mmだと問題なのかというと、その部分にとっては問題ないんですよ。それだけ見てれば。でもその集積が問題なんですよね。幅木の目地や高さ、天井、壁の関係というのが自分なりの規範があって、それが建物によって違ったとしても、何らかの規律がある。

赤坂：同じような話は都市の中にもあるんです。東欧を旅して、プラハに行った時のこと



4



5

1：〈R-90 竹中技術研究所〉壁面の凹凸がつくる陰影
2：〈東京自転車健康保険組合会館〉ファサードのマリオン
3：〈NSPビル〉サッシュシステム
4：〈東京自転車健康保険組合会館〉アルミ押出し型材
5：〈ジンジャー・アンド・フレッド〉フランク・O.ゲーリー
6：〈NSPビル〉スティール枠の片開き窓

です。とても美しい街でしたね。あそこは飛行場からモルダウ川が流れてる旧市街に向かってずっと斜面が続いてるんですが、勾配が緩いので初めはそれがなかなかわからないですね。都市的な長い断面で切らないかぎり斜面になっているのがわからないんですよ。夜中に、飛行場から街へ向かう車に乗って4、5分して、闇の中で、あっ、落ちてるなと気が付いたんですが、そのあとずっと緩やかな眠りに落ちていくような感覚が20分ぐらい続く。その時この都市はモルダウ川に向かって傾斜してるんだというのがわかるんです。水勾配と同じ50分の1ぐらい。その50分の1が連続して20分ぐらい続くと身体的に異様な空間感覚になるわけですよ。緩やかに川に向かう斜面に対して水平面をつくらずに建物が建ってるんですよ。ゲーテがプラハのことを「そこは丘でもなく谷でもなく平野でもなく、しかし、そのすべてでもある」と言っているのですが、それこそディテールの力なんですよ。東京ですと斜めの土地は敷地としては段々になってるでしょ。日本では建築というのは水平面上に建てるものだと思い込んでるけど、ヨーロッパの美しい街は違うんですよ。あるがままの傾斜を出来るだけ残していく。それは街全体を歩き回ってみないと分からないことなんですよ。

同じように先ほどの話で、部分的にはチリ10mmにしても問題ないんですよ。ただ、総体となった時に問題が出る。これがディテールなんです。つまりディテールは部位じゃなく小さな全体なんですよね。断片という名の全体がディテールなんです。全体とディテールの関係がすべてなんですね。プラハで私は初めて都市にもディテールがあるんだなと思いました。建築も街も同じだな、人間のやることって同じなんだと思ったわけです。夜、あのプラハの坂をおりていく時に、いつ水平のところに出るんだろうと思いながら、なかなか出ない感覚。静かに恐ろしいぐらい延々と落ちていった時に、ああ、都市ってこうなってるんだなと思い、部位じゃわからない、全体で初めてその都市がわかるということを実感しました。そういう意味では建築も都市の中の重要な要素であって、建築が集まって街を性格づけていくことってありますよね。

つい最近ですが、同じプラハのモルダウ川沿いにフランク・O. ゲーリーが〈ジンジャー・アンド・フレッド〉というとても派手な建物をつくったんですよ。でも不思議としっかり都市のディテールになってるんですよ。単体として見ると過激なんですが、全体の中で見ると、ちゃんとハーモニーしているんです。つまり川沿いのメインストリートの旧いアール・ヌーボーの建物がすべて微妙にセットアウトしていることに合わせて、トップヘビーになっているわけです（図版5）。これは都市のディテールとしてこそ、建築が初めて成立するというヨーロッパのマナーに対しての真摯な姿勢を表現してるんですよ。またどうして屋根がこんなに丸いのかと思ったら、そばに古い丸屋根の塔があって、これと呼び合うようになってる。街に参加するという姿勢が明快に建物に出ているんですね。

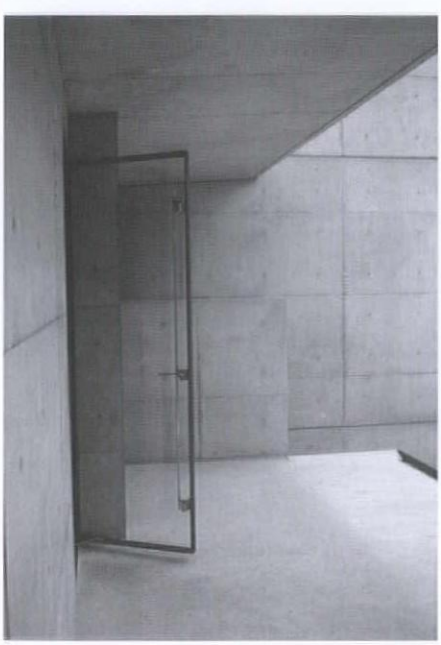
宮崎：建築の中のひとつひとつの部位もディテール、形そのものもディテールだし、建築と都市との関係というのもやっぱりディテールですね。

我々はモノのあり方を考えてつくってるので、とりあえずつくるというのはできないというのがありますよね。なんでそこまでやるの、ということを現場には言われることがありますけれど。

赤坂：そうですね。どうしてそれをゾロにするのかとか、チリ3mmじゃなくて10mmでいいじゃないかとかよく言われますが、だめだと言ってもわかってくれない。それは最終的に出来上がる空間を先に読んだ人しかわからないですよ。まず空間があって、次にディテールが決まるから。たしかにディテールが集積されて空間ができるんだけど、到達する空間がイメージできてないとディテールは決まらないんですよね。

宮崎：そうですね。ディテールを一生懸命追求しても建築はできないですからね。結局、街にしても建築にしても、全体とディテールを同時に捉えることではじめて見えてくるものなんでしょうね。　（1998年7月13日、於鹿島出版会）

●みやざき・ひろし／建築家
Plants Associates主宰
●あかさか・よしあき／建築家
竹中工務店東京本店設計部



6

作品紹介

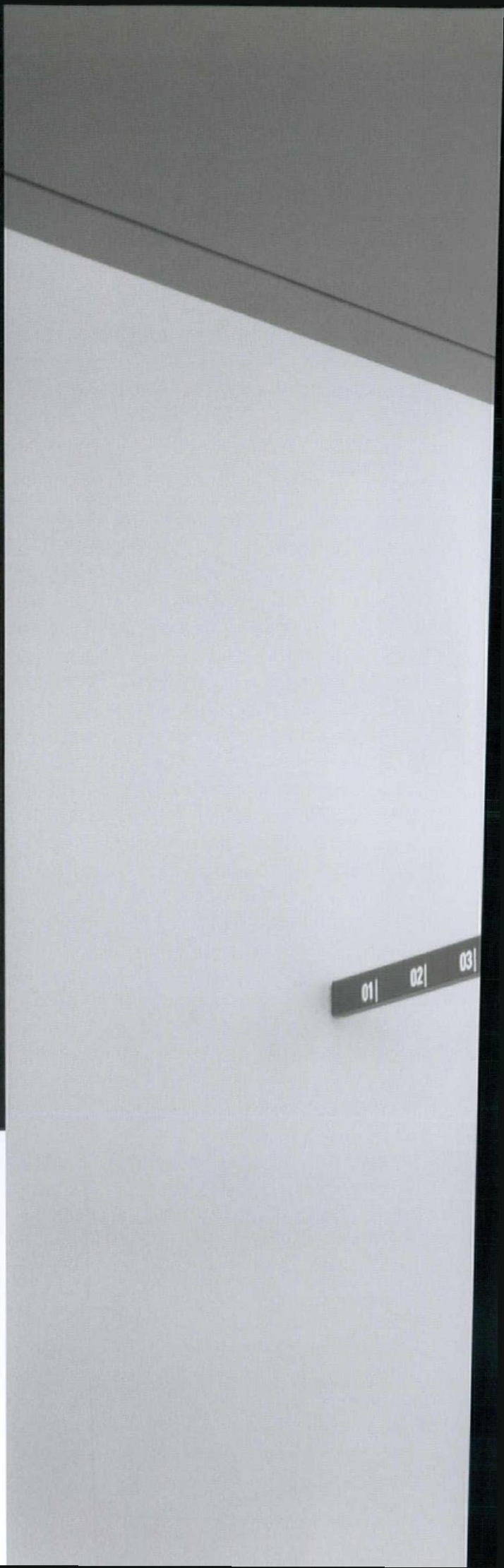
現代建築ディテール巡礼

建築家が細部に込めた寡黙な意図を探る

ある建物に足を踏み入れた瞬間、緊張感と心地よさを無意識のうちに感じることがある。また街を歩いてると、ある建物のファサードが雑然とした街並みを、極めてさりげなく純化している光景に出会う瞬間がある。

アクロバティックな空間構成や華美な装飾があるわけではない。しかしそこには、細部意匠と全体の空間の精緻な均衡の上にのみ成り立つ、寡黙で静謐な風景がしっかりと存在しているのだ。

ここでは、そうした情緒的で端正なニュアンスをつくり出す要素であるディテールに焦点をあて、そこに込められた意図を検証しながら、ディテール巡礼の旅を繰り広げてゆくことにしよう。建築家がそこに創ろうとした情景に思いを馳せながら……。



●飯田善彦建築工房〈川上村林業総合センター　森の交流館〉
●小川晋一都市建築設計事務所〈GLASS HOUSE〉
●KAJIMA DESIGN〈東京海上東日本研修センター〉
●岸和郎＋K. ASSOCIATES〈山口大学医学部創立50周年記念会館〉
●竹中工務店東京本店設計部〈東京自転車健康保険組合会館〉
●谷口建築設計研究所〈豊田市美術館〉
●槇総合計画事務所〈風の丘葬斎場〉
●宮崎浩／Plants Associates〈NSP Building〉
●渡辺明設計事務所〈成城の住宅 1996〉



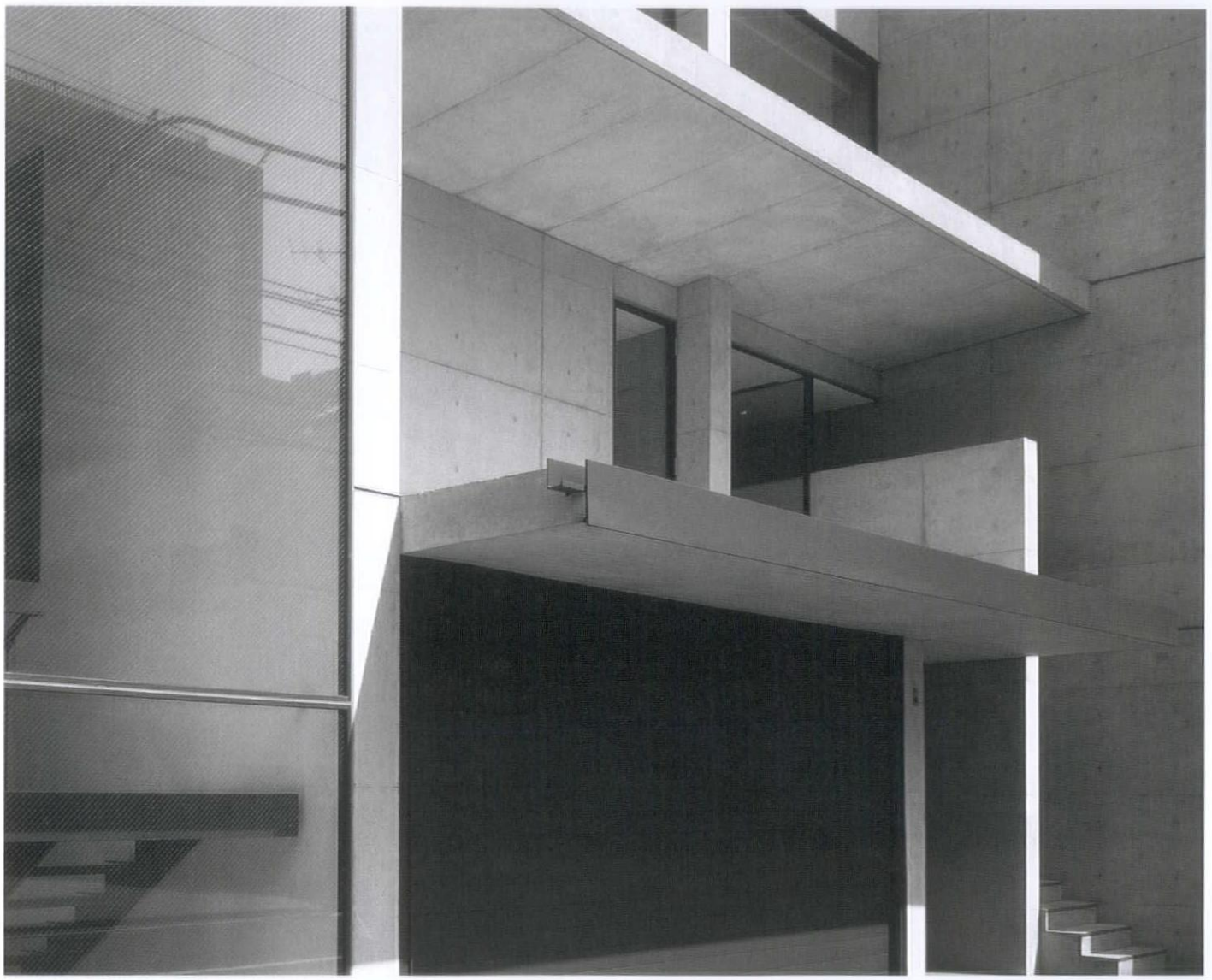
〈NSP Building〉空間を規定するバー・スケール　宮崎浩／Plants Associates

NSP building

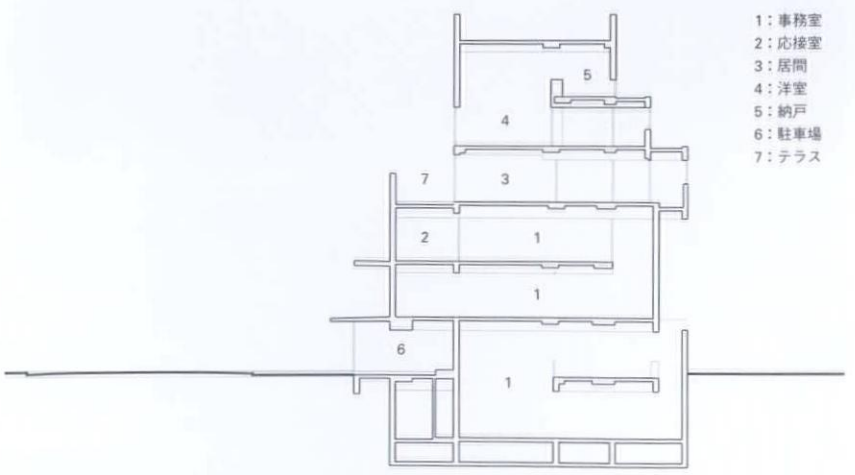
宮崎 浩／Plants Associates、東京都中野区、1997年

主用途：事務所・住宅
構造：RC造
階数：地下1階、地上6階
敷地面積：285m²
建築面積：212m²
延床面積：691m²





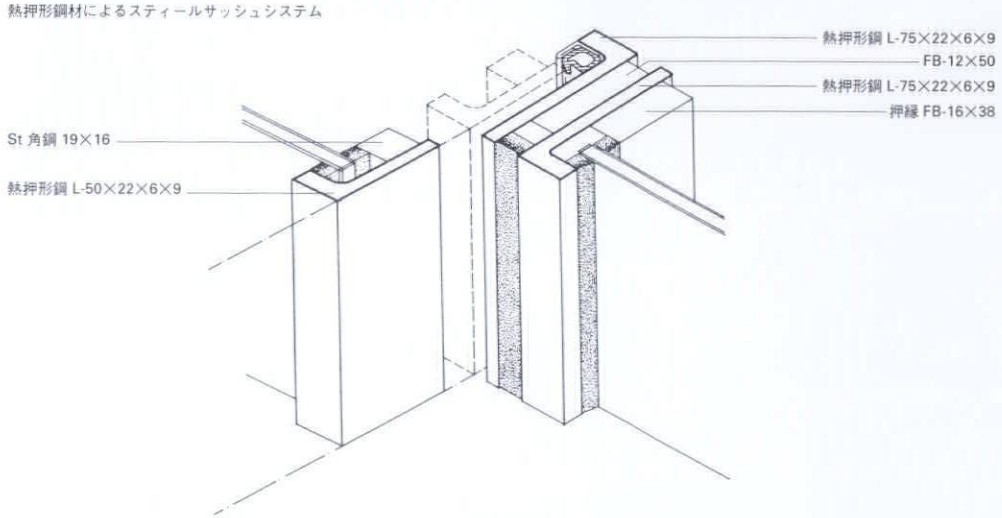
この建物は、上部に住居をもつオフィスビルである。敷地は南北を幹線道路沿いの雑居ビルと古くからの住宅地に挟まれた用途境界に位置している。南面の採光はまったく期待できない一方で、北側には雑多な都市風景が広がっている。このため内部に周辺環境から切り離され垂直方向に開いた空間を獲得することを目指した。建物全体は吹き抜けによる2層を単位としたオフィスと住居を積み上げた構成である。厳しい日影規制によって生じた建物のずれを利用して随所にトップライトやテラスを設けて、自然光を取り込んだ空間が重層することを意図した。



断面図　S=1:400

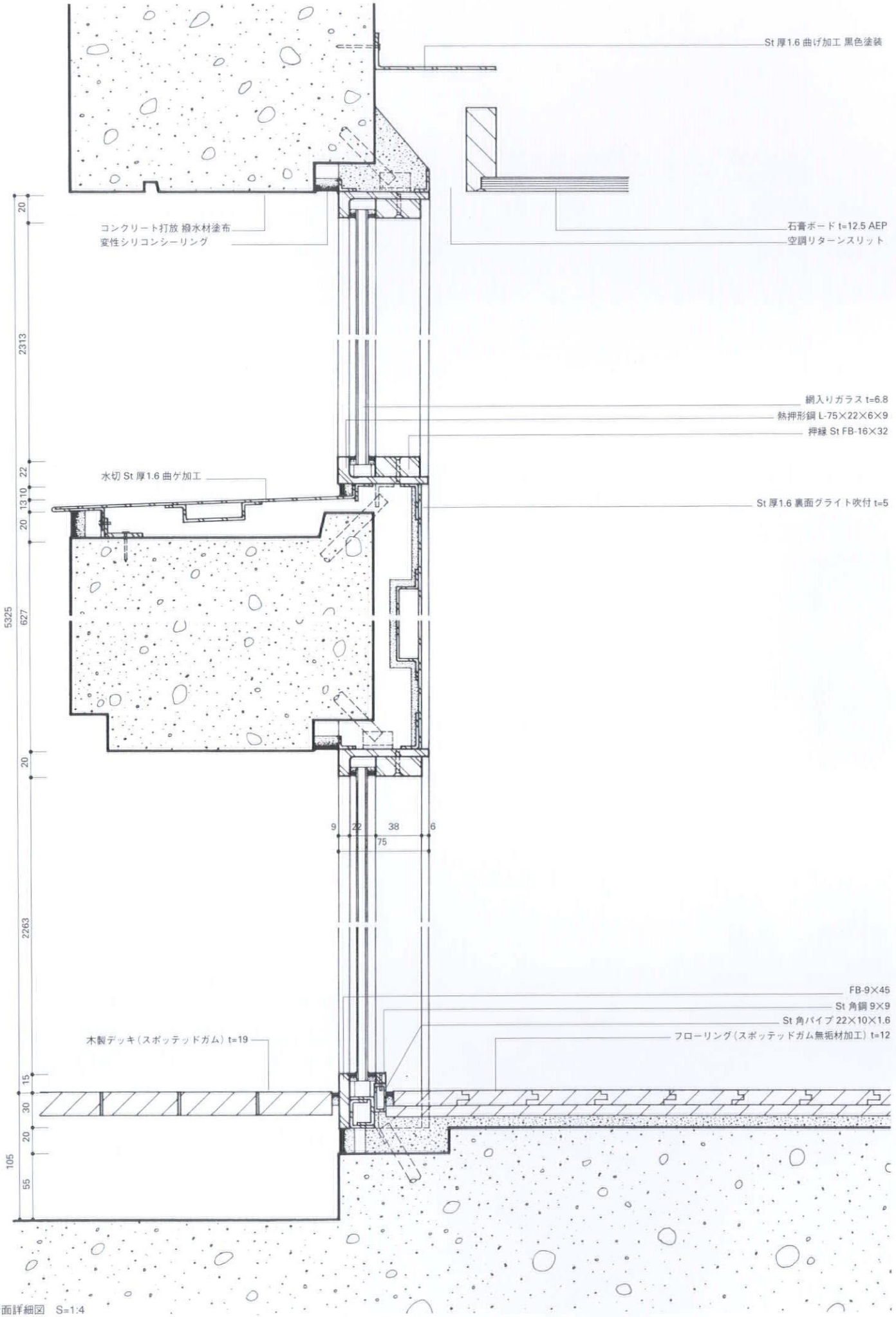


熱押形鋼材によるスティールサッシュシステム

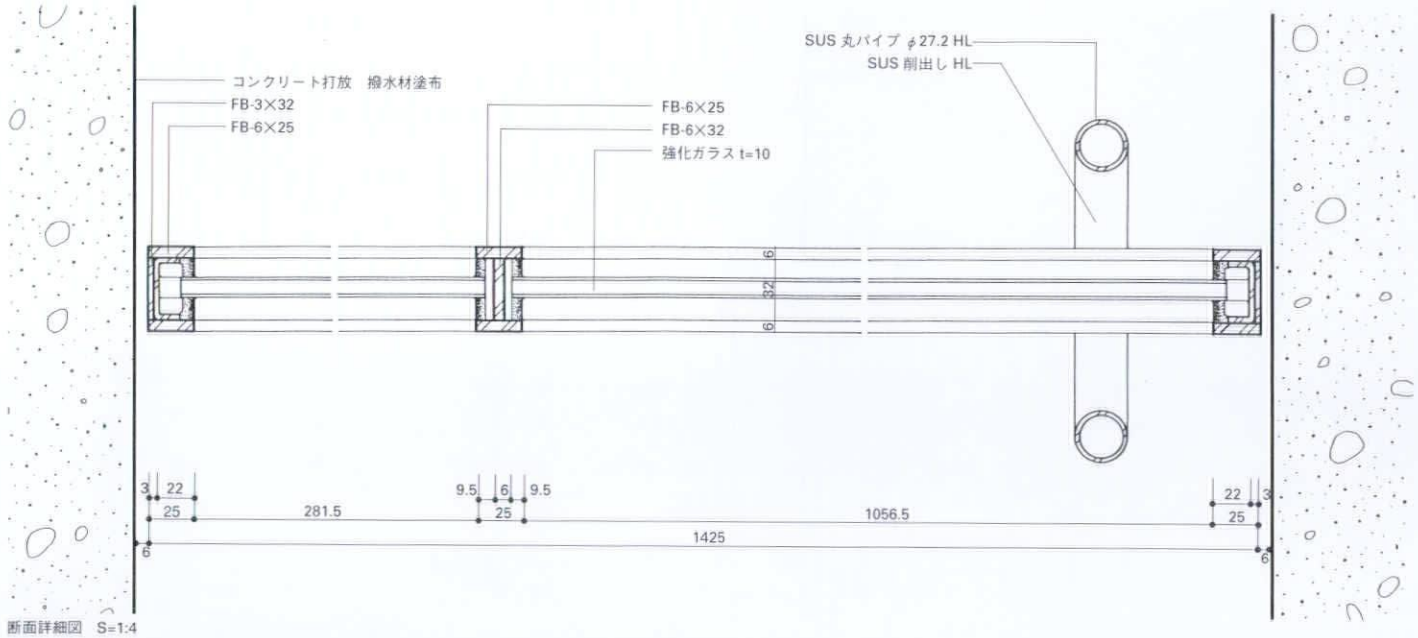


表面処理	メッキ	電気亜鉛メッキ処理
	下地塗装	エポキシ系錆止め塗装
	仕上げ塗装	ウレタン樹脂塗装
性能	耐風圧性能	S-3<1600Pa>
	水密性能	W-4<350Pa>
	気密性能	A-4<2等級>




St 厚1.6 曲げ加工 黒色塗装
石膏ボード t=12.5 AEP
空調リターンスリット
コンクリート打放 撥水材塗布
変性シリコンシーリング
網入りガラス t=6.8
熱押形鋼 L-75×22×6×9
押縁 St FB-16×32
水切 St 厚1.6 曲ゲ加工
St 厚1.6 裏面グライト吹付 t=5
FB-9×45
St 角鋼 9×9
St 角パイプ 22×10×1.6
フローリング（スポッテッドガム無垢材加工）t=12
木製デッキ（スポッテッドガム）t=19
5325
2313
627
2263
105
20
22
10
13
15
30
55
9
22
38
6
75

断面詳細図　S=1:4


SUS 丸パイプ φ27.2 HL
SUS 削出し HL
コンクリート打放　撥水材塗布
FB-3×32
FB-6×25
FB-6×25
FB-6×32
強化ガラス t=10
6
32
6
3
22
25
281.5
9.5
6
9.5
25
1056.5
22
3
25
1425
6
6

断面詳細図　S=1:4



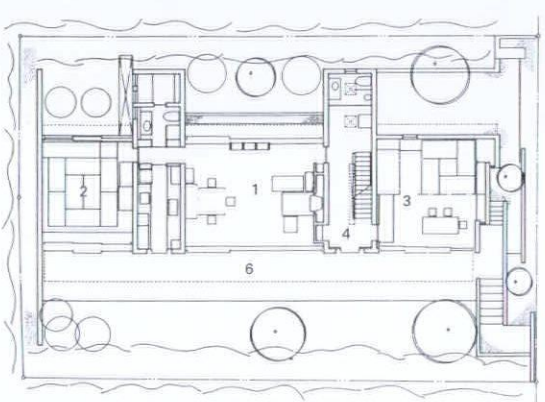


成城の住宅 1996

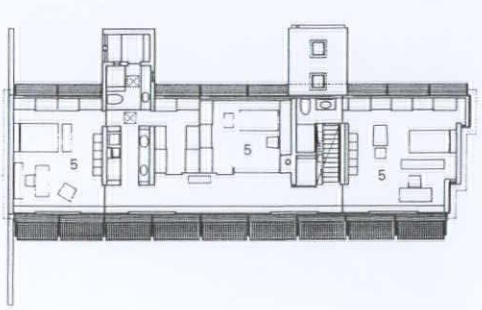
渡辺明設計事務所、東京都世田谷区、1996年

主用途：専用住宅
構造：鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
階数：地下1階、地上2階
敷地面積：493.96m²
建築面積：158.50m²
延床面積：435.49m²
造作家具制作者：吉田亞人／木曽三岳奥村設計所



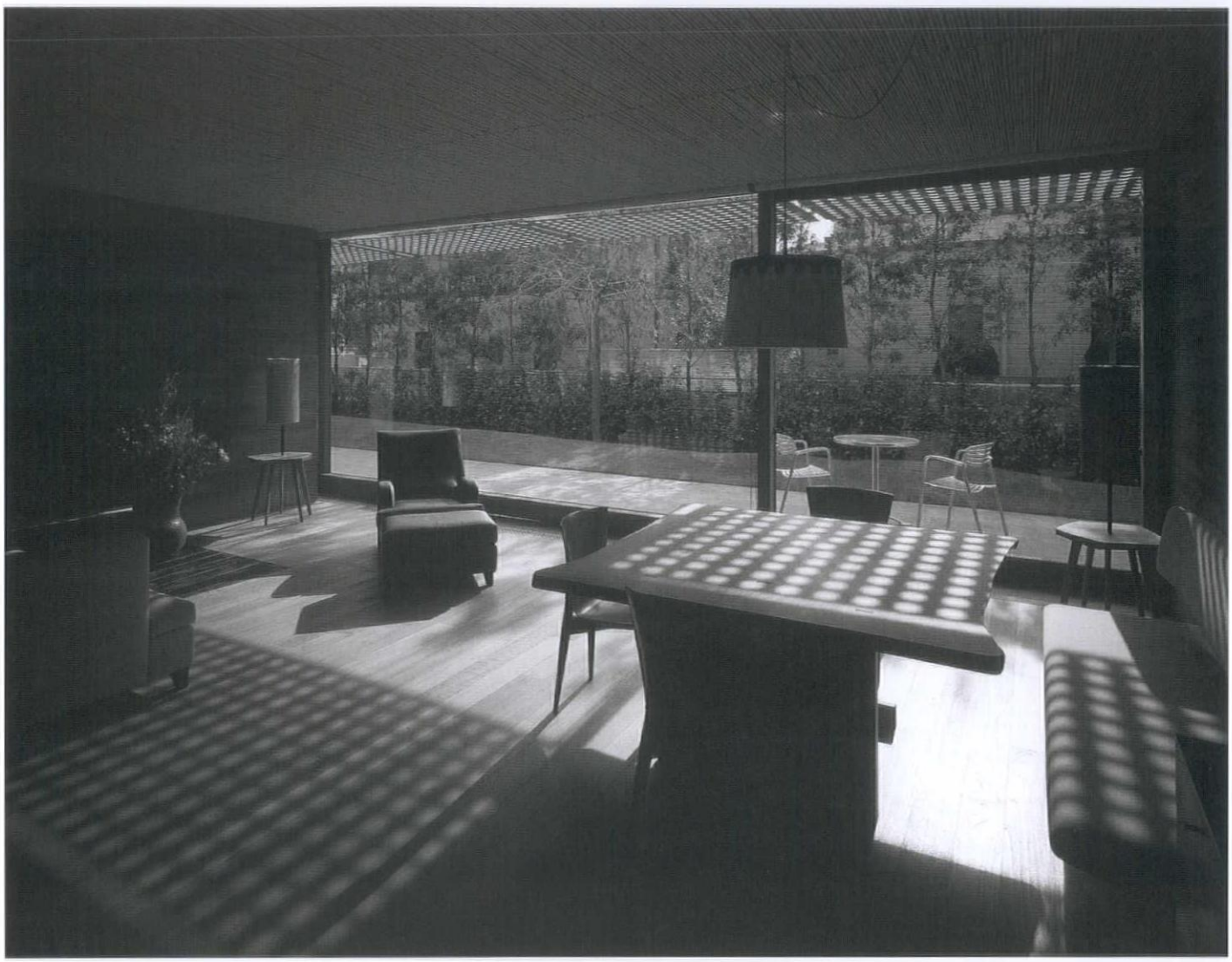


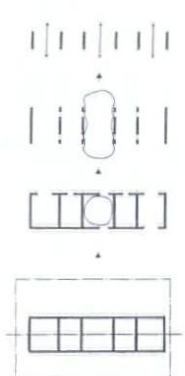
1階平面図兼配置図　S=1:400



2階平面図　S=1:400

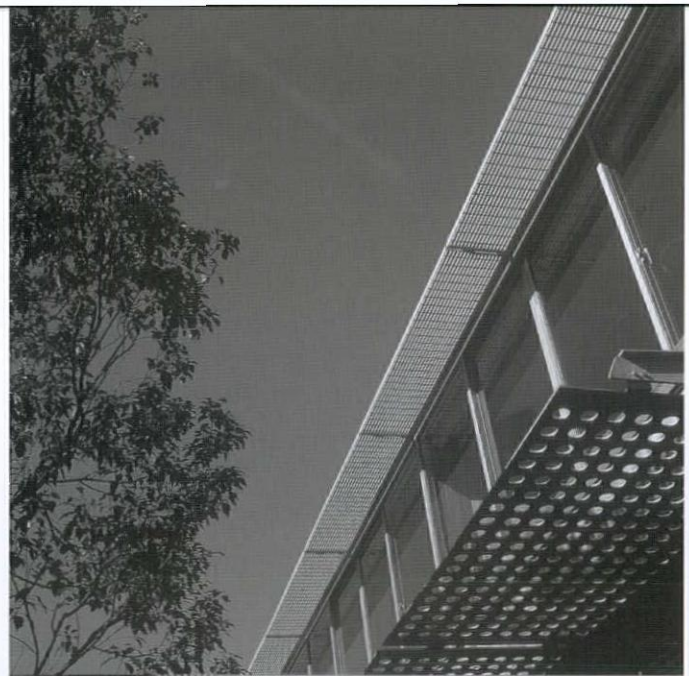
1：団欒の間
2：畳の間
3：板の間
4：玄関ホール
5：寝室
6：テラス



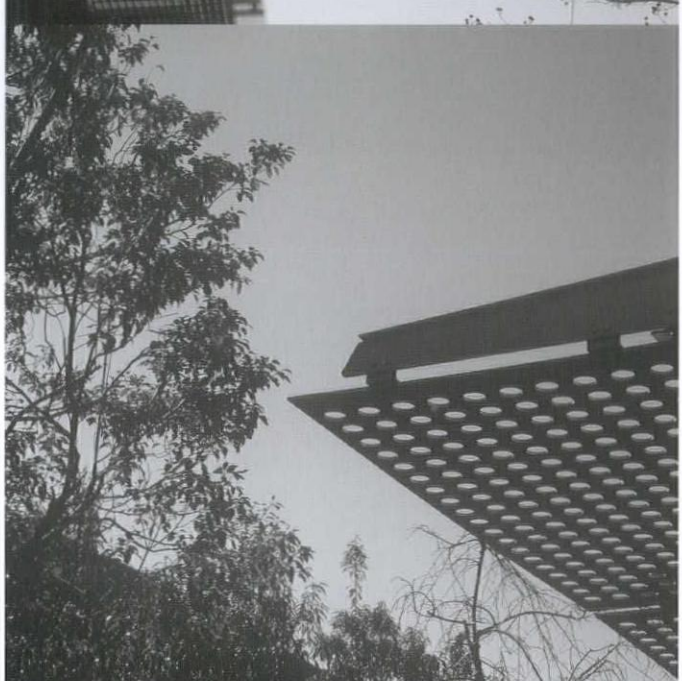


コンセプト・イメージ

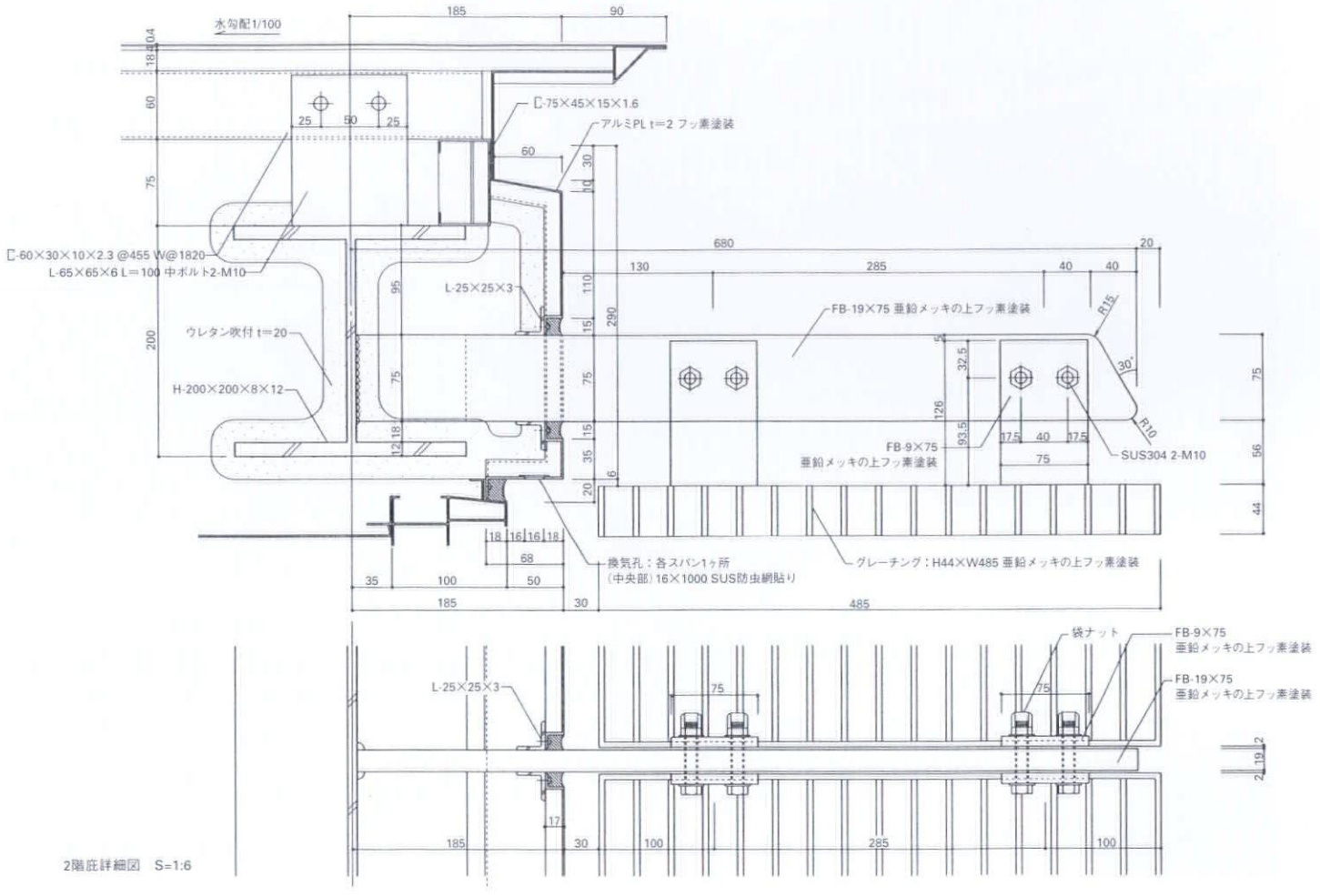
成城の光と風が通り抜ける空間を創り出すために、敷地条件にダイレクトに向かい合う事で設計をスタートした。東西に長く南北に短い短形の敷地のほぼ中心を軸として、東西に延びた直方体のボリュームは、薄肉ラーメン構造にする事によって、建物の壁を東西軸だけに置き、南北軸を開放した。南北に穴を開ける事で、リニアに配置された空間は奥行きのある外部空間の演出により、自然環境を取り込む生活空間としての領域を構成する。こうして生まれた内外の視覚交流に豊かな空間は、刻一刻と移り変わる光のたまりのうつろいを醸し出し、モアレのような柔らかな光の表情は、時空間の連続の中に一時の安堵感を生み、人のたまる生活空間と開かれた自然の息吹を与えている。



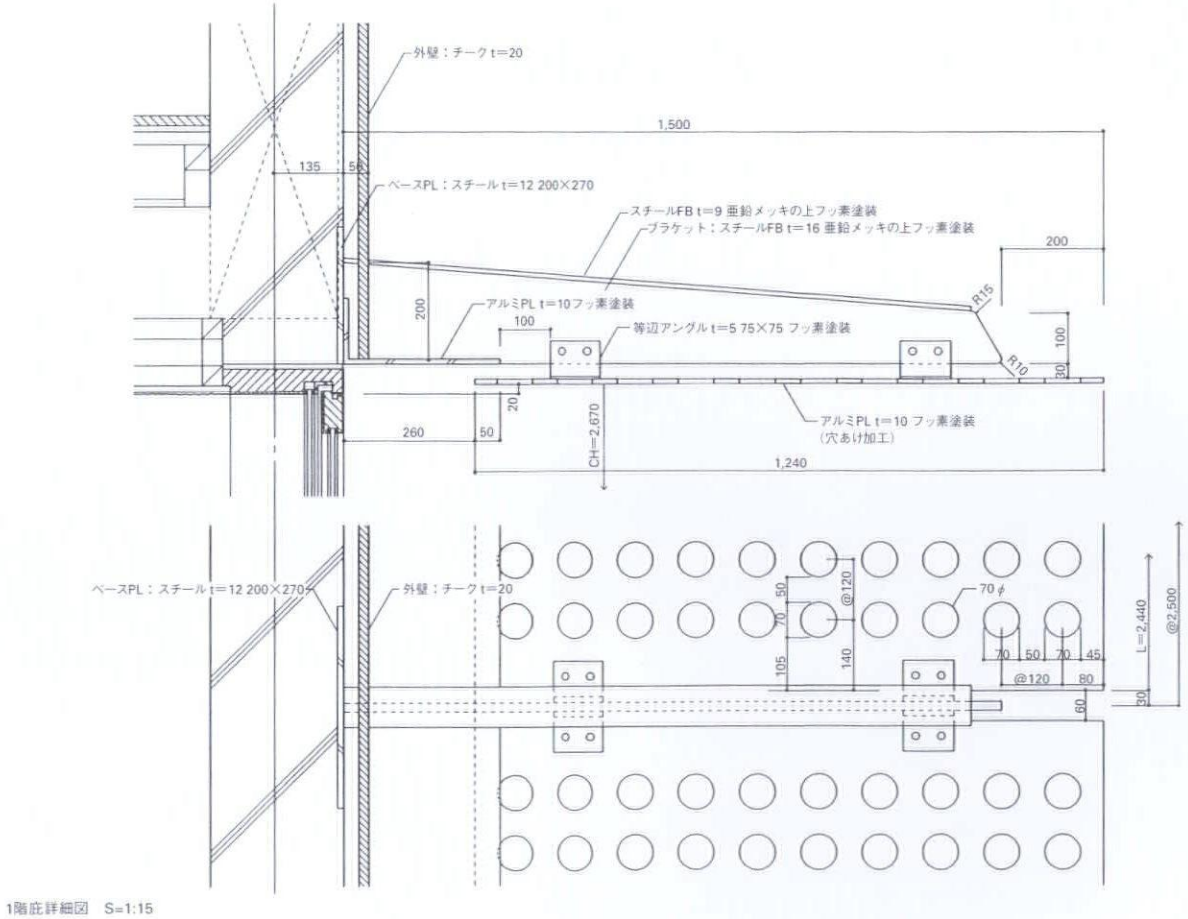




アルミプレートを透過し降り注ぐ光の粒が、さらに内部空間にしつらえられた葦簀（よしず）という二次的スクリーンを透過して生まれる表情を活きづかせるため、外光を切り口とし、日本家屋の持っている従来の庇を、光のたまりを生み出すダブルルーバーとしてデザインした。1Fにおける壁から1,500mmはね出した庇は、厚さ10mmのアルミプレートに、φ70mmの穴が@120mmで開けられている。アルミプレートの上下面はフッ素塗装処理をしているが、φ70mmの穴の仕口は金属の素地とし、光の反射の効果を期待している。そして内部には葦簀といった素材を使用しており、これらはデザインを推し進めるためのコントロール装置となっている。



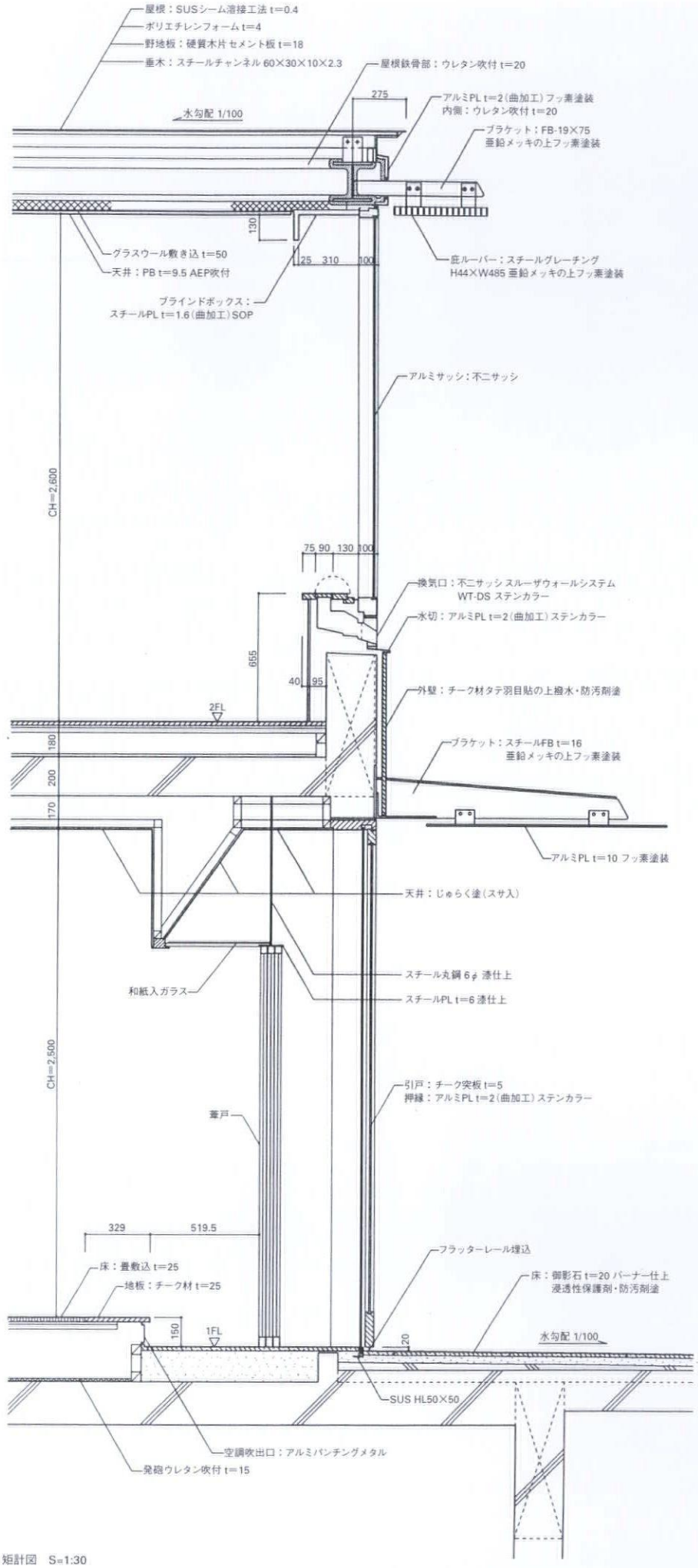
2階庇詳細図　S=1:6



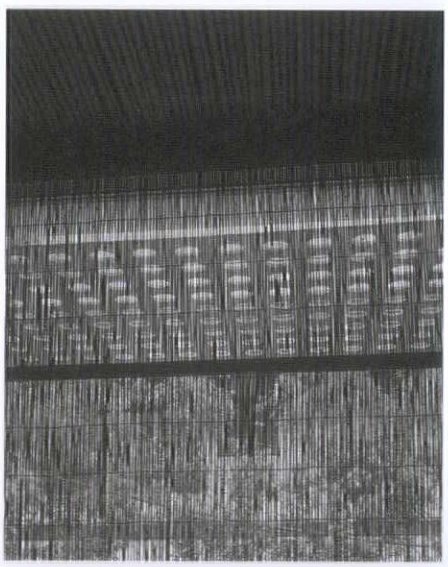
1階庇詳細図　S=1:15

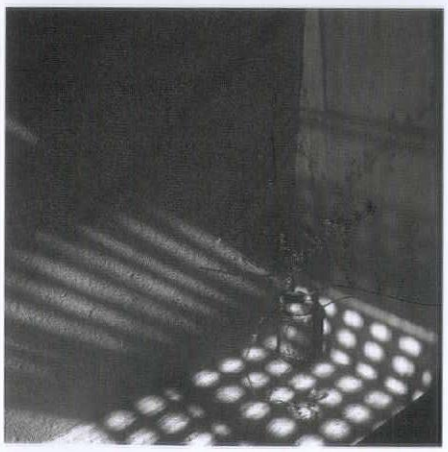





屋根：SUSシーム溶接工法 t=0.4
ポリエチレンフォーム t=4
野地板：硬質木片セメント板 t=18
垂木：スチールチャンネル 60×30×10×2.3
屋根鉄骨部：ウレタン吹付 t=20
水勾配 1/100
275
アルミPL t=2(曲加工)フッ素塗装
内側：ウレタン吹付 t=20
ブラケット：FB-19×75
亜鉛メッキの上フッ素塗装
130
グラスウール敷き込 t=50
天井：PB t=9.5 AEP吹付
25 310 100
庇ルーバー：スチールグレーチング
H44×W485 亜鉛メッキの上フッ素塗装
ブラインドボックス：
スチールPL t=1.6(曲加工)SOP
アルミサッシ：不二サッシ
CH=2,600
75 90 130 100
換気口：不二サッシ スルーザウォールシステム
WT-DS ステンカラー
水切：アルミPL t=2(曲加工)ステンカラー
655
40 95
外壁：チーク材タテ羽目貼の上撥水・防汚剤塗
2FL
ブラケット：スチールFB t=16
亜鉛メッキの上フッ素塗装
180
200
170
アルミPL t=10 フッ素塗装
天井：じゅらく塗(スサ入)
スチール丸鋼 6φ 漆仕上
和紙入ガラス
スチールPL t=6 漆仕上
CH=2,500
引戸：チーク突板 t=5
押縁：アルミPL t=2(曲加工)ステンカラー
障戸
329 519.5
フラッターレール埋込
床：御影石 t=20 バーナー仕上
浸透性保護剤・防汚剤塗
床：畳敷込 t=25
地板：チーク材 t=25
150
1FL
20
水勾配 1/100
SUS HL50×50
空調吹出口：アルミパンチングメタル
発砲ウレタン吹付 t=15

矩計図　S=1:30

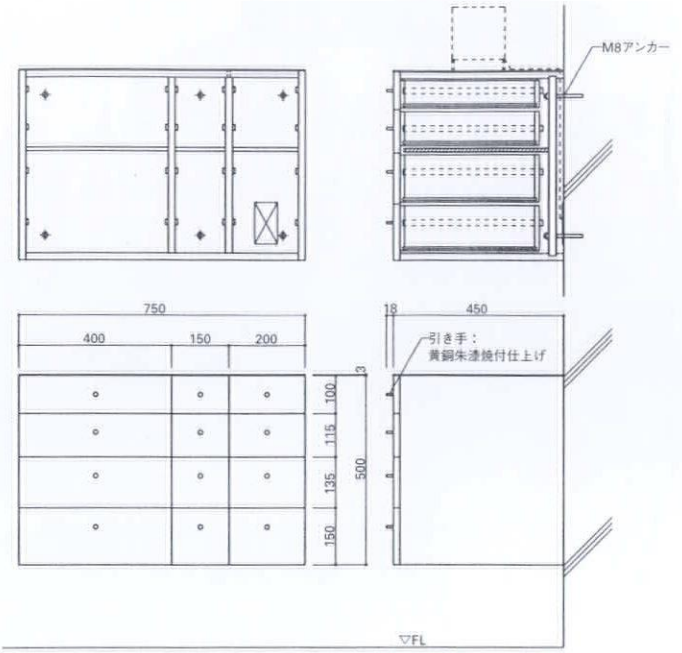






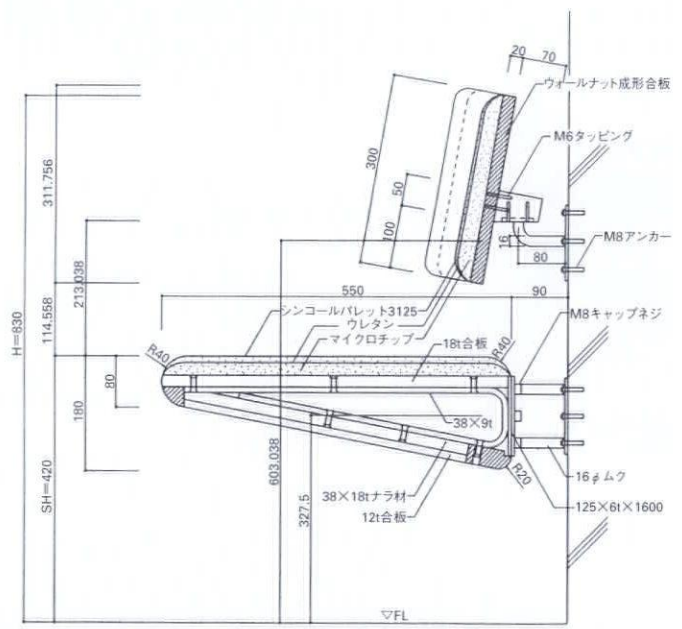
「全体」としての建築空間と、「部分」としてのディテールや家具はお互いに呼応するものである。今回の家具についても、素材としての在りよう、形としての在りよう等は、建築空間の中でそれらを操作する行為や動線が定まっていく事と同時に生まれる。建築空間において最初に出会い、手に触れる家具により、人は「全体」を理解し、さらに建築の素材やディテールと共鳴し合う家具は、生活環境の空間として生まれ変わる。





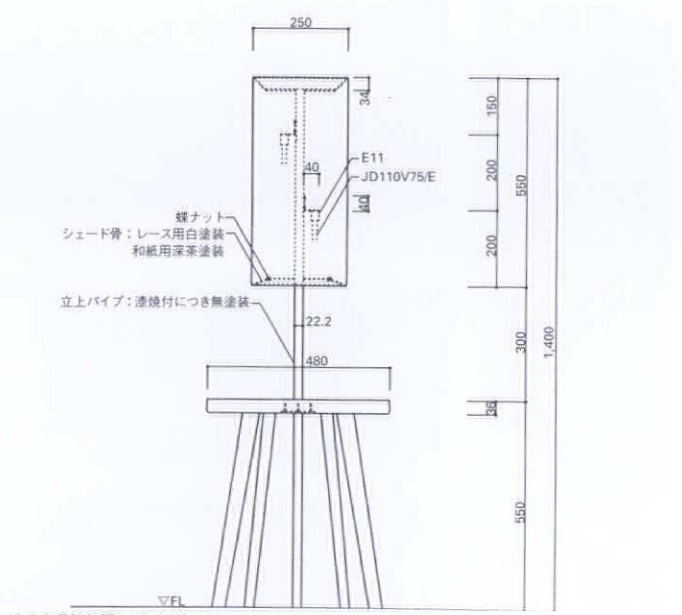
造作家具詳細図1　S=1:20





造作家具詳細図2　S=1:12



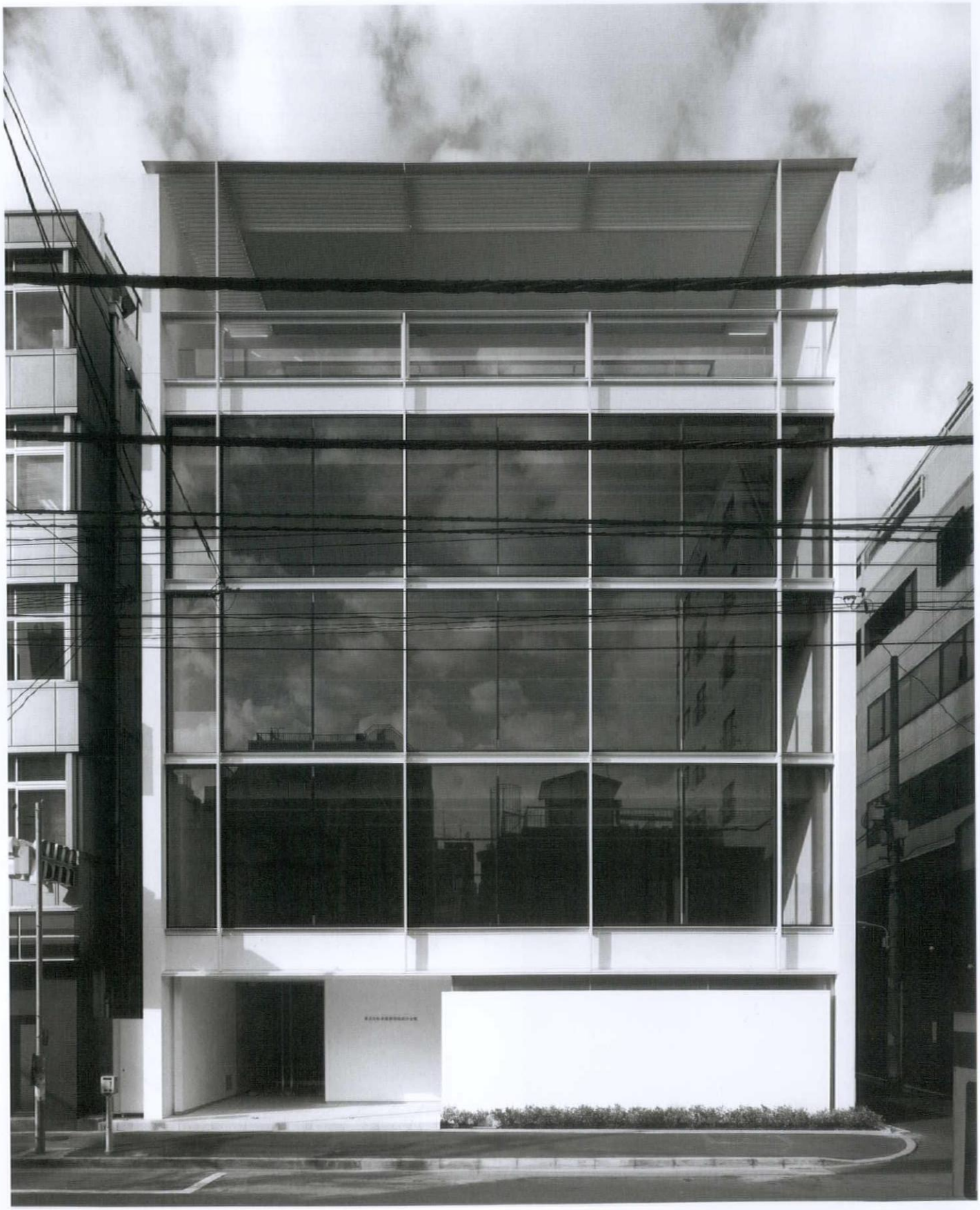


造作家具詳細図2　S=1:20

東京自転車健康保険組合会館

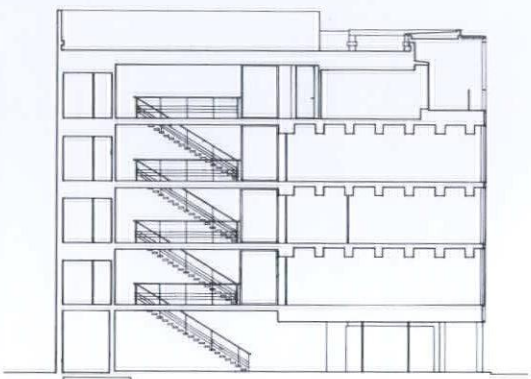
主用途：事務所
構造：鉄筋コンクリート造
階数：地上5階
敷地面積：272m²
建築面積：206m²
延床面積：908m²

竹中工務店東京本店設計部 担当：赤坂喜顕 廣島正明 喜田淳子、東京都台東区、1995年



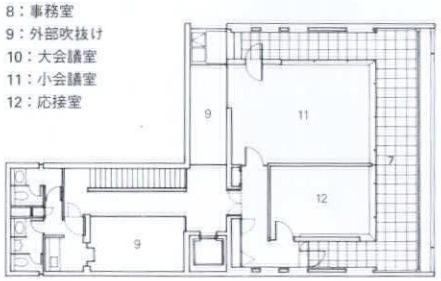


東京・上野に建つ、自動車部品製造卸売りに携わる中小規模の事業所員で構成された健康保険組合の会館ビルである。敷地は下町特有の細い街路や雑多な中小ビルに囲まれた典型的な商業地区の中にあり、この町並みに溢れる電柱や電線、広告塔などのさまざまな工業部材が形づくる騒然とした「線」と「面」の集合に対して、建築的エレメントの抽象的構成による形態的な応答を試みている。外観ファサードは、道路レベルの1階基部に防御的な壁を備え、3階の基準階をもつ胴部には街並みと慎重にスケールを合わせて内と外を交互に支持するリズミカルな白と黒のマリオンと透明ガラス、さらには半透過性のブラインドからなる開放と閉鎖の両義的な皮膜をまとい、頂部の最上階はルーバー状の庇に覆われた開放的なルーフテラスをもつという、ヒエラルキーのある三段構成が取られている。平面的には、間口の広い通りに面して2枚の壁と大小のガラススクリーンに囲まれたオフィスゾーンを配し、細く変型した敷地奥に挿入された伝統的な坪庭のようなふたつの中庭を介して、コアゾーンとの明確な空間的分節がなされている。床下空調されたプレストレス架構のロングスパン・コンクリート打放しのビームが露出した無柱の事務スペースや、最上階の会議・応接スペース、そしてカツラが植えられた求心的な中庭、ニッチ状に開かれたもうひとつの中庭に面したエレベータ・ホールや階段室まで、すべてのスペースに自然光を効果的に導入し、過密な都市の中で失われつつある「自然」の感覚を光と影のドラマによって再現している。

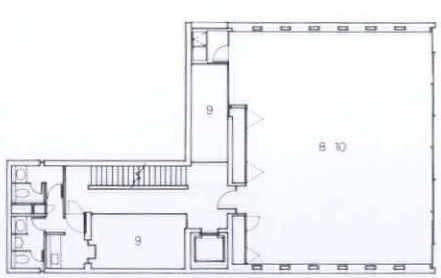


断面図　S=1:400

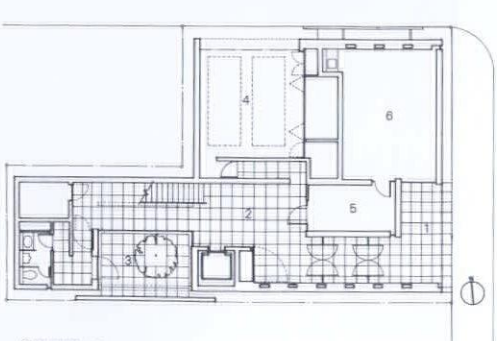
1：ピロティ
2：エントランスホール
3：中庭
4：駐車場
5：待合いコーナー
6：健康相談室
7：テラス
8：事務室
9：外部吹抜け
10：大会議室
11：小会議室
12：応接室



5階平面図

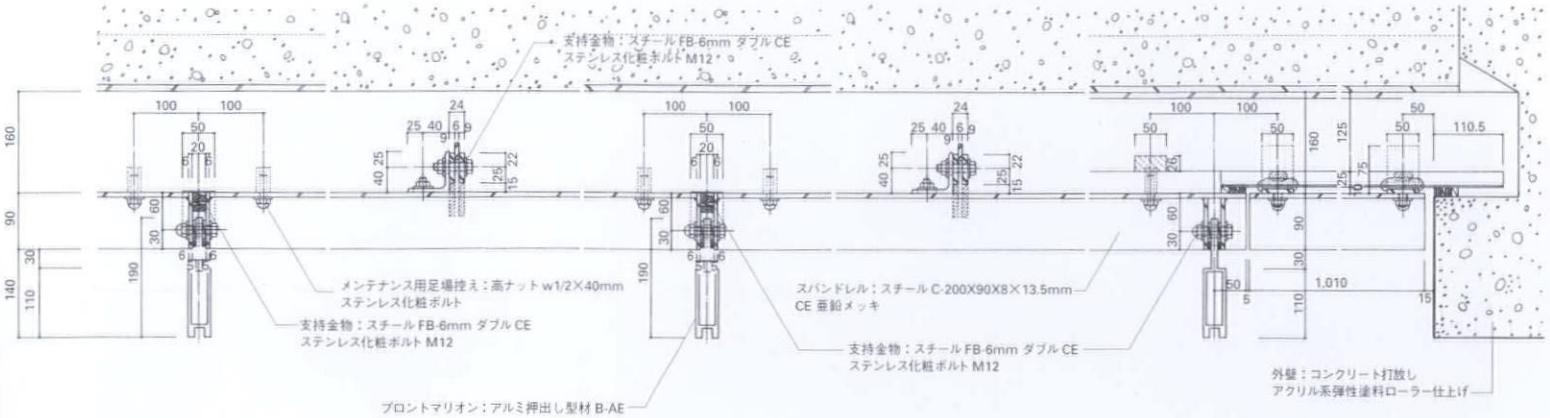


3,4階平面図

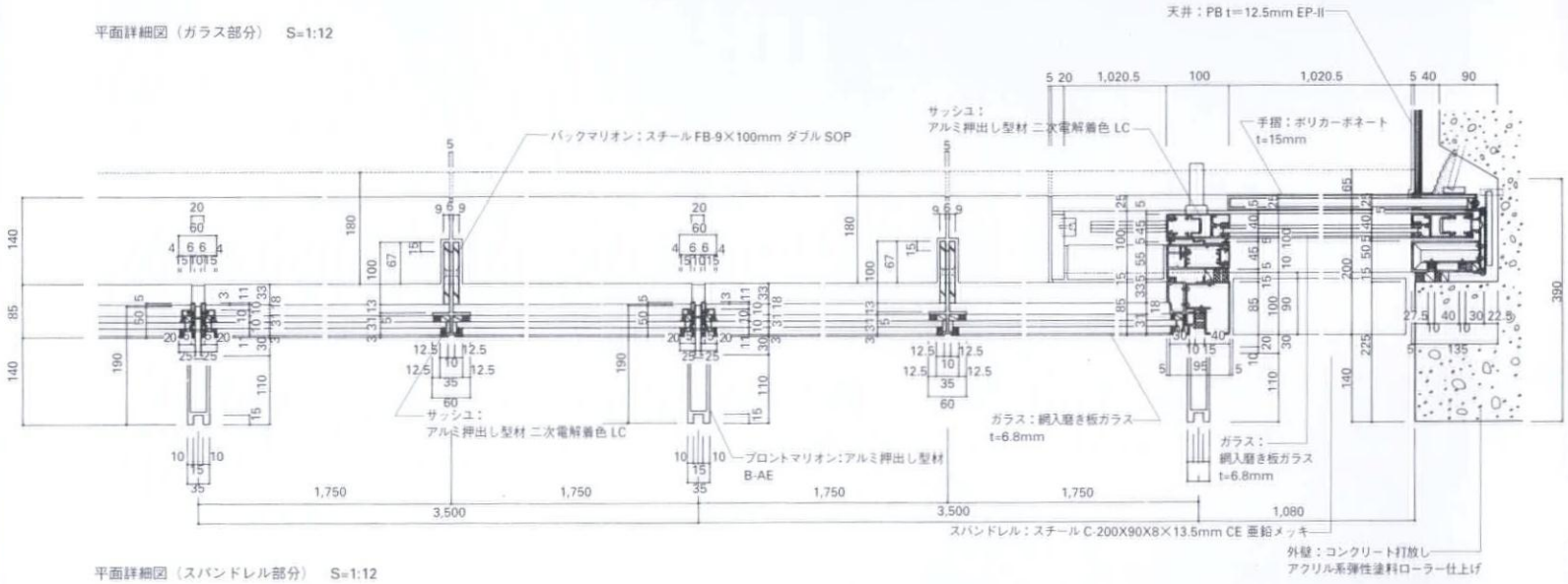


1階平面図　S=1:400


東京自転車競技保険組合会館



平面詳細図（ガラス部分）　S=1:12

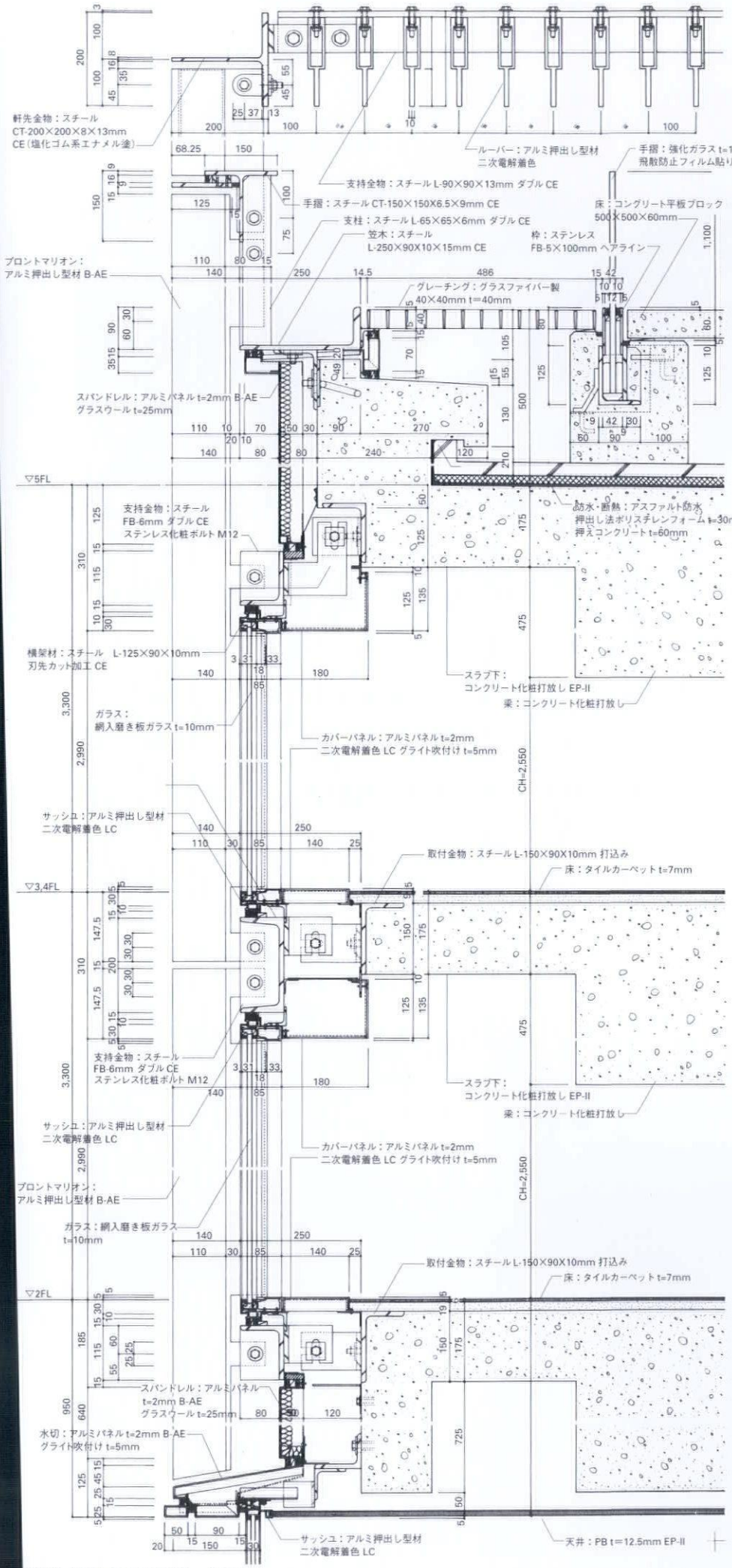


平面詳細図（スパンドレル部分）　S=1:12

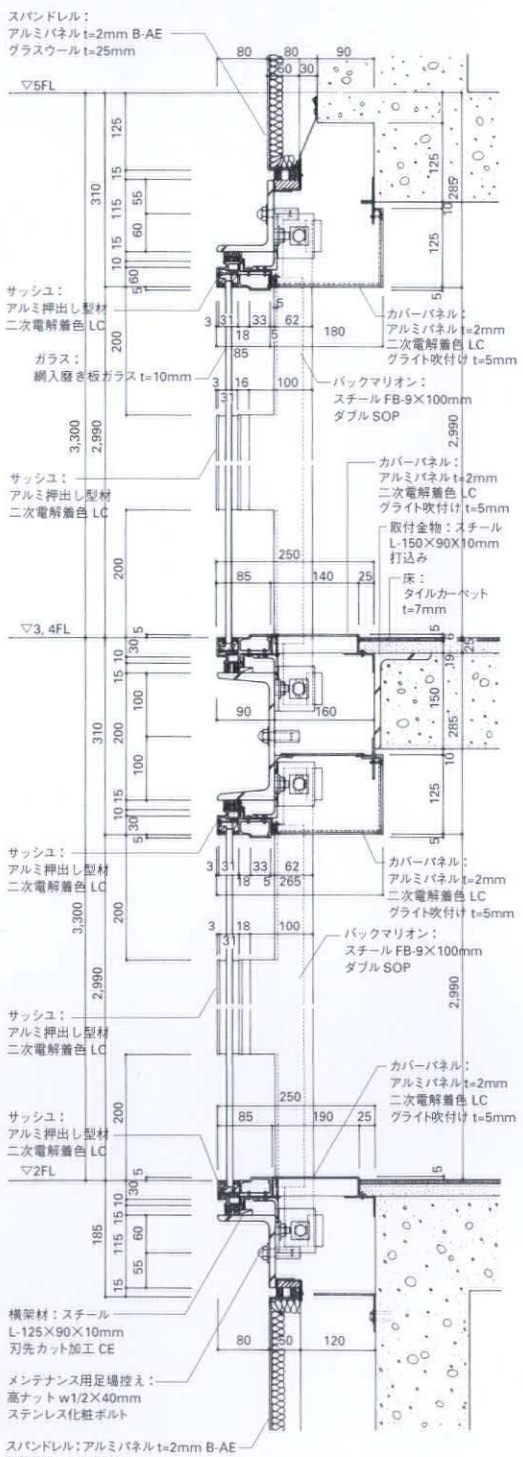


カーテンウオールの胴部は、網入透明ガラスの内側と外側を交互に支持する白と黒のアルミ型材とスチールフラットバーからなるバックマリオンとフロントマリオンの組合せからなり、フロントマリオンの一部が上方へと伸び、同部材を転用した5階のルーフテラスを覆うルーバー状の庇へと連続している。
ルーバー状の庇は、自然光を制御する機能的な役目を担いながら、視覚的には、過密な都市の中で失われつつある「自然」の感覚を刻一刻と変化する光と影のドラマによって表現している。





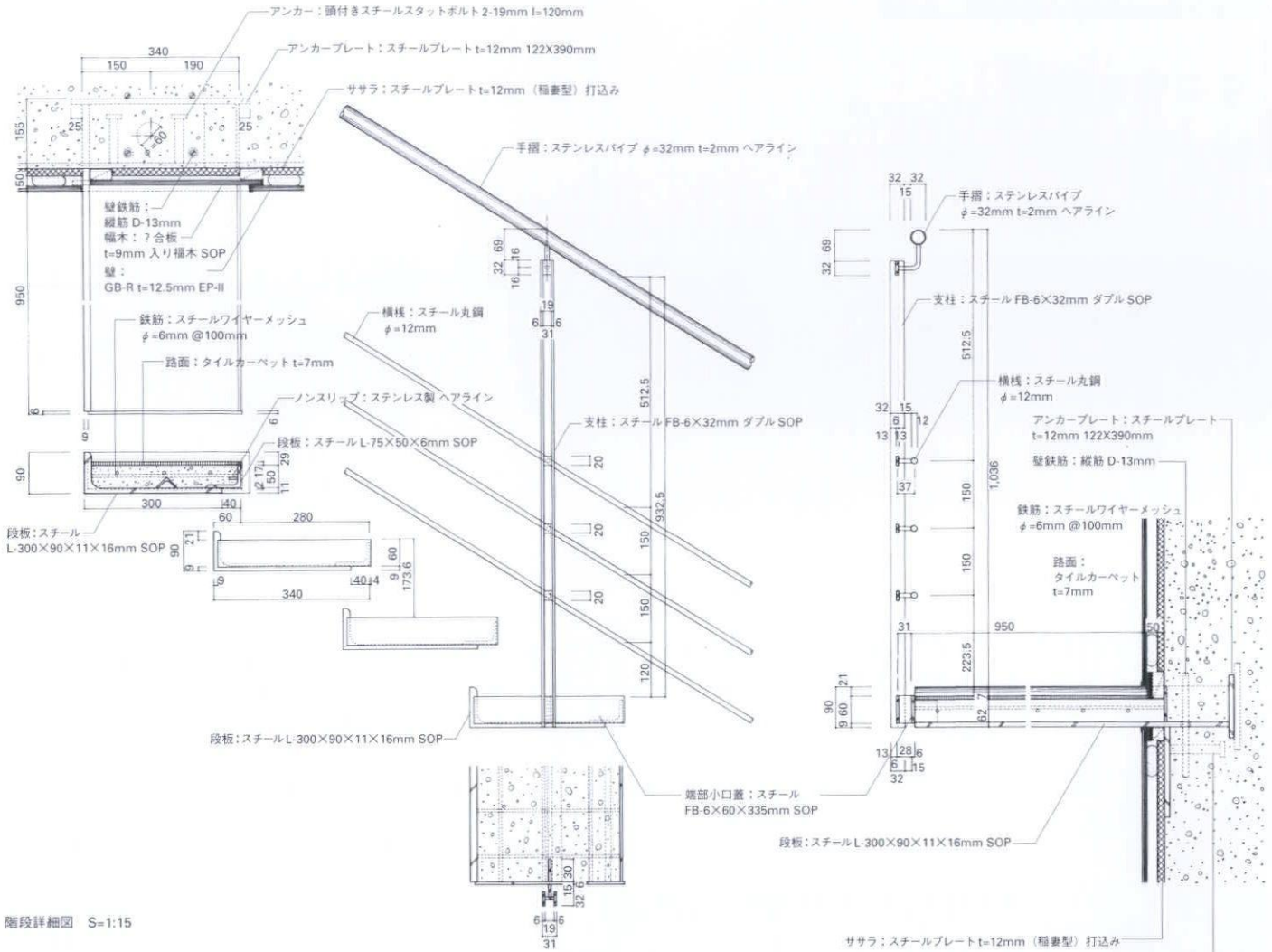
面詳細図（フロントマリオン部分）　S=1:12



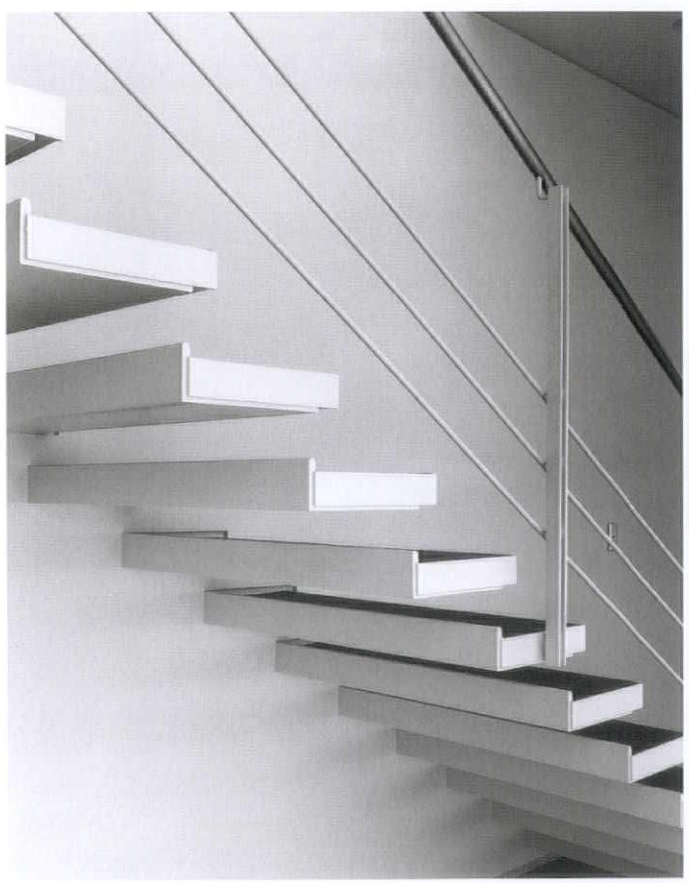
断面詳細図（バックマリオン部分）　S=1:12

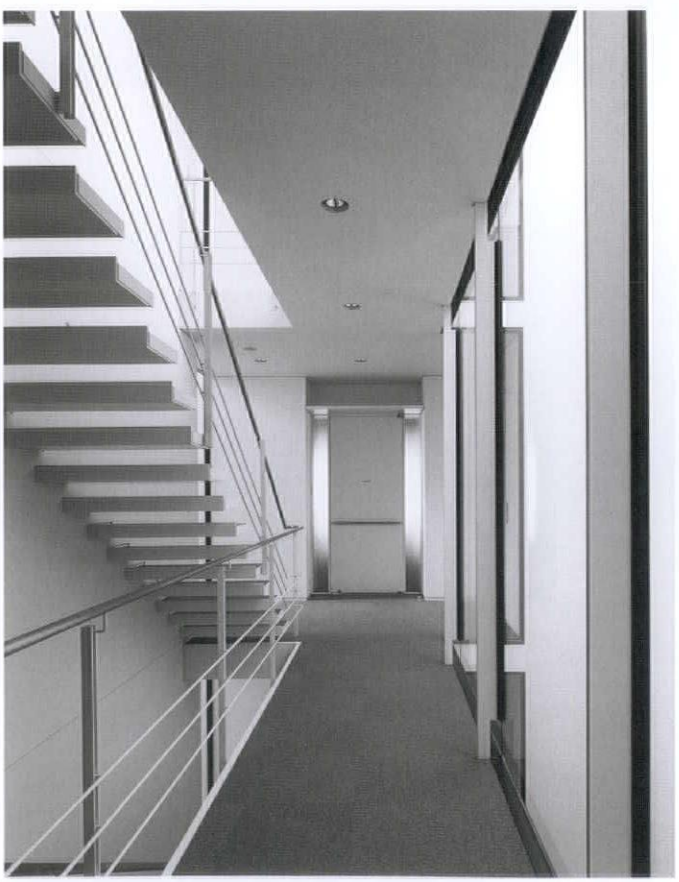
中庭に面し、自然光を効果的に導入した小さなコアスペースに、視覚的な広がりを意図したシンプルな段板のみで構成された内部階段である。段板は、既製品の薄いスチールL形鋼の組み合わせにより成り、さらにプレートの片側をコンクリート壁に打ち込み、壁からのキャンティレバーとしている。蹴込みは、段板の重ね寸法を十分にとることで自然光と視線の透過をバランスさせながら、わずかにアングルのアール部分を見せることで、シャープな鋭さの中に、柔らかな表情を創り出している。




アンカー：頭付きスチールスタットボルト 2-19mm l=120mm
アンカープレート：スチールプレート t=12mm 122X390mm
ササラ：スチールプレート t=12mm（稲妻型）打込み
手摺：ステンレスパイプ φ=32mm t=2mm ヘアライン
壁鉄筋：
縦筋 D-13mm
幅木：？合板
t=9mm 入り福木 SOP
壁：
GB-R t=12.5mm EP-II
鉄筋：スチールワイヤーメッシュ
φ=6mm @100mm
路面：タイルカーペット t=7mm
横桟：スチール丸鋼
φ=12mm
ノンスリップ：ステンレス製 ヘアライン
支柱：スチール FB-6×32mm ダブル SOP
段板：スチール L-75×50×6mm SOP
段板：スチール
L-300×90×11×16mm SOP
段板：スチール L-300×90×11×16mm SOP
端部小口蓋：スチール
FB-6×60×335mm SOP
段板：スチール L-300×90×11×16mm SOP
ササラ：スチールプレート t=12mm（稲妻型）打込み
アンカー：頭付きスチールスタットボルト 2-19mm l=120mm

階段詳細図　S=1:15



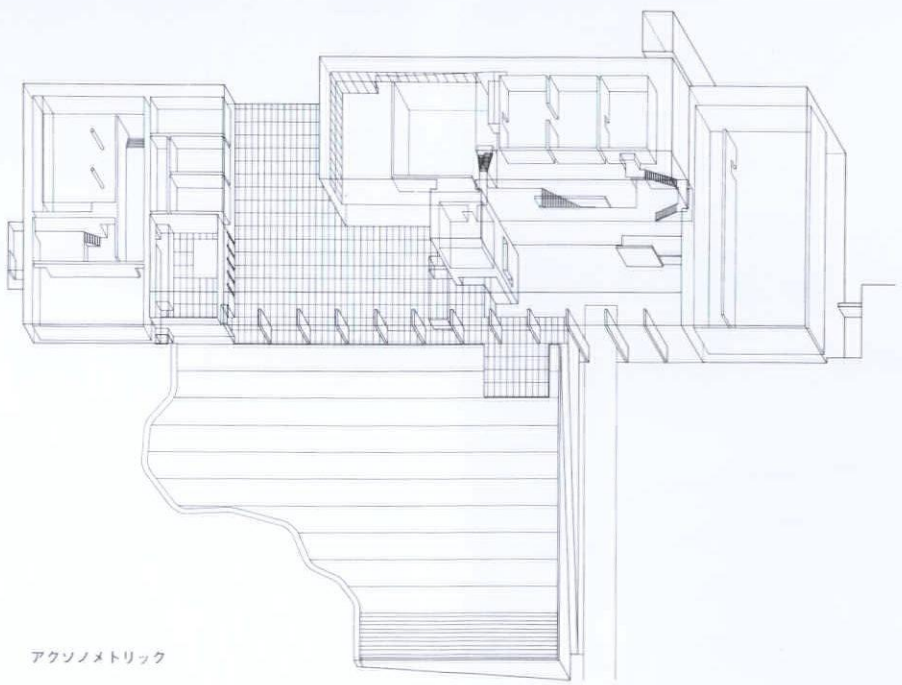


豊田市美術館

谷口建築設計研究所、愛知県豊田市、1995年

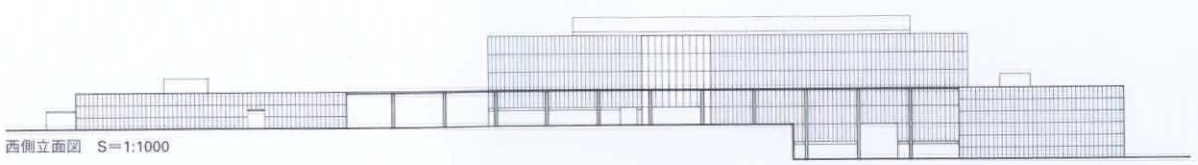
主用途：美術館
構造：鉄筋コンクリート造、
　　一部鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄骨造
階数：地下2階、地上3階
敷地面積：30,041.35m²
建築面積：6,194.67m²
延床面積：11,238.41m²





アクソノメトリック





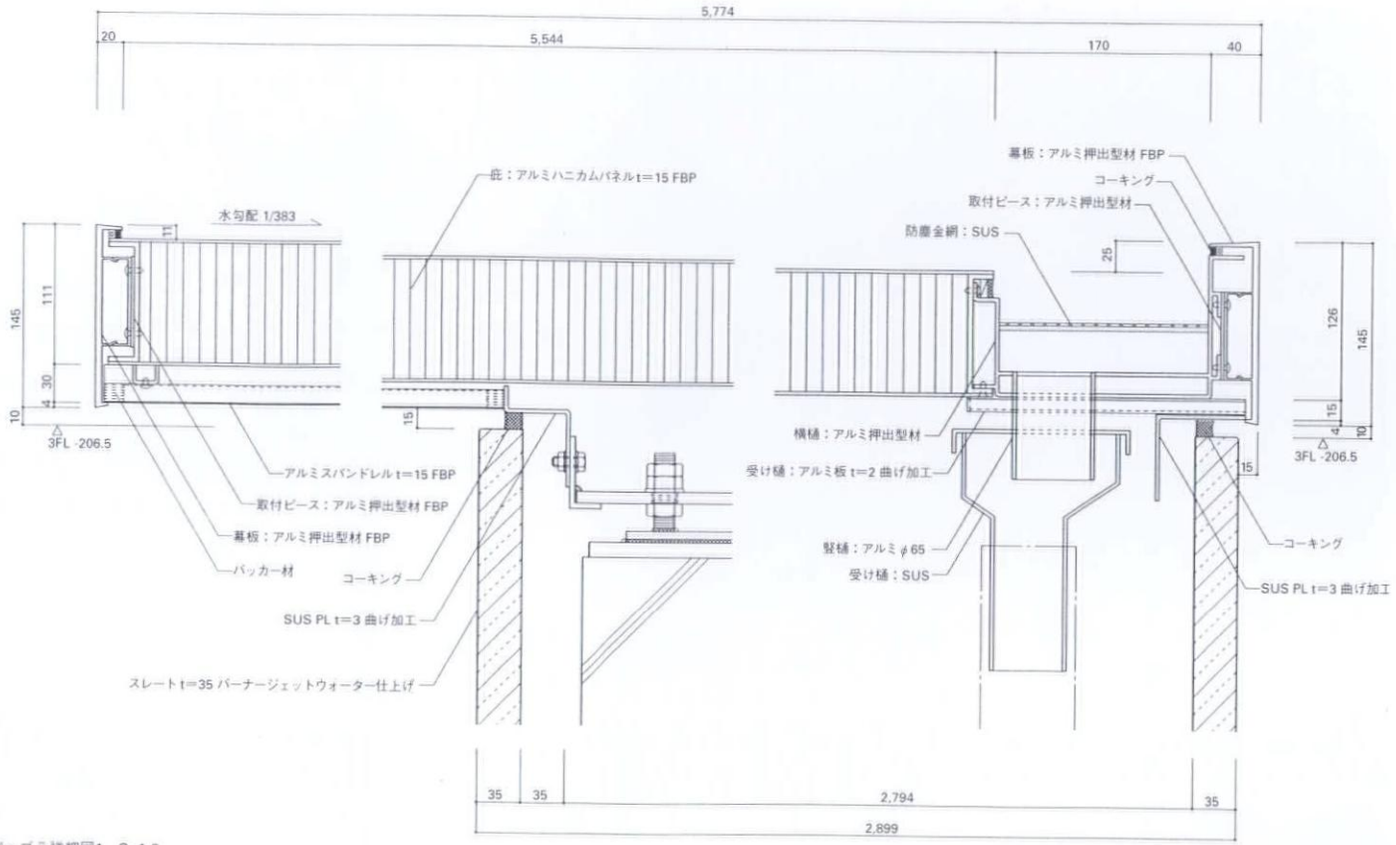
西側立面図　S＝1:1000



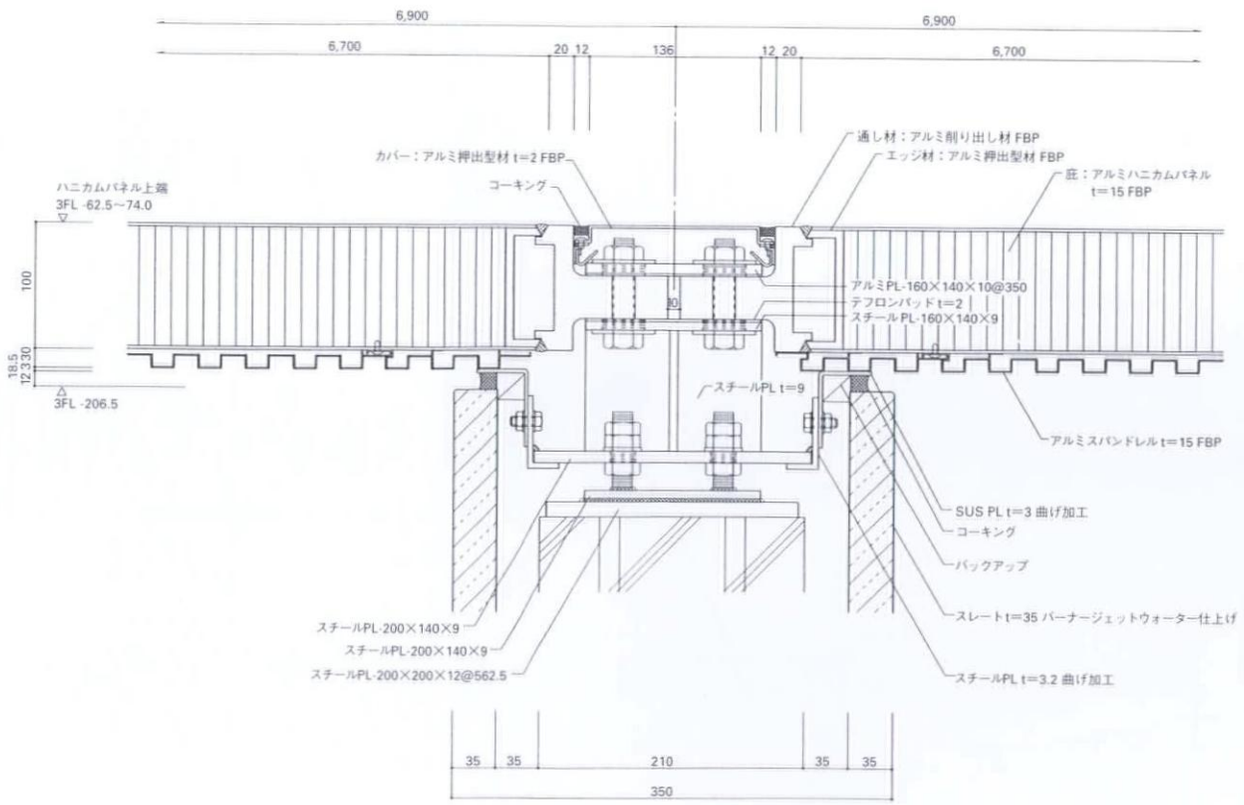
建物外観の構成が、常設展示、企画展示、高橋節郎館の3つのヴォリュームからなり、これらを統合するためのものとしてパーゴラが存在する。またエントランスではゲートとして、テラスでは外部回廊としての機能がある。全長80mのパーゴラは何よりもその水平性を実現することが重要であった。

アルミハニカムパネル（ろう付タイプ）は軽量でありながら十分な強度と面精度をもっているため、通常行う構造、仕上げ、防水等の考察が軽減され、薄く単純な収まりが可能となった。

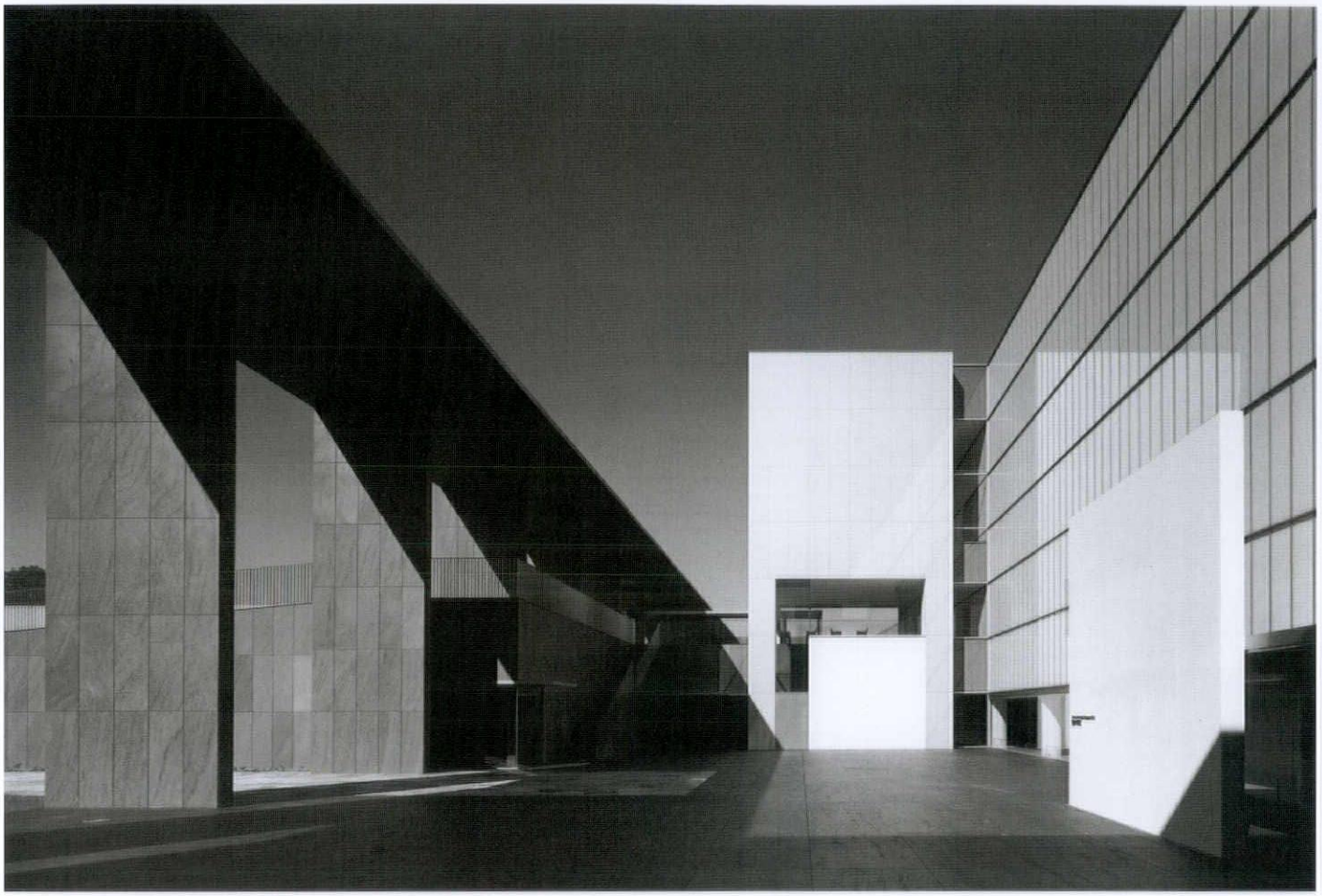
軒天の仕上げは、柔らかな陰影のあるアルミスパンドレルを用い、水面からの揺らぎをほのかに反射している。（棟尾 聡）



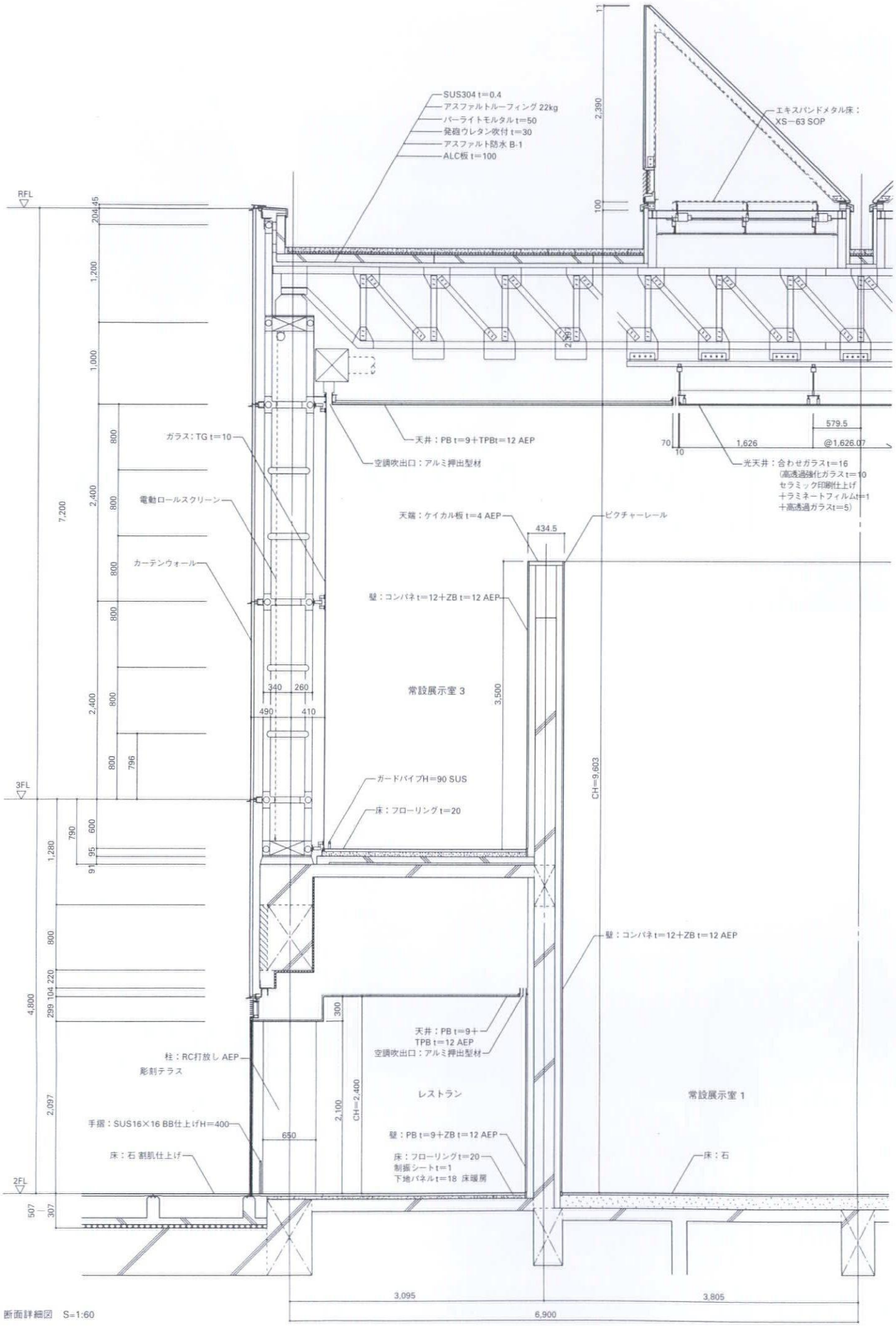
バーゴラ詳細図1　S=1:6



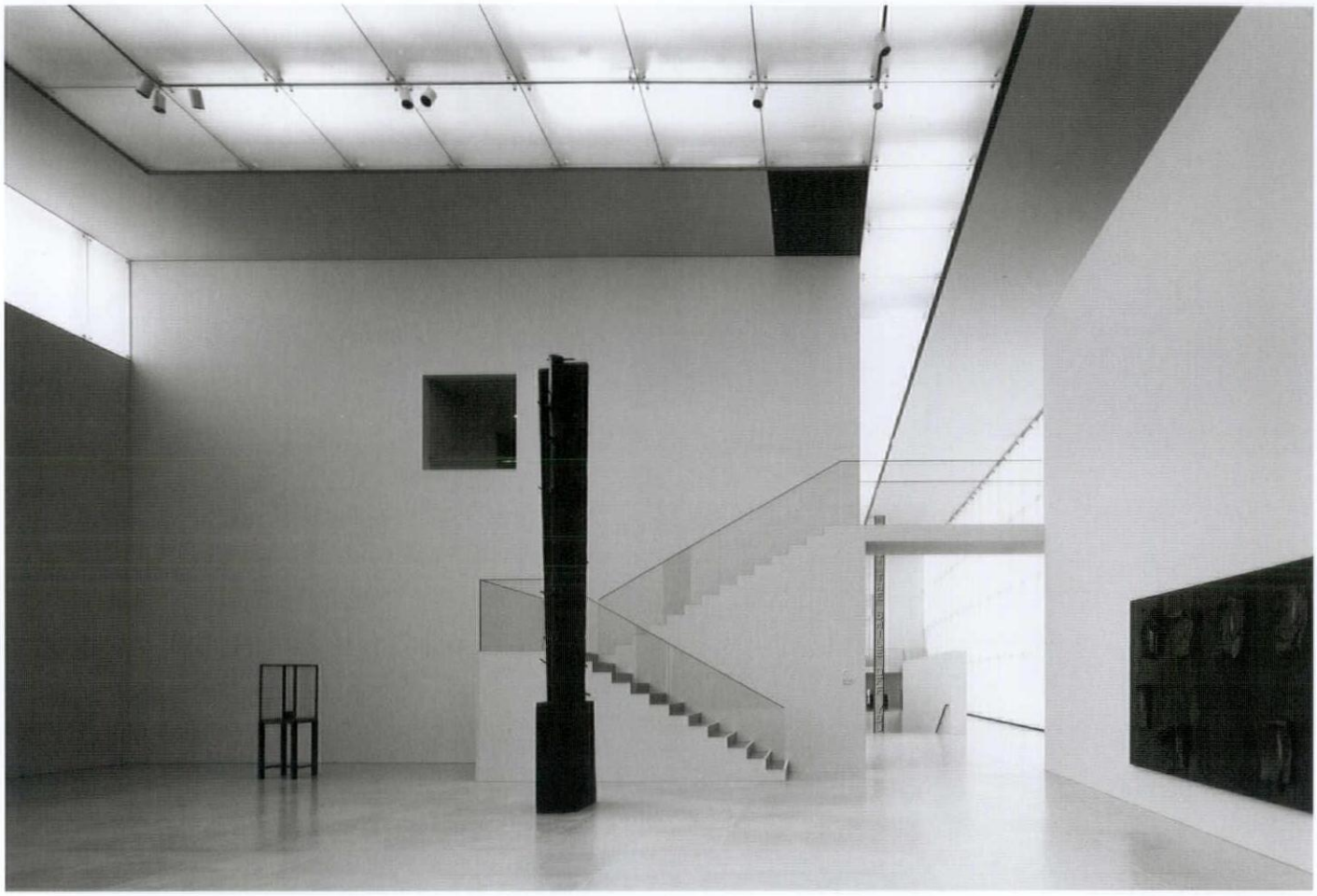
バーゴラ詳細図2　S=1:6

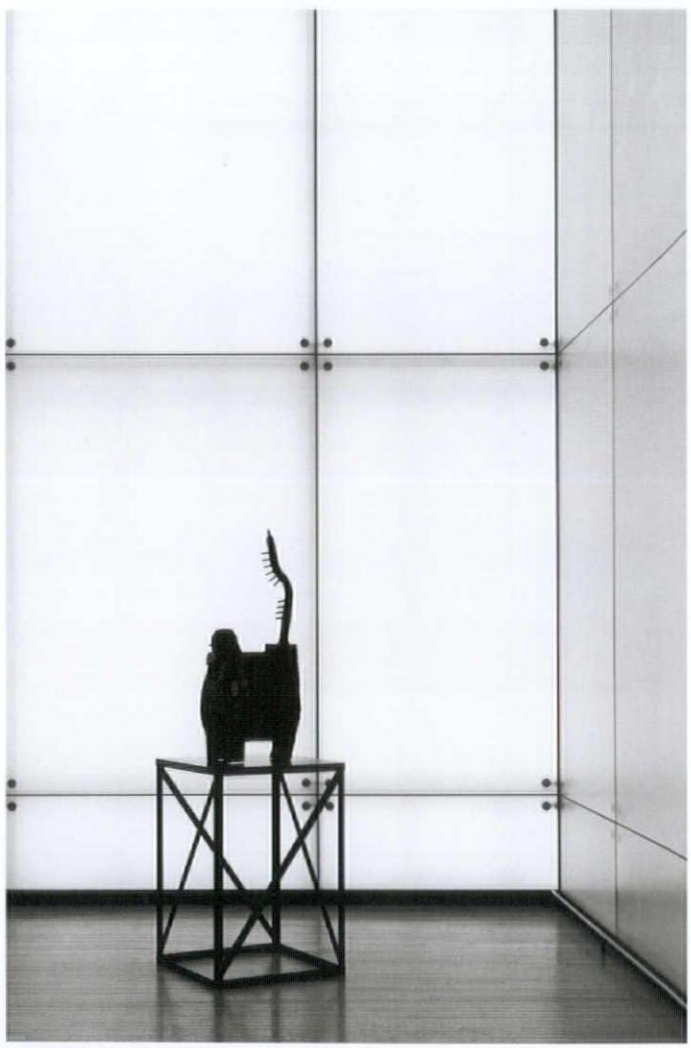



Francis Bacon
Karl Marx


SUS304 t=0.4
アスファルトルーフィング 22kg
パーライトモルタル t=50
発砲ウレタン吹付 t=30
アスファルト防水 B-1
ALC板 t=100
エキスパンドメタル床：
XS−63 SOP
RFL
3FL
2FL
ガラス：TG t=10
電動ロールスクリーン
カーテンウォール
天井：PB t=9+TPBt=12 AEP
空調吹出口：アルミ押出型材
光天井：合わせガラスt=16
(高透過強化ガラスt=10
セラミック印刷仕上げ
+ラミネートフィルムt=1
+高透過ガラスt=5)
天端：ケイカル板 t=4 AEP
ピクチャーレール
壁：コンパネ t=12+ZB t=12 AEP
常設展示室 3
ガードパイプH=90 SUS
床：フローリング t=20
天井：PB t=9+
TPB t=12 AEP
空調吹出口：アルミ押出型材
柱：RC打放し AEP
彫刻テラス
レストラン
常設展示室 1
手摺：SUS16×16 BB仕上げH=400
床：石 割肌仕上げ
壁：PB t=9+ZB t=12 AEP
床：フローリング t=20
制振シート t=1
下地パネル t=18 床暖房
床：石
CH=9,603
CH=2,400
7,200
4,800
2,097
2,400
1,200
1,000
800
796
2,390
100
579.5
@1,626.07
1,626
434.5
3,500
3,095
3,805
6,900

断面詳細図　S=1:60





階段室から展示室へと連なる一体の空間はすべてがコンテンポラリーアートのためのもので、その展示環境を生むために次の事に注意を払っている。

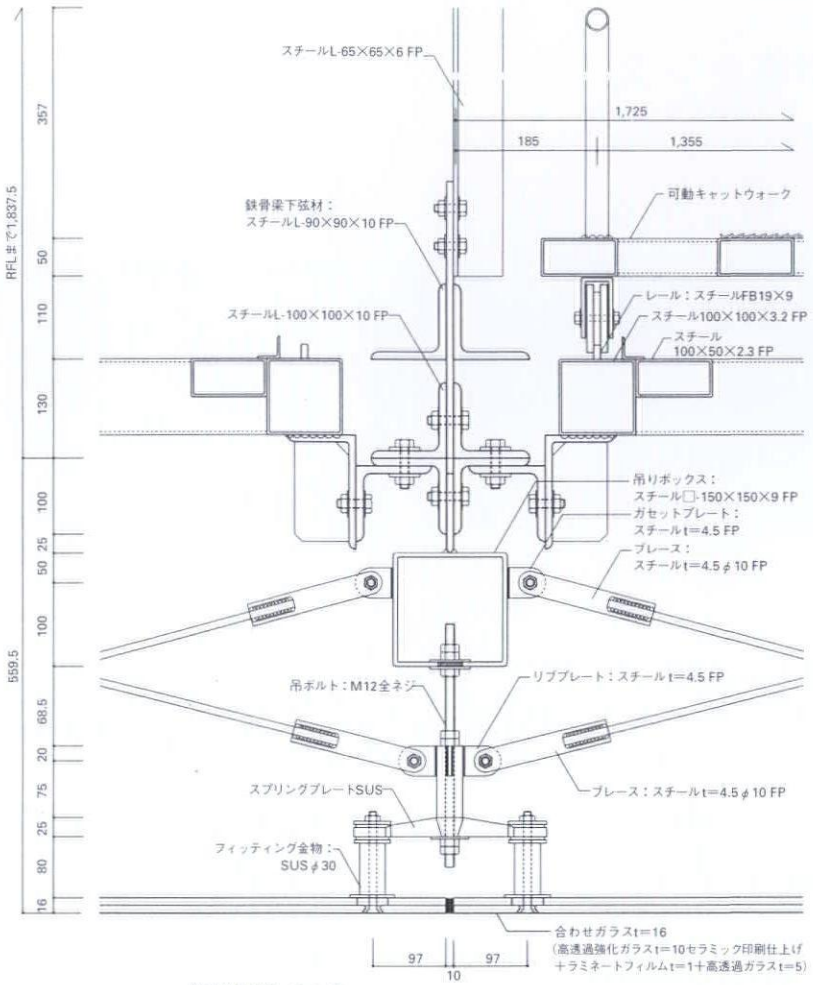
1. 光（自然光）の導入とその均質性の確保
2. ディテールの簡素化と割付のプロポーション
3. 使用材料

外装としてのカーテンウオール、内装としてのガラス（壁、天井）、構造体の3つで構成されたダブルグレージングは、外乱防止と良好な光環境を生み出すために考えられたものである。

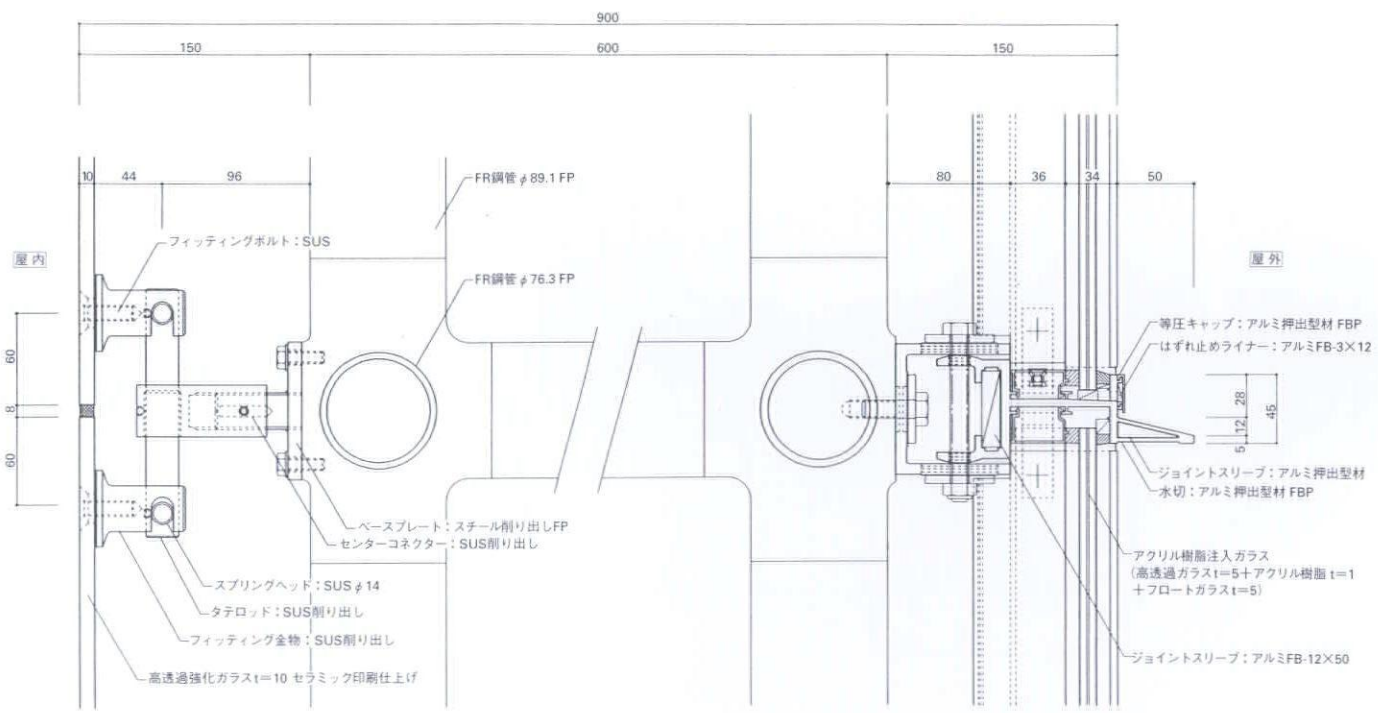
外部のアクリル樹脂合わせガラスは紫外線の防止と光の拡散、安全性等を考える上で重要な役目を担っている。一方内部（壁、天井）の4点支持で架構されたセラミック印刷強化ガラスには、シール目地と支持点以外無駄な線や影がでないことが、拡散光とともに作品の背景として求められた。

構造体はダブルグレージング内の空調スペースを生み出すことや、架構の影を消すため、細いスチールパイプによるフィーレンデールトラス（耐火無被覆FR鋼）とし、さらに各ジョイントはすべてパイプと同じ断面を持つ鋳物としている。

（棟尾 聡）



光天井詳細図　S=1:10



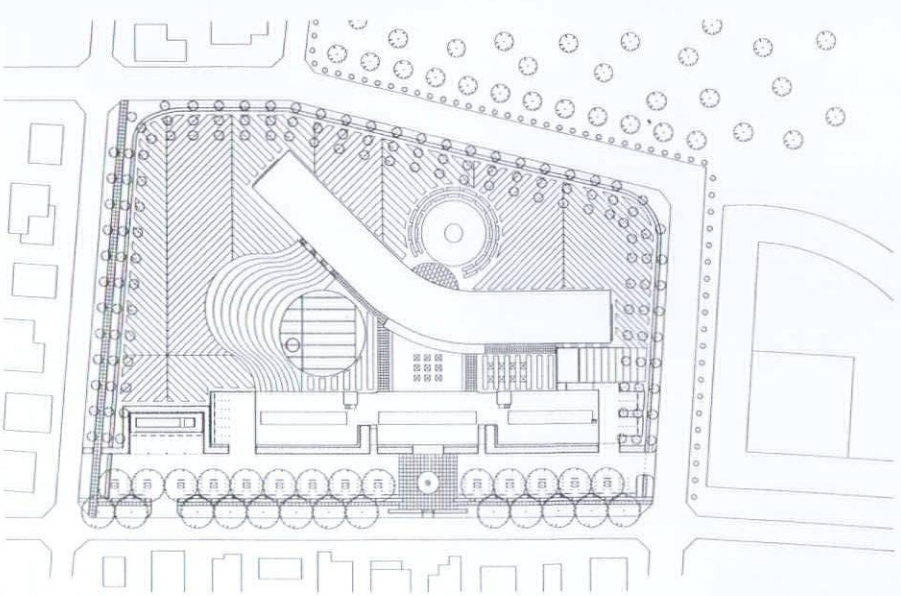
カーテンウォール詳細図　S=1:5

東京海上東日本研修センター

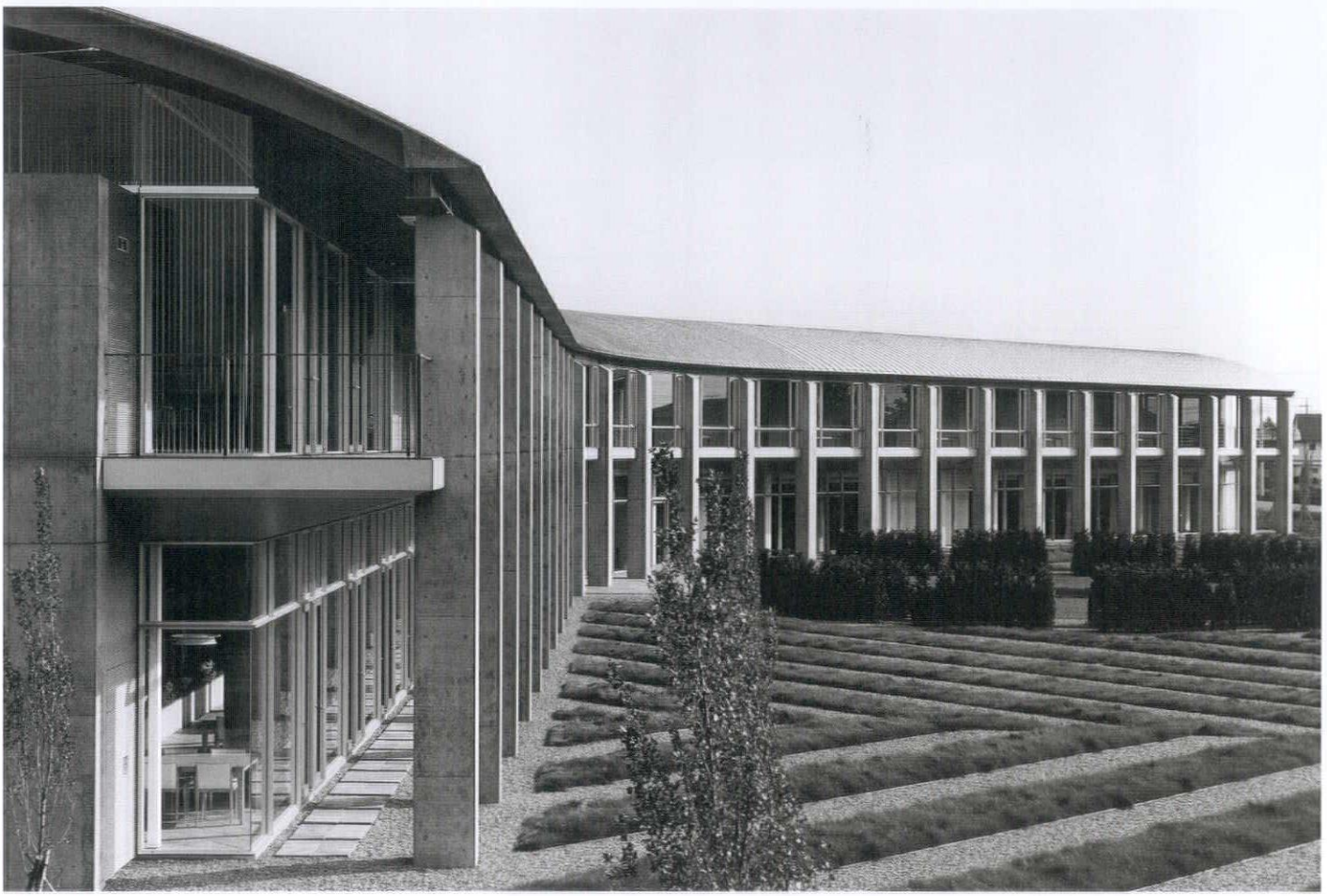
KAJIMA DESIGN　担当：押野見邦英、栃木県河内郡南河内町、1994年

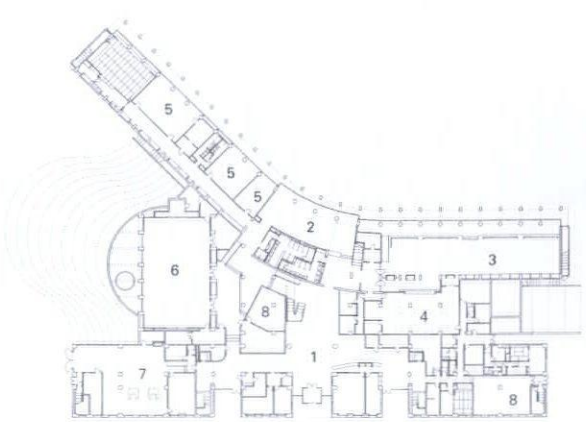
主用途：研修所
構造：RC造、PC造
階数：地上5階、塔屋1階
敷地面積：16,141m²
建築面積：4,275m²
延床面積：10,487m²
共同設計者：ピーター・ウォーカー、ウィリアム・ジョンソン・アンド・パートナーズ（ランドスケープ）
LPA（照明）、ILYA（FF&E）



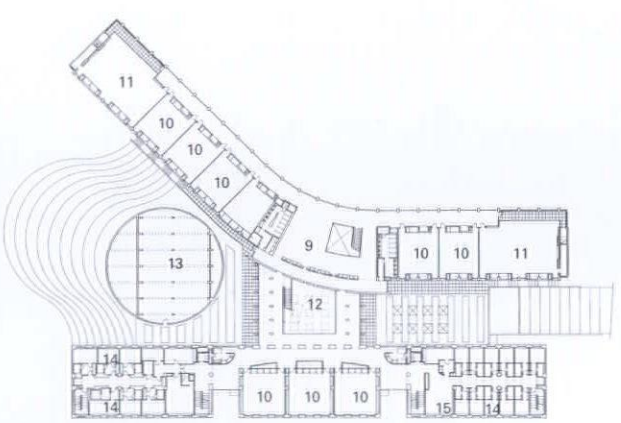


配置図　S=1:2000



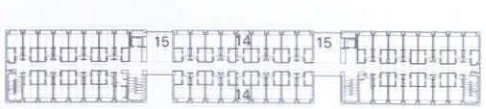


1階平面図　S=1:1500



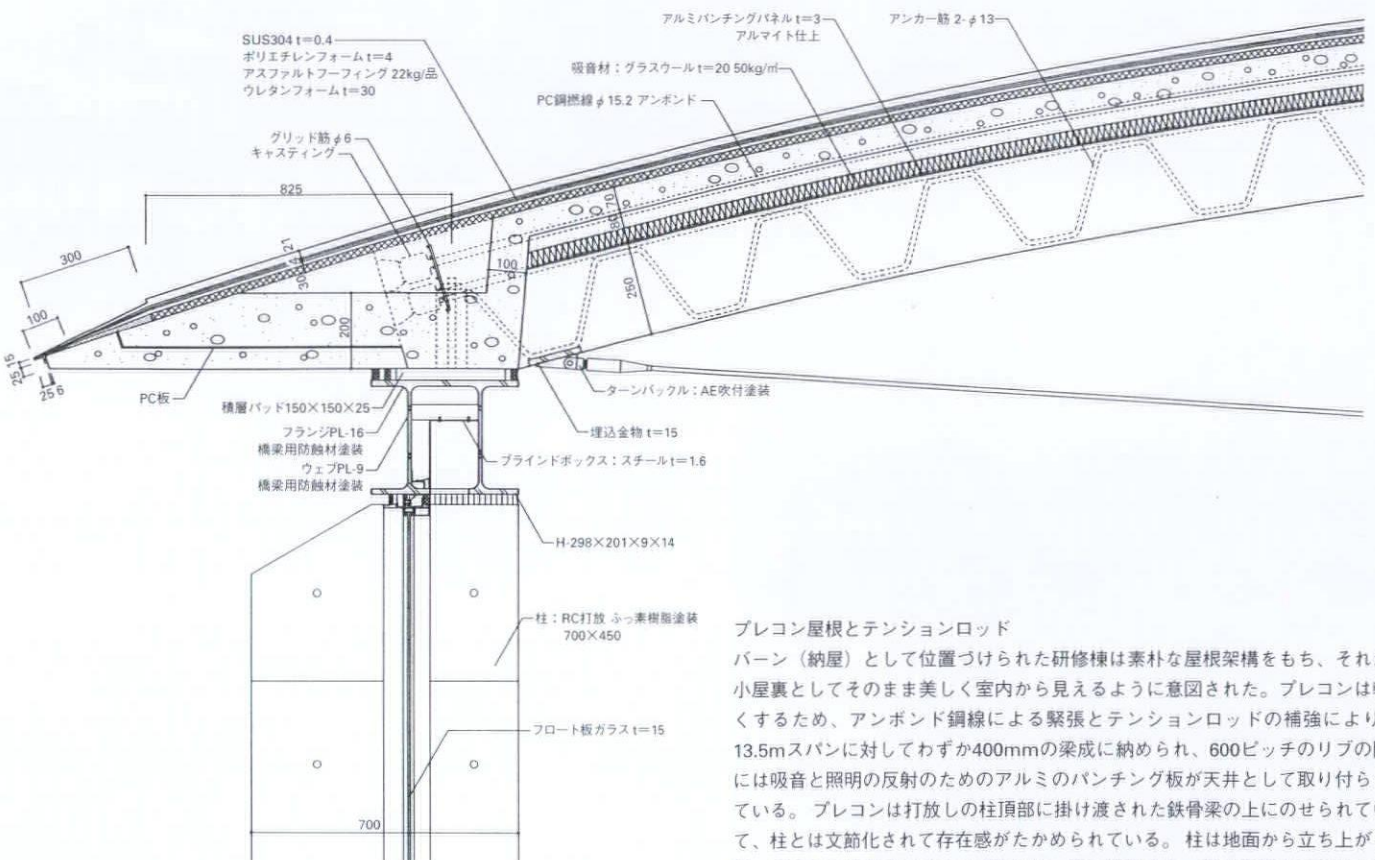
2階平面図

1：エントランスホール
2：ラウンジ
3：食堂
4：厨房
5：パーティールーム
6：大研修室
7：実習室
8：機械室
9 ：ライブラリー
10：小研修室
11：中研修室
12：吹抜け
13：室外機置場
14：宿泊室
15：宿泊ラウンジ



3〜5階平面図

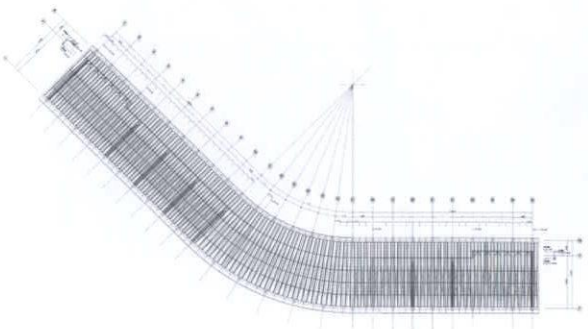




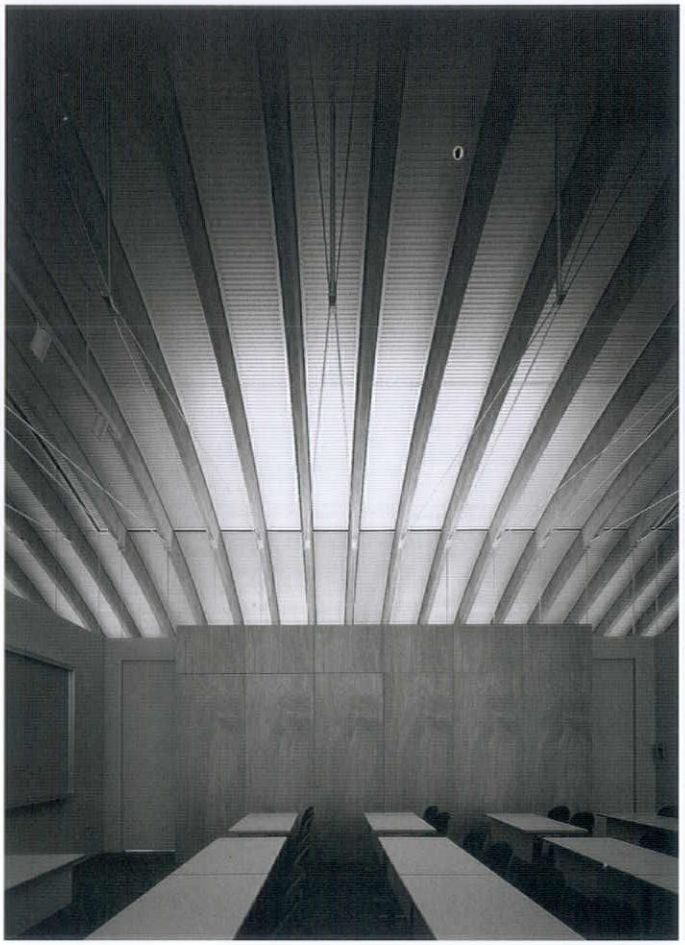
軒先詳細図　S=1:20

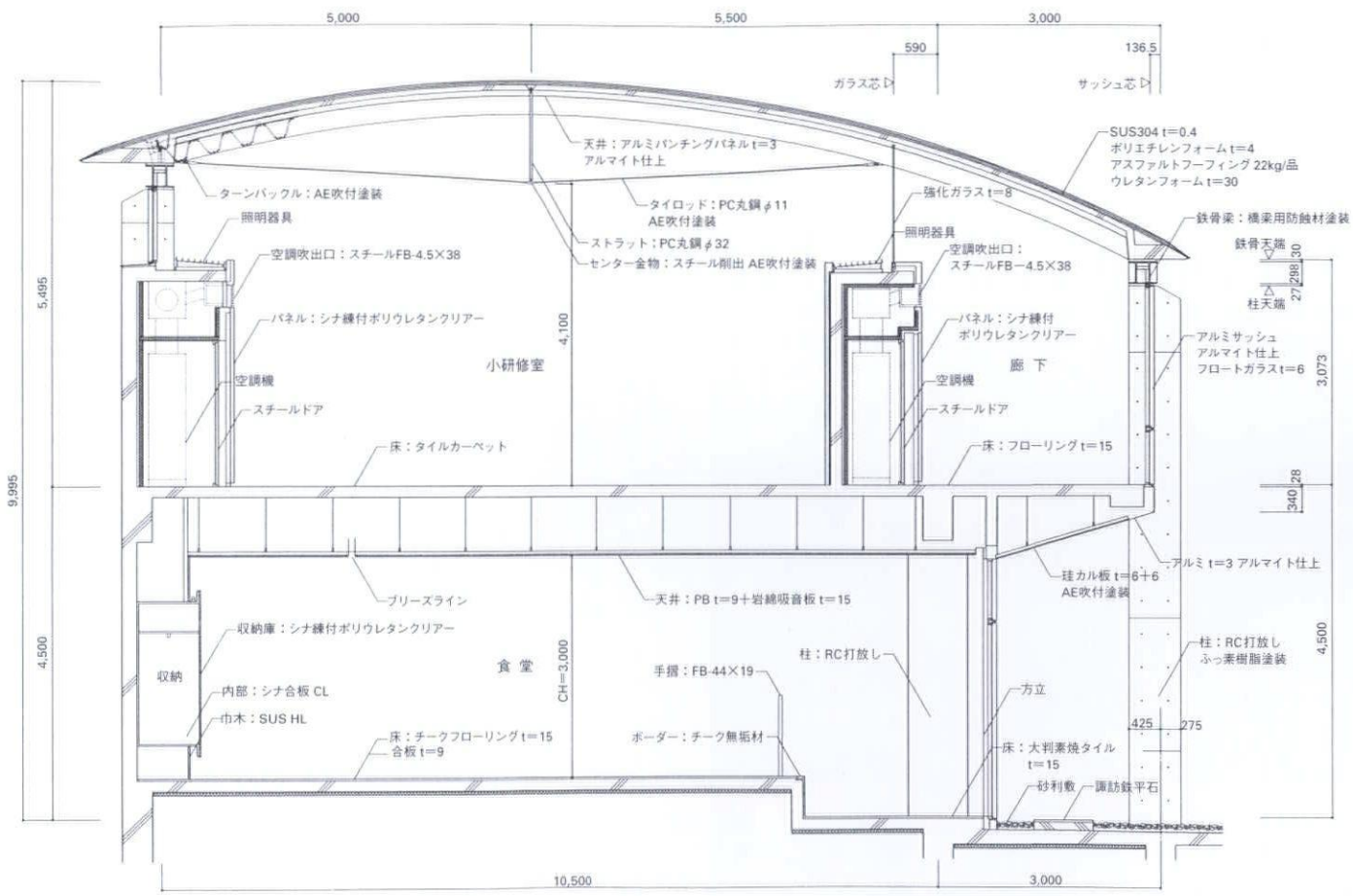
プレコン屋根とテンションロッド

バーン（納屋）として位置づけられた研修棟は素朴な屋根架構をもち、それが小屋裏としてそのまま美しく室内から見えるように意図された。プレコンは軽くするため、アンボンド鋼線による緊張とテンションロッドの補強により、13.5mスパンに対してわずか400mmの梁成に納められ、600ピッチのリブの間には吸音と照明の反射のためのアルミのパンチング板が天井として取り付られている。プレコンは打放しの柱頂部に掛け渡された鉄骨梁の上にのせられていて、柱とは文節化されて存在感がたかめられている。柱は地面から立ち上がる掘っ建て柱の感じを出すため2階分が一度に打設され、繋ぎ梁程度で結ばれているので外観上も平屋の気分が高められている。テンションロッドは積雪荷重に備えた構造材だが、室内の湾曲した天井空間の緊張感に満ちた美しいアクセントになるよう細かなディテールを工夫した。

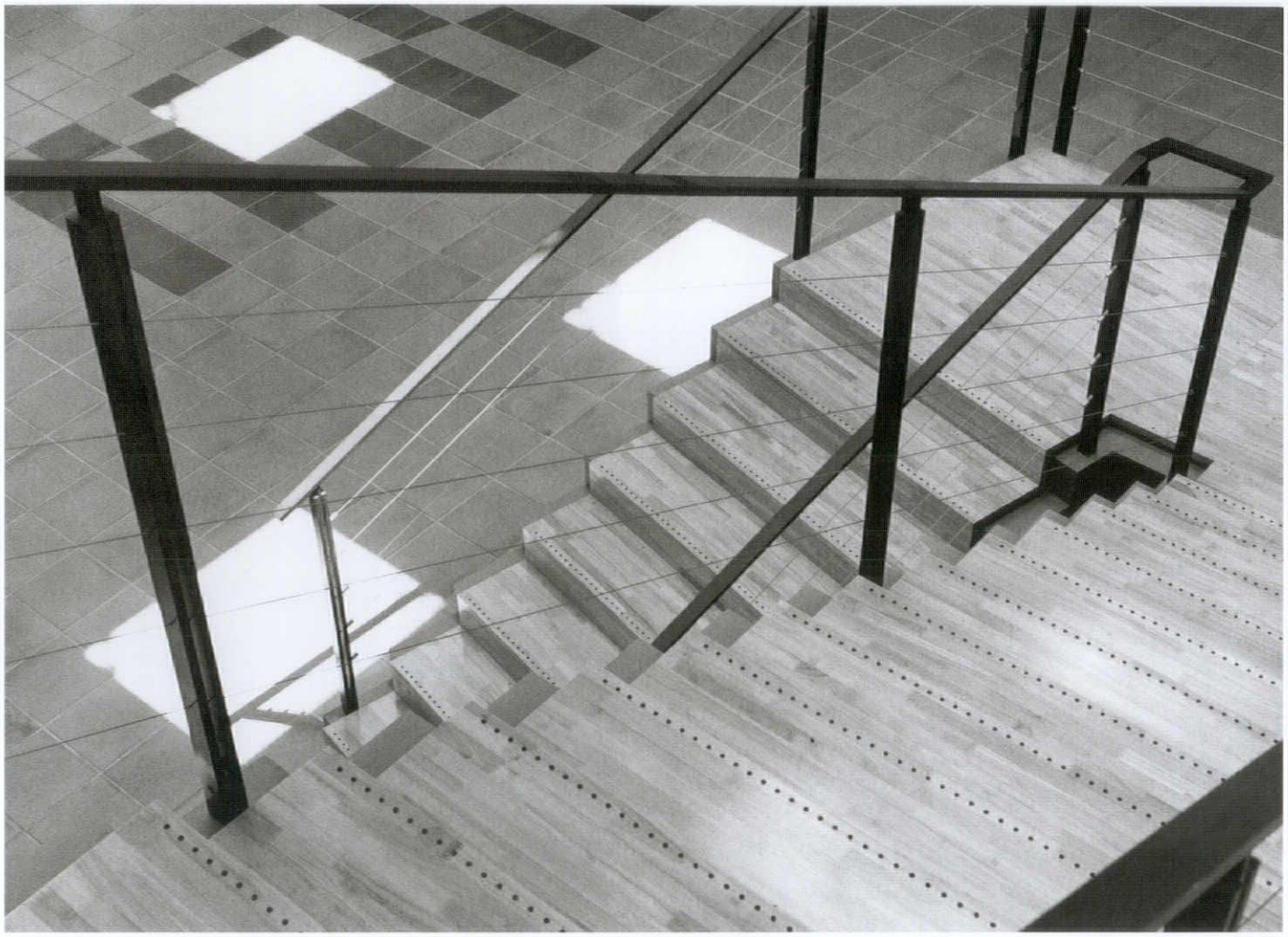


プレコン屋根フレーム図



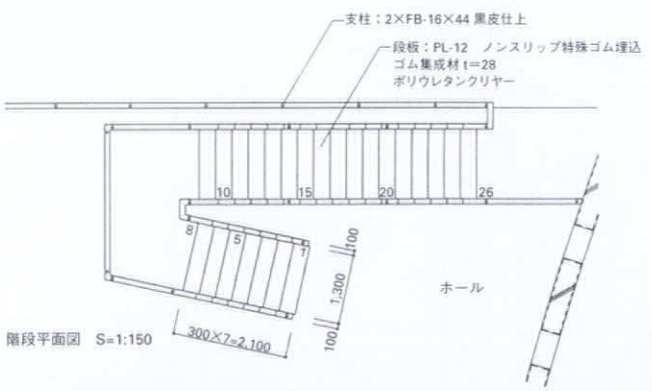


断面詳細図　S=1:100

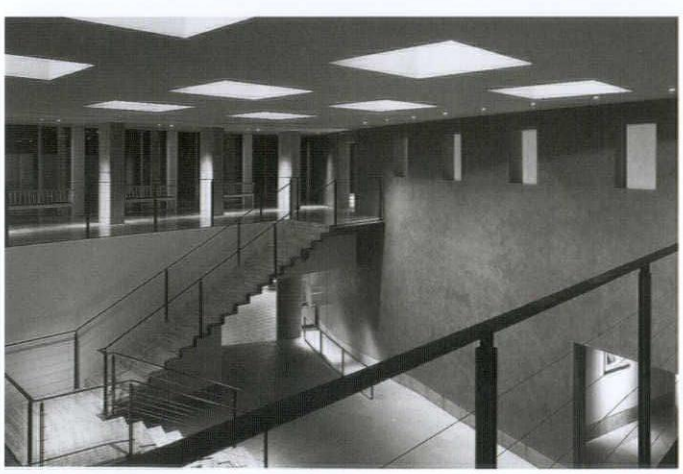


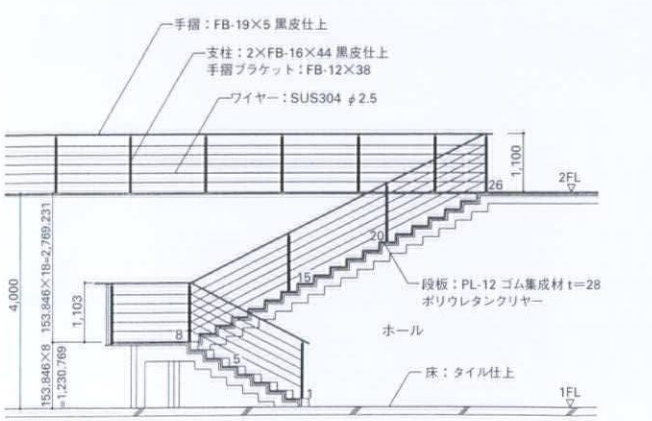
厚板鉄板による階段

この階段のあるホールは、スカイライトが射すラフなテラカッタ・タイルの床と鉄錆色の塗り壁の空間で、2階のバルコニーからは農耕風景のランドスケープが望める。階段はシェーカー教徒の使う道具のような繊細さと素直さを備えたものであって、どこか土の匂いを漂わすものであって欲しいと願った。黒皮仕上げの厚板鉄板で全体を構成し、段板をはねだして鉄の厚みと質感を見せて農具のような素朴さを表わすとともに、段裏の折り返しがリチャード・セラのアートワークのような美しく見せることを意図した。そのために歪みが出ないよう溶接には注意が払われ、すべて開先処理のうえ溶接されグラインダー仕上げがほどこされた。手すりは同じ黒皮付きのフラットバーであるが、中桟は軽快さを強調するためステンレスワイヤーを張ったが、シンプルな取り合いとするため、フラットバーに斜めの穴あけをほどこしたり、引っ張り金物を工夫した。

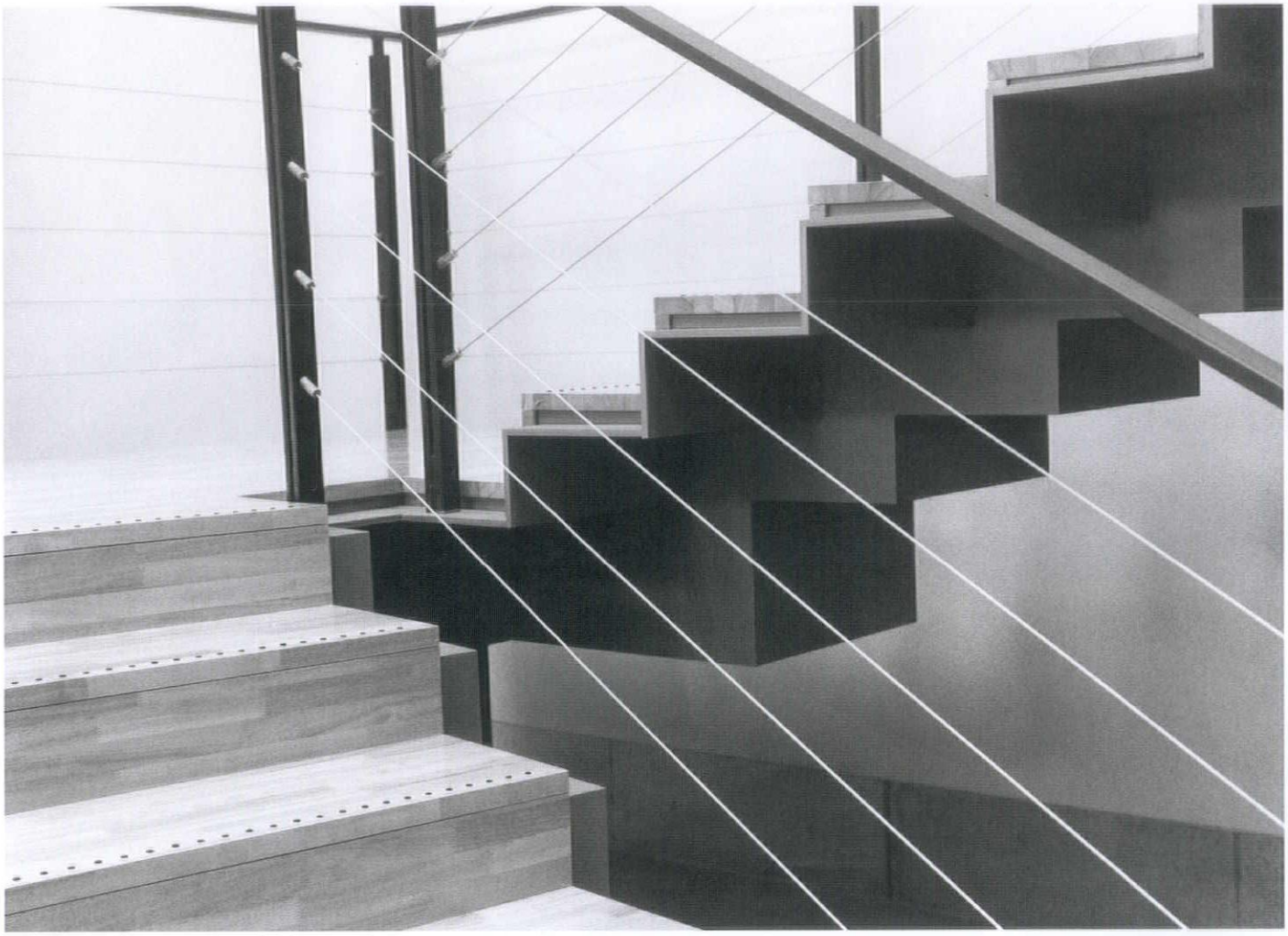


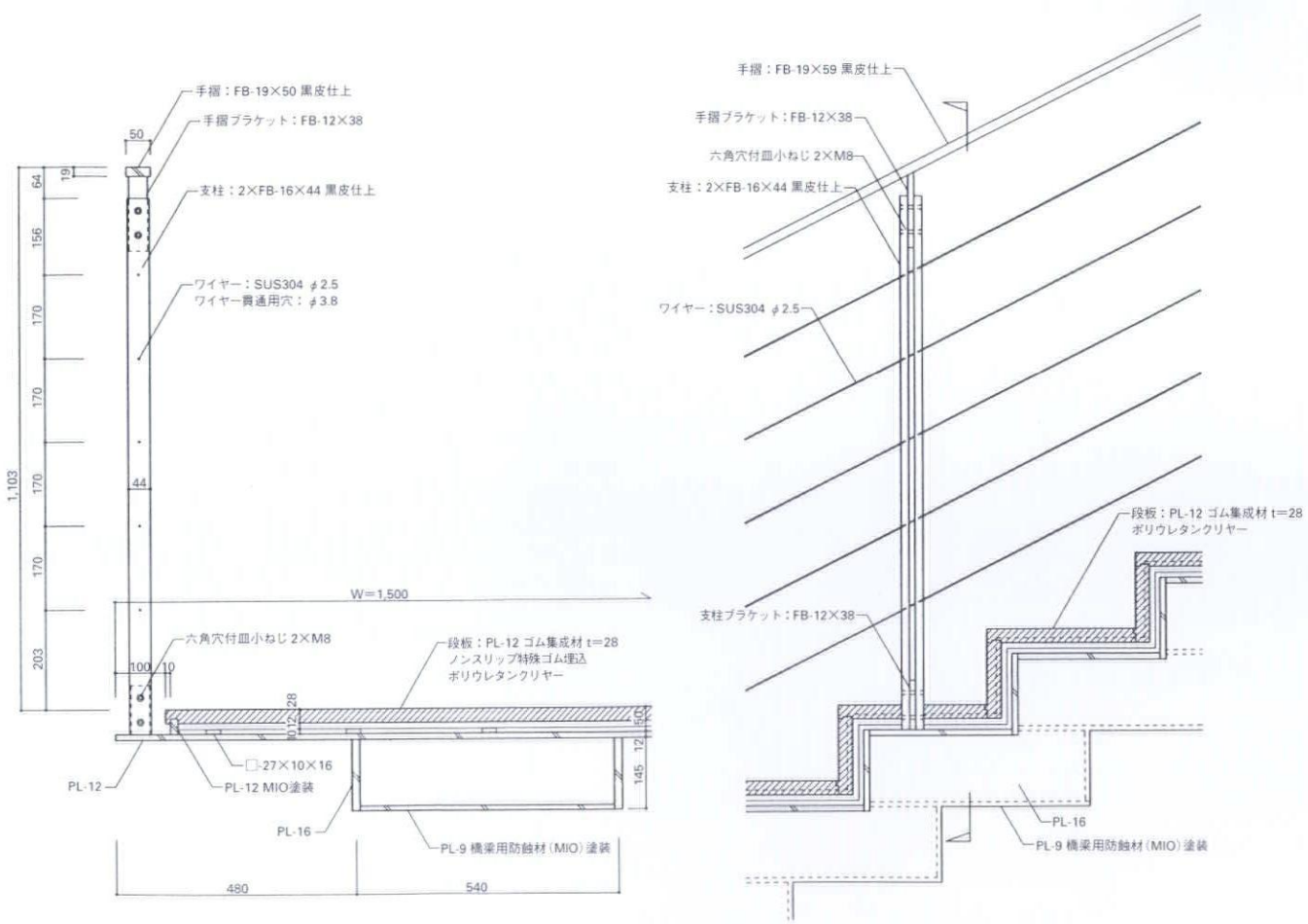
階段平面図　S=1:150





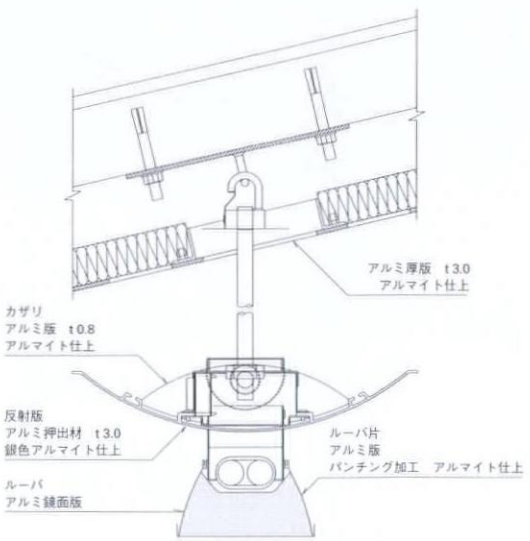
階段立面図　S=1:150




手摺：FB-19×50 黒皮仕上
手摺ブラケット：FB-12×38
支柱：2×FB-16×44 黒皮仕上
ワイヤー：SUS304 φ2.5
ワイヤー貫通用穴：φ3.8
六角穴付皿小ねじ 2×M8
段板：PL-12 ゴム集成材 t=28
ノンスリップ特殊ゴム埋込
ポリウレタンクリヤー
□27×10×16
PL-12
PL-12 MIO塗装
PL-16
PL-9 橋梁用防錆材（MIO）塗装
W=1,500
480
540
1,103
50
19
64
156
170
44
203
100
10
28
12
145
手摺：FB-19×59 黒皮仕上
手摺ブラケット：FB-12×38
六角穴付皿小ねじ 2×M8
支柱：2×FB-16×44 黒皮仕上
ワイヤー：SUS304 φ2.5
段板：PL-12 ゴム集成材 t=28
ポリウレタンクリヤー
支柱ブラケット：FB-12×38
PL-16
PL-9 橋梁用防錆材（MIO）塗装

階段詳細図　S=1:15

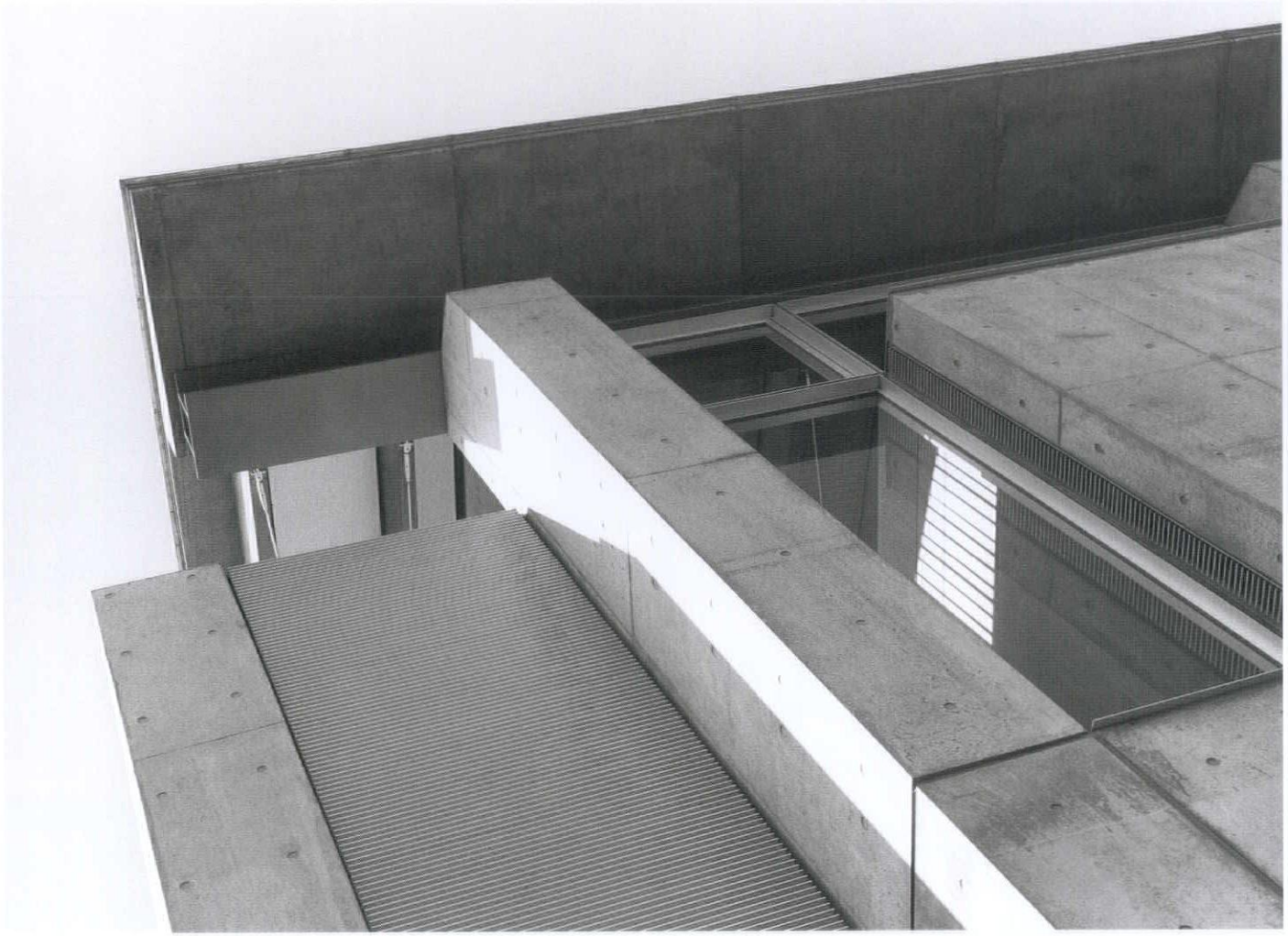


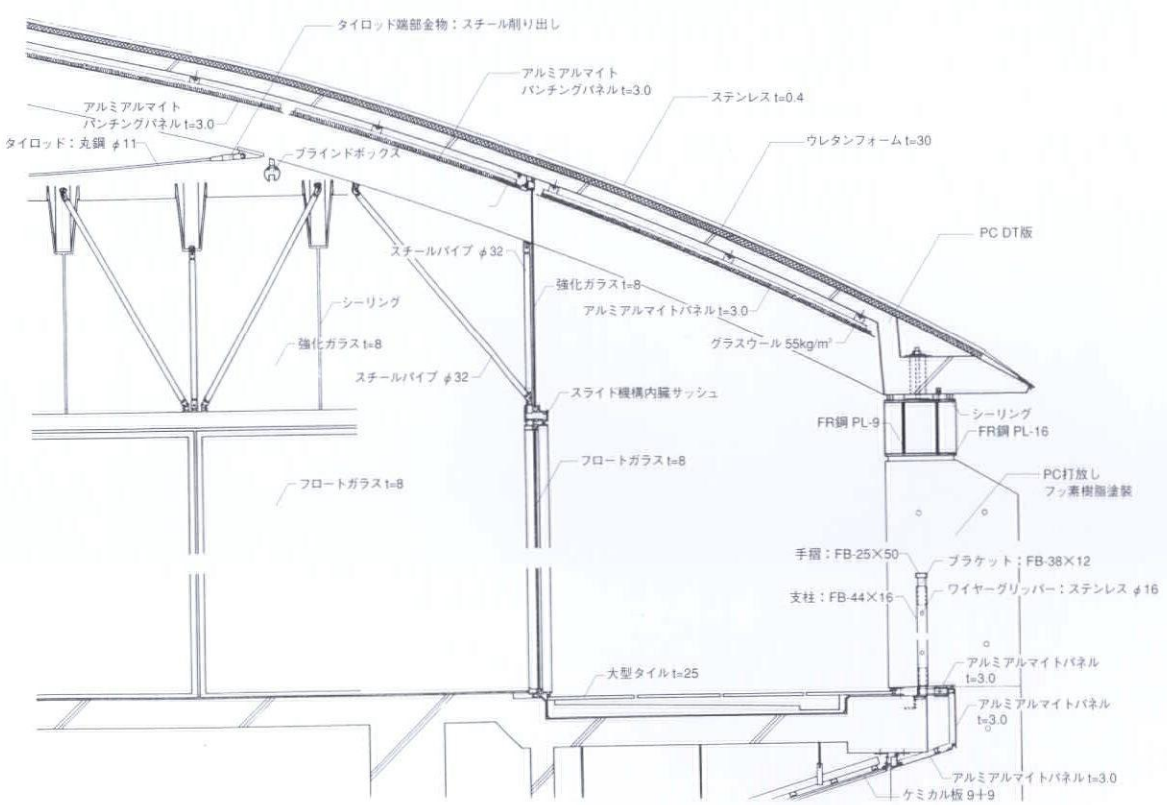


照明器具詳細図　S=1:6

妻側の縁空間

妻側に位置する研修室は内外を隔てるガラススクリーンとバルコニーからなる縁空間をもっている。ガラススクリーンは欄間を持ち、障子のように軽く納まることが意図されたが、あまりに薄いプレコン屋根は風荷重などで数十ミリの挙動がある上、欄間はリブ梁が貫通するので、欄間のガラスと下の障子部分をわけて、無目部分で動きを吸収することとした。従って欄間は各々三本のパイプの力骨でプレコンから釣り下げられ、障子はスライド機構を持つ無目で横力を負担させることとした。欄間のガラスは強化ガラスでリブ梁の断面どうりに切り抜かれて納められた。障子のガタツキを防ぐためパイプの力骨の加工精度確保には苦労が払われた、バルコニーと室内の仕上げはフラットで立ち上がりを薄く納めるために大型タイルの目地排水を試みている。照明はアルミ押出材を利用した特注器具を使いアッパーライトと机上照明を得ている。AV機器を使った研修の際は電動ブラインドとカーテンにより暗転できるようにデザインされている。




タイロッド端部金物：スチール削り出し
アルミアルマイト
パンチングパネル t=3.0
ステンレス t=0.4
アルミアルマイト
パンチングパネル t=3.0
タイロッド：丸鋼 φ11
ブラインドボックス
ウレタンフォーム t=30
PC DT板
スチールパイプ φ32
強化ガラス t=8
アルミアルマイトパネル t=3.0
シーリング
グラスウール 55kg/m³
強化ガラス t=8
スチールパイプ φ32
スライド機構内臓サッシュ
シーリング
FR鋼 PL-9
FR鋼 PL-16
フロートガラス t=8
フロートガラス t=8
PC打放し
フッ素樹脂塗装
手摺：FB-25×50
ブラケット：FB-38×12
支柱：FB-44×16
ワイヤーグリッパー：ステンレス φ16
大型タイル t=25
アルミアルマイトパネル
t=3.0
アルミアルマイトパネル
t=3.0
アルミアルマイトパネル t=3.0
ケミカル板 9+9

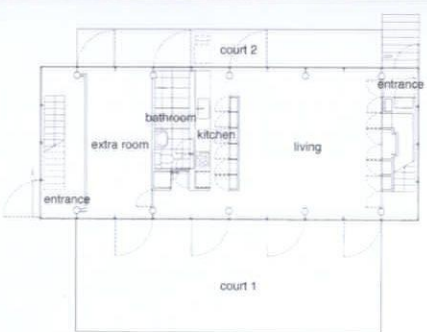
断面詳細図　S=1:40

GLASS HOUSE

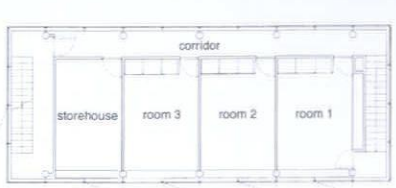
小川晋一都市建築設計事務所、広島県広島市、1995年

主用途：事務所＋住宅
構造：鉄骨造--
階数：地上3階
敷地面積：253.14m²
建築面積：91.16m²
延床面積：273.48m²

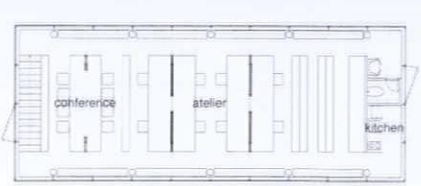




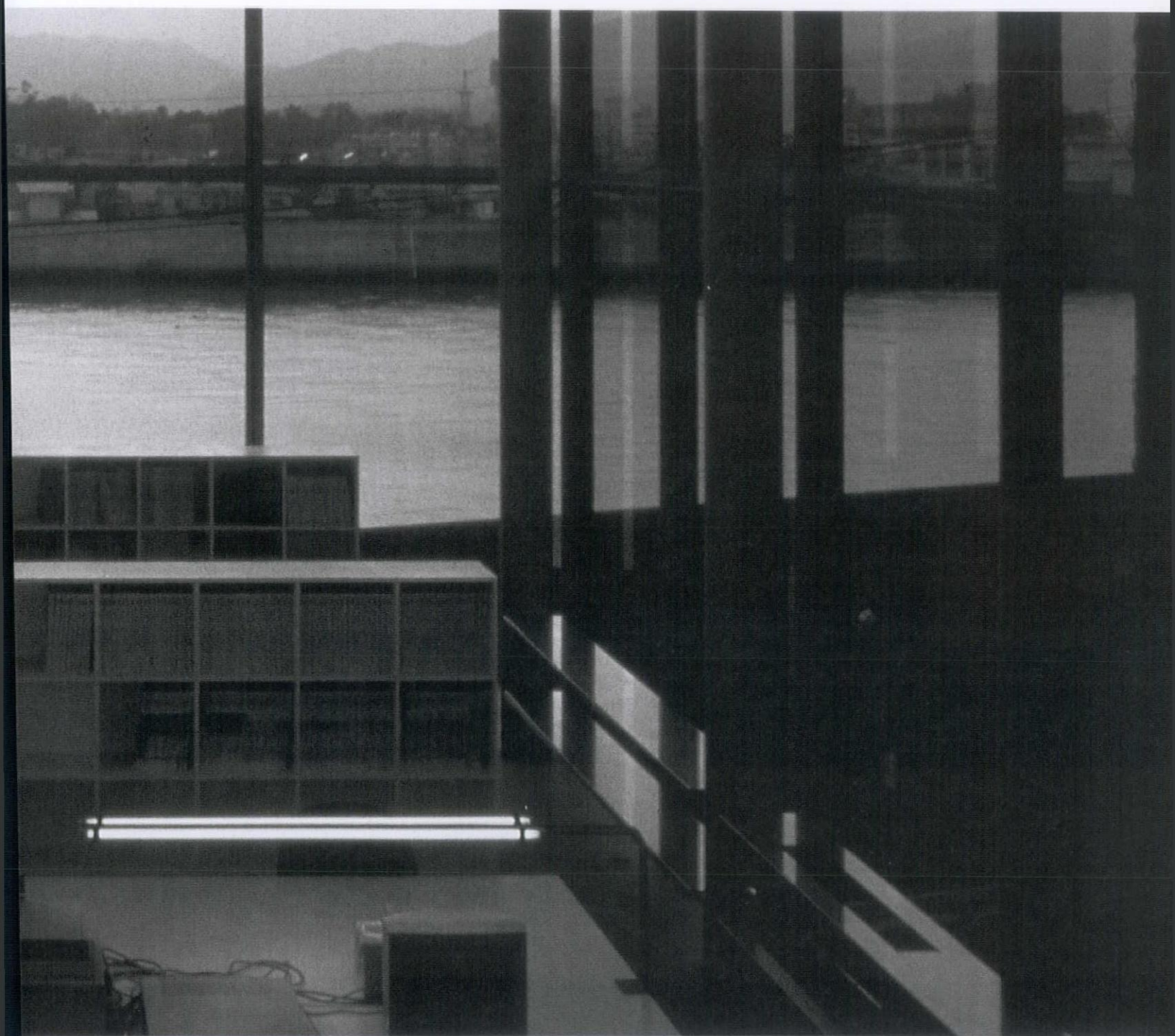
1st floor plan level +0.10m S=1:300

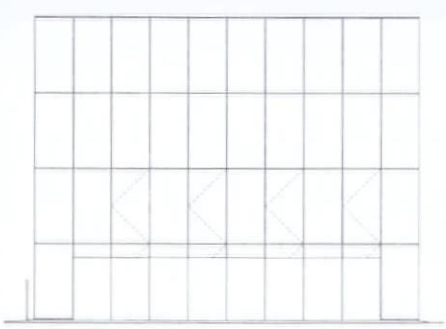


2nd floor plan level +3.10m

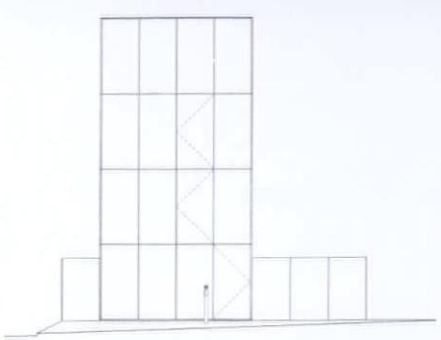


3rd floor plan level +6.10m

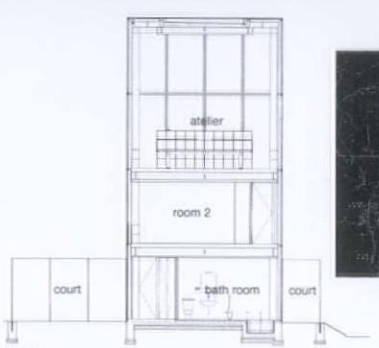




south elevation S=1:300



west elevation



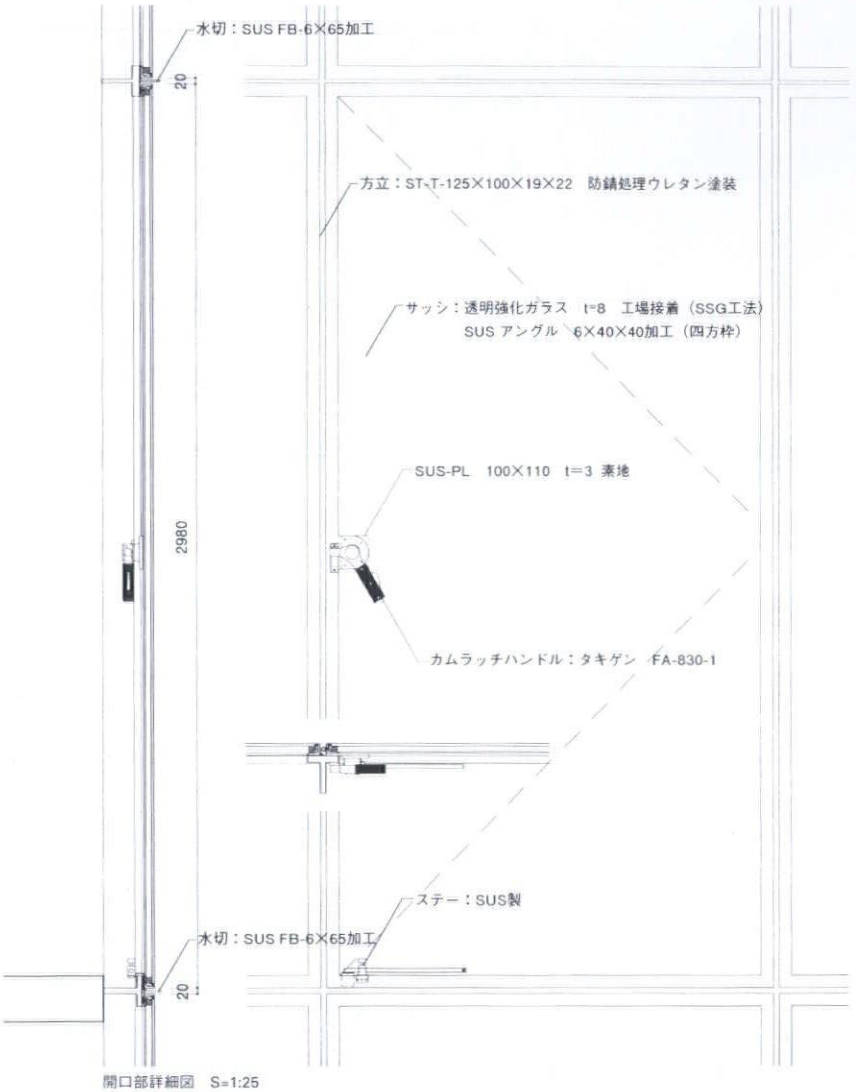
section



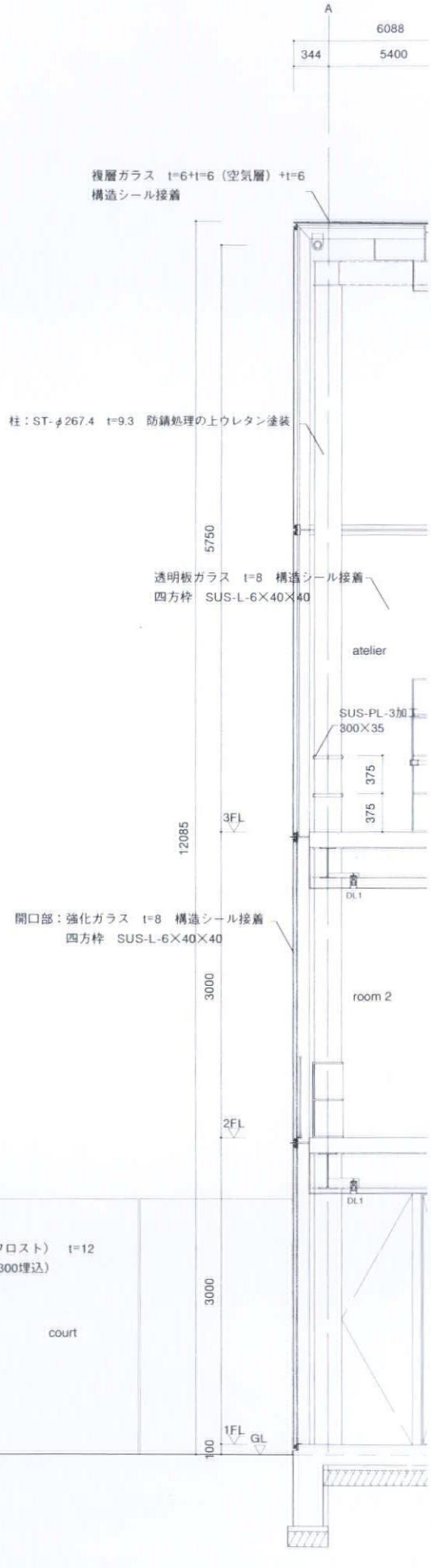




開口部平面詳細図　S=1:25
glass panel window detail



開口部詳細図　S=1:25
glass panel window detail



断面詳細図　S=1:60
section

建物全体は6m×15m×12mの箱である。この箱はXYZ方向3mグリッドで構成され、そのグリッドは1.5m×3mのガラスパネルからなる。この基本的な構成は建物全体のボリュームだけでなくプランニングや各部分の機能にも投影され、建物の存在を規定するベースとなっている。

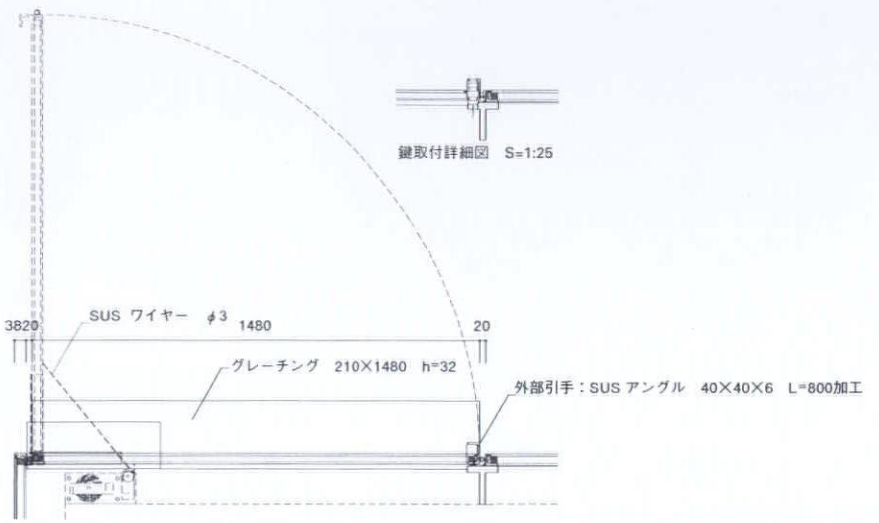
これらの構成の中心となるガラスのパネルは、40×40のステンレスアングルによって組まれたフレームにガラスを構造シールで接着することで出来上がる。すべてのガラスパネルは開口部、FIX部にかかわらず、工場で同様の工程、仕様、寸法で製造される。現場でFIX部はそのまま取り付けられ、開口となるパネルは特製の小型軸吊ヒンジを取り付け、その後他のパネルと同様に取り付けられる。開口部に必要な機能は上図のようにカムラッチとステーによる最小限の部材によって得られ、各部分のディテールはあらわしとなっている。

右図のコートに設けられた半透明強化ガラスの塀は支持の飲み込みを埋設し、フレームレスとしているため、1.5m×2.5mのガラスの壁が地面から直接ガラスの強度のみで自立する形となる。

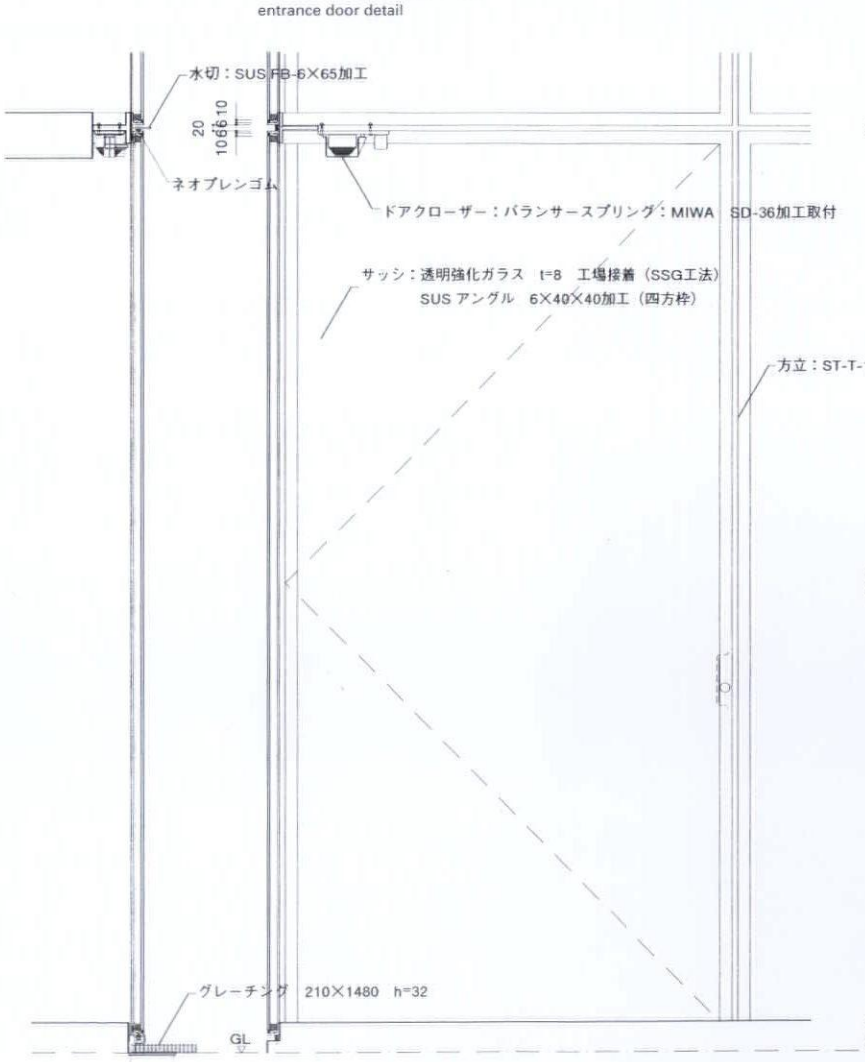


下図は事務所入口の開口のディテールである。ここでは1.5m×3mの他のFIX部や開口部と同様のガラスパネルを使用しながらも、建物のエントランスの開口に必要な機能、強度、耐久性を得られるよう考慮した。

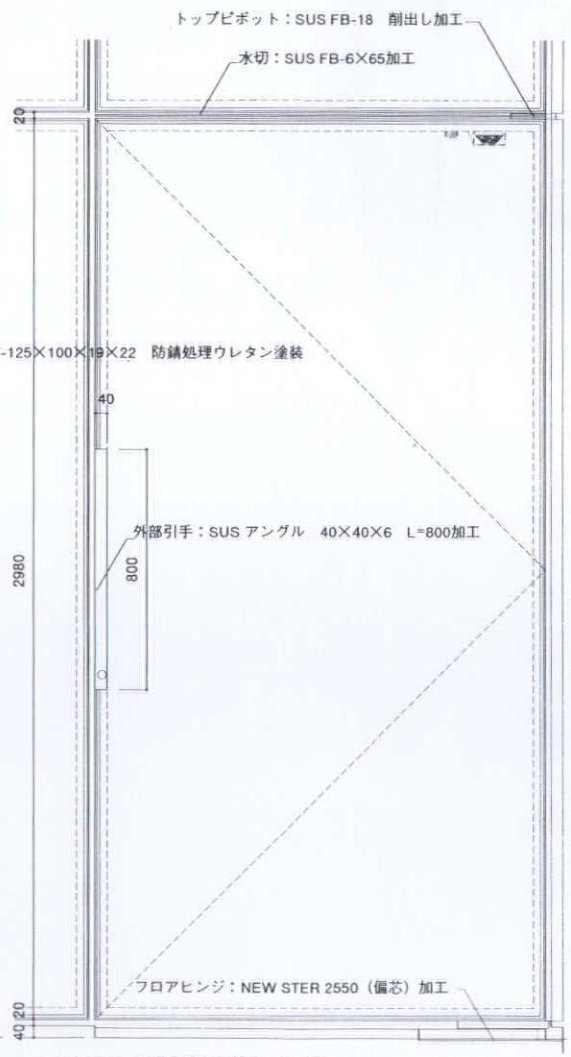
コーナー部に構造材や方立てを設けず、フロアヒンジ、小型軸吊ヒンジと既成のワイヤー巻き取り式のバランサーをドアクローサーとして使用し、大きな開口部の機能を成り立たせている。また、引き手は既成のステンレスアングル材をガラスパネル枠に溶接し、カギ穴だけを丸く切り抜いてつくられている。建物入り口のドアに必要な機能を標準のガラスパネルと最小の既成部材の簡潔な加工によって満たし、FIX部と同様の納まりで構成している。



エントランスドア詳細図　S=1:25
entrance door detail



エントランスドア詳細図（内部）　S=1:25
entrance door detail

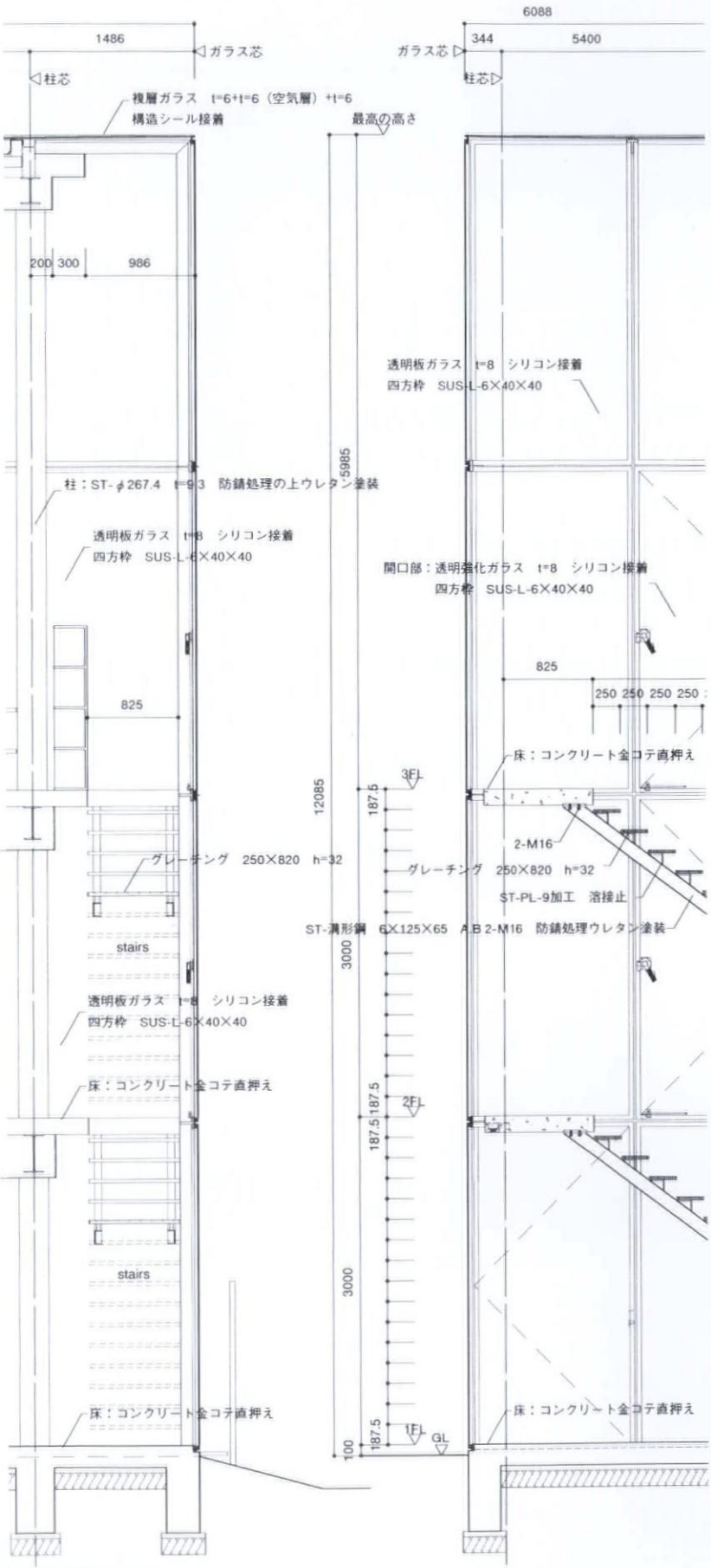


エントランスドア詳細図（外部）　S=1:25
entrance door detail

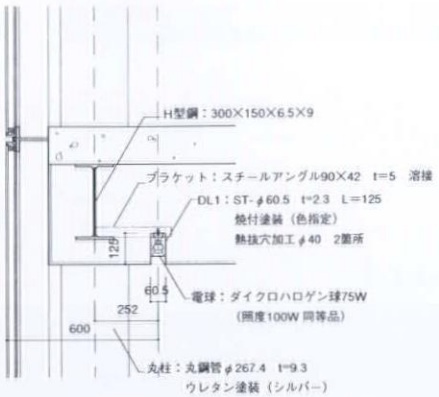


このページでは階段と照明とインターホンの詳細を示している。
階段の踏面にはグレーチングを用いて、1階から3階まで縦の空間の透明性を生み出している。仕上げ材、構造材等の区別なくあらゆる素材が、それぞれに必要な機能を満たしながら、等価に配置され、あるがままに露出されている。

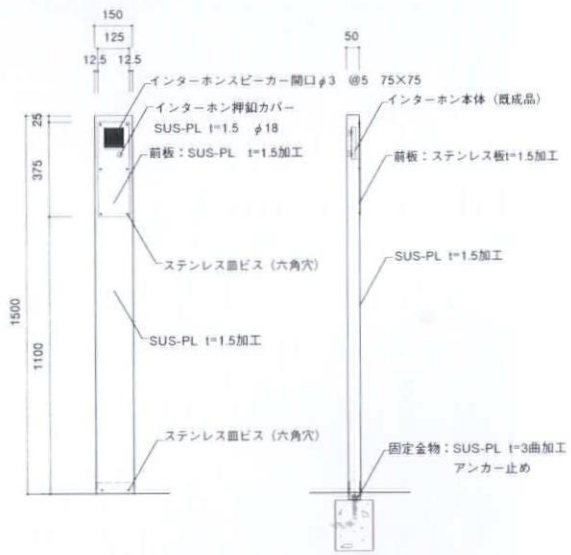
ダウンライトは既製品のように取り付けフレームが露出されるのではなく、天井面には照明器具としてのディテールを一切露出させず、φ60.5の穴が開いているだけである。天井ふところ内に照明器具としての機能をすべて埋め込み、取り付け部を天井面と一体に仕上げることで、日中は天井面に溶け込み、夜間は天井のなかに光る小さな穴のようにみえる。



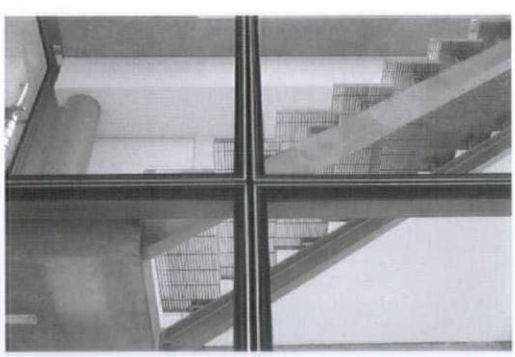
階段部断面詳細図 S=1:60
stair detail

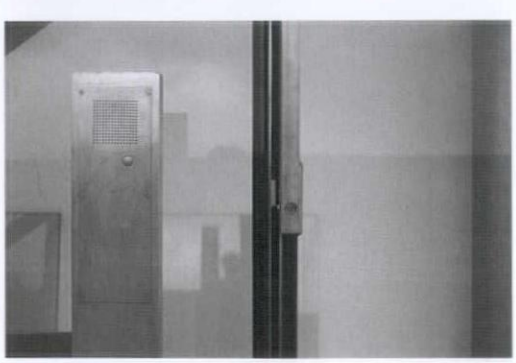


2階 天井 各室照明細詳細図 S=1:30
lighting detail



インターホン詳細図 S=1:30
interphone detail

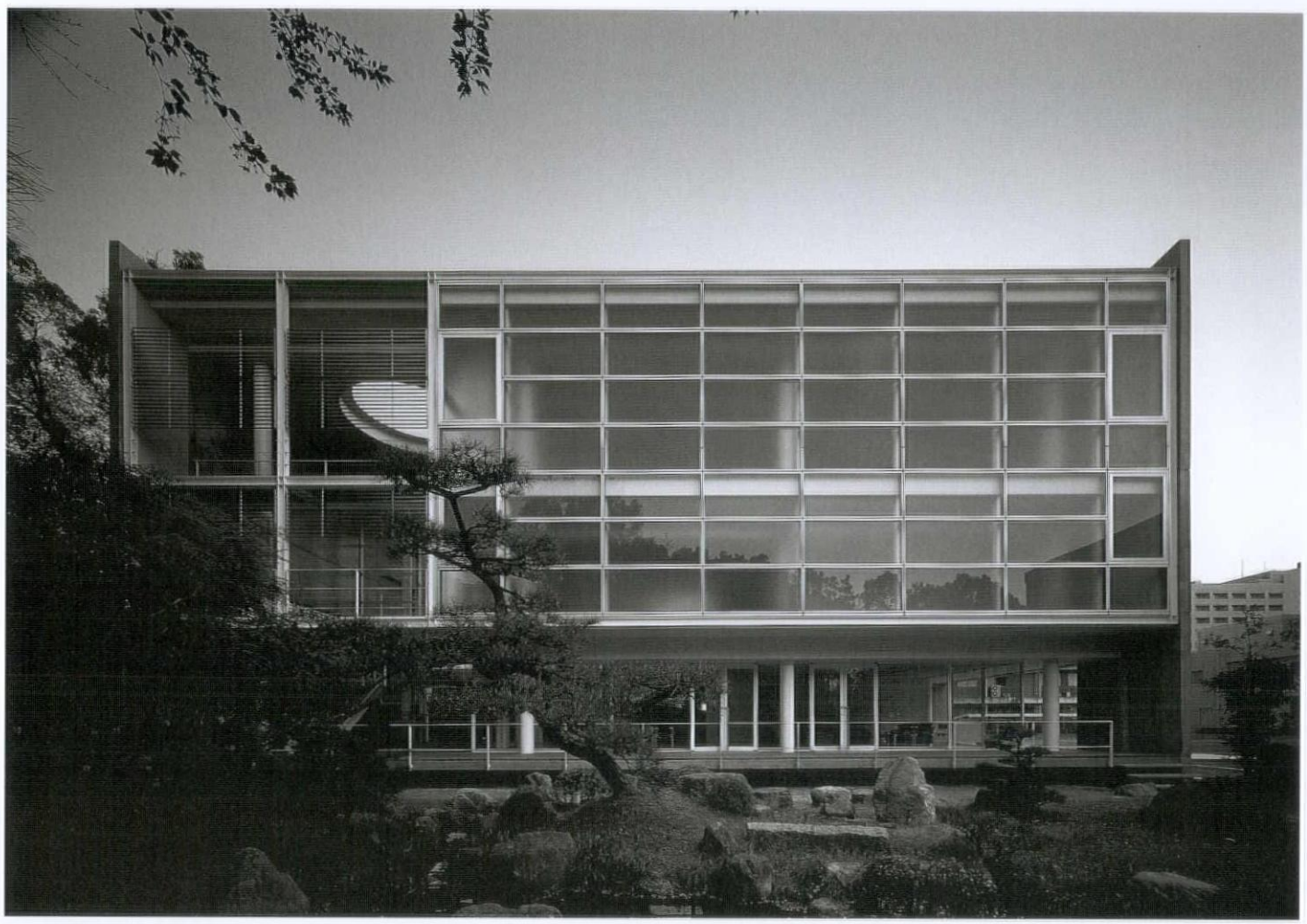


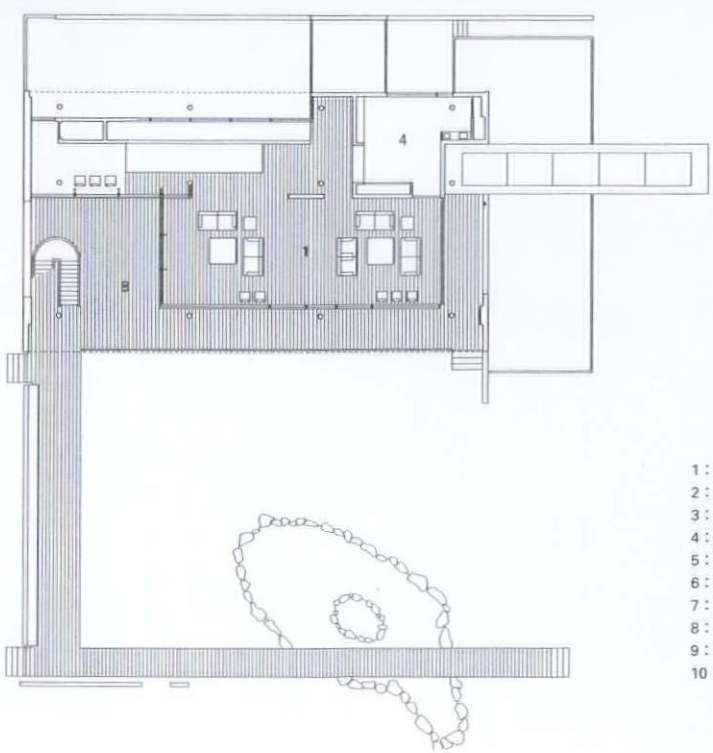


山口大学医学部創立50周年記念会館

岸 和郎十K. ASSOCIATES、山口県宇部市、1997年

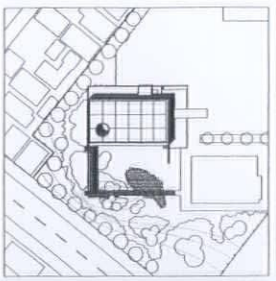
主用途：記念会館
構造：鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造
階数：地上3階
敷地面積：92,631.18m²
建築面積：329.53m²
延床面積：626.77m²





1階平面図　S=1:400

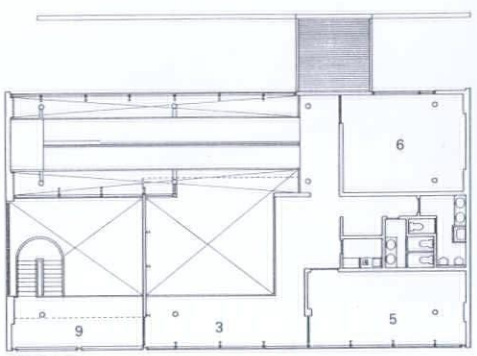
1：エントランス・ホール
2：多目的ホール
3：サロン
4：事務室
5：会議室
6：資料室
7：準備室
8：テラス
9：バルコニー1
10：バルコニー2



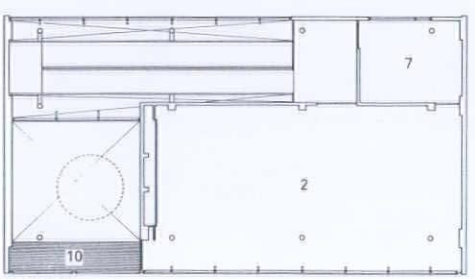
配置図





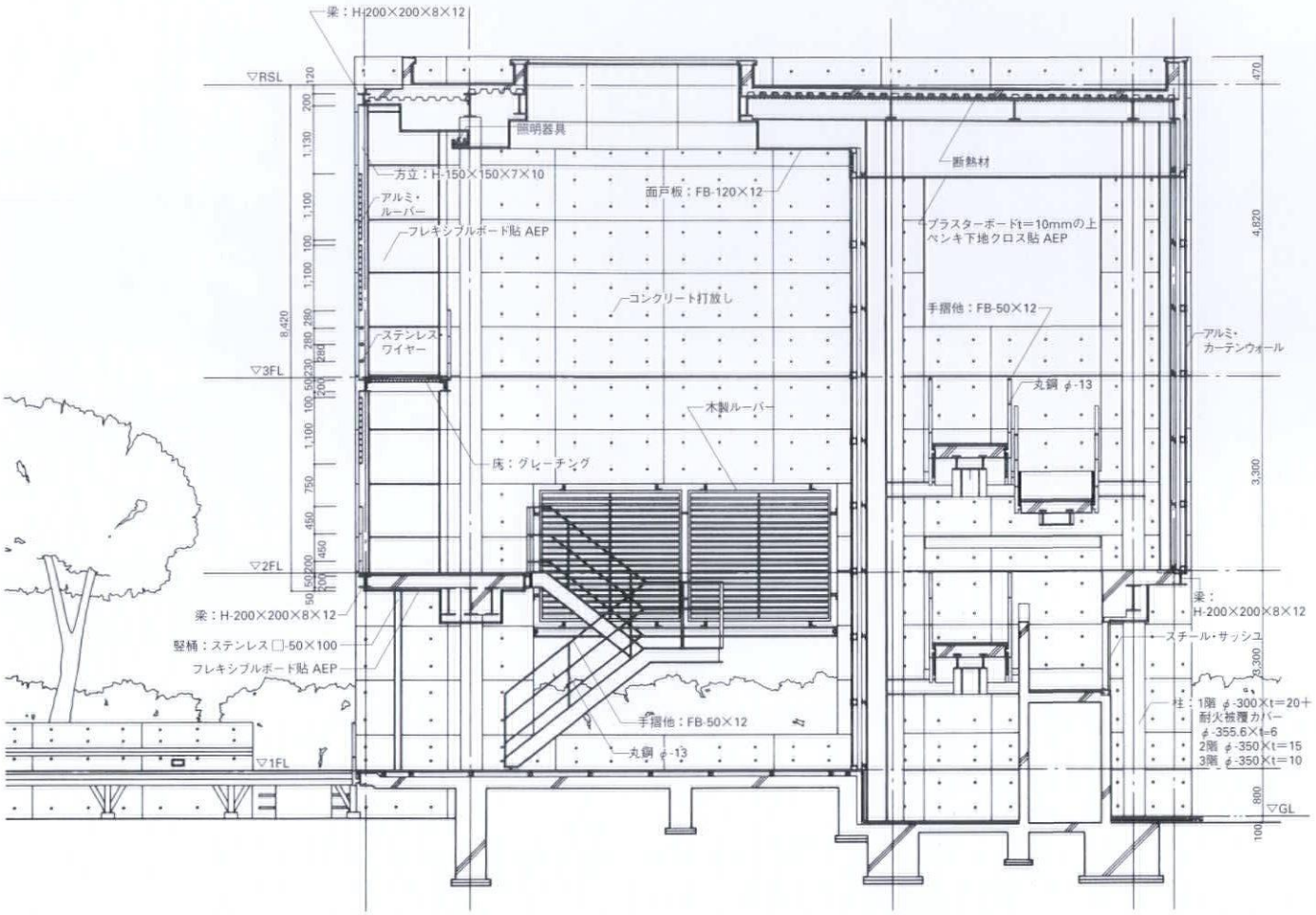


2階平面図



3階平面図

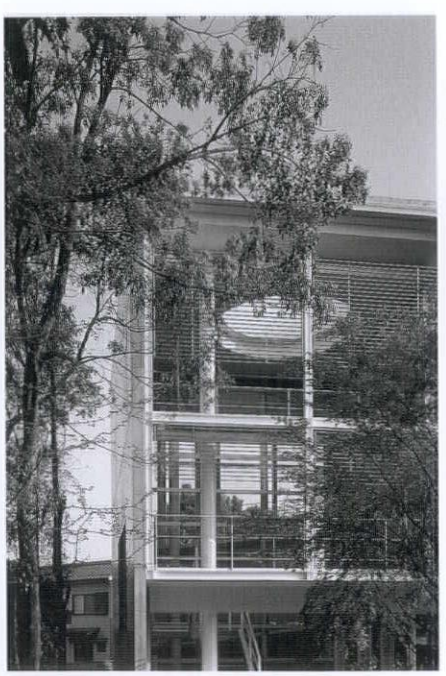




断面詳細図　S=1:120

外部空間としての再生された日本庭園と建築の内部空間をどのように関係付けるかというのがこの建築の主題であり、建物へのアプローチも庭園を廻遊させ、散策しながら建物へと近付いてゆく。建物の内部空間もそのプロムードを受け、それに連続するかのような動線計画となっており、その内外部の散策路の結節点となっているのが建物西端のテラスの空間である。このテラス部分は内部でもなく、そして外部でもない空間としたい、言いかえると外部空間から内部空間への遷移をより滑らかにするような場としたい、と考えていた。ルーバーという半透明な装置を使用したのはテラスというこの空間の持つ曖昧な資質をより強調し得ると考えたからであり、屋根面にあけられた円形の開口部も同じ文脈で採用したものである。

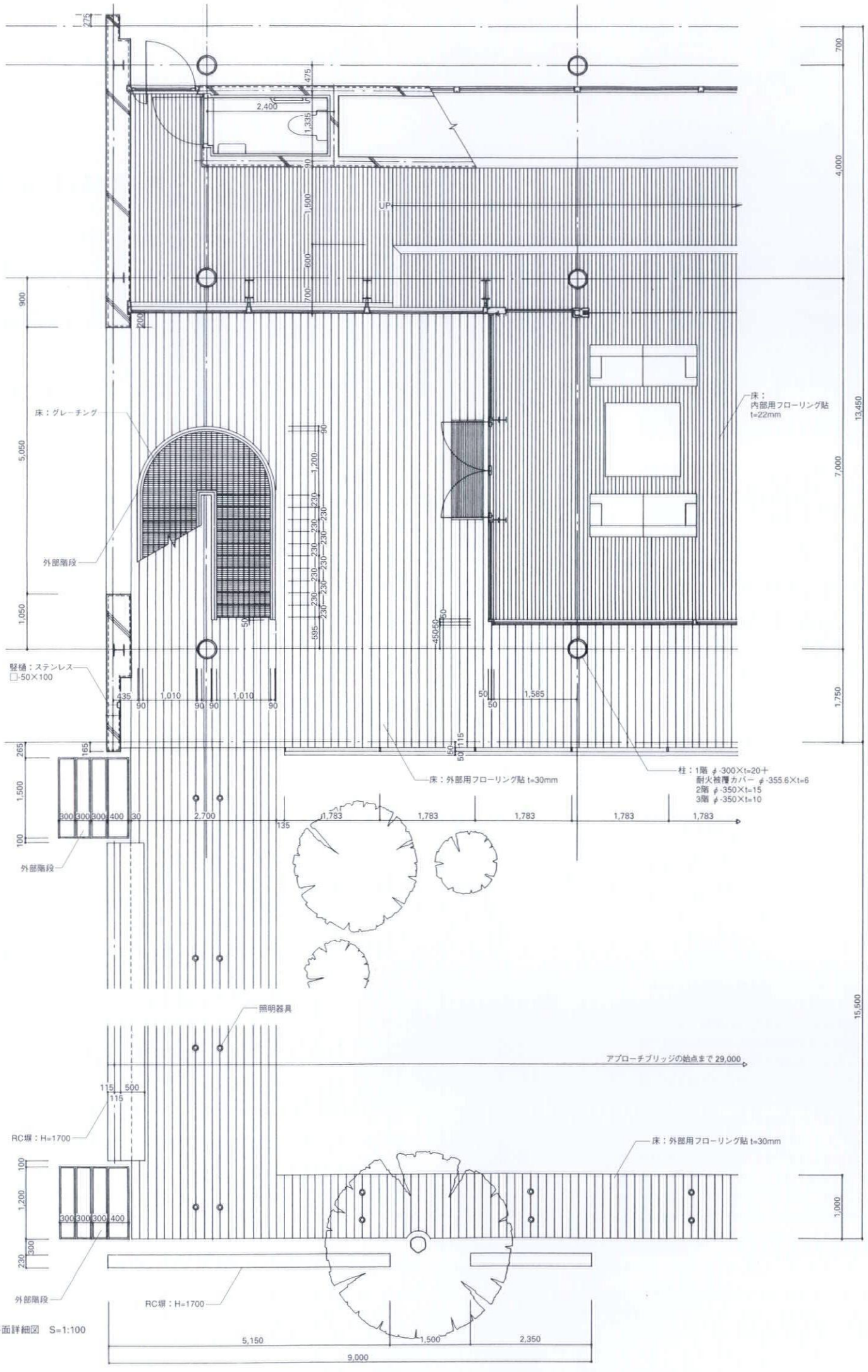




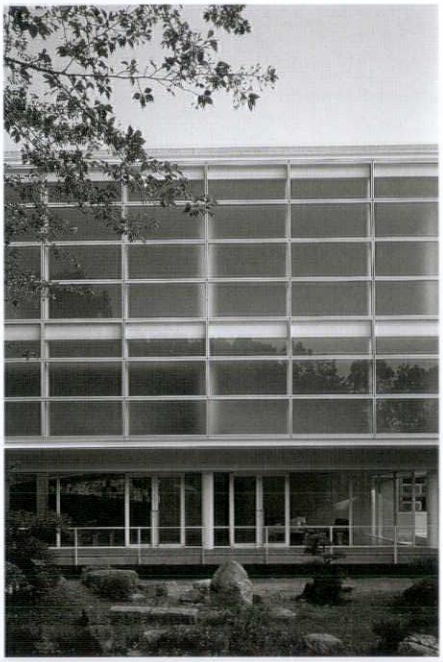


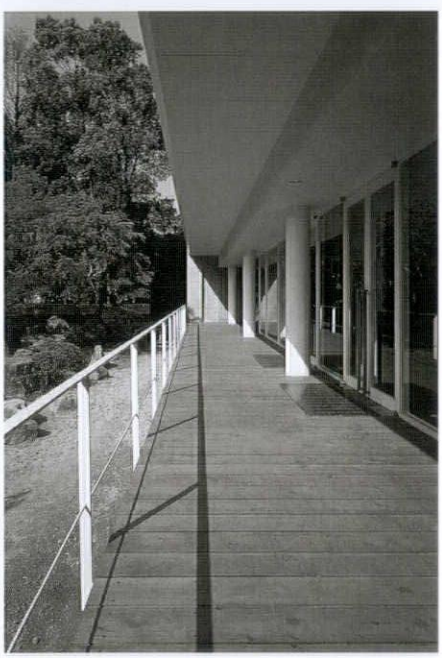


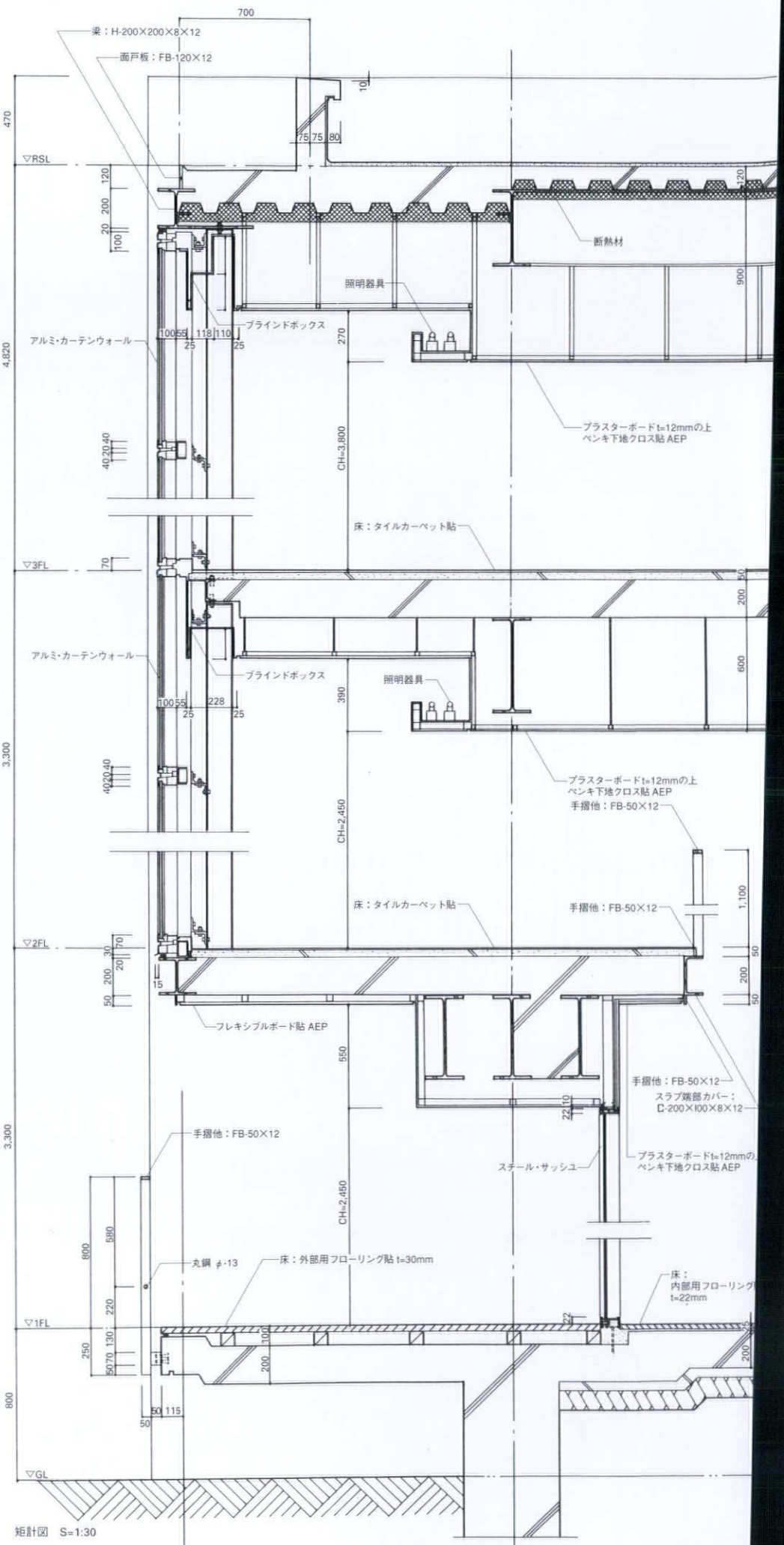




1階平面詳細図　S=1:100







矩計図　S=1:30

前面に拡がる再生された日本庭園と建物の内部との関係、建築の外部空間と内部空間との関係を制御する装置として、ファサードのスクリーン全体を考えている。1階のロビーではガラスは透明であり、前面に軒のあるデッキを中間に介しながら、内部空間と庭園とは一体に、連続的につながるよう計画してある。そうしたロビーから上の階に上がると共に外部の自然との距離が遠くなるように設計しようと考え、2階以上のファサードには1階の透明ガラスとは対比的なフロスト・ガラスのスクリーンを採用した。1階ロビーではあざやかに眼に入る緑の風景や陽光のまぶしさは上の階に上がると、緑や空の青をどこかぼんやりと写したくもりガラスの壁面へと変化する。それは抽象化された自然の風景とも言え、1階から見える極めて具象的な日本庭園の風景と対比するとともに、また逆に庭園にとってはフロスト・ガラスのスクリーンは夕暮になると建物全体を巨大な庭園照明へと変え、夕刻の庭園の散策を楽しいものとしてくれるのでは、と考えている。

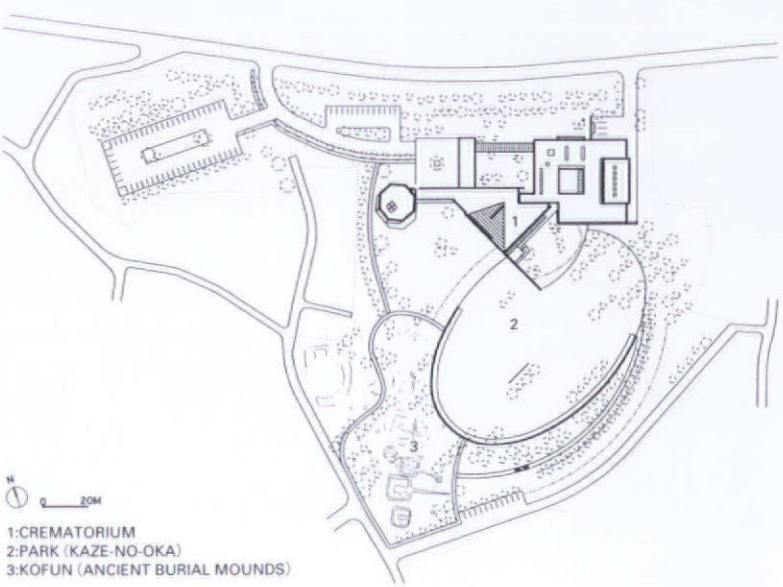


風の丘葬斎場

槇 総合計画事務所、大分県中津市、1997年

主用途：火葬場、斎場
構造：鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造）
階数：地上2階
敷地面積：33,316.85m²
建築面積：2,514.5m²
延床面積：2,259.9m²





1:CREMATORIUM
2:PARK (KAZE-NO-OKA)
3:KOFUN (ANCIENT BURIAL MOUNDS)

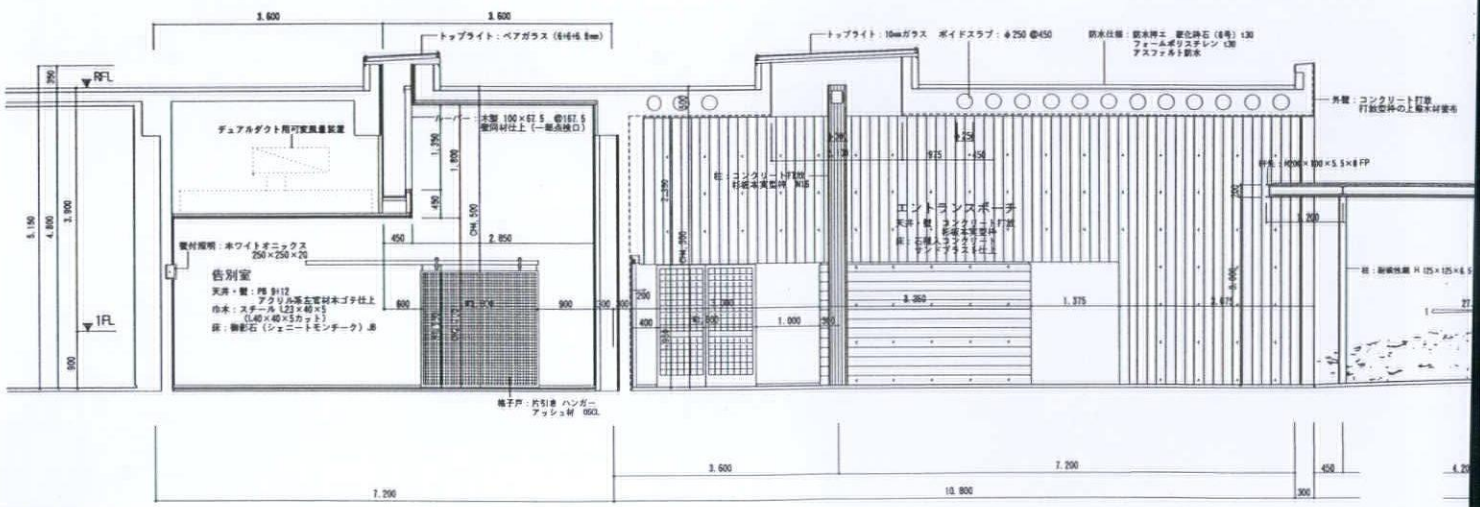


Homage to K Crematorium
Fumihiko Maki 3.12.97

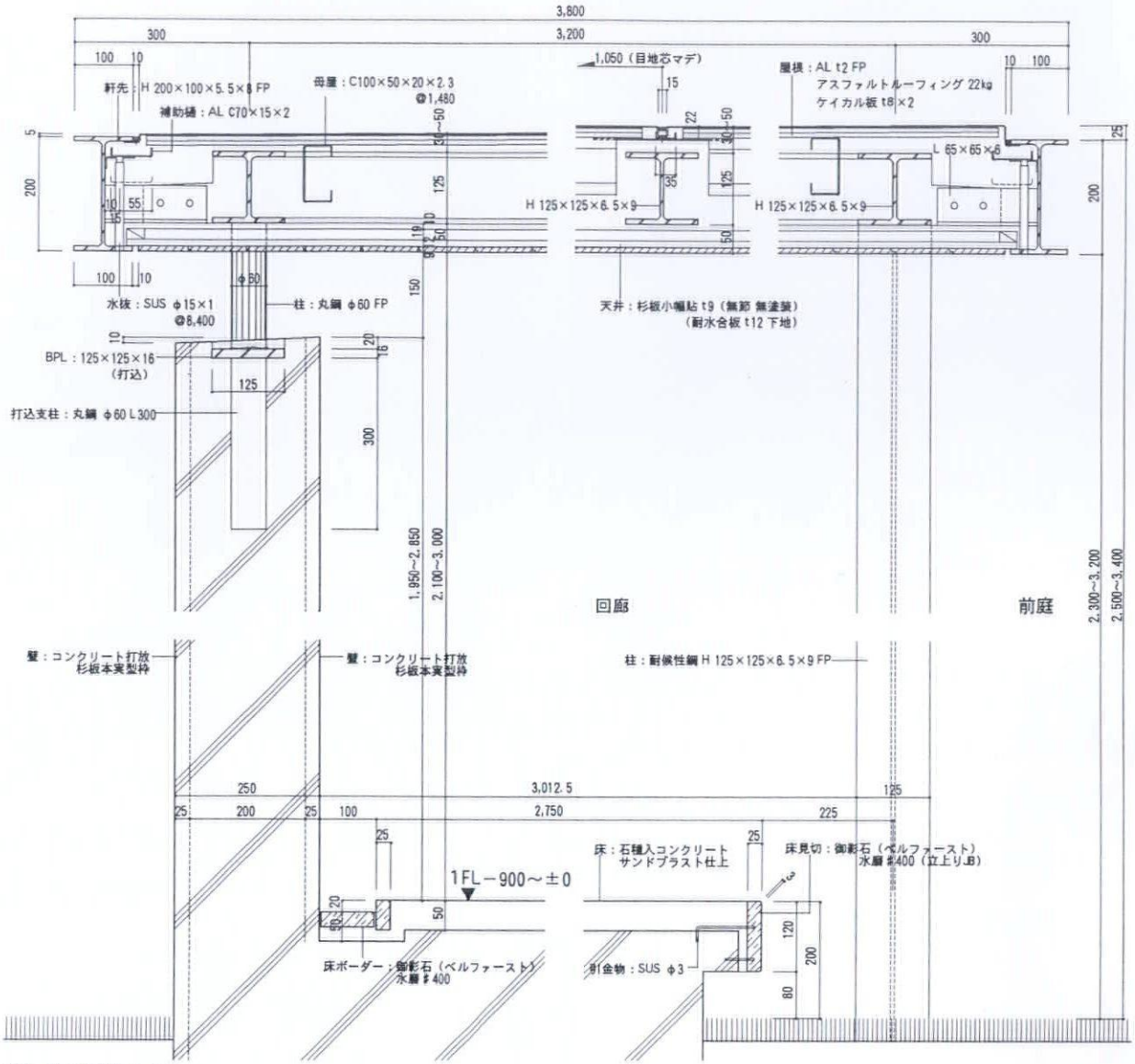


建物は、通夜、葬儀が行われる斎場、最後の見送りと骨上げなど、火葬にまつわる儀式が執り行われる火葬棟、そして、それらの合間を過ごす待合棟の三棟からなる。

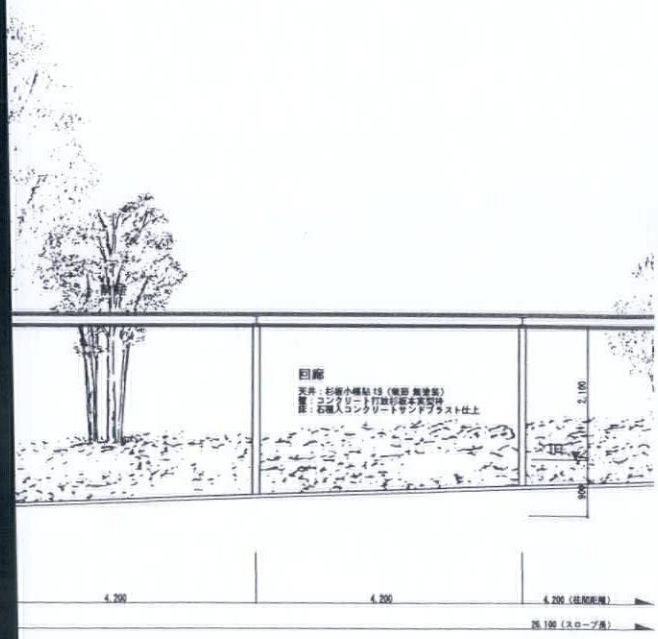
火葬棟へは、前庭の緩やかなスロープの回廊を通って到達する。この回廊は、片側が壁で閉じられ、独立性を高めるように前庭を囲い込む。火葬という非日常性へと向かう心理を考慮に入れ、時間的、視覚的な間を与えることを意図している。



断面詳細図　S=1:120



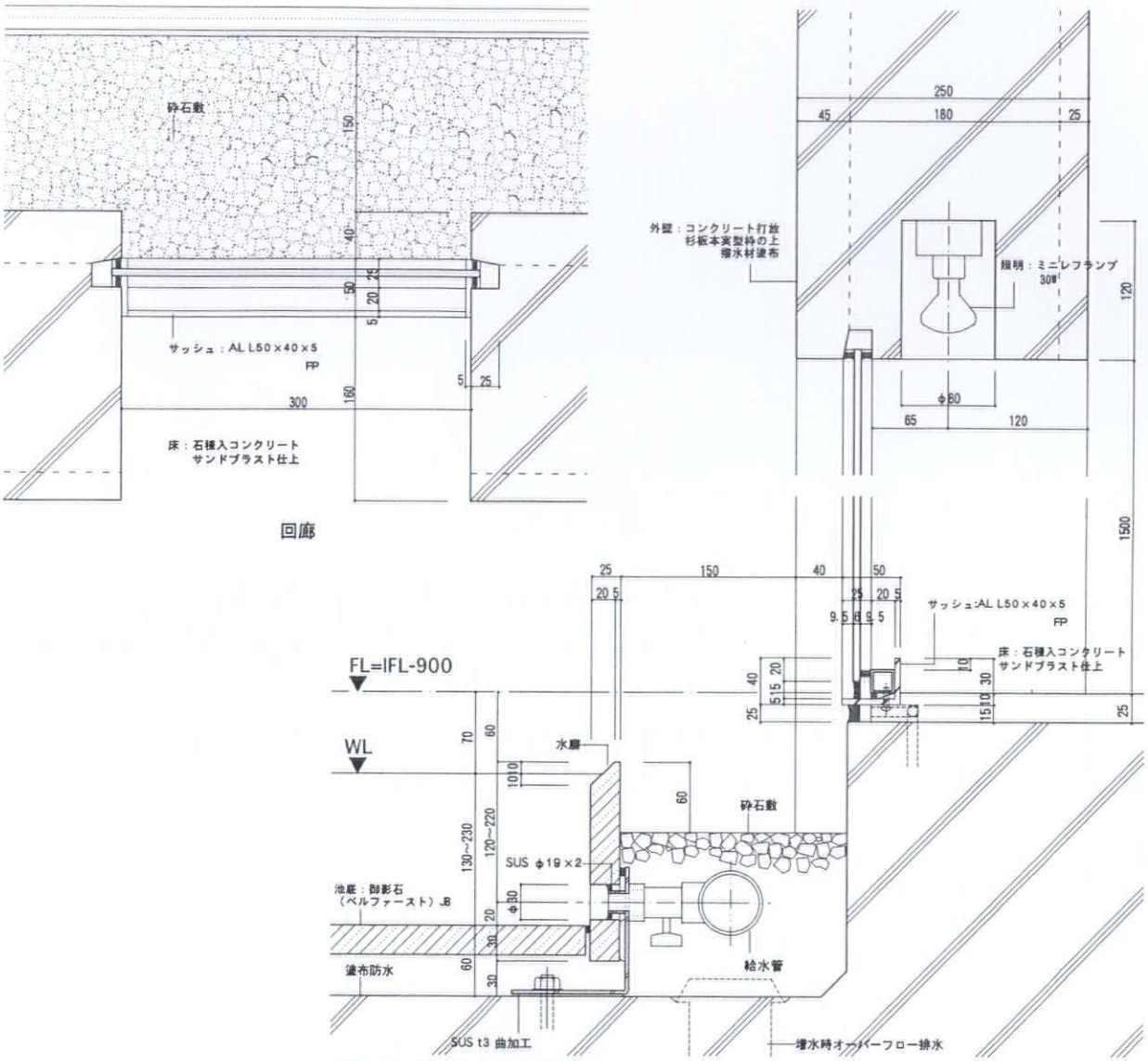
前庭　回廊詳細図　S=1:12



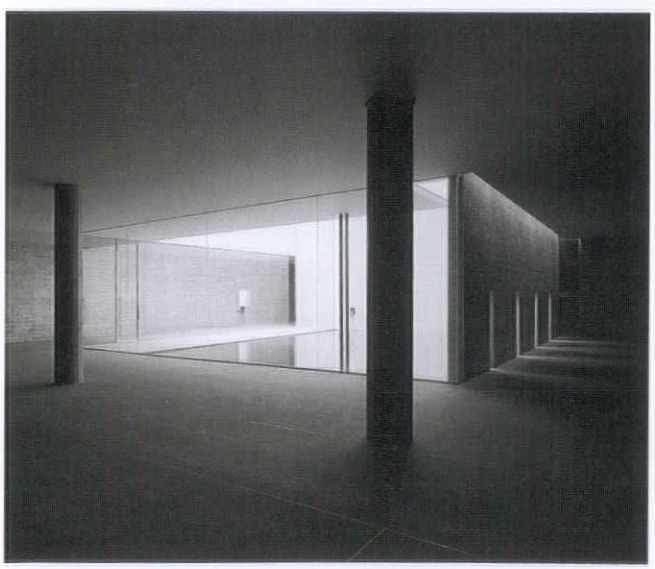


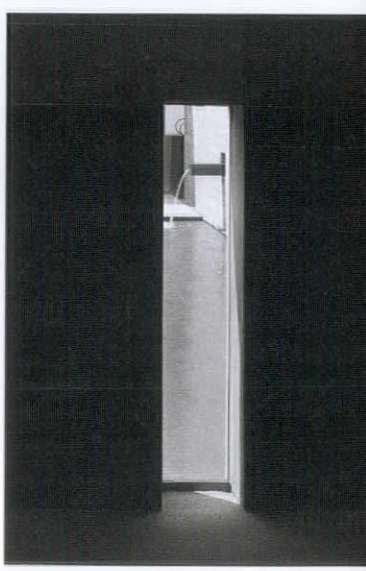


中庭



火葬棟中庭　開口部および池端部詳細図　S=1:6



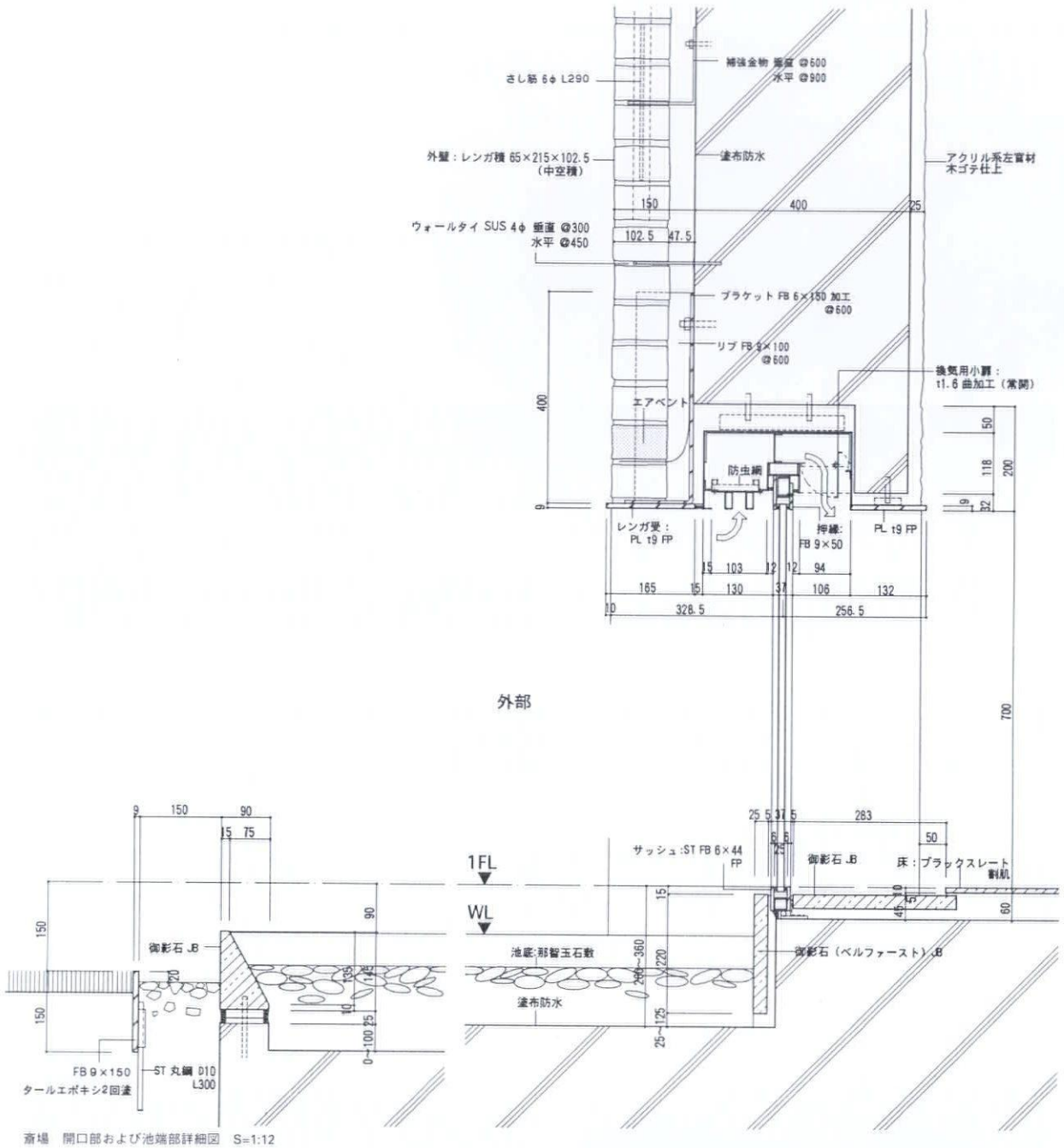


火葬棟における儀式は、中庭を巡るようにして執り行われていく。

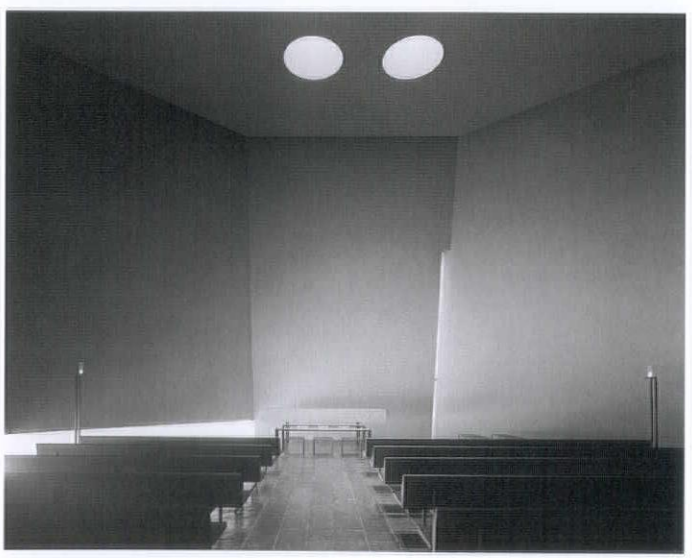
そこに張られた水は、石の立ち上がりと砕石敷によって、壁と縁が切られ、水盤としての性格を強めている。その砕石敷に給水管を組み込み、水を静かに循環させ、吐水口からの波紋が美しく広がるように工夫した。

開口部は、光を切り取ったり、外界を感じるためのものとして捉えた。内外を仕切る役割のガラスは、出来る限りその存在感を消すため、コンクリートの目地に留められ、サッシュは結露受とガラスの重量受けのため下枠のみを設けている。





斎場　開口部および池端部詳細図　S=1:12



八角柱が地面に突き刺さったような印象を与える斎場の内部は、包まれたような一体感のある求心性の強い空間に、参列者の流れと深く関係づけるようにして、自然光を取り入れた。

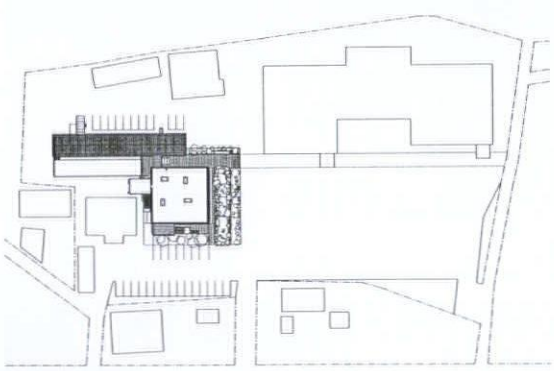
入口の格子戸を通して正面に細いスリットが光り、中に入ると、地明りを確保する4つの円形の天窓が垂直性を出す。参列者席の間を通って、祭壇に到達し、焼香を終えて、左手の水の反射光が揺らめく地窓を辿りながら参列を終える。そのように設定された開口部は、外観の抽象性を損なわないように抑制され、そのディテールも調光や通風を考慮にいれながら、注意深く決定された。

川上村林業総合センター　森の交流館

飯田善彦建築工房、長野県南佐久郡川上村、1997年

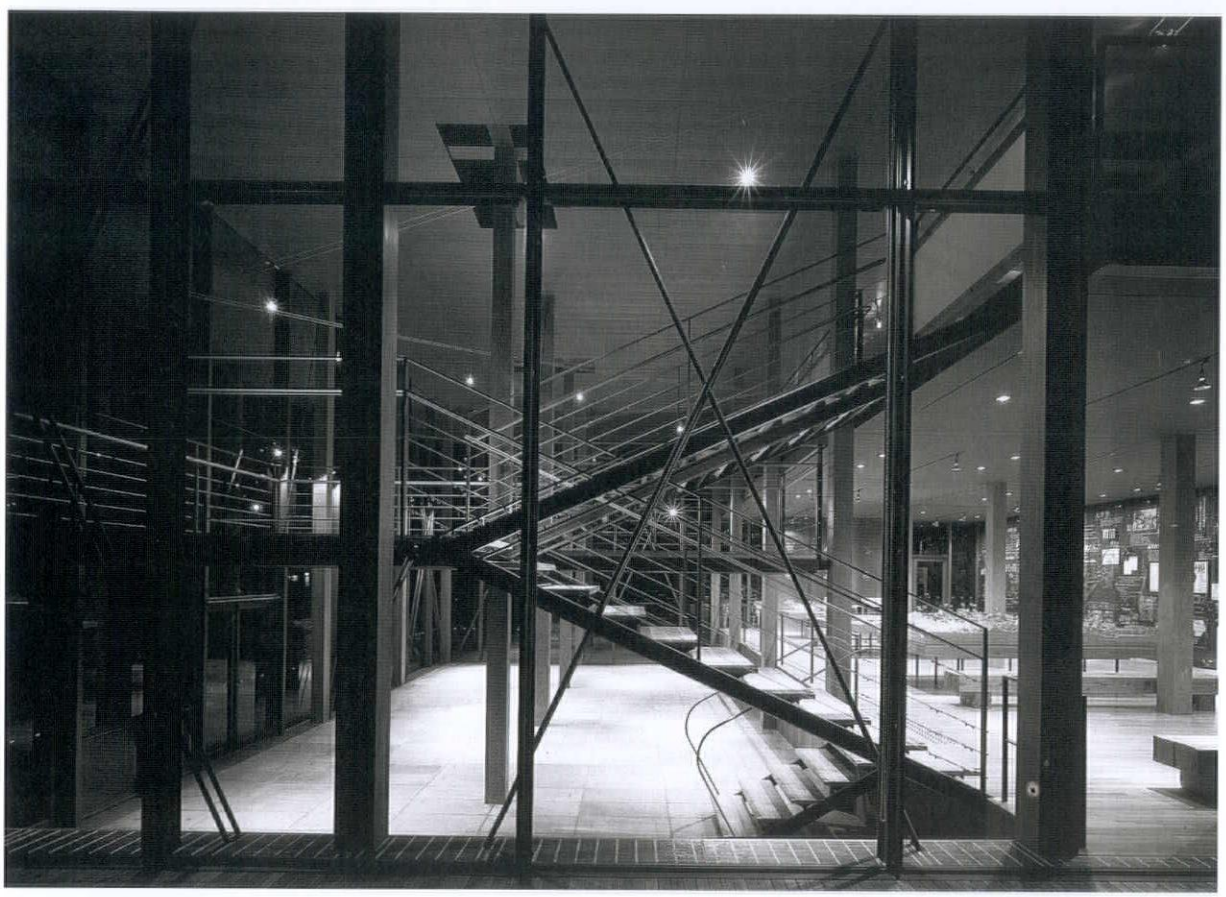
主用途：展示施設、飲食施設、事務所
構造：木造（一部鉄骨造）
階数：地上2階
敷地面積：2,775m²
建築面積：677m²
延床面積：989m²

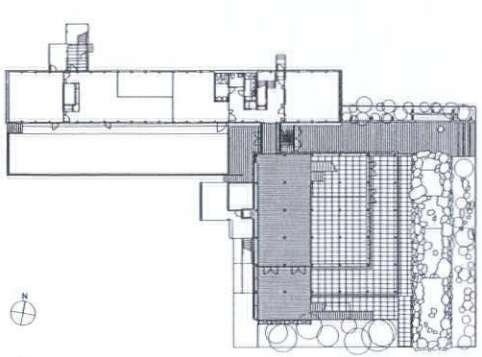




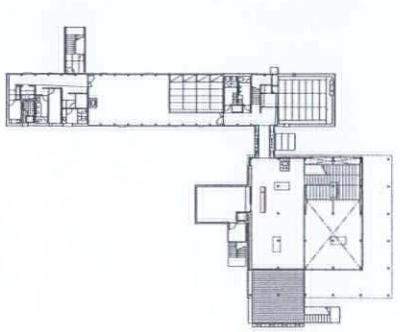
配置図　S=1:2500

広場からの全景
雪の朝、冬の低い日差しが奥に延びる。
輝く列柱。ガラスに投影された山脈のオーバーラップ。
右手に黒く長く横たわる事務棟。
白くきらめく切断面。



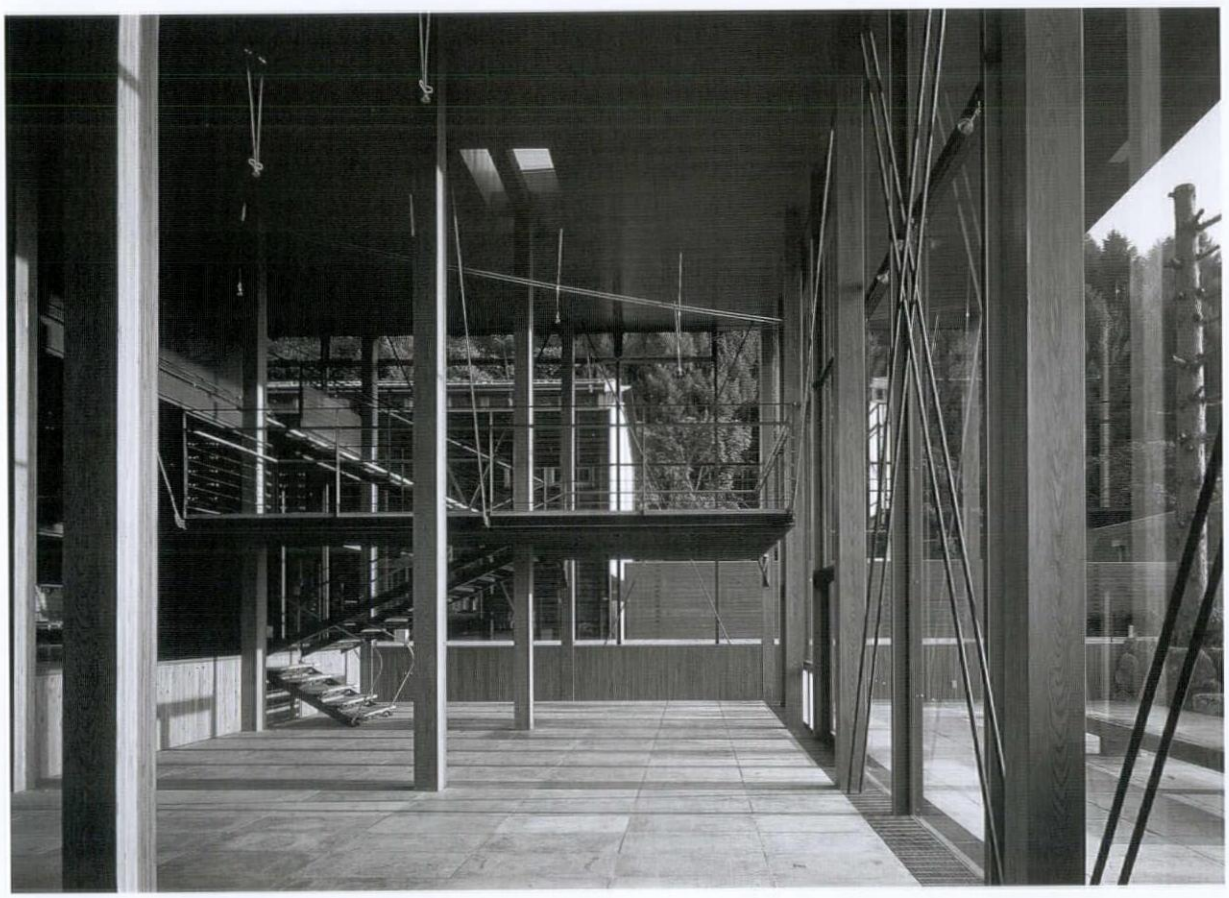


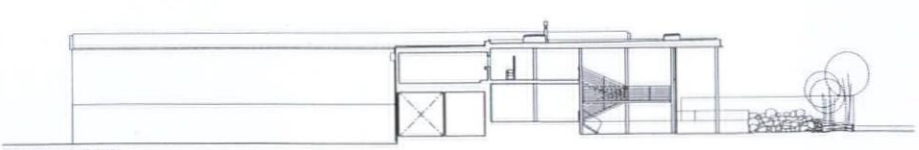
1階平面図　S=1:1000



2階平面図　S=1:1000

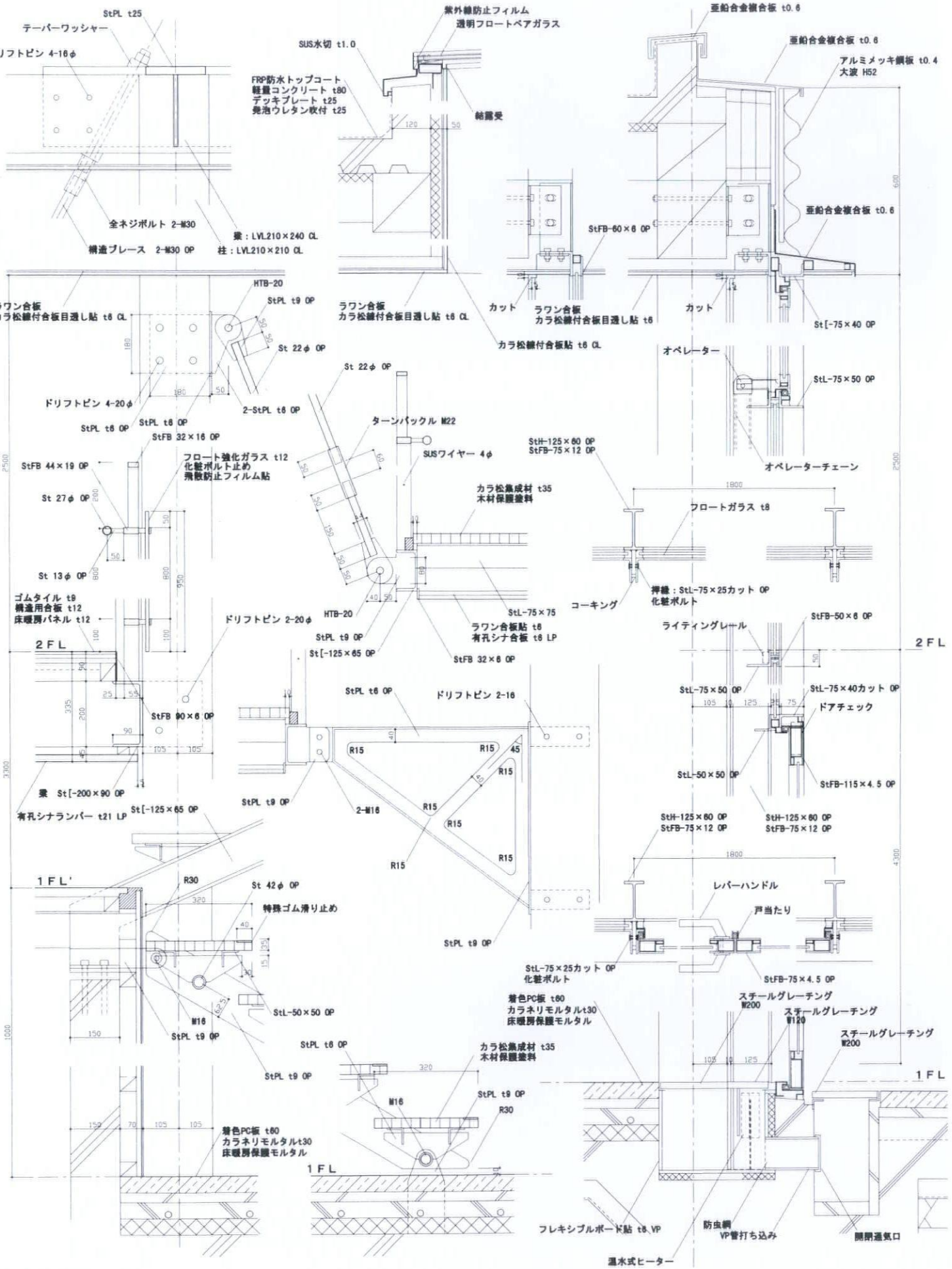
エントランスから視る展示棟夜景
階段、サッシュ、床版、ブレース等が
断片のように柱に取り付く。
空中照明に浮かび上がる木部と
シルエットに沈む鉄部。
寡黙と饒舌。単純と複雑。
ディテールによる作為。





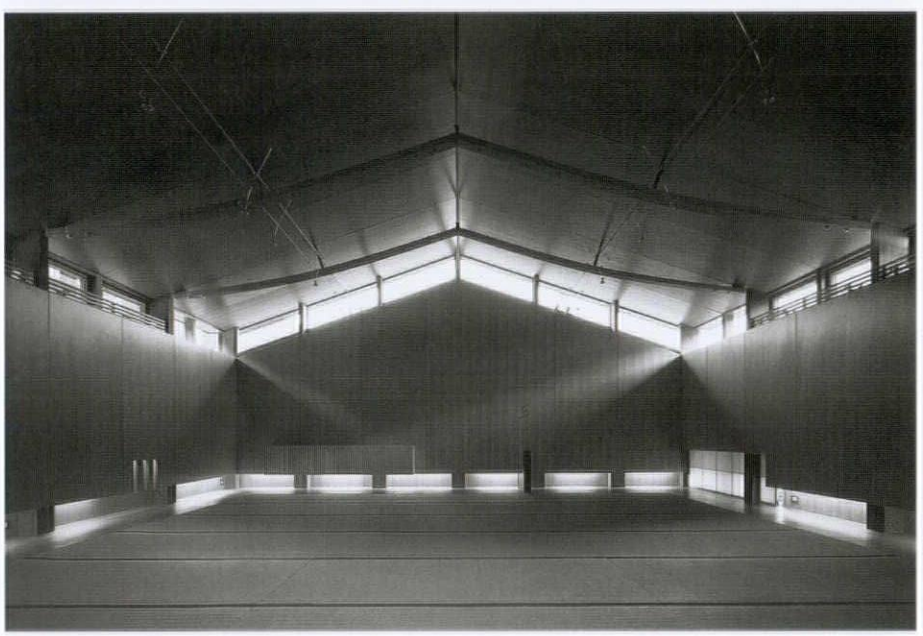
断面図　S=1:600

展示棟　朝の光に満たされた多柱空間
ボードウォークを挟み事務棟、
背景のカラ松林に続くシークエンス。
陽が廻るにつれてトップライトからの光が
強くなる。



A棟ディテール　S=1:15



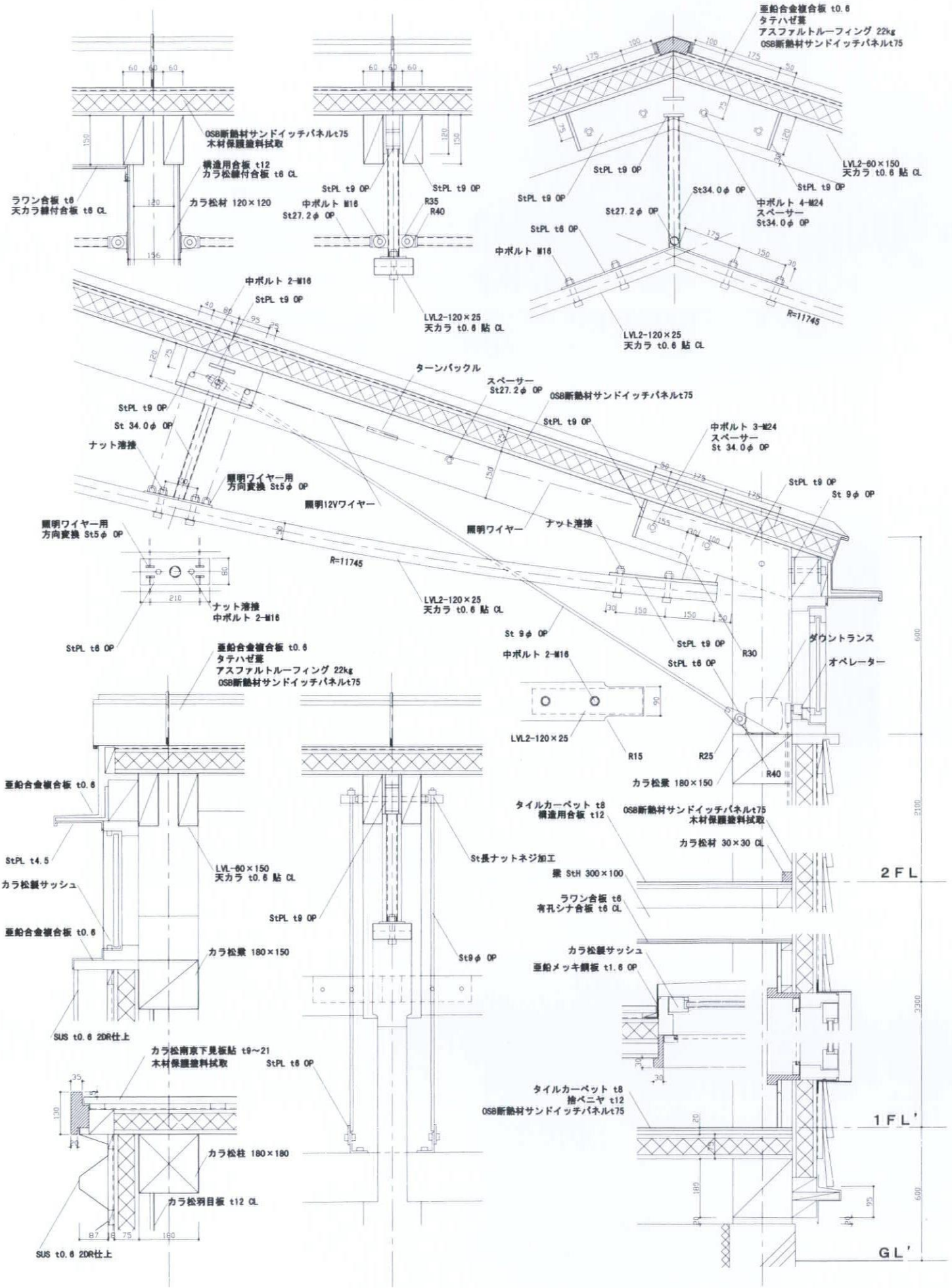


ラーチサロン　事務棟2階
連続する構造体。
たわめられ、力を孕んだ下弦材。
強さと繊細さの微妙なバランス。
木と鉄。柔と剛。
分断された天井と壁。
内にこもりたゆたう柔らかな光。

奥峰の間　事務棟2階
構造体の内側に衣のように纏いつく
艶やかな木肌。
光を滑らかに受けとめつつゆっくりと
熟成する300年生の天然カラ松。



断面図　S=1:600



B棟ディテール S=1:15

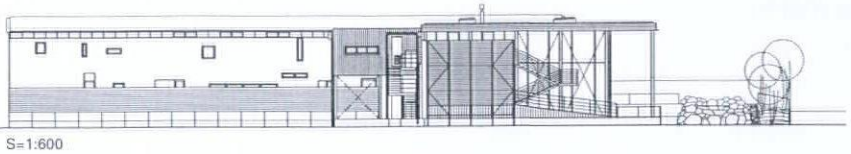


広場からの夜景
宙吊りの照明に天井が浮かび上がる。
ガラス面の反射像が消えて
パースペクティブに現れる最奥部の展示壁。
透明性がもたらす開放感。



東立面図　S=1:600





南立面図　S=1:600

遠景
雪景色。
集落の中の建築。
千曲川源流域の山脈を望む。

コラム集

細部への眼差し

現代のディテール・マイスター達が描く情景と射程



ディテールを納める——それには建築家はもちろんのこと、様々な業者や職人の類稀なる協力関係をもって初めて成し遂げることが出来るものであることに疑う余地はないであろう。素材のもつ質感、部材の性能や法的制約、美しいバランスとプロポーション……。細部の決定に携わる人たちがクリアすべき項目は枚挙に暇がない。しかし、そこにはもはや設計者と下請け業者という上意下達のヒエラルキーを超越した、共に建築を創り上げる「工匠＝マイスター」としてのこだわりと緊張感が確かに存在する。ここでは4名のディテール・マイスター達に登場して頂いた。それぞれのスタンスや思考方法は異なるが、ものづくりに対する一貫した真摯な態度は一致する。そんな彼らがものづくりに対する想いを生きた言葉で語ってくれた。

——「我々の仕事は、図面化できないところにあります。でも計算することができない部分、図面化できない部分ををどうすればよいのか、不思議なことに自然と体で分かるのです。理屈ではなく、小さい頃からひたすら石と格闘することで知らないうちに身に付いたもので、それは呼吸をすることと同じぐらい、私にとっては自然なものなんです。」（和泉正敏／石のアトリエ）

●和泉正敏／石のアトリエ：石を読む
●新日軽株式会社：型を極める
●宮崎浩・プランツアソシエイツ：スティールに息づく寡黙な美
●小川晋一都市建築設計事務所：トランススケール・マトリックス



石積みの意匠　和泉正敏／石のアトリエ

石を読む。

石のまち、香川県牟礼町で見た「石達人の極意」

和泉正敏／石のアトリエ

小さい頃何気なく河原や道端で拾った石に、言い知れない懐かしさや親近感を感じたことはないだろうか。その手触り、色、形……。何気なく拾い集め、部屋の隅にちょこんと飾ってみたりする。この石はどこから来たのだろう、自分が生まれるどれくらい昔からこの世に存在し続けてきたのだろうと、石の中に凝縮された時間と情景に思いを巡らせてみる。石と触れあい、向き合うことで、不思議と人の心は癒されてゆく……。

良質な花崗岩である庵治石の産地として知られる香川県牟礼町。そこは約350もの石材店が点在する「石の町」である。庵治石は墓石や石灯籠、記念碑などの素材として広く使われ、かつて大阪城築城の際には石垣用として船で運び出されたといわれている。この地で親子何代にもわたって石材店を営む家系に生を受けた和泉正敏氏は、ほぼ20歳までに石に関する知識や技術を日常生活の中で会得する。既存の概念にとらわれないアヴァンギャルドな石の使い方を模索するために、1964年に「石のアトリエ」を有志と共に設立。その直後、芸術家のイサム・ノグチと運命的な出会いを遂げ、氏の右腕として数多くの名作を手掛けた。イサム・ノグチの没後は、その意志を受け継ぎつつも、近年は独自の手法で新たな地平を切り開きつつある石の第一人者である。イサム・ノグチのアトリエに近接する和泉氏の住居兼作業場は、文字どおり石のアトリエである。石の壁、石の床、石の小物など、すべてが石なのだ。玄関先に何気なく置かれた石のつくばいには、季節の草花が生けられる。またアトリエの前には、石たちが乱舞する石庭がある。和泉氏の手によって命を吹き込まれた石たちが、無邪気に遊び戯れる、石のための舞台である。「自分を芸術家だとは思いません。石とともにやっているだけなんです。どうすれば石が喜ぶのかを感じとるのが仕事なんです。そうして石から随分色々なことを教わっています。」和泉氏は穏やかにそう語る。

そんな牟礼の町にひっそりと佇む石のアトリエを、ある良く晴れた夏の日の午後、訪ねてみた。



アトリエのまわりで見かけた風景

1：右手前の建物はイサム・ノグチのアトリエ、香川県内の古い米蔵を移築したもの。左奥は和泉正敏氏の住居兼アトリエ。この「石のアトリエ」は、両氏と旧交の深い山本忠司氏の設計による

2：イサム・ノグチ作品　蔵の中から見た石の作業場。ここで見た石の彫刻は、まるで意識を持ってるかのようにどれも本当に楽しそうだ。永い眠りから覚めて永遠の命を得たことを祝福するかのように。蔵の中にもイサム・ノグチの石の彫刻が置かれている

3：玄関先にさりげなく置かれているつくばい。季節の草花を水面に浮かべる風流な室礼（しつらい）。和泉氏曰く「夏は花と水にとって一番むずかしい季節だから、今日は何も飾ってないんです」。石にとって、春先や晩秋が水や空気が澄んでいて良い季節とのことだ

4：石のアトリエ内部の石壁。大小の石が織りなす絶妙なバランス感覚には目を見晴るばかりである。「頭で考えたり、図面を描いて納めたりといった世界ではないんです。自然に体で積み方がわかるというか、体が勝手に動くというか……」と和泉氏は語る。ただ最近はこうした石積みを創れる職人はほとんどいなくなったという

5：石のアトリエ内部。石の壁と床に囲まれた空間に、軽やかなトラス屋根とイサム・ノグチのデザインによる照明器具がかかる、モダンと自然の見事な融合。外の自然の借景も美しい

6：アトリエの近くにある石切場。基本的には1件の石材店が1箇所の自分の石切場を持っている。何百年も昔から掘り続けているため、地上からは数十メートルの深さがあるところもある。底には水が溜まり、非常に神秘的

7：同石切場の風景。上下で岩の表面が違うのがお解り頂けるだろうか。上は昔の手掘りによる跡、下は最近の掘削機による跡。「昔は手で掘っていたので、とても危険でした。仲間が何人も命を落としたし、自分も何度も危ない目に遭った。石切場に入るときはいつも命がけの緊張感があります」と語る。石切場には小さな祠（ほこら）があり、山の神を奉（まつ）っている

8：石切場での和泉氏。「ここに座ってると、自分も石の中から生まれてきたみたいで、心が落ち着きます」

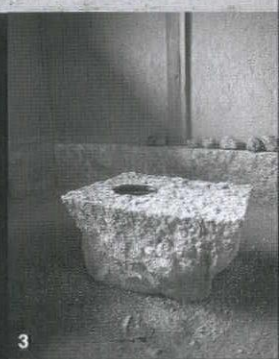
和泉正敏（いずみ・まさとし）　略歴と主な仕事

1938年　香川県牟礼町に生まれる
1969年　シアトル美術館　IN彫刻「黒い太陽」
1974年　最高裁判所　IN彫刻「噴水」
1978年　草月会館ロビー1階プラザ
1984年　土門拳美術館
1985年　司祭の家
1987年　メトロポリタン美術館　IN　つくばい
1991年　カナダ大使館
1992年　札幌IN彫刻「ブラック・スライド・マントラ」
　　郡山市立美術館
1994年　東京都現代美術館・京都コンサートホール
1995年　豊田市美術館
1996年　東京オペラシティ
　　札幌モエレ沼公園　IN「プレイマウンテン」
1997年　新国立劇場
1998年　サンフランシスコにて3回目の個展

主な受賞　1994年SDA賞、1995年日本現代藝術振興賞など。


1


2

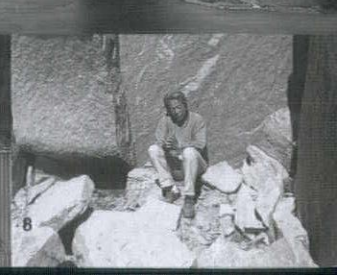

3


4


5


6


7


8

和泉正敏氏へのインタビュー

石についての四方山話

「石と向き合ってることが、自分にとっては気持ちが落ち着く至福の時間なんです」



――どのような経緯で石屋を始めようと思われたのですか。

子どもの時からずっと石の中で過ごしてきました。親やおじさん、兄とかみんな石の仕事を家の前でしてましたからね。近所の人もみんな石と向きあって仕事をしてました。現在のように職業を選択する自由があるというのではなく、自然に大きくなったら石屋になるものだと思ってました。子供の頃から親の手伝いはずいぶんしてましたから、手伝いがそのまま仕事になっていたという感じですね。

――イサム・ノグチさんとの出会いについてお聞かせ下さい。

最初はずっと庭園用の石や墓石関係や土木工事用の石を扱ってたんですけど、丹下健三先生が香川県庁舎にずいぶんモダンな庭をつくられたんですね。ああ、石は使い方でこんなにモダンに見える方法もあるのかと思って、作り方をいろいろと勉強しないといけないんだなと考え始めたんです。ちょうどそのころイサム・ノグチ先生と会う機会があって、この人についていこうと思った。ノグチ先生としては香川で仕事をしたいという希望があって来られたんですけど、当時の香川県知事だった金子正則先生と建築家の山本忠司氏が「和泉という若いのが新しい石の試みをしようとしてるから、彼なら頑張るんじゃないか」といって紹介してくれたんですね。その時ノグチ先生が60歳、私が25歳でした。それ以来ノグチ先生が84歳で亡くなられるまでの24年間、一緒に仕事をやってきました。



――「ノグチさんと一緒に仕事をする時には言葉がいらない、逆に言葉が邪魔になることもある」というお話を以前に伺ったのがすごく印象的だったのですが。

ノグチ先生が私を選んでくれたのは、石が好きで、熱意と技術があったことで、英語が話せたり、美術の学校に行って知識があったりすると、逆にそのことが制約になるかも知れないと思われたんでしょう。言葉のコミュニケーションがあると、本当に純粋な気持ちでノグチ先生の仕事に取り組めなかったかもしれませんね。

――和泉さんは生まれた時から石に触れて、石が体の一部として感じられるようになっているとおっしゃってましたけど、イサム・ノグチさんもそれと同じ感覚を求めていたということなんでしょうね。芸術についての知識や論理的な考察ではなくて。

多分そうだと思います。言葉を交わさずとも、共有できるものがあったんだと思います。

――建築家との仕事では、どのようなものがありますか。

香川県内では山本忠司氏と仕事をいくつかしてましたけど、千葉の美術館の時には大高正人さんと一緒に仕事をしました。それが県外での最初の公(ママ)の仕事でしたから大変うれしかったというか、熱意を燃やして始めました。それからはいろいろな建築家と一緒に働かせて頂きました。最高裁判所では岡田新一さんとやりましたし、谷口吉生さんとか、柳澤孝彦さんとか……。

――建築家と仕事を一緒にする時に、特別に何か考えていらっしゃることはありますか。

建築家との仕事の時は、できるだけその建築家のイメージに合わせなくてはいけないというのがあります。石以外との合わせがすごく大事なんですね。石だけがとびぬけて違ったように見えてもいけないので、色とか形とか仕上げとか、いろんな方法で周りと合わないといけません。でもずいぶんと勉強になりました。いろんな苦労はたくさんありましたけど、出来上がってみると、いい思い出だけが残ってるんです。

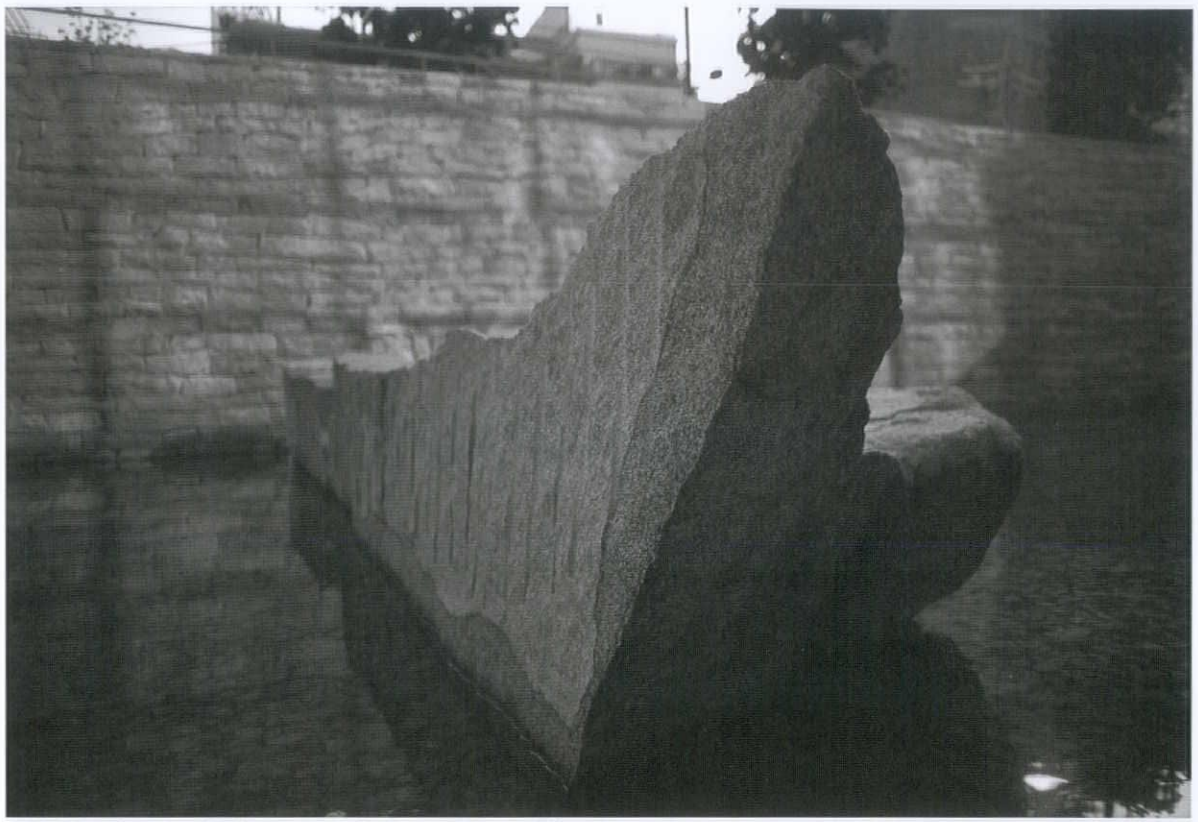
――和泉さんにとって石とは何ですか。

難しい質問ですね……。イサム・ノグチさんは日本の自然から色々なことを勉強しようとしたんですね。自然から勉強するために、木とか土とか、いろんな素材を使ったんです。そして最後にたどりついたのが石で、石から勉強したいという想いがあったとおっしゃってました。私は芸術家のようにあまり難しいことは言えませんが、石はお金をもうけるための素材ではなくて、小さい時から好きな石を動かしたり、石から何かつくったりということは、やはり、私も無意識のうちに石から勉強しようとしていたからなんでしょう。これからは自分の信じることだけをしていけたらいいなと思います。周りの状況にあれこれ左右されずに。

――また生まれ変わっても石の仕事をしたいと思われますか。

そうですね……。ほかのことはできないと思います。だんだん年を重ねてきたせいもあるんですけど、いろんな人と会って話をしたり聞いたりすることよりも、石のほうが自分の気持ちを落ち着かせてくれるところがあるんです。生きてるのはこういうことだという大事なことを教えてくれるようなところが……。石と向き合ってることが、自分にとっては気持ちが落ち着く至福の時間なんです。

(1998年7月10日　香川県牟礼町「石のアトリエ」にて)



新国立劇場の石庭。大地から掘り起こされることで長い眠りから目覚め、その勇姿をあらわにする

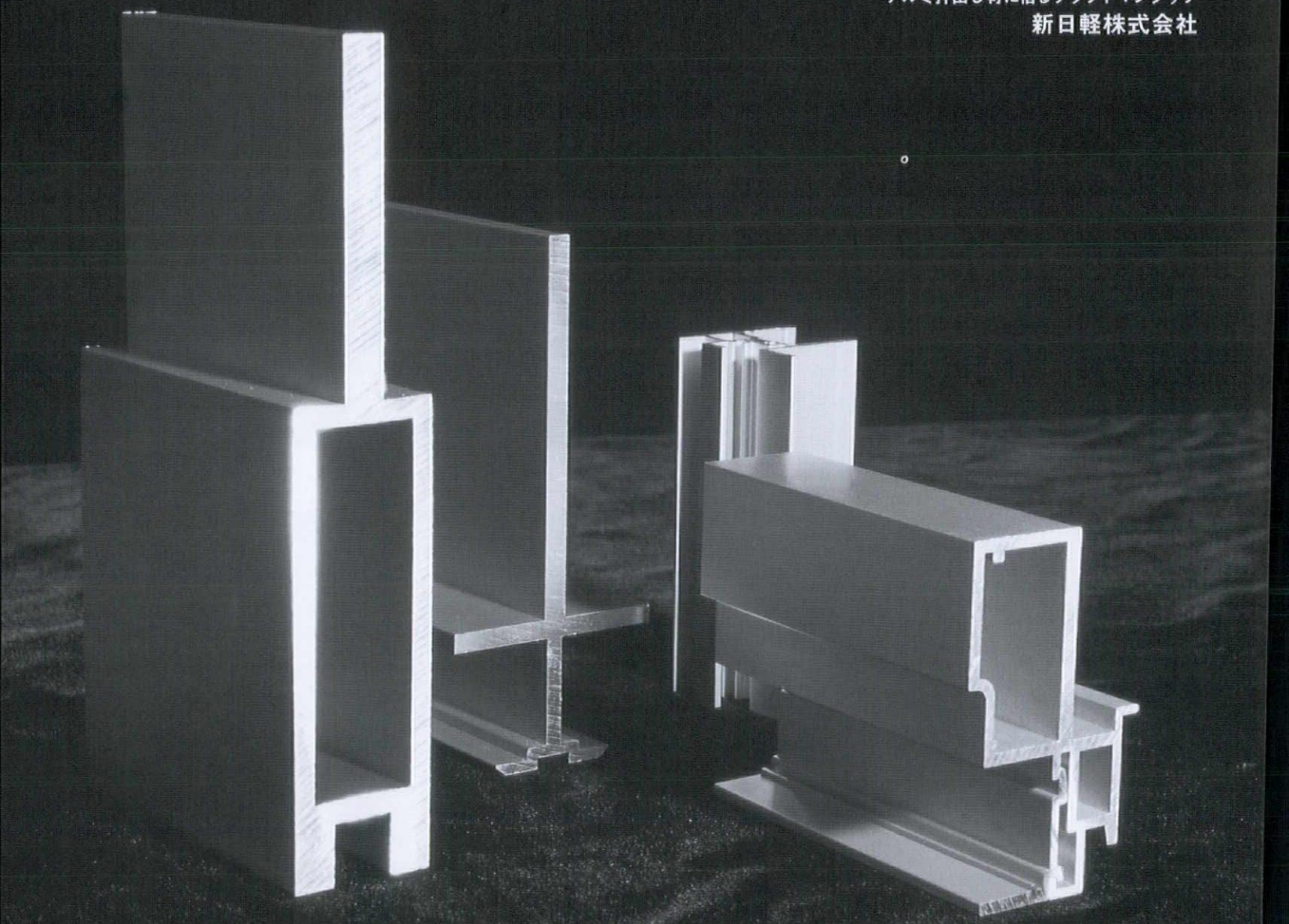


アトリエの庭先に置かれたつくばい。水面に季節を映し込み、空気と同化する

おおらかさを感じる石は心がなごむ
大地を連想させ　温もりが伝わり　空にも繋がる（和泉正敏）

型を極める。

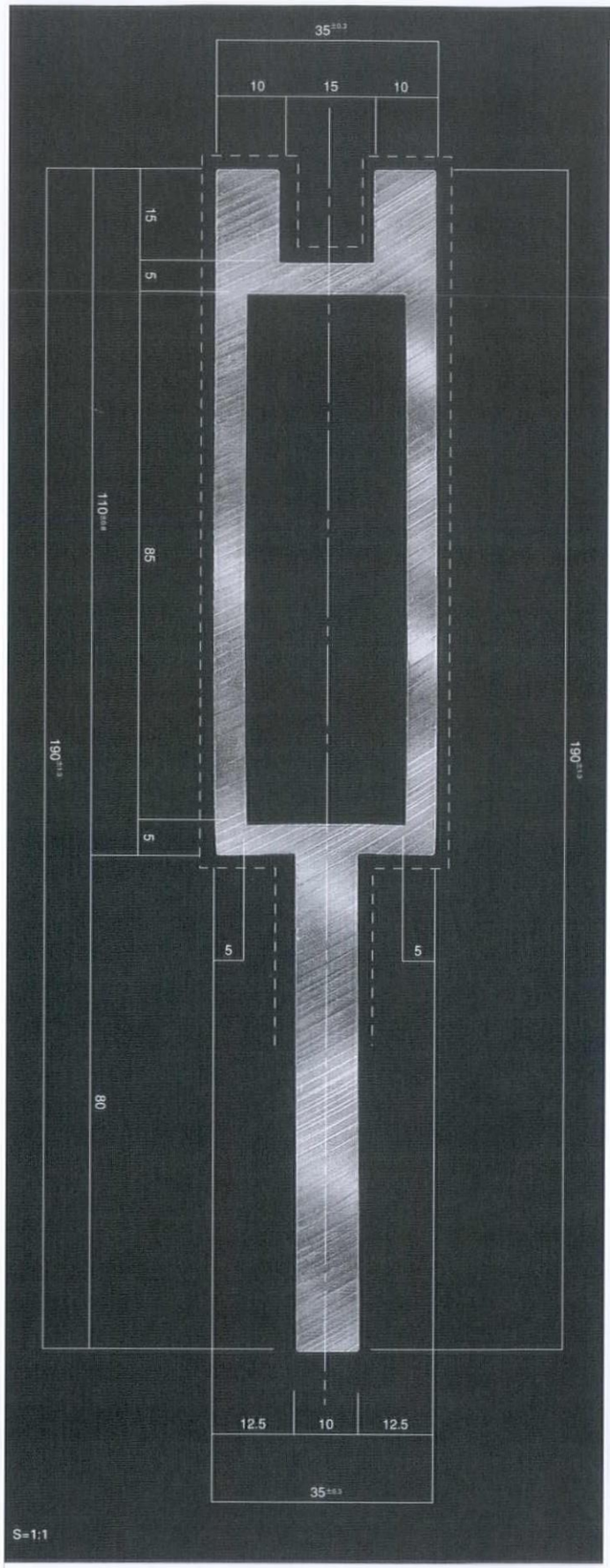
アルミ押出し材に宿るクラフトマンシップ
新日軽株式会社



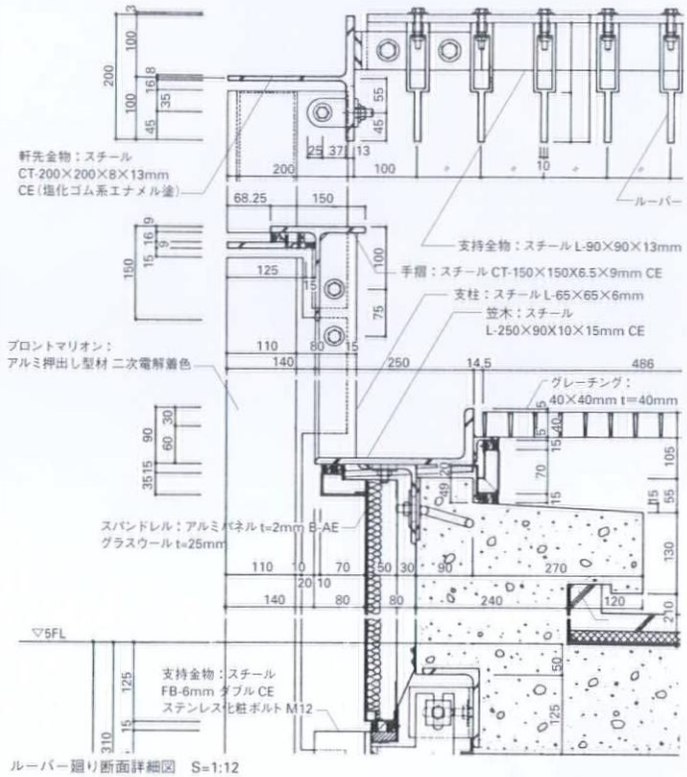
ひとつの部材のプロポーションが、その建物全体のイメージに与える影響は計り知れないものがある。ある部分の見付寸法を数mm変えただけで、その建築のイメージが一変する——そういった微妙で繊細なバランスの上に成立する緊張感。もはや単なる建築部材といった枠組みを超え、ひとつの部材がその建物のアイデンティティにさえなり得ることもあるのだ。

〈成田図書館成田山仏教研究所〉〈R-90 竹中技術研究所〉〈東京自転車健康保険組合会館〉……、竹中工務店・赤坂喜顕氏の一連の作品に共通して見られる端正なサッシュ・ワークは、すべて総合建材メーカーである新日軽が特注で製作したものである。実際にサッシュの設計を担当するスタッフついても、多少の入れ替わりはあるものの、一貫して同じ人たちがデザインを行なっている。まさに建築家とメーカー側のデザイナーによる見事な共同作業の結晶が、作品のアイデンティティとなっている良い例であろう。そこには、「建築家と建材メーカーの関係」というような月並みなカテゴライズをはるかに凌駕する、こだわりをもったマイスター（工匠）同士の真摯で等価なコラボレーションの様を見て取ることが出来るのである。このコラムでは、新日軽側の担当デザイナーのひとりである横山幸喜氏に、〈東京自転車健康保険組合会館〉で使用したサッシュについて、その形状や特性を決めるにあたっての過程をわかりやすく解説して頂いた。

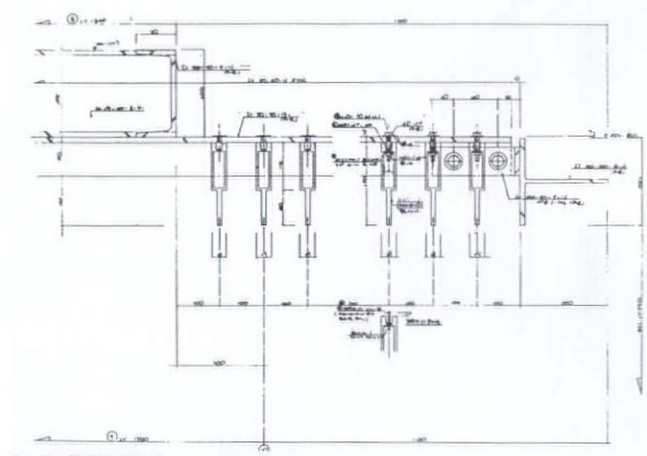
——「ある日赤坂さんから頂いた断面図をみると、ルーバーからこぼれる光と影による陰影がびっしりと描き込まれていたんですよ。それを見れば、この建物では何をテーマにしているのかがとても良くわかるんですね。そこに流れる空気みたいなものが伝わってくるというか。なるほどこの人はこういった考え方をする人なんだなと思いまして、是非この考え方を実現させたいと思ったわけです。そうした建築家のイメージに、いかにして現実的な解答を数値で裏付けながら与えていくことが出来るかが、私たちの仕事なのかもしれません」。そう語る横山氏に、ものづくりに対するこだわりを垣間見たのであった……。



フロントマリオン+ルーバー型材



ルーバー廻り断面詳細図　S=1:12

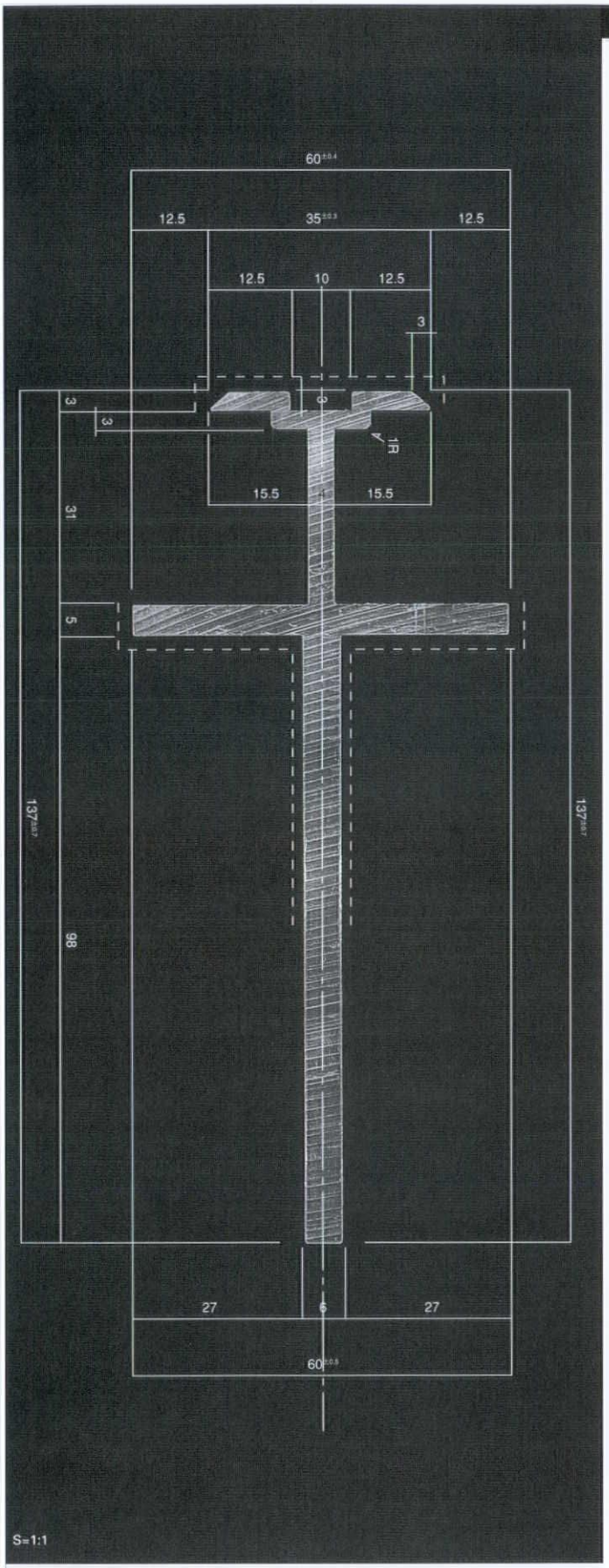


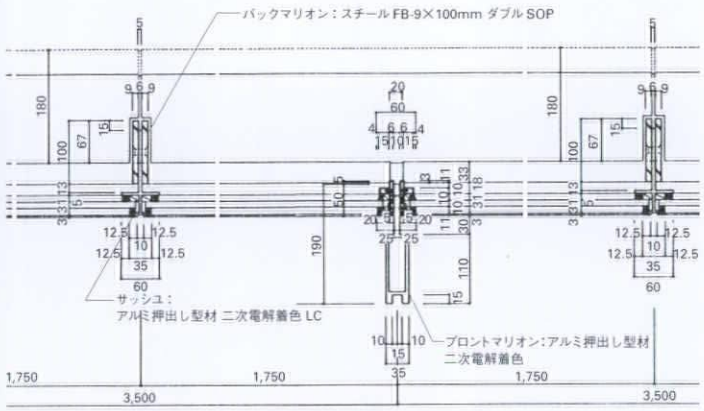
ルーバー施工図（断面）



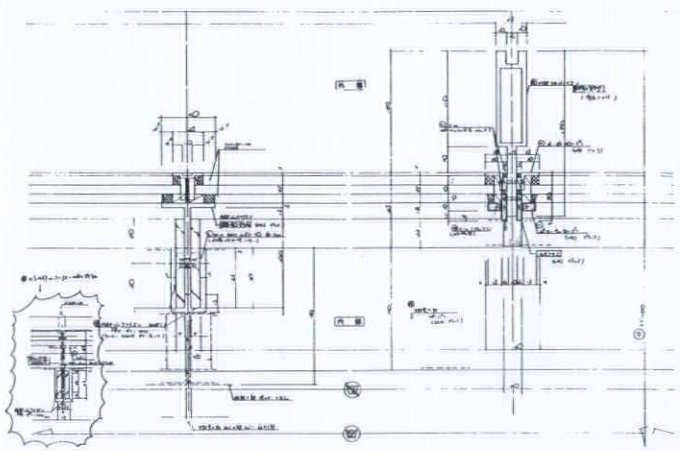
この型材は、東京自転車保険健康組合会館にて新しく製作した型材である。当初、アルミ角パイプと、アルミフラットバーの既製の材料を組み合せて対応しようと考えていたが、異種の材料を組み合せて製作すると、どうしてもビスや溶接等が見えがかり部に露出してしまうのと、強度的に、異種の材料を組み合せることで強度上弱くなるため、新しく型材を作ることでそれらを解決した。また当初、赤坂氏はこの型材をフロントマリオンのディテール（断面）だけとして考えていると思っていたが、まさかこの同じマリオンをルーバーに応用して使用するとは思わなかったことを記憶している。

バックマリオン型材





バックマリオン＋フロントマリオン廻り平面詳細図　S=1:12

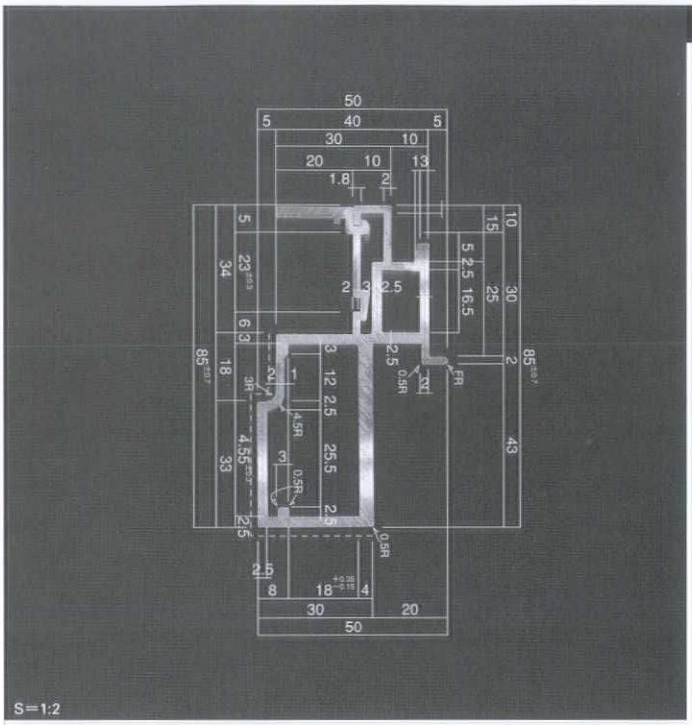


バックマリオン＋フロントマリオン施工図（平面）

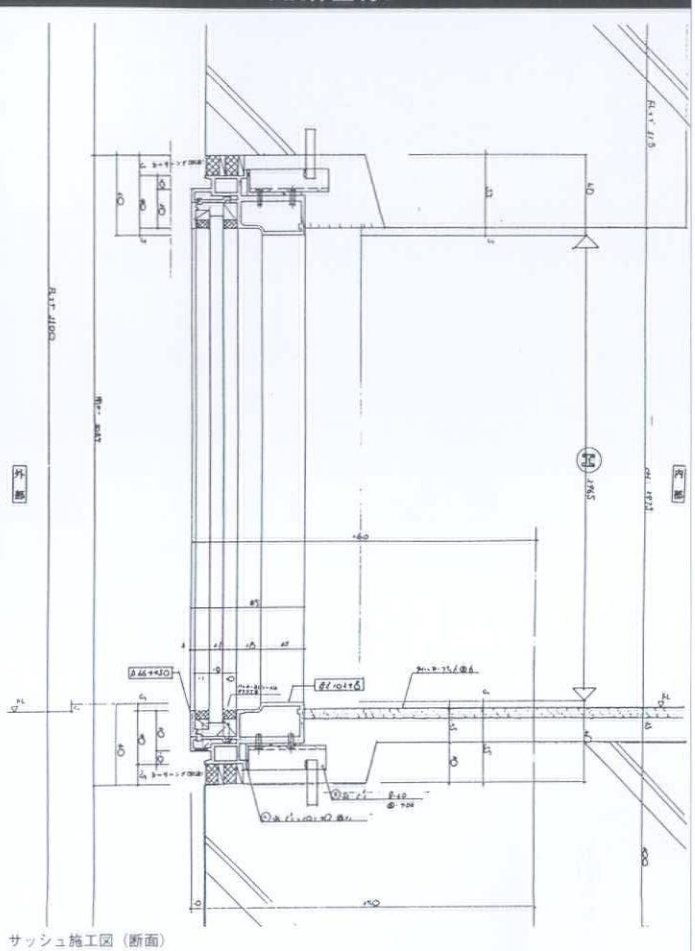


この型材も、フロントマリオン（ルーバー）と同じく東京自転車健康保険組合会館で作った型材で、ガラススクリーンの透明感を強調するために、上下端部をカットしてガラス突合せ部をシリコン・ジョイントしている。バックマリオンと内部側で、ステールフラットバーを皿ビスでサンドイッチすることにより、上下端部をカットすることで生じた断面欠損の不足分を、ステールフラットバーにて補って強度的に対応している。また、外部側の見付が35で、これはフロントマリオンと同じ見付になっている。

FIX枠型材1

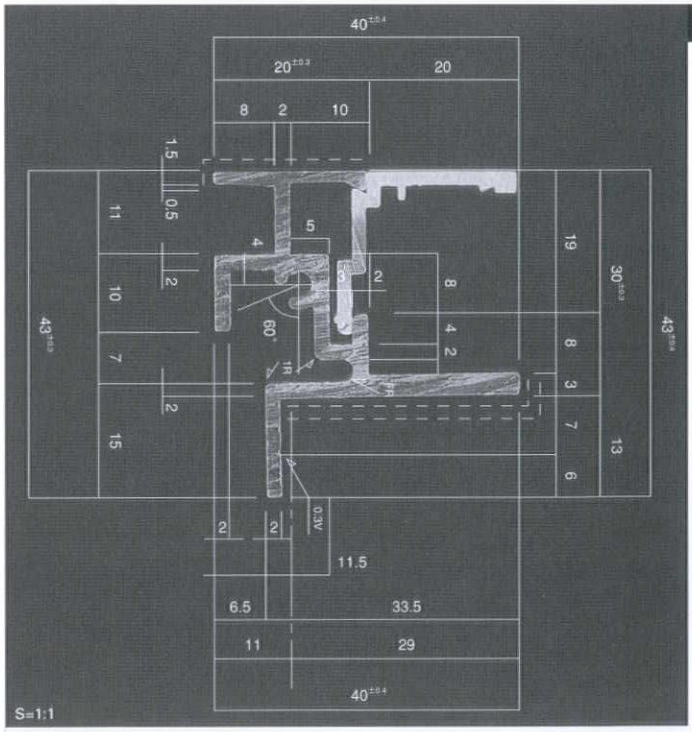


この型材は赤坂氏の代表的型材で、〈R-90竹中技術研究所〉で作った嵌殺し専用枠である。型材の意匠のベースは、同じく赤坂氏の〈成田図書館成田山仏教研究所〉で使用した類似の型材が、意匠的なベースでモデルチェンジして、この嵌殺し枠の形状になった。見込が85、見付が30と一般の既製品にない断面になっている。ガラス溝巾も31mm開口あり、いろいろな制約条件はあるが、15mm程度のガラス厚まで対応可能である。サッシュの枠の組み合せも、基本的にこの枠を四方廻して枠の構成をしており、コーナー部をトメ加工する様に考えている。また枠との取り合いシール部も、意図的に10mmセットバックする様な型材の型状になっているので、サッシュの枠見付が必然的に浮き出る様になっている。

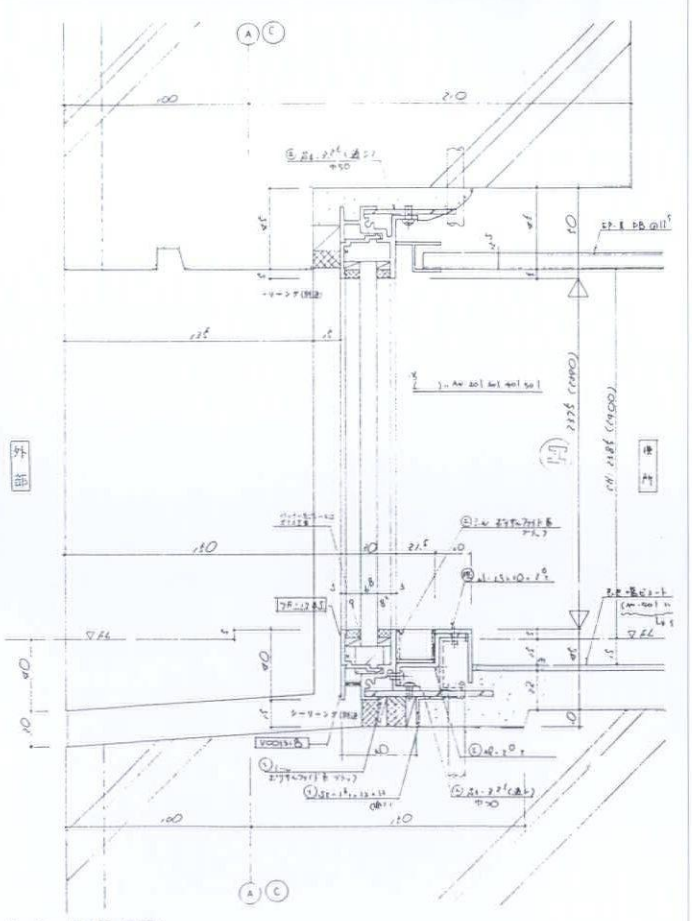


サッシュ施工図（断面）

FIX枠型材2



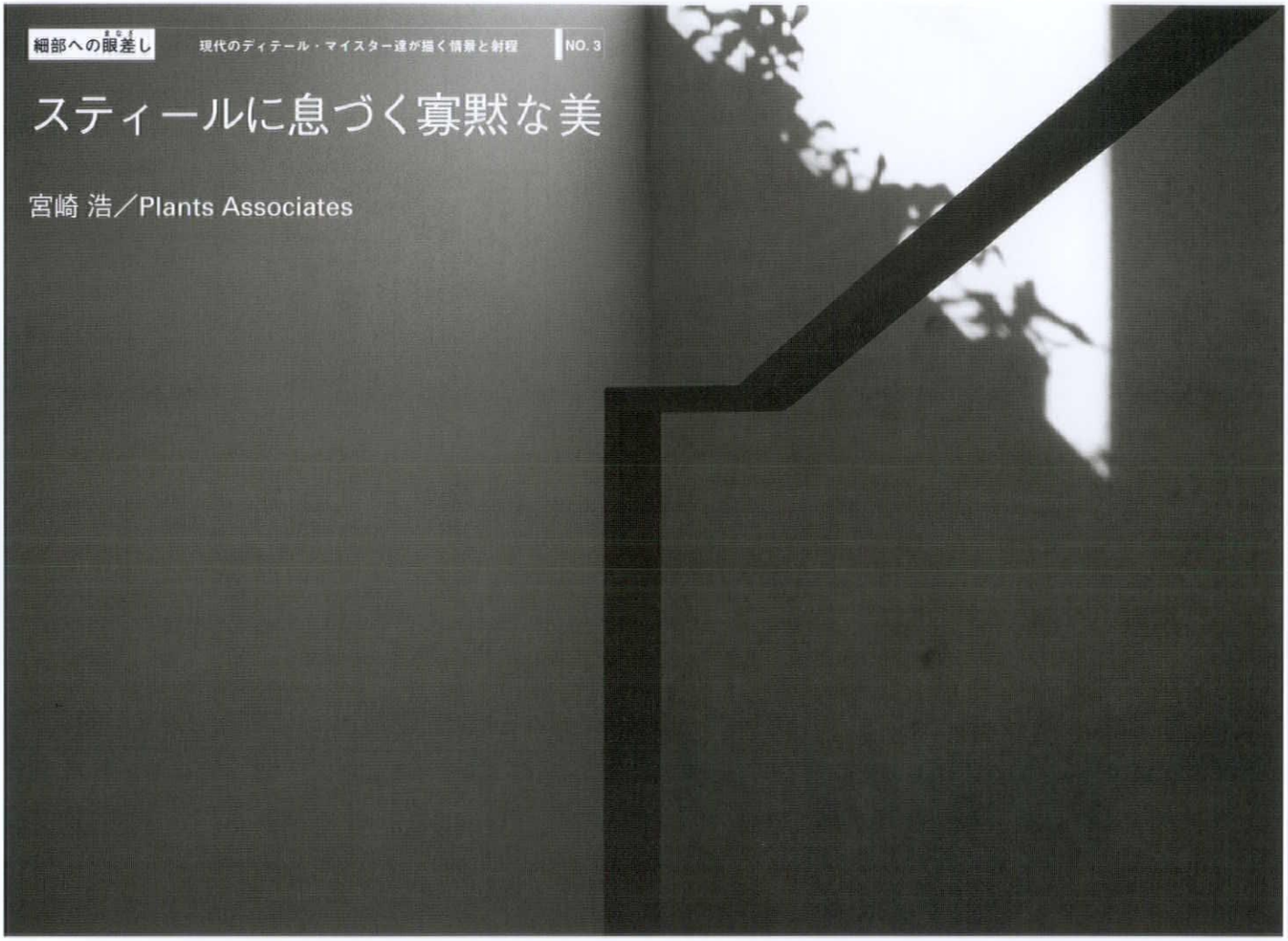
この型材も、フロントマリオン（ルーバー）、バックマリオンと同じ〈東京自転車健康保険組合会館〉にて新しく作った型材である。当初は、アルミのチャンネルを四方組んだ枠で、そこにガラスを嵌込んだ簡単なサッシュ枠であったが、ガラス廻りの水抜きがアルミチャンネルでは難しいのと、どうしてもガラスを嵌込むために、どこかにビス止めで対応する押縁が必要であった。このふたつの問題点を解決するためにこの型材を作ったのである。水抜き孔も、ビス不要の嵌込式の押縁も、この型材を作ることによって解決した。上下にこの枠を使用し、竪枠にアルミチャンネルを組み合せる方法でサッシュ枠を構成する。枠見込30、ガラスは5mmから12mm程度のガラス厚が対応できる。また後付で結露受も取り付けることが可能である。



サッシュ施工図（断面）

スティールに息づく寡黙な美

宮崎 浩／Plants Associates



スティールの魅力

昨年の暮れから今年にかけて、東京下町のある鉄工所の廃業から建物の解体に立ち会う機会があった。御多分にもれず最近の経済状況の悪化や、工業地帯までスプロールしてきた住宅群による無言の圧力等、多くの操業環境の変化が、40年近く操業を続けていた小さな鉄工所を廃業に追い込んだのである。灯の消えた工場には、赤錆の浮いた巨大な圧延機や工作機が無惨に打ち捨てられていた。少しでも使える機械は海外に売り飛ばされ、工場はアッというまに姿を消した。

寂しいことに、我々の周りから、古いといわれる素材や技術、生産施設が次々に消えていってしまう。自分自身、現場で設計する度に、多くの工場に出かけ、ものづくりの場に参加してきた。その中でも、特に硬質で強靱、そしてシャープな金属の製作現場の迫力は、言葉に表せないほど感動的である。その魅力に惹かれていつも、デザインに熱中してきた。鉄やアルミ、ステンレス等、各々が独特の捨てがたい質感と性格を持っているが、その中でも最近は、どういうわけか特に、鉄の持つ粗野な力強さに強く惹かれていた。

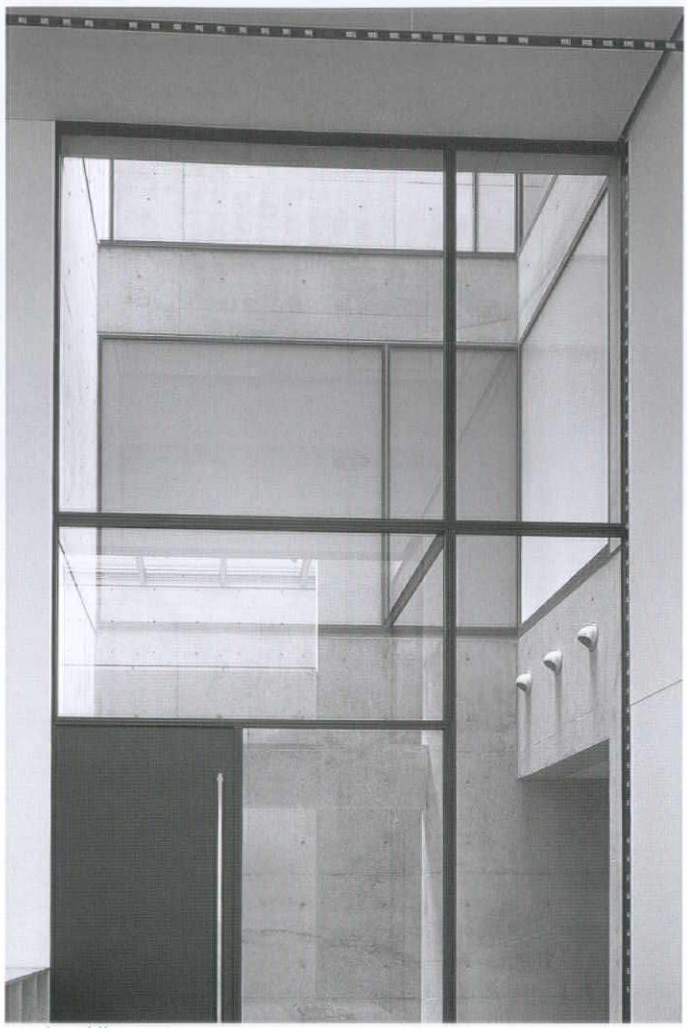
熱押出形鋼によるサッシュシステムを、本格的に設計することになったきっかけに、そんな鉄に対する個人的な思い入れがあったのかもしれない。ぼんやりとそんなことを考えていた時、山口県光市の製鉄工場を訪れる機会があった。かねてから、熱押出形鋼が変形小断面の構造材やカーテンウォールの補強材に採用されていることは聞いていたが、その精度を含め、製品そのものにはそれほど大きな期待を持っていたわけではなかった。同行したメンバーも皆同様であったと思う。

メンバーは、事務所の若いスタッフと、サッシュメーカーの設計技術者数名。彼らとは、これまでも何回か共同で開発を手がけているが、ものづくりに対して非常に興味旺盛な集団である。建築そのものを設計するときにも避けて通れない問題であるが、特に、設計者が工業的な製品をデザインするときには、自らでは解決できない技術的限界が常につきまとう。その限界を越せるかどうかは、それを専門とするメーカーの技術者たちの能力と熱意に負うところが大きい。彼らと共に初めて足を踏み入れた押出現場は、一昔前の工場のような手作り的な雰囲気が漂い、押し出したばかりのスティール材は、まるで焼けただれたスクラップ材としか我々の目には映らなかった。ある程度予想はしていたが、全員ショックは隠せなかった。とてもものになるとは思えなかったのである。

しかし、その製品が工程を経る度に、本来スティールの持つ力強い姿に変化していくのを見て、全員が熱押出形鋼の魅力にとりつかれてしまった。工法そのものが古くからある素材技術であるが故に、その独特の質感は、鋳鉄に似た暖かさを感じさせ、部材を手にしているだけで我々のイメージを膨らませるのに充分な迫力を持っていた。この信じられないような製造現場を見て、どんなことをしてもこの素材に挑戦しようと決心した。



NSPビル　片開き窓



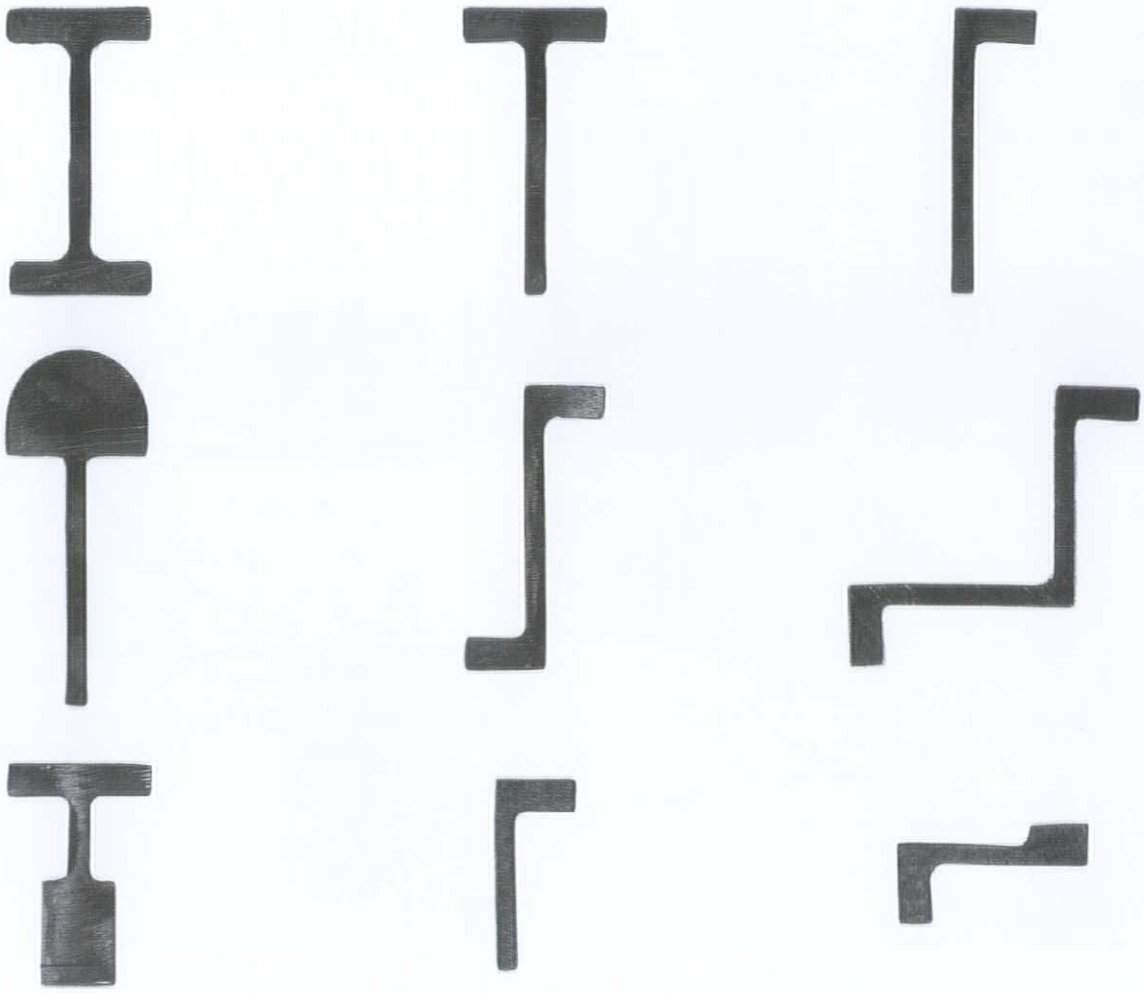
NSPビル　吹抜けスクリーン

熱押出形鋼によるサッシュシステム

熱押出形鋼によるサッシュシステムのデザインに着手するのとほぼ同時期に、我々の事務所では、典型的なアーバンスモールビルディングといえるNSPビルという建物を設計していた。建築は、透明感を持った空間の連続性をテーマのひとつとし、光を導く開口部はできるだけ単純であることを求めていた。また、建物が都市部の矮小な敷地に立地し、殆どの外周開口部に乙種防火戸が要求されたため、我々は、スリムな断面でかつ耐火性に優れ大きな開口部を構成できる建具を必要としていた。このタイミングを逃さずに、熱押出形鋼を使用したサッシュシステムをこの建物で実験的に採用し、実施および施工レベルの問題点も開発と同時に検証することとした。

熱押出形鋼材の工法上のメリットは、アルミ押出材等に比べて圧倒的に小さなロットでも比較的容易に製作できる点、そしてアルミ形材ほど複雑な形状は不可能であるが、通常の形鋼や板材の組合せでは得られない自由な形状をデザインできる点である。しかし、この熱押出形鋼を実際の建築の部品としてものにするためには、当然いくつもの技術的な問題を解決する必要がある。最大の課題は、スティールの耐候性に対する信頼性であった。我々が建築の仕上材を決定する時は、その材料の持つ性能や耐久性等を考慮し、かなり慎重になる。特に外部に面する部分は、素材の製品性能の安定性がより厳しく要求される。スティールサッシュが外部で採用されにくい理由は、殆どがこのことに起因する。

幸い、NSPビルの設計期間は比較的充分に与えられていたため、スティールサッシュを採用する前提として、この期間に表面処理確認試験（付着性、耐衝撃性、耐薬品性、促進耐候性等10項目に渡る試験）を繰り返し行うことができた。結果として、アルミやステンレスは劣化しないという前提を100％信じるとしても、充分に処理をしたスティールがそれらに比して極端に劣るとはいえないという結論を得た。建物ごとに要求される性能を冷静に判断すれば、その採用を恐れることはなく、機能的にもコスト的にも合理的であると思う（NSPビルでは、電気亜鉛メッキ処理後、エポキシ系錆止塗装の上ウレタン樹脂塗装を外部建具の標準仕様としている）。表面処理の問題に解決のめどがたつと、我々の興味は熱押出形鋼の断面設計に向けられた。通常の形鋼の組み合わせによるサッシュは、溶接精度や変形に対する許容範囲が製作する工場や職人の技量に大きく左右され、コストや納期に関しても不確定な要素が多すぎる。熱押出形鋼を使用するならば、この問題点を踏まえた上でシステムとして実験的に展開してみようという話になり、スティールサッシュでは珍しく性能面の目標値まで設定し、設計と実験を繰り返した（水蜜350Pa・気密2等級・耐風圧1600Pa）。最終的に9タイプの熱押出形鋼基本断面を試作し、この建物では既製形鋼と組み合わせやすいように、75mm×38mmのスモールH鋼、CT鋼及び75mm×22mmアングル鋼の3タイプに絞り込み採用した。サ



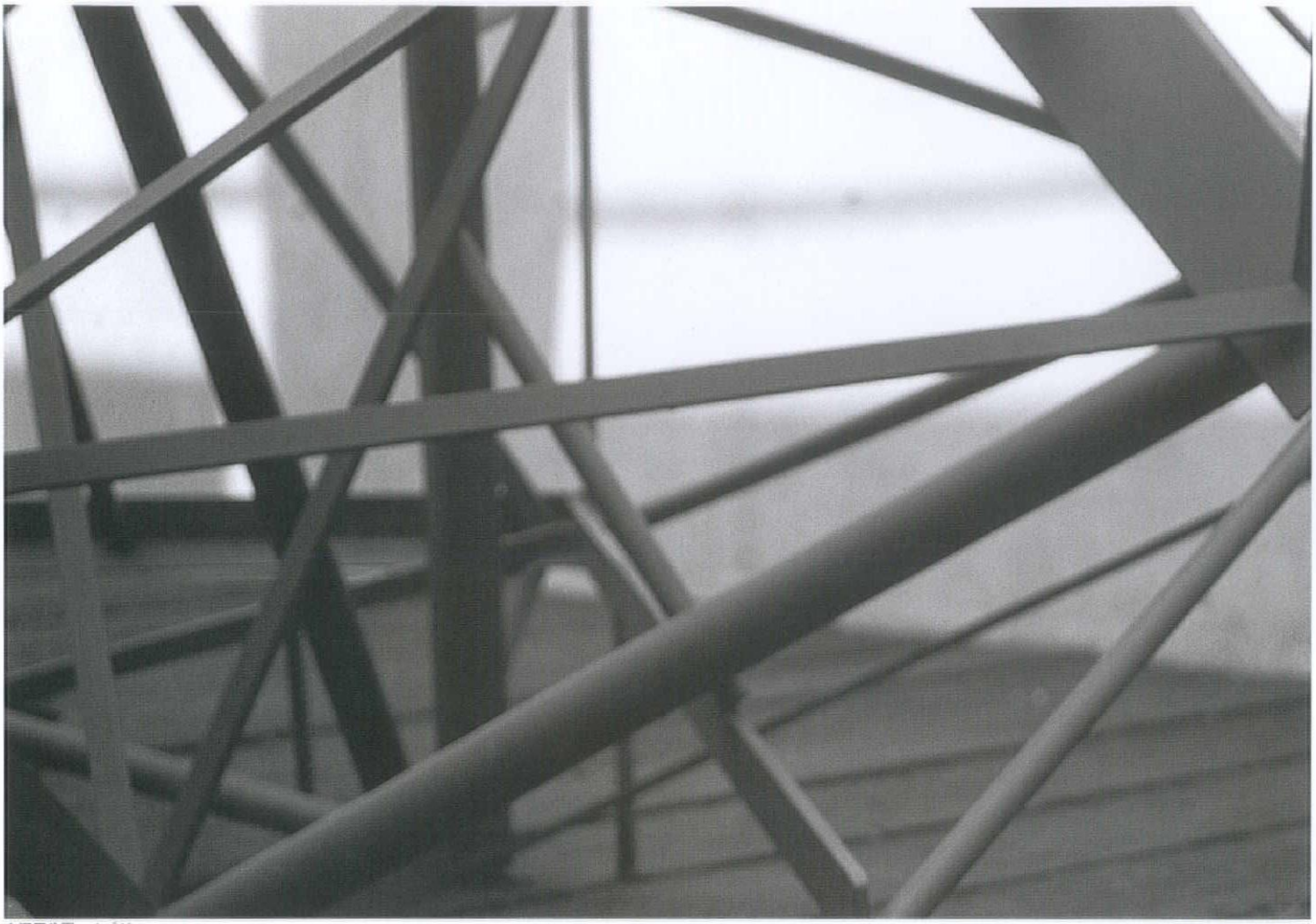
熱押出形鋼材基本断面　S=1:2

ッシュ本体はこの基本形と板材や既製形鋼の組み合わせからなる。通常のアルミサッシュでは不可能なサイズの乙防スクリーンや吹抜けスクリーンも、もくろみ通りかなり小さな断面で実現することができた。水仕舞や耐候性を考慮し、外部に面する全ての部材のメタルタッチ部分をなくすため、基本断面は内押し縁タイプとなっている。またシステムとしての3点締りのカムラッチハンドルや、2辺支持の大型框戸等も同時にデザインしている。

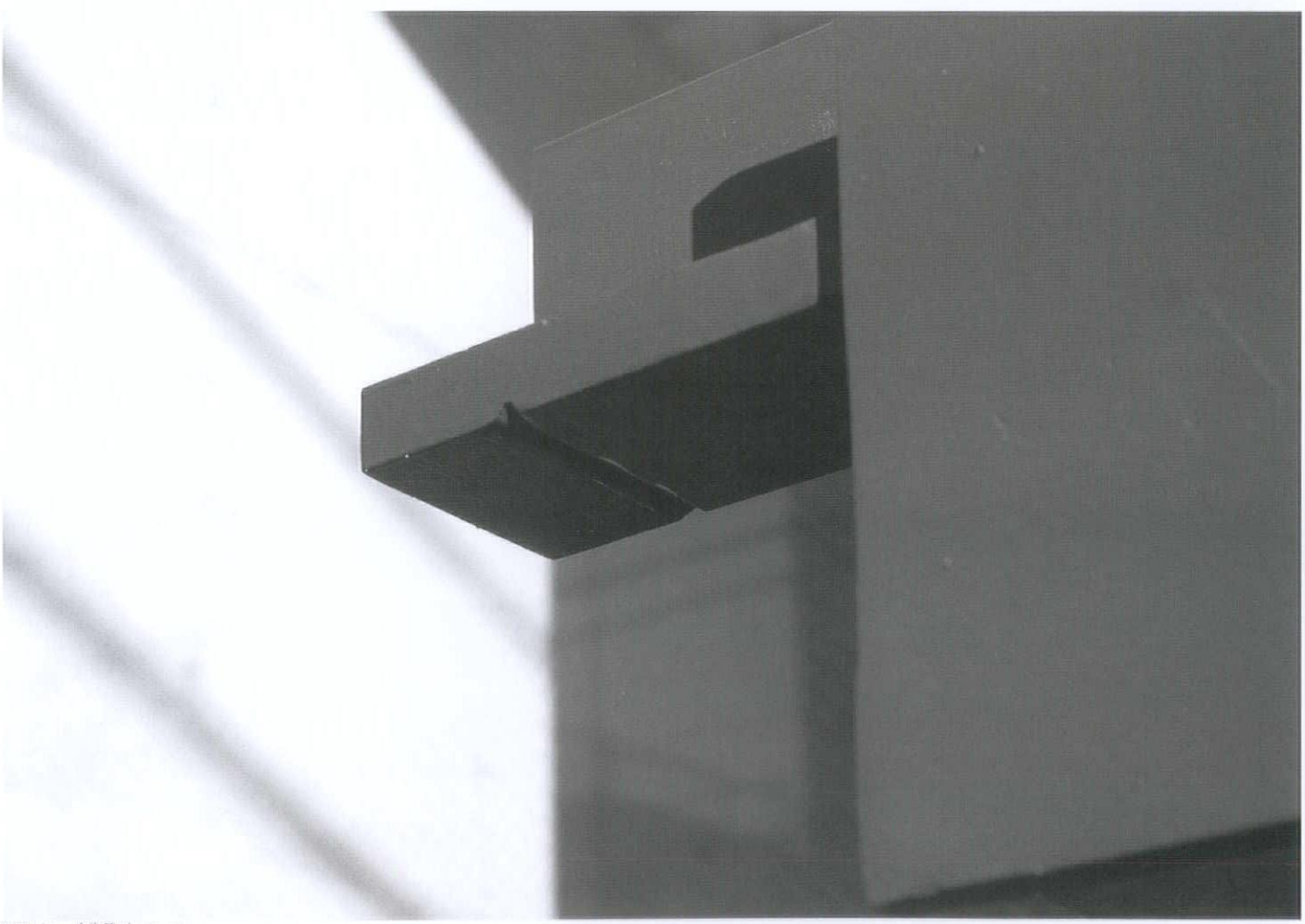
試行錯誤の連続であったが、完成した製品は性能的には当初目標としていた数値を充分達成し、シャープでありながらも存在感を持ち、スリムでありながらも重量感を感じとれるものになったと思っている。コスト的には、設計に費やしたメーカーサイドの膨大な人件費は別にすれば、既製形材を組み合わせたものと変りなかった。今後熱押形材をロール成形形材へと発展させれば、製品はローコストでより性能、精度の高いものになるであろう。

スティールは、建築を構成する素材として古くから親しまれてきた材料のひとつである。金属が、石や木や土などの材料に比して新しい素材であると言っても、近代建築の中で建築材料として本格的にスティールが使用されてからでもすでにかなりの時間が経過している。長い時間をかけて継続的、累積的に積み上げられた研究や開発により、現在では以前では考えられないような高性能の金属やその周辺の技術が確立されている。おかげで我々設計者は、さしたる苦労もなく（優秀な施工技術や高度なメーカーのノウハウを前提とすれば）夢のような構造体や、自由な表層を容易に手に入れることができるようになった。新しい素材技術やそれに伴う技術革新に支えられ、建築のデザインの可能性が飛躍的に増大し、新しい表現が次々と生み出されきたことは間違いない。今後とも金属に限らず新しい素材や技術、建築以外の分野からの情報や技術が加速度的に進歩し、建築に影響を与えていくであろう。しかし、技術表現の可能性を探し出すことに熱中する過程で我々は、本来素材の持つ物質性、肌触り、材質感という根元的な物性を常に二次的な問題として扱ってきたことも否定できない。今回NSPビルという小さなプロジェクトの中ではこの点についてもできるだけ注意深くこの素材を取り扱ってきたつもりである。そしてこの試みは、我々にとって金属の中でも最もローテクな素材であるにもかかわらず今も生き続けるスティールの魅力を改めて見直す絶好の機会となった。寡黙でありながらも確かな存在感を併せ持つこの金属は、使い方によっては、また非常に軽やかな表情も見せる。素材そのものに内在するこの二面性は、今自分が目指している建築そのものではないかとも思えてくる。

●みやざき・ひろし／建築家、Plants Associates主宰



大河原公園　オブジェ

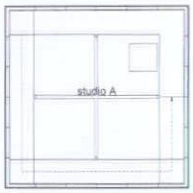


NSPビル　庇先端ディテール

Transscale Matrix ／トランススケール・マトリックス　小川晋一都市建築設計事務所

1989年から現在までに計画された16のプロジェクトがそれぞれ任意のスケールの5枚のドローイングによって示されている。

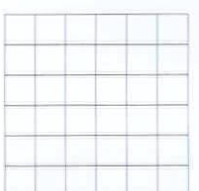
01/1989



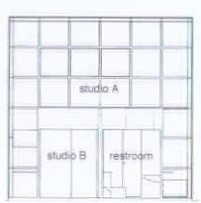
scale:1/250
Cubist House
2F plan
geometry:cube



scale:1/250
Cubist House
1F plan
function:residence　studio



scale:1/250
Cubist House
east elevation
grid
x:1000　y:1000　z:1000

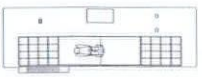


scale:1/250
Cubist House
section
size
x:6000　y:6000　z:6000



Cubist House

02/1990



scale:1/1000
Minimalist House
roof plan
geometry:box culvert



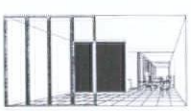
scale:1/1000
Minimalist House
plan
function:residence



scale:1/1000
Minimalist House
section
grid
x:3600　y:3600　z:3600



scale:1/1000
Minimalist House
elevation
size
x:25200　y:7200　z:3600



Minimalist House

03/1991
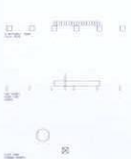


scale:1/20000
Restore Station
map
location:Hiroshima Japan



scale:1/6000
Restore Station
plan
function:restaurant　shop
multi purpose hall
VIP room



scale:1/7500
Restore Station
diagram 1



scale:1/7500
Restore Station
diagram 2

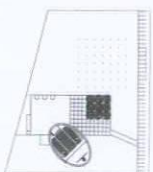


Restore Station

04/1993

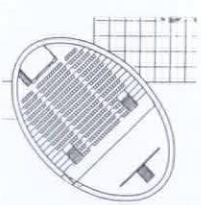


scale:1/40000
Aio Sound Egg
map
location:Yamaguchi Japan



scale:1/4000
Aio Sound Egg
2F plan
function:public hall
community center

scale:1/4000
Aio Sound Egg
elevation
grid
x:2500　y:2500　z:2500



scale:1/1200
Aio Sound Egg
hall plan
geometry:eggshell oval



Aio Sound Egg
under construction

思考の痕跡を消すディテール。単純でありながら複合を統合すること。物質とイメージ、ディテールとシステムの相対化。在るべき物がただそこに存在しながら、全ての関係が整合されること。

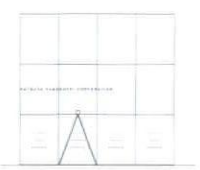
05/1995



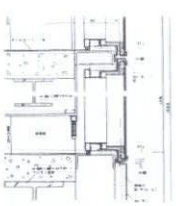
scale:1/4000
Hatsuta Yamaguchi
Corporation
site plan
location:Yamaguchi Japan



scale:1/1500
Hatsuta Yamaguchi
Corporation
3F plan
function:office storehouse
showroom



scale:1/1500
Hatsuta Yamaguchi
Corporation
elevation
size
x:10000 y:10000 z:35000



scale:1/40
Hatsuta Yamaguchi
Corporation
detail



Hatsuta Yamaguchi
Corporation

06/1995



scale:1/5000
Yokohama International
Port Terminal
site plan
location:Yokohama Japan



scale:1/2000
Yokohama International
Port Terminal
roof plan
function:international port
terminal

scale:1/2000
Yokohama International
Port Terminal
elevation
size
x:450000 y:45000 z:17500

scale:1/2000
Yokohama International
Port Terminal
section
grid
x:2500 y:2500 y:2500

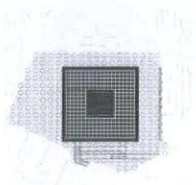


Yokohama International
Port Terminal
competition

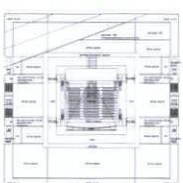
07/1995



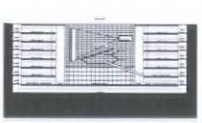
scale:1/30000
Scottish Architecture and
Design Centre
map
location:Edinbrugh U.K.



scale:1/8000
Scottish Architecture and
Design Centre
site plan
geometry:square



scale:1/3500
Scottish Architecture and
Design Centre
plan
grid x:2500 y:2500

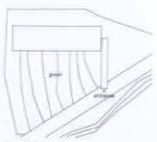


scale:1/3500
Scottish Architecture and
Design Centre
function:design centre
office IMAX theater



Scottish Architecture and
Design Centre
competition

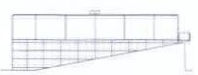
08/1996



scale:1/1500
Isobe Studio & Residence
site plan
location:Yamaguchi Japan



scale:1/800
Isobe Studio & Residence
2F plan
function:studio residence



scale:1/800
Isobe Studio & Residence
elevation
geometry:box culvert



scale:1/30
Isobe Studio & Residence
window section



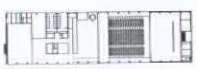
Isobe Studio & Residence

1個の建築という全体は一方で都市という不確定な全体の部分である。全体／部分というヒエラルキーを超えて、中立に存在する建築。

09/1996



scale:1/50000
Kid Museum
map
location:Yamaguchi Japan



scale:1/3000
Kid Museum
1F plan
function:multi-purpose hall



Kid Museum
axnometric
grid
x:2000 y:2000 z:2000



scale:1/3000
Kid Museum
elevation
size
x:72000 y:20000 z:8000

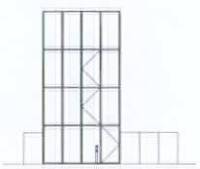


Kid Museum

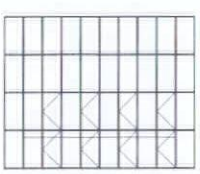
10/1996



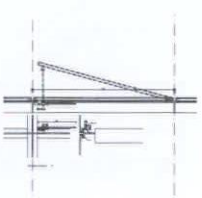
scale:1/65000
Glass House
map
location:Hiroshima Japan



scale:1/600
Glass House
west elevation
function:studio residence



scale:1/600
Glass House
south elevation
grid x:1500 y:1500 z:3000

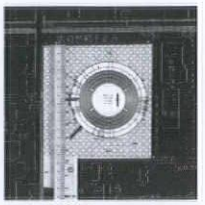


scale:1/80
Glass House
window detail

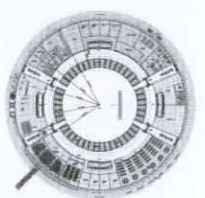


Glass House

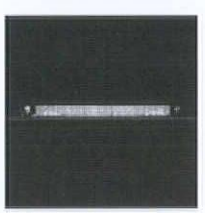
11/1996



scale:1/9000
Hirata-machi Town Center
map
location:Yamagata Japan



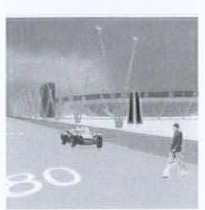
scale:1/4000
Hirata-machi Town Center
site plan
function:town center
forum



scale:1/4000
Hirata-machi Town Center
elevation
geometry:circle



Hirata-machi Town Center
model



Hirata-machi Town Center
competition

12/1997



scale:1/30000
Glass Housing
site plan
location:Hiroshima Japan



scale:1/15000
Glass Housing
plan
function:housing



scale:1/15000
Glass Housing
elevation
size
x:355500 y:21000 z:54200



scale:1/900
Glass Housing
housing unit plan
3 pieces duplex



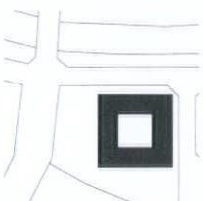
Glass Housing
Housing and Community
Foundation

デザインしないデザイン行為。表層や形態、色彩、ファサードでなく、存在するためへの思考。芸術的価値観に制限されない建築。フォルムと機能の簡潔性。ニュートラルな空間と建築。

13/1997



scale:1/20000
Nagaya Ladies Clinic
map
location:Yamaguchi Japan



scale:1/2500
Nagaya Ladies Clinic
site plan
geometry:spuare



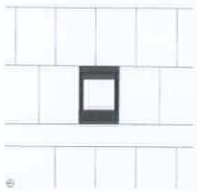
scale:1/1000
Nagaya ladies clinic
1F plan
function:ladies clinic

scale:1/1000
Nagaya Ladies Clinic
elevation
size
x:24000 y:24000 z:6000



Nagaya Ladies Clinic

14/1998



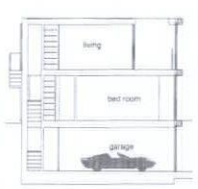
scale:1/2000
White Cube
site plan
location:Hiroshima Japan



scale:1/400
White Cube
3F plan
function:residence



scale:1/400
White Cube
elevation
size
x:8100 y:8100 Z:8100



scale:1/400
White Cube
section
geometry:cube

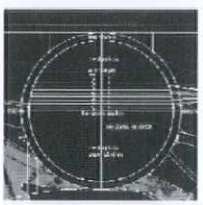


White Cube

15/1996



scale:1/50000
transbody / super traffic
map
location:Hiroshima Japan



scale:1/25000
transbody / super traffic
site plan
geometry:circle

transbody/super traffic
transact/transcend/transcript/trar
transfigure/transform/transgress/
transit/translate/transmigrate/trar
transmute/transparent/transpose
language/telephone/memory/tim
virus/train/airplane/ship/erectricit
television/fashion/fantasy/vision/
energy/noise/shock/emotion/mus
sports/money/festival/liberty/free
image/face/ego/taxi/balance/opir
code/mind/sense/pain/song/mod



transbody / super traffic
function:station office hall
open space hotel
theater stadium

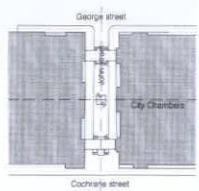


transbody / super traffic
triennale di milano '96

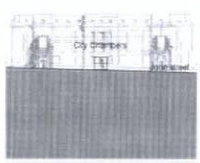
16/1998



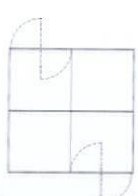
scale:1/70000
The Cube
Glasgow Project
map
location:Glasgow U.K.



scale:1/4000
The Cube
Glasgow Project
site plan
geometry:cube



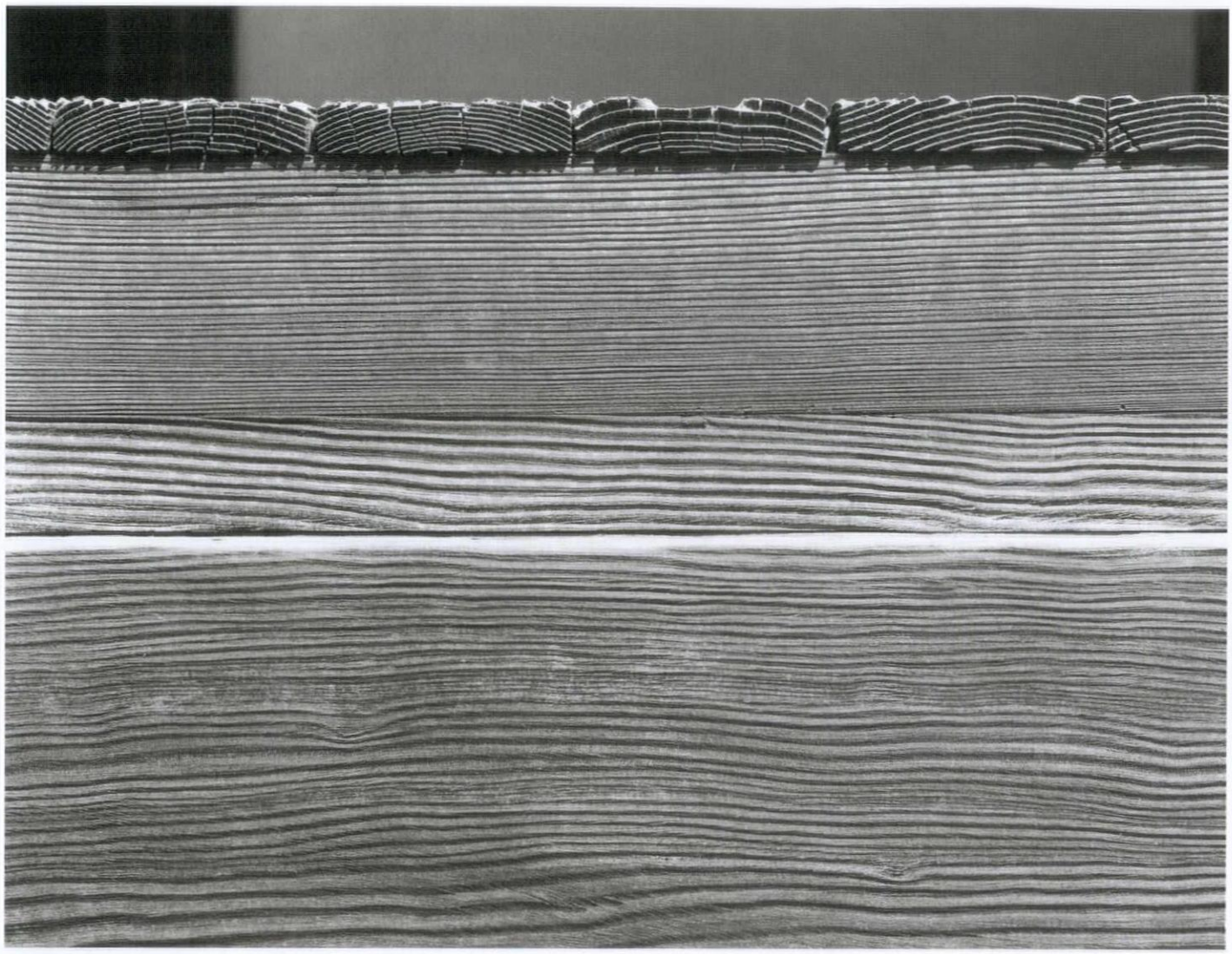
scale:1/3000
The Cube
Glasgow Project
elevation
grid
x:2500 y:2500 z:2500



scale:1/300
The Cube
Glasgow Project
plan
size
x:5000 y:5000 z:5000



The Cube
Glasgow Project



ディテール写真館

写真家がとらえた桂離宮の細部意匠

写真、文=岡本茂男

上：桂離宮　楽器の間外観 広縁細部
右：桂離宮　新御殿 一の間上段 付書院棚形窓　棚板に置かれた雲鶴蒔絵の硯箱は、普段置かれていないが、御道具が置かれたことで空間に緊張感が生まれる

岡本茂男（おかもと・しげお）
1929年東京生まれ。日本写真家協会会員
主な著作物：『桂離宮』毎日新聞社、『日本の庭園美』集英社、『日本名建築写真選集』新潮社、その他多数
受賞：1982年度 毎日出版文化賞特別賞、1990年度 第15回吉田五十八賞特別賞

部分を撮る

建築を撮影しているとき、ああ奇麗な納まりだなと感じることがしばしばある。そんなとき私はたいていの場合理屈抜きにシャッターを切っている。勿論動機はそのケースごとに違うが撮影理由はあとからゆっくり咀嚼すればよいと思っている。

平素は木造の古典的な建築をテーマにしている私の場合、大工の優れ業とか、材質感のようなところに強く魅かれて撮影することが多いように思える。

建築と向き合ったときに、それを手懸けた大工の力量は何となく伝わってくるものだが、いわゆる「匠業」と言われる鋭い刃物の切れ味を感じる部分は、外見では見えない仕口の中にひっそりと隠れてしまうことが多い。しかし見え掛かり、見え隠れするディテールの中に見事な納まりを見つけたとき（専門家には深読みだよと言われる時もある）には何とも嬉しいものである。

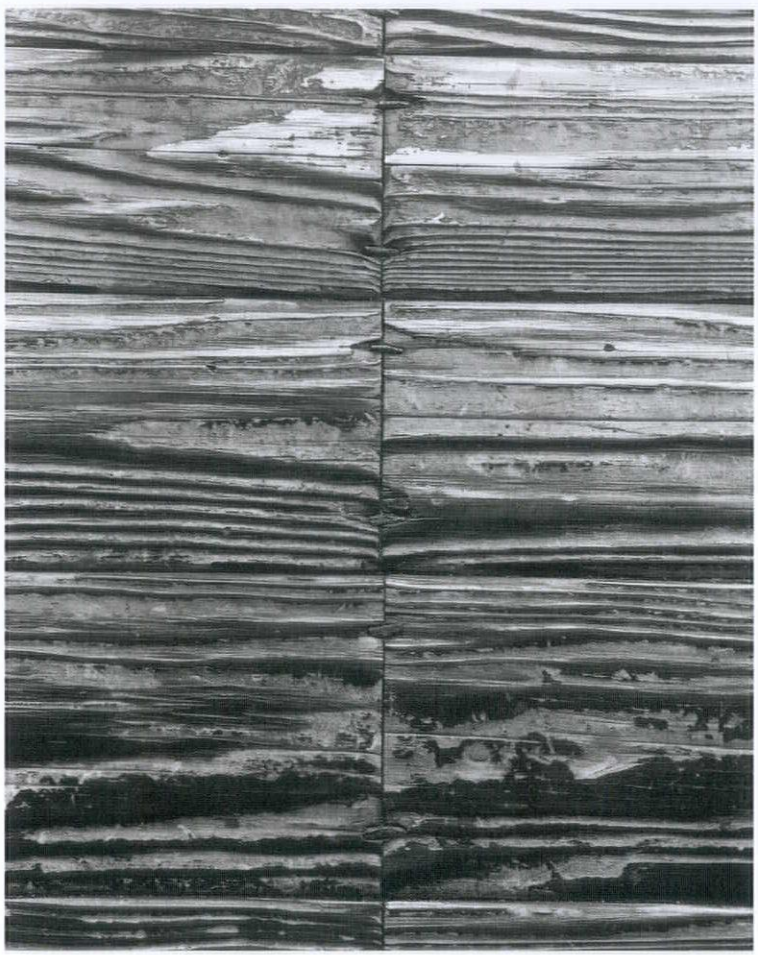
圧倒されるような凄い空間であればあるほど、どこを撮っても一応写真になってしまうようなところがある。それだけに見落としがちな部分が出てくる。何度となく通っていて知り尽くしているような気分の時に、偶然見えたディテールの意味に気が付き、その後も二度、三度と撮影しなおすことも仕事のペースの遅い私にとっては間々あることである。

この稿の上の写真は、桂離宮の楽器の間だが、風化によって木目模様の浮出た美しい縁板でその名を知られる。その楽器の間高床広縁の構造材である胴差しと、その上に木表に奇麗に並んだ杉の縁板の木口が見える。楽器の間から広縁にでる踊り場ともいえるこの箇所だけ縁板の木口を表わしにしているが、広縁の縁板すべてに木口を隠す処理をしてある。百年一分と言われる木材の風化速度などは、この仕事をした棟梁には当然読み込み済みであったであろう。もちろん踊り場と広縁を区別するという専門的な理由もあるだろうが、この木目のディテールから私は棟梁の遊び心が伝わってくるような気がする。

●おかもと・しげお／写真家







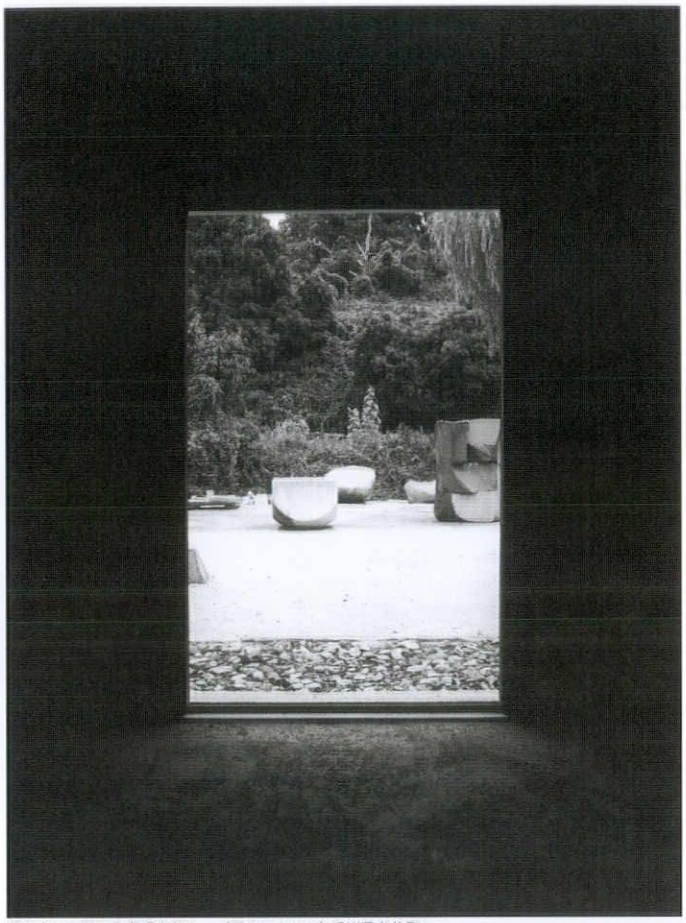


左：桂離宮　新御殿 折曲り入側縁　美しく浮き出した木目模様。室内なので表面から和釘を打ち込んである（雨の掛かる濡れ縁であれば、釘が錆びぬように板裏から目違い鎰で根太に固定する）
上：桂離宮　新御殿 折曲り入側縁細部　一本の頭巻の和釘で、二枚の縁板の継ぎ目を同時に抑えている。あたかも縫合痕のようなしゃれた景を造っているが、洋釘では不可能なディテール
下：頭巻の和釘（右）と目違い鎰（左）





左：桂離宮　御手水の間 竹簀子　中央の十文字の受け台は蜘蛛手と呼ばれ、水桶を置くためのもの
上：桂離宮　御手水の間 竹簀子詳細　前頁の写真の逆側から見た竹簀子の部分。見え掛かり側からは見えぬよう低い位置に釘打ち固定してある



蔵の中から石の作業場を望む　〈石のアトリエ〉香川県牟礼町

●フォト・クレジット

石黒守　p.76-78、p.80、p.82-83
岡本茂男　p.102-107
小川泰祐　p.28-32、p.34-35、p91-92
北嶋俊治　表紙、p.10-11、p.12-16、p.18-19、p.68、p.70、p.73左、p-74-75　p.95右
Judith Turner　p.48上、p.49-51
新建築写真部　p.36-37、p.40、p.42、p.52-53、p.56、p.69、p.71-72、p.73右
平井広行　p.54、p.58、p.60-64、p.66-67
藤塚光政　p.5、p.20-22、p.24-27
二川幸夫／GA photographers　p.38
松岡満男　p.46-47
村井修　p.44-45、p.48下
上記以外の写真は、各設計事務所提供もしくはSD編集部の撮影による

●図面製作協力

山田きよ子／フィギュアデザインショップ

●取材協力

和泉正敏、益田美保子／石のアトリエ
池田文／財団法人イサム・ノグチ日本財団設立準備室
横山幸喜／新日軽株式会社
阿部哲男／宮内庁京都事務所・参観係

MITSUBISHI
SOCIO-TECHの三菱電機

みんなが待ってたエレベーター。



三菱中低層共同住宅用エレベーター

メルワイド新登場

三菱の中低層共同住宅用エレベーター〈メルワイド〉なら
設置のための制約が少なく、自在な建築レイアウトが可能。
そのうえ、誰にでも快適に利用できる工夫もいっぱいです。
住む人、建てる人、設計する人、
みんなが満足できるエレベーター。
それが、三菱の〈メルワイド〉です。

new 三菱中低層共同住宅用エレベーター
MEL WIDE
メルワイド



みんなが待ってたうれしい特長

マシンルームレス 巻上機を昇降路内に設置するので、ペントハウスが不要。設置レイアウトの自由度も向上。

ワイドなかご室 ダブルベッドもラクラク運べる。間口900mm×奥行1400mmのワイドなかご室。

二方向出入口 かごの前後2方向に出入口が設置可能。乗った方向のまま降りられ、車いすでの利用にも便利。

省エネ+省コスト 省エネタイプなので、一般の住宅用エレベーターに比べ、維持コストも非常に経済的。

【基本仕様】●用途:中低層用共同住宅用●駆動方式:トラクション方式●積載荷重・定員:320kg・4名●定格速度:45m/min.●制御方式:インバーター制御方式●停止箇所:最大5ヵ所●昇降行程:最大13m●ドア形式:電動2枚戸片引き式●かご内法:間口900mm×奥行1400mm●出入口寸法:間口800mm×高さ2000mm●電動機容量:2.7kW

三菱電機株式会社

お問い合わせ・資料のご請求は……三菱電機株式会社 〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20(赤坂パークビル) 本社ビル事業部 TEL.(03)5573-3793



連載⑨森島紘史の起こし繪図

日本のかたち紙考

月見

陰暦では7、8、9、の3ヵ月を秋としている。その真ん中の月であるところから8月を中秋とし、8月十五夜に昇る満月を「中秋の月」と呼ぶ。真西に沈むために1年で最も正円に近く見える月は、古来より完全無欠を願う日本人の心と深く結びついている。人々は満月の形「円」に因み、餅や果物などすべて団円い供物を揃えて、一家の団円（団欒）を願い、月の世界に遊んだ。

日本人の月への想いは月の名称にも込められ、朔月の翌日の月を「初月」、2日目を「二日月」、3日目を「三日月」、4日から8日目を



［入選者］

アルヴァロ・ヴァレラ＋サイード・シエド
アンドリュー・バリー＋ミヌストリー・アーキテクチャー
遠藤政樹＋池田昌弘
岡村和典＋石井米二郎＋清水里司/日本設計九州支社
尾沢俊一
川嶋彦一郎
駒井貞治/駒井貞治の事務所
ジン・タイラ＋三好隆之
手島浩之＋都市建築設計集団/UAPP
手塚貴晴＋手塚由比/手塚建築研究所
長倉威彦
廣谷純弘＋石田有作/建築研究所アーキヴィジョン
三上晴久＋三上建築事務所
山田幸司建築都市研究所
和田吉貴

［東京展］

会期：1998年9月16日〈水〉—9月27日〈日〉
12:00—19:00
土・日・祝日も開催
会場：東京都渋谷区猿楽町18-8
ヒルサイドテラスF棟 ヒルサイドフォーラム

［大阪展］

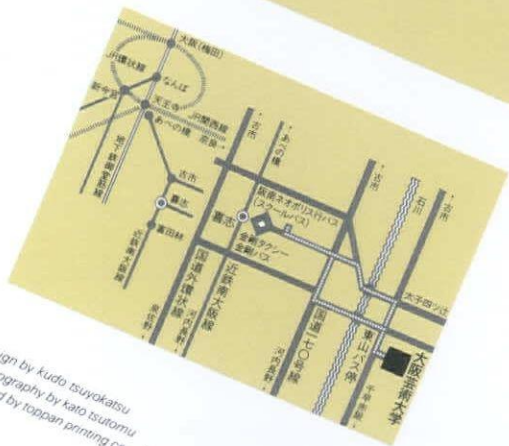
会期：1998年10月1日〈木〉—10月11日〈日〉
10:00—17:30
土・日・祝日も開催
会場：大阪府南河内郡河南町東山
大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール

［主催］鹿島出版会SD編集部
［大阪展共催］大阪芸術大学
［後援］朝倉不動産株式会社
［協賛］ノールインターナショナルジャパン

［問い合わせ先］

鹿島出版会SD編集部
107-8345 東京都港区赤坂6-5-13
tel:03-5561-2555 fax:03-5561-2565
大阪展：大阪芸術大学建築学科合同研究室
585-0001 大阪府南河内郡河南町東山
tel:0721-93-3781





design by kudo tsuyokatsu
photography by kato tsutomu
printed by toppan printing co., ltd. 1998

展覧会レポート

ミラノ国際家具サロン
SETSU ITO展より

宮城志信

今年のミラノ国際家具サロンの会期中である4月18日、ミラノ中心のドゥオモ広場につながるビットリオエマヌエレ回廊の中央にはプランターで囲まれた長テーブルにビュッフェが並び、ジャーナリスト、デザイナー等大勢の人で賑わった。会場内には約30点の作品が展示され、大型スクリーンと10台のテレビモニターからはそれぞれの作品のCGが流された。ここは昨年暮れにこのミラノの一等地にオープンしたメルセデスベンツのショールーム、"MB-SPOT"である。この期間、メルセデスベンツのサポートによる日本人の新鋭デザイナー、伊藤節の展示会が催された。

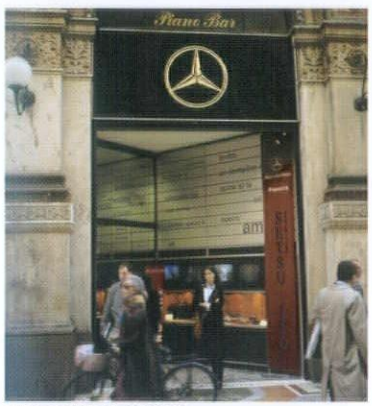
ミラノ・サローネ(国際家具サロン)は、毎年4月に開かれる家具、生活具デザインの国際的祭典であり、その動向はその年のデザイン傾向の重要な指標として世界中から注目を集めている。メイン会場はミラノ・フィエラ(見本市会場)であるが、伝統的にミラノ市内の様々な展示会場、ショールームでは、メーカーまたは作家の展示会が催され、夕方は会場ごとのカクテルパーティーで賑わう。

伊藤節は、最近ミラノで注目を集める若手デザイナーのひとりである。彼の作品は素材感を生かしたエッセンシャルなものであり、デザインの切り口はシンプル、と同時に気品のある重厚さも持ち合わせている。日本的な題材を用いながらも、ヨーロッパ感覚によく合うものづくりをしている。今回のエキシビションでは、日本のFRONT社、BONZO社の共同プロデュースで今年発表された、テーブル"SAITA"、パーティション"ORIITA"のシリーズが展示された。この古色の家具シリーズは、スチール板を折り紙のごとく折ったり丸めたりする事により、その素材の「らしさ」の魅力を表現したものである。このスチール素材は、自然錆による錆の美しさを表現した特殊塗装加工によるものである。パーティション"ORIITA"(仕切り)には同素材の花台がセットされており、石川雅一氏による生け花を据えて展示された。和風でありながら、西洋の伝統空間にも納まるものだと言えよう。この作品は、デザイナー、リチャード・サッパー氏のセレクションによる、ドイツ・ベルリンでのエキシビションを経てミュンヘンのコンテンポラリーデザインミュージアムへ永久保存されることになった。また、同素材は彼のプロジェクトである東京近郊のオフィスビル建築の際にも外装材として用いられ、今回も写真展示されていた。

この他、素材毎のデザインをテーマに、金、銀、クリスタルの新作が展示された。ゆらりと揺れる銀製のティーポット"YURARI"、トレイの中にポット、カップ、ソーサーがコンパクトに納まった新しい仕様の銀製ティーサービスセット"WATTO"は、コンセプト、ユニークな形など新しいティータイムの提案と言えよう。また金のジュエリーシリーズ"HIRARI" "KIRARI" "FUTARI"も職人の手作りであるイタリアの伝統的な技術を、上手く現代感覚にアレンジしたものであり、彼が数年手掛けてきたクリスタルグラスは、シンプルなかたちの中に反射光の変化をうまく取り入れた美しいものである。また、ポリカーボネートのシートをキット式に組み立てる照明器具"HORETA"は光も柔らかく軽快な印象で、サローネと同時開催されたユーロルーチェ(照明器具見本市)関係者からも問い合せが多かった。この作品は年鑑"1998 The International Design Year Book"(英)への掲載も決定した。

今年のミラノ・サローネ全体の傾向は、様式、スタイルを排した、ニュートラル、アイディアものが多く、充実した内容であったが、この"SETSU ITO展"はその素材感の現代的アレンジで際立ったものがあった。

●みやぎ・しのぶ／デザイナー、在ミラノ



1. "SETSU ITO"展会場風景


2. 展示会場で流されたCG


3. カクテルパーティー風景


4. 展示風景


5. 花台がセットできる間仕切りシリーズ"ORIITA"

写真1、3、4、5＝中井一哉

ニュース

「生きた」かたちの発見

伊藤節

素材が変われば「かたち」も変わって然るべき、とは我が師アンジェロ・マンジャロッティの言葉で、私の大切なデザイン指標である。素材の特性は、素材自体のもつ内的特性と、生産技術、生産性等による素材の外的性状とから規定されるが、これらが変われば当然見せるべきものの魅力のポイントも変わる、というのがその視点である。

建築家マンジャロッティは40年来日本を訪れ続け、日本の民家、民芸に見られる伝統的なものづくりの在り方に大きな関心を寄せてきた。日本は、素材を熟知した上で、素材を使う喜びを知ってものをつくってきた国であるという。

元来日本の伝統的生活環境は、自然、風土、集落、生活風習への融和、同化的な調和感覚に守られてきた。ものづくり自体も、歴史的に継承されてきた素材の活かし方を研究し、それを時代の技術及び生産性の中で発展させてきた。伝統的な民家や民芸は、無名の職人作家達の手でこれ程美しく継承されてきたのである。

今日の我々を取り巻くものは、商業主義的な異化・差別化が優先され、本来のものの美しさ以上に、そのものの付加価値、意味性に重きが置かれているようである。私自身、10年前ミラノにやって来て、地中海の石の文化のエッセンスを究めた建築家マンジャロッティに出逢い、改めて日本的なものづくりの意義を再認識させられた。一見皮肉に聞こえるが、至極当然のことでもあった。

イタリアには日本に共通する工芸事情がある。伝統的に作られ続けてきたガラス器、銀器、宝飾品、皮革品等は今でも多くの職人を擁するが、現代的なモチーフを持ち得ずその伝統が継承されにくくなってきている。伝統的な流れの中に現代の技術、趣向に見合うものづくりの在り方を見い出していくこと、これがものづくりの世界の大きな課題となっている。伝統と現代の融和、則ち素材特性を研究した上での新しいモチーフ、「生きた」かたちの発見、ということである。

クリスタルガラスは、現代でも結婚式の引き出物感覚で装飾的なものが好まれる一方、工業化が進む背景で職人の手仕事の伝統が薄れ、そのかたちは逆に(回転体、対称形と)単純化してきている。単純でありながら変化にとむ豊かで現代風のかたちを見つけていく必要がある。("KEIKOSAN")

銀器は手工芸に頼らざるを得ない高価なものであるが故、若者に継承されにくくその伝統の存続が危ぶまれる。伝統装飾的なモチーフばかりでなく、銀でしか表現できない現代的なモチーフを与えることが課題である。("WATTO")

金細工も、一部のブランドの下請け業者を除き、多くの優秀な職人が個々の技術をもてあましている。ファッション性の強い人気分野だけに、その伝統以上に、新しい試みに対する反響は大きいはずである。("YURARI"、"HIRARI"、"FUTARI")

鉄もまた素材のもつ表現力を引き出して、新鮮なかたちと質感のモチーフを与えることにより、伝統的安定感及び快活さを同時にもち得る。("SAITA"、"ORIITA")

日本の、紙、木、漆器、陶磁器、金属器といった伝統工芸、手工業の世界も、優秀な職人との共同作業により、様々な現代的試みができるはずである。そしてその試みは、世界的な反響を呼ぶことも可能であろう。素材感を生かした活性化の息吹きが望まれるところである。

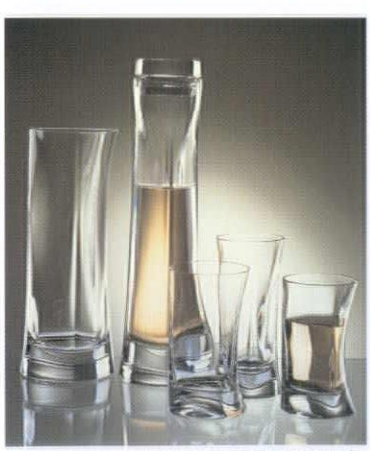
●いとう・せつ／デザイナー、在ミラノ



1. "SAITA":特殊錆加工仕上げのスティールテーブル　写真=中井一哉



2. "HIRARI":金の帯がメビウス上に構成されるブレスレット、イヤリングのシリーズ　写真2、5、6=Marco Angeretti



3. "KEIKOSAN":持ちやすさと飲み物の表情(断面形状)変化を表現したクリスタルグラスセット



4. "FUTARI":輪状のつながりの変化を表現した金のマリッジリング



5. "WATTO":銀食器の新しいあり方を示唆するコンパクトなティーサービスセット



6. "YURARI":ゆらりと揺れる銀製ティーポット

あっ、きんでんだ。

きんでんは情報・エネルギー・環境の各分野にわたって、
人と技術の調和を目指した総合設備エンジニアリング事業を展開。
社会と暮らしのさまざまな場面に、きんでんの先進技術が活かされています。

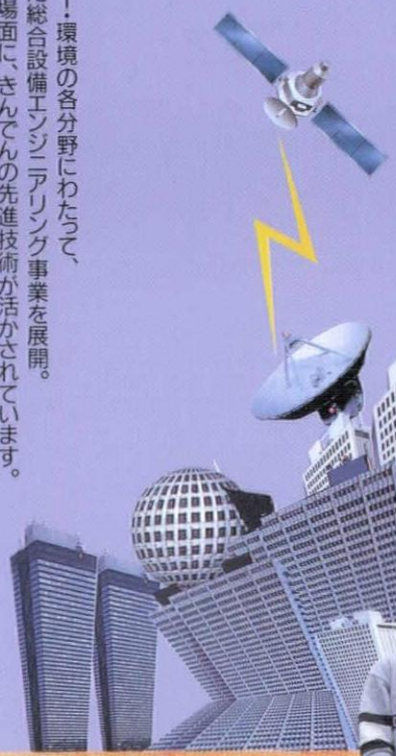




「僕のうちにも、もうすぐCATV。」

■情報通信メディアの明日を創る——ここにも、きんでん。

光通信やCATV、携帯電話…これら情報通信の総合設備にも先進の技術力が光っています。

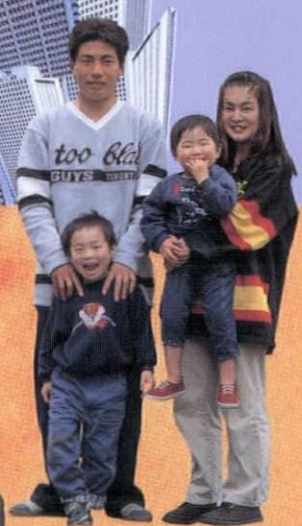




「人にも地球にも大切なエネルギーだから。」

■安全に安定してエネルギーを供給する設備とシステムづくり——ここにも、きんでん。

地球環境に優しく、経済的なエネルギーの開発と有効利用の実現に向けて、日夜取り組んでいます。





「良くなるね。街も人も。」

■ビルでオフィスで地域社会で、より快適な環境を創る——ここにも、きんでん。

地域冷暖房プラントなどの環境設備。オフィス空間の機能性・快適性を提案する内装設備。これらの多面的で総合的な設備事業を展開しています。

「システムインテグレーションて、人に優しい。」

■繊細に感性豊かにシステムを制御する——ここにも、きんでん。

多様なオフィスビルや工場の環境と生産体制に対応した、人間中心のシステムづくりを開発・提案しています。



「マルチメディアは簡単になるんだ。」

■情報化社会を全方位でサポートする——ここにも、きんでん。

これまで個別だった音声・データ・映像の配線を統合したり、光ファイバ融着技術等の新工法に取り組むなど、多面的なネットワーク環境を構築しています。

「海の向こうでも活躍してるんだって。」

■地球上の各地域におよぶ海外工事の実績——ここにも、きんでん。

1950年代に始まるきんでんの海外経験。習慣や国民性の異なる世界各地でも、キメ細かな活動を続けています。



株式会社 きんでん

本　店　大阪市北区本庄東2丁目3番41号
東京本社　東京都品川区東五反田5丁目25番12号
国内事業所185ヵ所／海外事務所12ヵ所／国内関係会社19社／
海外関係会社4社／海外合弁会社7社

展覧会レポート

バレエ・リュス、あるいは漂流者たちの類希なる邂逅の場

五十嵐太郎

ディアギレフのバレエ・リュス展
会期：1998年6月13日(土)～8月3日(月)
会場：セゾン美術館
※1998年8月22日(土)～10月11日(日)まで滋賀県立近代美術館へ巡回

ある時代の輝きを瞬間的に凝縮した表現というものは、必ずしも後世に残ればそれで良いわけではない。ときとして死に損ねた時代の結晶物は、研究という名のもとに徹底的な解剖を受け、保存という名のもとに強制的に永遠の生を与えられ、観光という名のもとに陵辱され続けることもあるからだ(むろん、三重の不幸が我々に与える恩恵も忘れてはならないが)。一方で、もう二度と同じものを見ることができないという単純な事実が、我々の想像力を最大限にかきたてることも起こり得る。この時、我々はそのものを直視できないがゆえに、その周辺にあったさまざまな遺物や痕跡、また半ば神話化した言説を手がかりに、失われた輝きを思考の中で取り戻そうと試みる。

20世紀初頭のヨーロッパを席巻したバレエ団を紹介するセゾン美術館の「ディアギレフのバレエ・リュス」展も、幕が下りると消える舞台芸術の性格と、すでに映像技術が生まれていたにもかかわらず、なぜか記録フィルムが一切残されなかったことによって、そのもの自体の展示の不可能性に立脚していた。しかし、バレエ・リュス(ロシア・バレエ団)を率いる天才的なプロデューサーのディアギレフが、ダンスの革命はもちろんのこと、同時代の美術、音楽、ファッションの動向を巻き込み、総合的な近代芸術に仕立て上げたおかげで、関連分野に多くの興味深い資料が残っている。また後世に再演されたバレエや、再解釈された演目など、約8時間におよぶ17点の映像資料が会場で展示された。

こうしてオリジナルのコスチューム、衣装・舞台美術のスケッチ、ドローイング、ポスター、プログラム、書簡、当時の雑誌記事、写真、ビデオ映像がところ狭しと並ぶ会場は、4つのセクションから構成されている。つまり、時代順に各演目を紹介しながら、バレエ・リュスの第一期(1909-13年：ニジンスキーの官能的な踊りと強烈なオリエンタリズムでパリを魅了した日々)、第二期(1914-21年：新しいダンサーのマシーンが活躍し、モダニズムとの結合を開始)、第三期(1921-29年：ニジンスカによる振付の時代からディアギレフの死による解散まで)と続き、最後のセクションでは同時代のバレエ団やバレエ・リュス解散後の後継者の軌跡を扱う。

個人的にバレエ・リュスのことは、『装飾芸術』の研究書の翻訳(未刊行)のほか、演目の制作に関わったピカソ、サティ、ストラヴィンスキーなどの固有名を通して、これまで断片的に知る機会をもっていたのだが、この展覧会によってようやくその全貌がわかり、改めてその活動領域の広がりに驚かされることになった。しかし、巷にはバウハウスのような総合芸術に関する書物はあふれていても、バレエ・リュスについてはあまり語られていないように思える。おそらくバレエを除く、各ジャンルの近代芸術史では、巨匠とされる人物が余興として、バレエ・リュスに関わったことがあるという記述がたまに出てくるくらいで、その評価は活動の強度に比べて低いとさえ言えるだろう。

何故か。諸芸術においてバレエの位置づけが決して高くないこと。分断化された各芸術史では総合芸術の評価がなされにくいこと。そしてバレエ・リュスが純粋な芸術運動ではなかったことが大きな要因だろう。ディアギレフは無節操とも言える貪欲さで、未来派や構成主義の実験さえとりこみ、アヴァンギャルドの商業化を推進し、大衆芸術として多くの観客に提供したのである。例えば、1926年の『ロミオとジュリエット』では、シュルレアリスムのマックス・エルンストとホアン・ミロが舞台美術を手がけることになるが、資本に隷属するバレエ団を軽蔑するブルトンとアラゴンは激怒し、抗議文を天井桟敷からばらまいた。しかし、この混乱さえも結果的には公演の宣伝となってしまう。

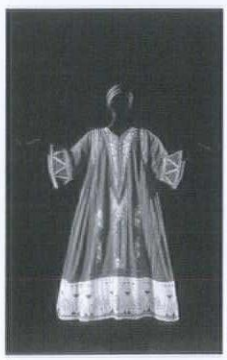
建築的な視点から言えば、アレクサンドル・ブノワによる古典主義的舞台や『ペトルーシュカ』の異国趣味デザイン、ピカソの考案した『パラード』におけるビルのかぶりものをした登場人物、アンドレ・ドランによる『びっくり箱』の白と黒の舞台、キリコによるオーダーを大胆に用いた衣装デザインなども興味深い。いずれにしろ、世紀末の現代にバレエ・リュスと同じ動きはありえないにしても、今も叫ばれているコラボレーションのあり方については多くの視座を与える運動だったのではないか。

最後に繰り返して言おう。当時のバレエ・リュスの演目そのものを見ることは、もはや不可能である。1919年に精神分裂病と診断されて以降、永遠に失われたニジンスキーの輝ける瞬間は、我々の想像力の中でしか飛翔しえない。しかし、だからこそ美しいのだ。乙女の夢の中でのみ精霊が幻想的に舞う、ニジンスキーの代表作『薔薇の精』さながらに。

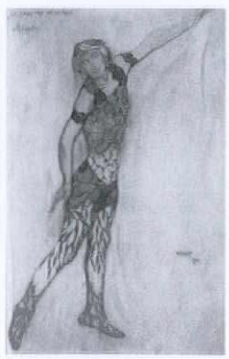
●いがらし・たろう／建築史家、hugbard



1



2



3

1：展覧会会場
2：レオン・バクスト「『青神』のための衣装」1912年／ワズワース・アテネウム美術館所蔵
3：レオン・バクスト「『薔薇の精』のニジンスキーのための衣装デザイン」1911年／ワズワース・アテネウム美術館所蔵

展覧会レポート

「新世紀末都市—東京」展—東京新世紀from東京世紀末をふりかえって

若松久男

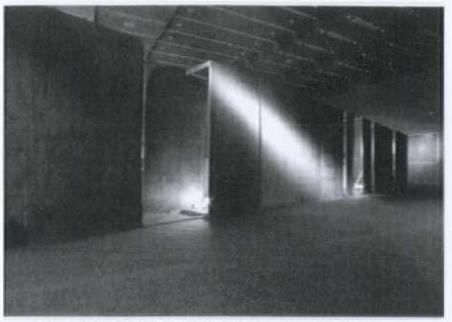
この活動の発表においては様々なタイトルが考えられました。「新・都市論」、「新東京論」、「関東京論」、「東京新世紀」、「新世紀末都市」、「東京—東京湾プロジェクト」、「東京新世紀 from 東京世紀末」……。 いろいろな言葉が浮かび上がってくる中、結果として私たちは「新世紀末都市—東京」に行き着くことになりました。その意味は今世紀から来世紀に向かってアクティブな変容をつづける都市——東京をとらえるのに最もふさわしいのではないかという考えからです。すなわち「新世紀末」という言葉の中に、今世紀の、それもこれまでの歴史において、かつてない程大きな世紀末(グランド世紀末)を体現しているという認識と、これまで以上により明るく広い新世紀を踏みだしていくという認識の両方が感じとられたからです。「東京新世紀 from 東京世紀末」と併記したのも、この歴史的なフィルターをエネルギッシュに渡って行く「東京」を強く意識したいがためでありました。

また、この活動には一言で語り切れない多くの視座が混在しています。5つのグループがそれぞれ自立性をもち、独自の視点を独自の表現で作り出しています。自発的なプロジェクトには独自な形で多くの可能性が秘められています。中でも唯一の共通性があるとすれば、意識の対象としての「都市—東京」と、それに対する「自由な解読の姿勢」であるでしょう。

「新世紀末都市」とは、その翻訳にあたって植野斜氏が創り出した言葉ですが、その原文にある「100マイルシティー」が意味する巨大さを有した言葉でもあるでしょう。東京もその巨大さに迫ろうとしています。恐らく50年後はもう「東京」と言ってないかもしれない。そんな意識が今まさに感じられつつあります。5つのグループが多かれ少なかれ感じているものに、そうした「東京の得体の知れない躍動感とエネルギー」というものがあるように思われます。かつてない程に成長し、もはや「かつての東京」でもなく、「今の東京」でもなくなるという茫漠とした意識です。広い意味での共通性を感じながら、この5つのグループが発展した形で発表しようということになったのは、若松、森、植野の3人による呼びかけによるものでした。その呼びかけに際し、それぞれの方々が、大変忙しいにも拘わらず、快く参加を受け入れて下さり実現に至りました。そして発表の機会として建築学会関東支部建築計画専門研究委員会の今年度のメインテーマ「次世紀の建築・都市—新種の建築・都市」とも呼応する形で、同研究会にて自由な形での発表、交流の場と展開することになりました。

ここで5つのグループの発表までの展開を見てみようと思います。第1のグループは若松久男、森徹、植野斜です。今回の企画の切っ掛けとなったのは1996年に東京デザインセンターで発表した若松久男、森徹、植野斜の3人による「際の都市展」です。都市のあるがままを積極的にとらえていき、都市の状況そのものを題材にシティ・アートとした展覧会でした。その後この活動をなんらかの形で展開していきたいと模索する動きがこの企画の母体となりました。今回の作品 POWERS OF TOKYO はそうしたシテイー・アートの概念に基ずくもので、東京という都市の構造の中に、普段は見過ごされやすい円環構造があることを再認識し、その計り知れない都市のエネルギーを図式化、凝縮化してみようとしたプロジェクトです。会場に置かれた使い古しの型枠ベニヤによる24mのオブジェは、巨大都市東京の縮尺約2000分の1のエネルギー・ベクトル・バーとして表現しようとしています。東京の円環構造の平均重心と学会会場とを結ぶ線上に置かれ、オブジェを横切るスリットは円環構造と交差する断層を投影しています。その地点での実際の音が光と共に放たれ、東京のエネルギーをこの場に凝縮しようとした作品です。使い古された型枠ベニヤは、膨大な量の建造物の誕生生成の記憶であり、言うなれば都市生成の紛れもない証人でさえあります。打設時と裏返し、それが都市生成に関する記憶のオブジェとして表現されています。

第2グループは1997年新建築誌で連載していたTOKIO計画の宇野求さん、岡河貢さんです。エネルギッシュな連載を裏ずける12のプロジェクトが模型、図面とともに展示されました。TOKIO計画は東京湾岸に新種の建築のプロトタイプを提案するもので、建築の知的挑戦の試みとして、今後の更なる展開が期待されます。両氏によるダイアローグが幅広く展開され20世



1. POWERS OF TOKYO　森徹＋植野斜＋若松久男



2. POWERS OF TOKYO　断層部分



3. TOKIO計画1998(version July)　宇野求＋岡河貢



4. TOKIO計画1998(version July)ワークショップ風景



5.「動態都市」の試み－田町ワークショップ　田島則行＋納村信之



6. 中庭にての「動態都市」－田町ワークショップ風景



7. 都市の空地－ひまわりの島「第2海堡」　大西麻貴＋三澤純子

写真1、8、11：淺川敏　その他の写真：若松久男

[新世紀末都市—東京]展 —東京新世紀from東京世紀末—

参加グループとテーマ
コーデイネーター：若松久男
POWERS OF TOKYO
　森徹（建築家）＋植野斜（建築家）＋若松久男（建築家）
TOKIO計画1998 (version July)
　宇野求・岡河貢都市居住研究共同体
　宇野求（建築家）＋岡河貢（建築家）
「動態都市」の試み——田町ワークショップ
　田島則行（建築家、アーバニスト）＋納村信之（建築家）
　（オープン・スタジオNOPE）
都市の空地——ひまわりの島「第2海堡」
　大西瞳（アーテイスト）＋三澤純子（デザイナー）
　（オープン・スタジオNOPE）
「脳人都市・東京、東京超元気論」
　山田雅夫（都市設計家）
主催：「新世紀末都市—東京」展実行委員会、建築学会関東支部建築計画専門研究委員会
助成：日本芸術文化振興基金助成対象事業
協力：照明；面出薫＋LPA、CG；古庄真一郎、映像；樺沢耕次、音楽；クリストフ・シャルル、設営；クマイ商店（熊井芳孝）、グラフィック・デザイン；篠田昌三＋野村和久＋プロジェクト201、写真；浅川敏
会場：日本建築学会大ホール、中庭,STUDIO NOPE他
会期：1998年7月10日～20日


8.「動態都市」の試み—田町ワークショップ　田島則行＋納村信之

紀初頭の巨人達の偉業に対してのさわやかな挑戦の姿勢が語られました。またワークショップが同時平行ですすめられ、両氏が会場を頻繁に行き来し、参加者とともに、新種の建築モデルを模索する姿がとても印象的でした。中でも都市のエネルギーを蓄積していく「コンデンサー」をモチーフにしたプロジェクトが提示され興味をひきました。UNDER-CONSIDERINGと記された展示スペースの一角にワークショップの成果が並べられ、常に変わっていく展示シーンが作られていきました。

第3のグループは田島則行さん、納村信之さんです。1997年にSTUDIO NOPEを創設。その活動は建築のみならずアート全般にわたる幅広いもので、大変興味深いものです。田島、納村両氏は昨年STUDIO NOPEで行った動態都市のワークショップを更に発展させる形で発表を行いました。〈都市のヒンジ〉と称するキーポイントを実際に体験し、サンプリングし、それをプロジェクトモチーフに展開する試みです。中庭に面した廊下には、周辺都市のエスキースが展示され、実体験にもとずくサンプリング・オブジェが、この中庭に設営された3.6mグリッドのフレームの中に釣り下げられていきました。会場全体に刻々と変わるおもしろい状況が作り出され、いわばプロジェクト全体が都市における心理地図の立体モデルを感じさせるものになっていきました。学会より徒歩5分くらいにあるSTUDIO NOPEとをつなぎ、ワークショップが行われ、ごみ袋などの廃棄物をモチーフにした都市のSKIN、FILTERやEGGをモデルにしたプロジェクトが発表されました。

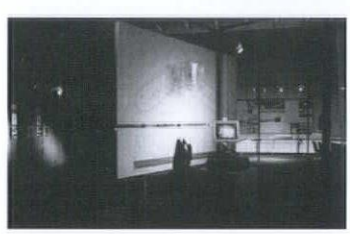
第4のグループは大西瞳さん、三澤純子さんです。両氏はSTUDIO NOPE 創設メンバーとして昨年から、東京湾の第2海堡のプロジェクトを進めています。約140年前に建設されて今は忘れ去られようとしている第2海堡。そこに花の種をまき、やがては花の島（ひまわりの島）にしようと考えています。かつての国家機密と最高の技術にささえられて建設された東京湾における防衛拠点としての人工の島です。大西、三澤の両氏はその魅力にとりつかれ島を訪れるにつれ、東京湾の要所に位置するこの極限のポイントに新たな生命を感じることとなっていきます。そこで巡り合ったのが花の種でした。そして、現在「花の種が都市をも次第に変えていく」という夢のあるプロジェクトに展開しようとしています。根底に流れる「種子のコンセプト」は実に興味深いものです。人類が本来的に有している自然と対話する心のプロジェクトであるともいえましょう。今回はこれまで隠されていた歴史、図面などが、最新展示映像機器のデザイン開発とあわせて、ドラマチックな映像を背景に展示されました。加えて最終日、海の日は、見学会とし第2海堡の砲台に立ち素晴らしい東京湾の水平線を目の当たりにすることとなりました。

最後は「未来史の脳人都市」、「渦と水の都市学」、「東京超元気」など、特に東京を題材に著作されている山田雅夫さんです。東京の未来の姿を多くのデータによりシミュレートしてしまう鋭い視点をもって、東京の未来予測を進める一方、ミクロからマクロへのモデル作りを独特の手法で組み立ててしまうのが山田氏の仕事の重要な点です。そうした中、流れをモチーフにした興味深いCGが提示されていました。予期せぬ都市の進むべく方向性とエネルギー、それを解析しようとする試み。流れの先に予期される事態。流動的で不確定な現代都市の動性そのものが流体のアナロジーの中にみてとれる、と言った印象でした。今回は、その象徴としての約6分の1の石庭のモデルが展示され、流体解析と都市解析とが相関する仮想世界に〈都市の元気—エネルギー〉の源泉を垣間みるようでした。

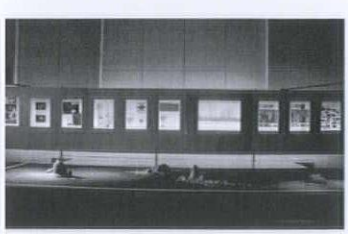
この活動の発表において心がけたことは、出来るだけ自由に表現することです。関係者全員でのミーテイングで期せずして出てきた言葉に「なまもの」という言葉があります。都市は「なまもの」。そこで考えられていく都市の解読の試みも「なまもの」。アクテイブに生きる中で相互に関連しあって、また発展していく。この活動も固定的な形式でなく、多様で、自由な形であるべき。常にそこで考えている姿を見ることが出来、参加出来る。刻々と変わっていく姿そのものに意味がある。この考えは日程全編にわたり10日間、形式にとらわれない自由な発表へと展開していくこととなりました。全員参加によるシンポジウムも結論のない形でエンドレスの様相で展開していきました。

都市の解読の試みは常に多様で、不確定であるようです。その不確定さゆえに、都市は私たちに更なる新たな解読の意欲を与えつずけているようにさえ思えます。期せずして同時期に、都市—東京を解読しようとしてきた5つのグループがこの場に会したことは大変貴重なことであったと思われます。茫漠とした現代都市を模索するに立場や個性、表現方法も全く異なるにせよ何かその大本のところで意識を共有している。何かが生み出されていけると言った明るい予感と出会いの大切さを心に刻む展覧会であったと思います。

●わかまつ・ひさお／建築家


9. 都市の空地—ひまわりの島「第2海堡」調査図面、模型と最新映像機器


10. ひまわりの島「第2海堡」ワークショップ・見学会風景


11.「脳人都市・東京超元気論」展示　山田雅夫


12. 全員参加によるシンポジウム

展覧会レポート

世紀末の結算

「建築の20世紀」展をめぐって

飯島洋一

7月10日から開かれている東京都現代美術館の「建築の20世紀」展は、今世紀の建築を総ざらいにしようとする壮大な企画である。本展のキューレーターであるロサンゼルス現代美術館のエリザベスA.T.スミスは、ここには決して傑作ばかりを集めているわけではなく、また時の流れを単に追っているわけでもないと、10日に東京グローブ座で行なわれた開催記念シンポジウムにおいて語っていた。たしかに20世紀のと謳うにしては、誰がみても20世紀を決定したはずの名作――たとえばペーター・ベーレンスの「AEGのタービン工場」やワルター・グロピウスの「ファグス製靴工場」など、きりがないほど多くの作品――が抜け落ちているといわざるを得ないだろう。

しかしそれにしても、ル・コルビュジエからディズニーまでの約300点の作品の、850点もの膨大なパネルや模型展示を、2時間以上もかけて、しかも駆け足で見せられると、これは20世紀を総括しようとするもくろみが背後に潜んでいるとどうあろうと思わずにはいられないのである。それはありていにいうと、きわめて啓蒙的な姿勢であり、その姿勢は、展示全体の構成にも表れていた。

その展示構成は、全体を21のセクションに大きく分けることに示されている。これも同じくスミスによる説明だが、いろいろなタイプに分けて展示を見せる方法だという。具体的には、「20世紀初頭における植民地主義」、「キッチンの合理化」、「1930年代の建築における政治とモニュメンタリティ」、「エコロジー建築」、「スペクタクル文化：ファンタジー・観光・娯楽の都市」、「スカイスクレーパー：20世紀のビルディング・タイプ」などというカテゴリーによる分類であり、文化的、社会的事象との関わりによって決められているように見える。実際、筆者名は定かではないが、展示パンフレットにも、建築を「様々な社会的事象との関係を通じて検証」との説明書きがある。つまり時代精神と建築、文化現象と建築との相関性を問うていると考えてもいいわけで、本展はそれを、20世紀という巨大な枠組みのなかで総括し直そうというのである。

いずれにしても、この類型分けは、建築をよく知らない人々には、たいへん親切なものであろう。多分、そういう人々のイニシエーションとしては成功しているはずである。とりわけ「エコロジー建築」や「スカイスクレーパー」などの項目は一般の人の関心を引くに違いない。しかしその一方で、私にはこの類型分けが、やはり啓蒙的であるとの感を拭えなかった。いかにも「優等生的」であって、建築正史然としているところが少なくとも私には気に入らない。

こう書いたからといって、私は何も、啓蒙的であるそれ自体を云々したいわけではない。それはある場合には必要なことだからである。もちろん、ここでの類型の仕方のなかに、明らかな錯誤が見られることについては、いっておくべきかもしれない。たとえば磯崎新の「空中都市」(1960-62年)や、セドリック・プライスの「ファン・パレス」(1961-65年)、あるいはアーキグラムにいたロン・ヘロンの「ウォーキンク・シティ」(1964年)を、「ユートピアの探究：メガストラクチャー(巨大構造物)とインフラ(下部構造)」のところに入れているのはどうかと思われる。むしろそれらの作品は、磯崎新自身が第二次世界大戦の傷痕から来ていると、いろいろな箇所で吐露しているように、近代機械主義文明、あるいは近代ユートピアへの強烈な悪意が基本にあるとしたほうが正解であろう。

ともあれ、私がいいたいのは、仮に本展が啓蒙的であるなら(あるいは社会的事象との関連で建築を考えるといってもいいが)、そ



〈カールスプラッツ計画〉ウィーン、1909年／オットー・ワーグナー(ウィーン市立博物館蔵)



〈カール・マルクス・ホーフ〉ウィーン、1927年／カール・エーン(ウィーン市役所蔵)

建築の20世紀展――終わりから始まりへ――
会期：1998年7月10日(金)～9月6日(日)
会場：東京都現代美術館

こに抜け落ちてはならないはずの事象が「ない」ことなのである。たとえば、ここには「アウシュビッツ」という項目がない。これは建築の20世紀を社会事象でとらえるというのなら、致命的な欠落というほかないだろう。アウシュビッツのあの陰鬱な建築物がそこに展示されないのなら、「1930年代の建築における政治とモニュメンタリティ」での、アルベルト・シュペーアによる「大ベルリン計画」(1941年)などのナチスの展示も意味がないのではなかろうか。

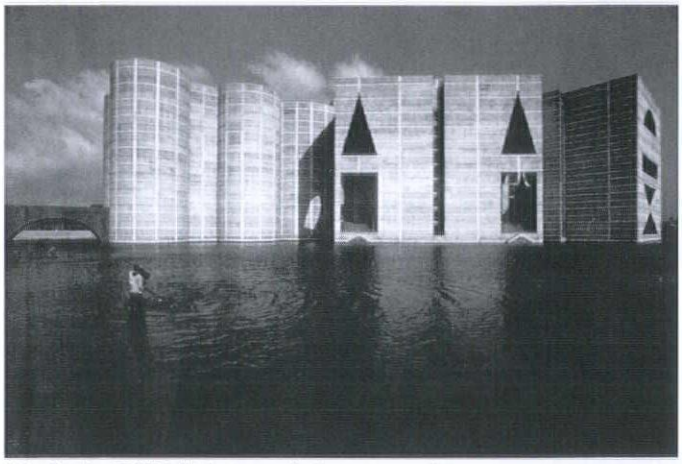
私がこう書くと、ある人は、シュペーアのものは「建築＝文化」だが、アウシュビッツは「建築」ではなく、ビルディングであると言い返すかもしれない。しかし私がいいたいのは、それが「建築」か非建築かという議論ではない。ここに見られるのは、生産か消費か、そのどちらでもいいが、資本主義都市の、生の都市のモニュメントばかりなのであって、死の都市の建築は、その範疇から除外しようとする姿勢が露骨に感じられることなのである。今世紀において、そうした生の都市と死の都市は、多木浩二が『都市の政治学』ですでにいうように、実は、無関係なふたつの事象ではないのである。

私はやはり、本展の優等生的な姿勢が気に入らないのかもしれない。すなわち、暗かったことも何もかも、明るい方向へと乗り越えようとする問題だけを、来世紀へ持ち込もうという姿勢をよしとするわけにはいかないのである。それは10日に開催された先のシンポジウムを聞いても、同様であった。

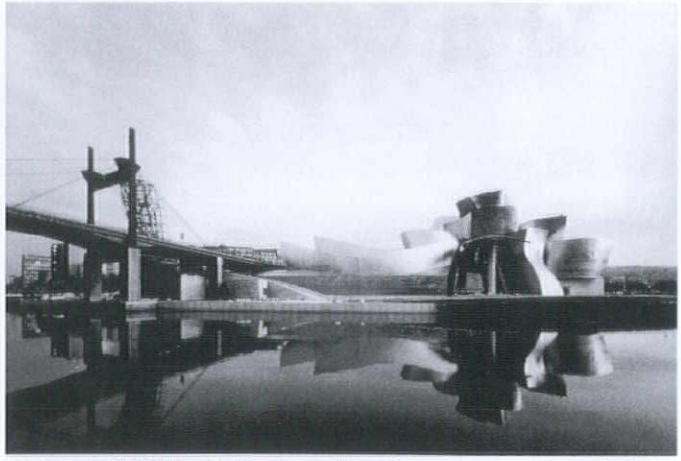
たとえばそこでは、建築史家でパリ＝ヴィルマン建築大学教授のジャン＝ルイ・コーエンによる基調講演がまずあったが、それは優等生的な、十分に退屈な「授業」であった。続くスミス女史のキューレーションの立場からの話も同様であって、その後にパネラーによるシンポジウムが行なわれたが、そこでコーエン氏が、20世紀の死、建築正史におさまらない事柄について触れはじめたにもかかわらず、それは同潤会などの消えゆく建築を意味するにすぎなかった。

唯一、会場の空気を変えたのは荒川修作の破壊的な発言――20世紀の建築はすべて失敗だったというもの――であって、それが私がこの日、展示からシンポジウムと、ほとんど丸一日かけてやっと辿り着いた「優等生でない者」の叫びであった。それはもはや英雄の演説ではなく、いわばピエロやドン・キホーテの振舞いにたいへん近いものを感じさせるが、しかしその怒りというか、ほとんどばかばかしさに近いものが、周囲の優等生の一群を一挙に吹き飛ばす痛快さにつながっていたことだけははっきりと言っておきたい。こうした破れかぶれのなかからしか、新しいものは出てこないだろう。

●いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教授



〈バングラデシュ国会議事堂〉ダッカ、1963年／ルイス・I.カーン(©Reha Gunay/ Age Kahn Trust for Culture)



〈グッゲンハイム美術館〉ビルバオ、スペイン、1997年／フランク・O.ゲーリー　以上、同展出品作より

書評

『環境デザインの方法』

評者＝西沢 健

実践に役立つ本



『環境デザインの方法』
仙田満＝著
A4判　290頁
彰国社　5400円

かつて著者仙田満氏が一冊の自分の作品集を見て「僕の作品には共通したものがないんだよね」と言われた。共通とは造形上のルール、あるいは形式とでも言うべきもののことであろう。その後で「環境デザインだからね」と。

考えてみれば環境を重視した建築となれば場所性や機能性が表現されることになり、自然に各々の表情が変わってしまうことも理解される。ところが不思議なもので、著者のつくった作品を見ると、やはり仙田流であり、仙田造形を彷彿とさせるものがある。それは何かということがこの本を読むことによって理解させられる。

今でこそ「環境デザイン」という言葉は社会のなかでメジャーな位置づけとなり一般的な名称となっているが、著者は菊竹清訓建築事務所を出た30年前、すでに「環境デザイン研究所」を設立して今日に至っている。設立当時は目新しい言葉であった。確かに著者の先見性は注目に値する。それ以来著者は自らを環境建築家と規定している。

ここで言う建築家とは、創造者としてのArchitectを意味する。従って著者の対称領域は単に建築に止まらず、都市、広場、公園、道路そして遊具等幅広く、そのユニークなデザイン活動が評価され約20年前に毎日デザイン賞を受賞している。しかもこれを横断的にとらえ、その本質的、実践的な計画、設計方法の必要性を感じ研究・検証を行ってきた。そこに、単に造形家のみならず、研究者としての著者の顔が見える。要するに実践と研究活動を両輪として活躍した建築家と言える。

その軸となっているのが人間アクティビティである。従来より著者は、それをこどもの遊び環境において研究とデザインに帰結させようとし、その延長上に遊具を始めとし、広場、公園、建築、都市を通観する実績を上げてきた。

著者の人間性、さらには空間や物に対する姿勢がそのようなところに如実に表れている。本書はそのような環境デザインと言われる領域に適用可能な各種実践方法を提示している。

序章では、「環境デザインとは既にある物語を大切にしながら設計すること」と著者は唱える。場所の物語を読み取り、それを尊重し、環境なり建築なりをつくっていくといった姿勢を大切にしている。また「環境デザインは関係のデザインである」とも唱えている。それは物語という時間の関係だけではなく、建物とその隣の建物、道路、都市、自然とあらゆる空間との関係をも示している。

設計と研究をこなす著者は両者ともに観察が大切であると明言する。観察からどのような仮設を導き出すか、それは直感力と経験に関わるものである。ただ、大切なのは仮説をたてるということは引用や安易なコピーではなく、まったく新しいコンセプトを生むことである。その著者の考えを研究から実際の設計にまで適用し、研究成果として建築作品を発信してきた。本書はそれらをまとめたものになっている。特に最終章で著者が唱える独自の空間構造論である「遊環構造」は、こどもの遊び環境の調査から導き出されたもので、こどもの遊び行動の構造を分析し、こども達が遊びやすい空間の構造を明らかにしたものである。それを7つの条件から導き出しているが、それは楽しい遊び場だけではなく一般的な様々な施設にも適応できると述べ、また著者は多くの公共建築にそれを実践している。

本書はのべて280頁で判の大きさもB5判であり極めて内容が濃い。序章から始まり、第1章から第8章まで「歩行線形」「滞留」「建築の個体距離と社会距離」「満足度」「集容性」「快適感」「安全性」「遊環境構造」となっている。このような研究は著者が籍を置いた琉球大学、名古屋工業大学、現在の東京工業大学（教授）での成果であり、また豊田財団やNIRA等の研究助成の結果、さらには「こどものあそび環境の研究」で学位を取得した内容も含まれ、著者の集大成ともいえる。

本の表現は図、表、式等が多く用いられており、著者が実際に手掛けた作品も写真も多く掲載され、硬軟組み合わされた構成が面白い。

本文にも書かれているが、「本書は通読されることを目的とするよりは環境デザインの計画領域において、興味ある部分に関心をもって読み、参考にしていただければと思っている」。その通りであるが、いずれにしても多くのデザイナーにとって刺激と発想を豊かにさせる本である。

最後になるが、この本の装丁は松永真氏が行い、研究本としては新しいイメージをつくり出した。

●にしざわ・たけし／GK設計

Book Review

書評

『反対称の物学』

評者＝小池一子

ディ・シンメトリーは人間の選択



『反対称の物学』
黒川雅之＝著
菊判　168頁
TOTO出版　1905円

何回となくページを繰ってみて、そこここに黒川さんのあの、良い声を聞いた。豊かなバリトンで私が20年あまりのおつきあいの中で惚れこんでいる声、それは彼が重視する生身の人間存在から生まれるものである故にいっそう重要だ。本書でも随所にヌード・フォトグラフィーや性的イコンと読みとれる挿画、挿話が配置されていて、ボディコンシャスな黒川さんならではの本（装丁は秋田寛）となっている。

反対称の物学、という表題は、初めて黒川さんの世界に触れる人にはどう読まれるだろうか。物学はブツガクであってモノガクではないらしいのだが、文中にこの一文字が現れると私はモノと読んでいた。気になって広辞苑で見ると、分かった、黒川さんのこだわりが。ブツは現物、ということなのだ。GOMシリーズ、ガスレンジ、等々、そして建築、それぞれの誕生の折に私は彼の肉声で説明を聞く運に何回か恵まれたが、机上の、虚構の概念ではなく、彼は物質そのものをまず問題にする。そこで、「物による思想とその構築の方法を物学と呼ぶ」（本書カヴァー）というマニフェストが生まれることになったのだ。　空間の物学、空間の修辞法、空間の文脈、と大きく三部に分けられた内容は、互いに関連しており、そのため私のような怠けものの読者は飛ばしてずっと先に行ったり、また前のページに戻るなどの逍遥を大いに楽しんだ。言いかえれば、物を軸にアフォリズムの満ちた一冊で、去年の9月に突然書き始めたということが信じられないくらいだ。「つくり続けることは考え続けることであったから」自分の中に何かがいっぱいたまっていたという彼の言葉には実感がある。

そこで思う。この本の快さは、つくる人が書いたからという点に集約されるのではないかと。建築家の書、作曲家の書、舞踏家の書、デザイナーの書が充実しているのは黒川さんの言う通り、つくり続けることから思考が発生しているからだ。このところ、引用の多いデザイン評論などを疎ましく思っていたので、私にはまた好みの書物が増えたことになる.

言うまでもないが本書の誕生の背景は、このガラガラと音を立てて変化しつつある世紀末の現実である。20世紀の検証を行うことがあちこちで試みられているが、黒川さんの執筆の衝動もそこにある。シンメトリー（対称）が象徴する秩序の美学に対して、ディ・シンメトリー（反対称）という論考を打ちたてようとする彼の作業には説得力がある。ロジェ・カイヨワによればシンメトリーの前に不安定で混沌の状態（ア・シンメトリー）があり、それは何らかのきっかけでシンメトリーに移行する。下等な生命は進化して対称形となるが、人間は一旦手に入れたシンメトリーをもう一歩進化させて再び不安定な状態に移行した生物だという。これが「ディ・シンメトリー」、反対称のゆえんである。「反対称とは、安定状態が破壊されてアンバランスな、不安定な危うい状態になることだとすれば反対称は、美とは何かについて重要なヒントを与えてくれている」と黒川さんは書く。反対称は美の本質ではないか、とも。そして反対称の美としての数寄屋論が展開されていく。

後半で、物の形態というくくりがあり、歴史的に存在してきた「顕著な形」から多義的な言語を汲みとろうと書き下ろされた部分がある。球、楕円体、円錐形、螺旋、トーラス、紡錘形などの形がとりあげられており、それらの名称は外の形からつけられてきたとある。だが黒川さんにはそれらの裏の形、内部の空間が面白いという視座があり、そのことへの彼の好奇心の道連れとなって、読者はデザインの多重な構造に目を開かれることになる。

ところで、つくる物の行方が定まらず軋み音を上げているのがこの世紀末の現実だ。人工、生産、開発、どの局面を見ても過剰、過剰。だが今見る結果は、ここ2、30年間の我々の生活パターンに発しているので、天に叫び声をあげても顔にかかる涙やツバは自ら拭く他にないのである。19世紀末のヴィクトリアン・キッチュやウィーンの退廃はその後に栄光のモダニズムとグッド・デザインの伝播を控えていた。だが現実がバルプ・フィクションとなり、世界がこわれてしまった今、肉体の物化、消費化も日常に浸透しつつある。

物学はこれからどんな方向にきりこむのか。注目していたい。

●こいけ・かずこ／佐賀町エキジビット・スペース主宰

Book Review

メトロポリタンライブラリー

1998年の評者＝
渡辺武信／太田佳代子／港 千尋

今月の評者＝港千 尋

パリの新しい書棚から

今月は、ワールド・カップ優勝の余韻残るフランスから。南仏プロヴァンスはアルルに本拠地を構える出版社アクト・シュッド(Actes Sud)社が創立20年を迎えて、いまや破竹の勢いである。日本に似て、ほとんどの大手出版社が首都に集中する、中央集権型の文化地図のなかで、こうした地方出版社の成功は、いかに特徴を打ち出すかにかかっている。アクト・シュッドは、もともと紙の製造から始まったこともあり、アルシュ紙に似た美しい紙と、縦長の版型、そしてロシア文学や東洋文学など、他の出版社があまり手掛けなかった海外文学の翻訳で注目され、いまやいくつものコレクションを抱える大手出版社になっている。最近では特に「シンドバッド」と名付けられたアラブ文学のコレクションが好評のようである。日本文学、韓国、中国文学も積極的に取り上げており、同じアルルにあって東洋文学専門の翻訳出版を行っているフィリップ・ピキエ社ともども、どの書店でも目立つ存在だ。

ここのところアクト・シュッドは美術関係にも進出し、国内で開かれる展覧会のカタログを作ったり、独自の美術書コレクションを発表している。美術書というと、従来は重く厚く高いというイメージがあったところを、文学関係と同じ紙と版型で、薄くて軽く、しかも内容的にも、現代美術や写真の最先端を扱うという方針で、好評だ。一方で出版の系列化・画一化が進むなかで、こうした形態的にも内容的にも独自の路線を貫く出版社の存在は、注目に値すると思う。

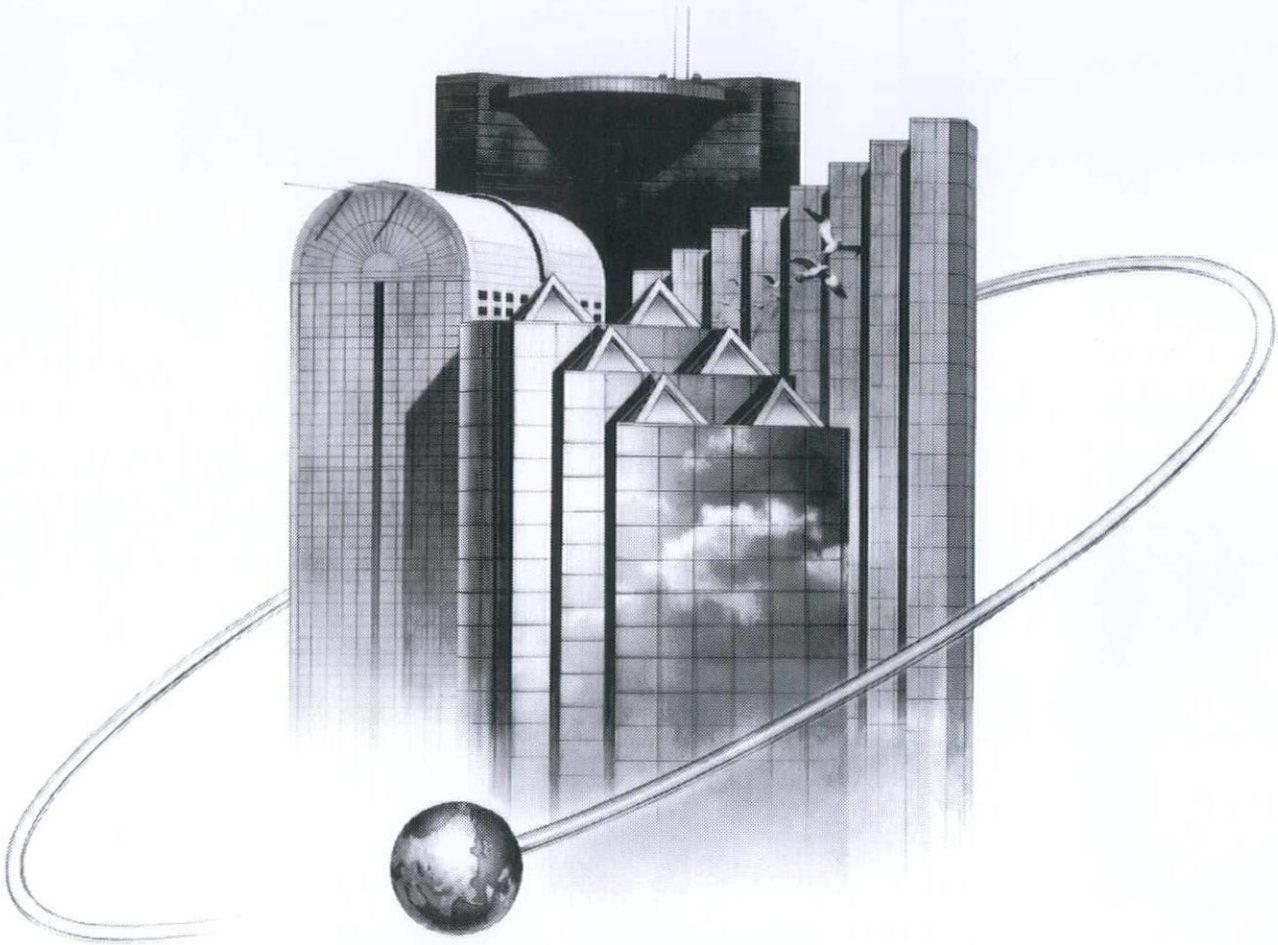
フランスの書店では子供向けの本のコーナーに、建築関係の新刊が目立つようになった気がする。日本の教育過程で、建築史に関する知識を教えるのは、おそらく中学以降か、それも修学旅行のときだったりするが、その点、フランスの小学生は、ローマ時代から近世にいたる多様な建築群に触れる機会が多いようだ。小学2年生からすでに城塞や教会建築の細部の名称を、デッサンしながら覚えさせられているし、様式の変遷についても、ある程度教えている。そのせいもあって、建築史を図入りで解説する子供向けの本が、比較的多く出ているのだろう。

スーユ(Seuil)社から出ている『Architecture』は、ポップアップの最先端をいく造りで、中世から現代までの建築のエッセンスを網羅するものだ。原書はオランダで出ているが、この本のなかでロン・ファン・デル・ミーアとディヤン・スジックのふたりの著者はこれまでのようなクロノロジカルな建築史ではなく、テーマ別の構成によって、建築という文化を多角的に眺めることを提案している。たとえば「建築家と職人」「古典の影響」「形態と構造」「芸術と建築」といったテーマは、それぞれポップアップによる寺院やオペラハウスを中心にして、その周辺に理論や同時代の芸術運動、都市計画など関連項目を開いている。あたかもウィンドウを次々に開いていくようにして、見開きひとつのテーマを立体的に追っていける。おそらく今のところ、ヴィジュアル的にこれを超えるものはまだ出ていないだろう。ポップアップの作り自体がすでに「紙の建築」で、付録としてシュレーダー邸の組み立てキットまで添えられている。子供向けのコーナーに並んでいるが、教材として優れているというだけでなく、知識のアッサン・ブラージュの方法論として、参考になる点が少なくない。

小学校低学年向けの絵本だが『Le Corbusier』(la Joie de Lire社発行)は20ページ弱のヴォリュームのなかで、コルビュジエの仕事を要領よく紹介している。テキストは最小限にとどめているが、絵がなかなかいい。シリーズ化して、絵本で紹介する建築家のシリーズがあっても良いだろう。ピカソやモーツァルトだけが、絵本の対象だけではない。建築や写真、電話やコンピュータといった技術文化を対象にして、子供向けの良い本を作れるかどうか、これはどの国にとっても、これからの挑戦的な課題になるはずである。

●みなと・ちひろ／写真家、多摩美術大学教授

快適創造

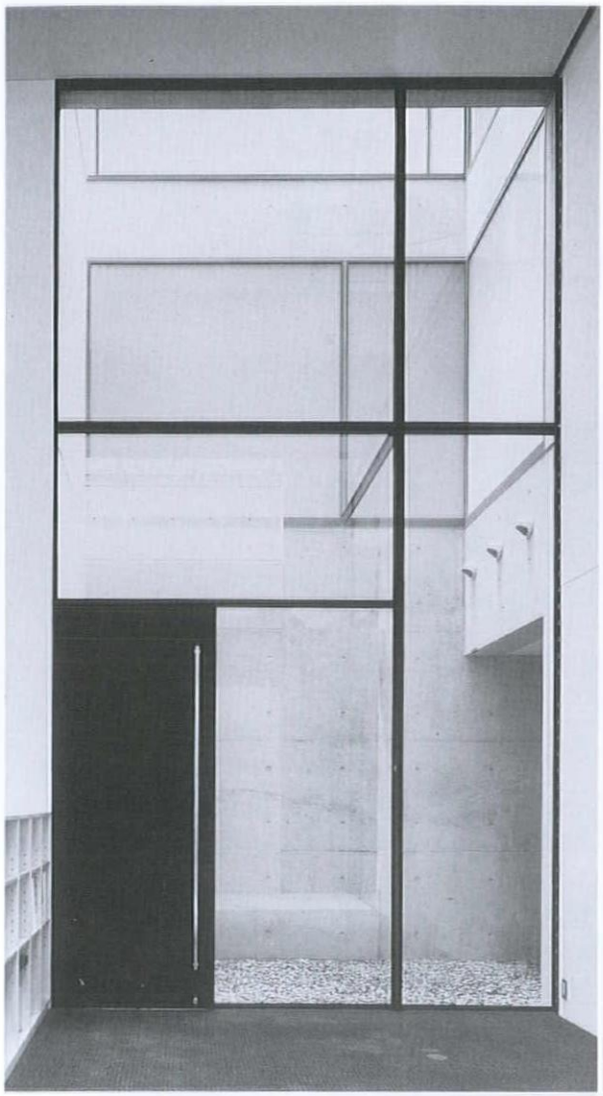


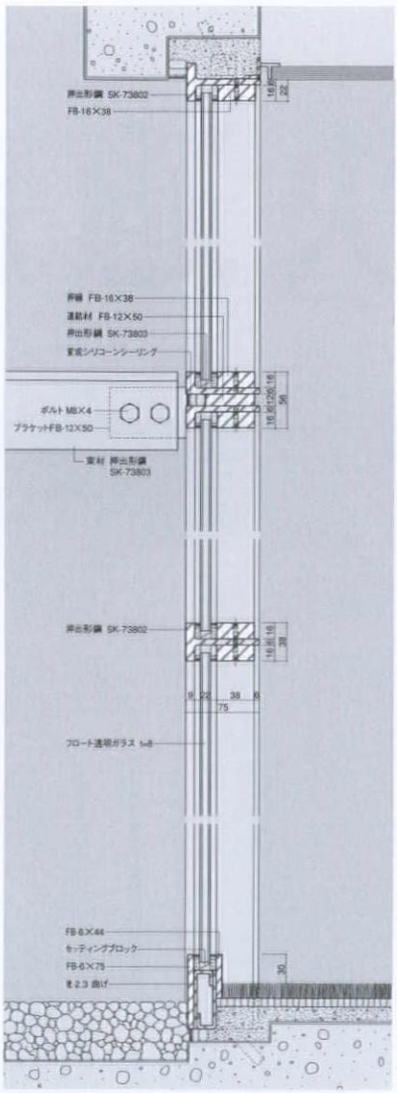
人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

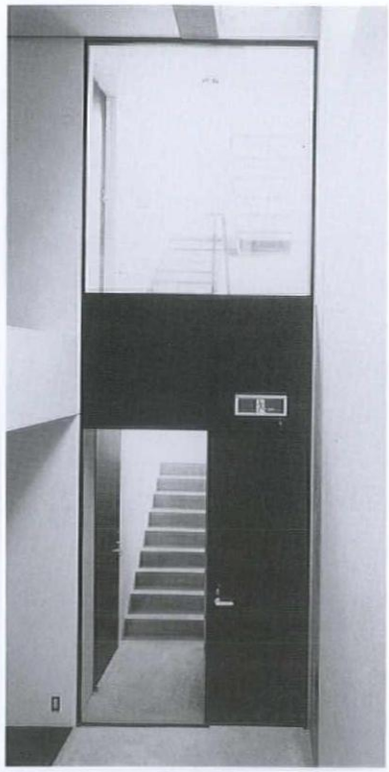
人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。
それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。
都市、コミュニティ、産業施設…人をとりまくさまざまな環境について考え、
その理想を追いつづけている三機工業は、
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

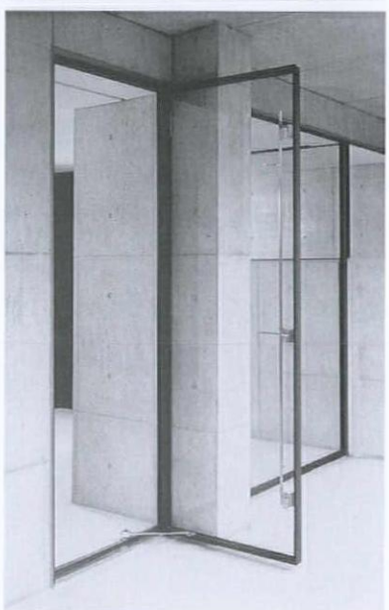
三機工業株式会社

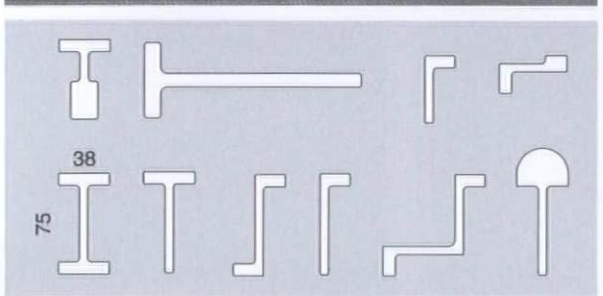
〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111



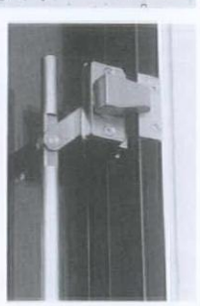












時代が求めるファサードを スチールという素材で表現

NECESS St 3875

建築の外装デザインにおいて、ガラスによる透明感のある表現は、近年、構造設計や施工方法、新素材の開発などの技術革新により、さまざまな形で具現化されています。YKK APでは、この様なデザインを可能とする新技術や新素材を常に研究し、新しい商品を生み出しています。その中で「スチール」という古くからある素材を改めて見直してみました。そして、鉄の持つ強度、耐火性などの魅力ある特長を活かし、開発したサッシシステムが「NECESS St 3875」です。熱間押出成形による専用形鋼は、既存形鋼との組み合わせが自由にできるシンプルな断面形状です。シャープでありながらも存在感を持ち、スリムでありながらも重量感が感じられるものを目指し、優れた材料特性とも相まってデザイン自由度の高いシステムとなっています。

■仕様

- 表面処理　最下層：電気亜鉛メッキ処理
  下地塗装：エポキシ系錆止め塗料
  仕上げ塗装：ウレタン樹脂塗料
- バリエーション　FIXスクリーン
  はめ殺し窓
  外開き窓
  外倒し窓
  框ドア
  フラッシュパネルドア

YKK ap

YKKア・キテクチュラルプロダクツ株式会社

東京都千代田区神田和泉町1

YKK APホームページ http://www.ykkap.co.jp/

新刊紹介

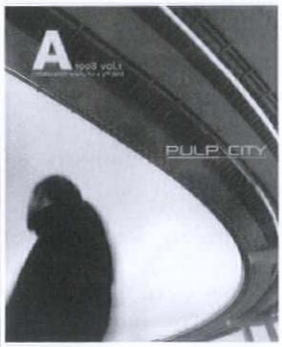
『A』

A4変形　96頁
光琳社　880円

「現代都市の風景を、ヒト、アート、建築、デザイン、写真、演劇、イベント、コミックなど、様々な表現を通して伝えるcity spaceをテーマとした新しい雑誌」が創刊された。第1号では「pulp city」をテーマに、原広司のインタビューやク・ナウカの劇空間を紹介する。

『A』の編集を担当するA-activityは、若手の建築家を中心にしたクリエイター集団である。7人のコアメンバーは編集長の馬場正尊を始めとして、松野勉、永山明男、相澤久美といった建築家として活躍するメンバーと、メジャーのCDジャケットのデザインも手掛けるグラフィックアーティスト八木直子や、新聞記者の関口威人、空間プロデュースや街おこしを企画する伊藤考紀。

建築関係者が建築というフィルターを通して都市を語ろうとする一般誌はあまり見当たらない。「一般向けの建築雑誌」と呼ばれるのも、「建築的」と評されるのも、彼らがどう感じるかわからないが、少なくとも私達にとって、目線を同じくした建築的雑誌が創刊されたことは喜んでいい。



『ユーロアーキテクツ』

岡部明子＝著
四六判　256頁
学芸出版社　2200円

ヨーロッパ各国で現代を代表する重要な建築家に直接インタビューを試み、彼らの生に近い声を集めることに成功している。著者の言うように虚像の建築ではなく、「現実の社会問題に根を下ろした泥のついた建築」が伝わってくる。



『図説　上海――モダン都市の150年』

村松伸＝著
増田彰久＝写真
A5変形　128頁
河出書房新社　1800円

中国の県とイギリス租界という顔を持つ上海。本書は、それぞれが与えた影響を都市はどう記憶しているのか、その変転をビジュアルに見せる、アジア通の著者による上海ガイド。



『レンゾ・ピアノ――航海日誌』

レンゾ・ピアノ＝著
23×23cm　296頁
TOTO出版　4571円

還暦を迎えたレンゾ・ピアノが、建築の本質を若い世代に伝えたいと、執筆はもとより、編集、デザインまでを自ら行っている。設計プロセスやプロジェクトにおけるエピソードもふんだんに取り込み、作家の自叙伝的一冊に仕上がっている。



『ふれあい空間のデザイン』

清水忠男＝著
四六判　216頁
鹿島出版会　1800円

人は本質的にふれあう場を求めている。そう確信する著者は、住居、近隣、など各場面において、
ふれあいの場における望ましいデザインとはどのようなものかを、
幅広く豊富な資料をもとに提示する。



『10+1』

田中純＝編集協力
B5判変形　236頁
INAX出版　1500円

特集は「メディア都市の地政学」。
テレコミュニケーションによって、物理的な距離が失われていく中、都市や政治に「おける地政学的な変容を検討し、さらには「メディアとしての都市」「都市の記憶／都市の記憶」などを論じていく。



『直島文化村へのメッセージ』

ベネッセコーポレーション　220ページ
A5判　220頁
ベネッセコーポレーション

「人間自然・アート・建物の対話と融合」を構想して建設された直島文化村。本書は〈直島コンテンポラリーアートミュージアム〉の設計者、安藤忠雄を始め、三宅一生、隈研吾、北川フラム、安斎重男など、多彩な顔ぶれによる直島へのメッセージ集。



海外レポート

古いものと新しいもの
バーゼル市立劇場増築計画コンペティション1997

from Basel

久野靖広

写真出典："Baudepartment des Kantons Basel-Stadt", Bericht des Preisgerichtes, Basel, 1997

スイス北部、ドイツ、フランス国境に隣接しているバーゼル市で昨年、21世紀に向けた文化施設整備のひとつとして、市立劇場増築のコンペティションが行われた。敷地はバーゼル駅から程近い「シュタインベルグ」と呼ばれる古い街区で、シュバルツ＋グートマン＋グロール設計による既存の市立劇場、美術館、教会が立っており、今回の増築計画では既存の劇場との機能的な融合に加えて、現在、既存の劇場へのアプローチとなっている広場の再構成が重要なテーマとなった。予備審査を経た11組の建築家が指名され、新しい市立劇場の提案を行ったのだが、これらの案を見比べてみると、スイスの建築家と他の国の建築家との考えの違いが現れてくるから面白い。

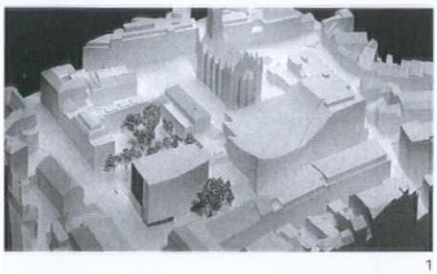
今回紹介するスイスの建築家たちの案は、ほとんどが箱形のヴォリュームを街区の角に配置するものである。それは建築のヴォリュームによって角を押さえることで、それまで不完全だった街区型の都市の構成を定義し、それまで既存の劇場の前庭的空間であった広場をふたつのホールに挟まれた中庭的空間へと再構成するものと言える。

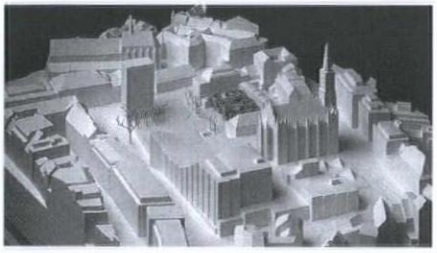
それぞれの入選案を具体的に見ていくと、マイリ＆ペーターによる3等案は劇場の機能を箱形にコンパクトにまとめ、そのヴォリュームを街区の角にあたる部分に置いている。その箱の4面はそれぞれ周辺環境との関係で外側にわずかずつ膨らんでいて、結果的に微妙に変形した箱は、内部に明快な機能性を保持しながらも外部空間にある種の複雑性を与えている。これと同様にヴォリュームを街区の角に置いているのが、ディーナー＆ディーナー（1等買い取り）による提案である。劇場のホール部分を地下に沈め、他の諸室を積層させて高層のヴォリュームとすることで、地上のオープンスペースを最大限に確保するとともに、この地域のアイ・ストップを作り出すことを意図している。また、モルガー＆デゲロの4等案は、ヴォリュームをコンパクトにまとめている点で他の案と共通しているが、その箱を街路から後退させて配置することで街区の角に小さな広場を出現させている。そのファサードは鏡面仕上げとされており、向かいの建物が映し込まれる。既存の広場はそれぞれの劇場へのアプローチとして大小ふたつの広場に再構成されている。1等案であるヤコブ・シュタイブ案は、前述のヴォリュームによって街区を閉じていながらも、3つのヴォリュームによりホール部分を浮かせ、地上部分をピロティ空間とすることで街路から街区中心部への公共空間の連続性を確保している。また街区の他の建物とほぼ揃うように既存のふたつの屋根高を建物に取り込むことで、街区全体をあたかもひとつの建築であるかのように統合している。

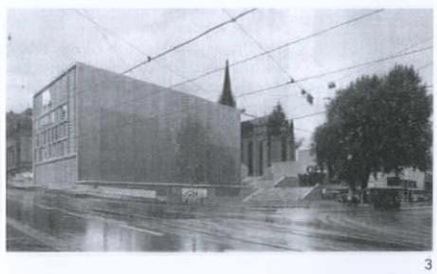
一方、これらスイス建築家による案と異なるものとして、OMAによる提案（3等買い取り）が挙げられる。この案では、市立劇場というビルディングタイプがもつ公共性を主たるテーマに据え、スイス人建築家たちが問題とする街区構成の再定義、都市のファサードという問題には無関心を決め込んでいるようである。新しい建物部分は既存の劇場のファサード面に密着して作られ、街路から劇場までのオープンスペースは緩やかな斜面によって構成されている。

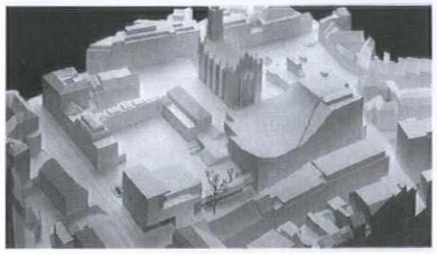
このコンペに限らず、スイス・ドイツ語圏の建築では常に周辺環境と建築の関係が議論される。しかし同様に歴史的な都市の中に建つイタリアの現代建築のように、全てが都市の保存という名目に強制されるといった不自由さとは無縁である。またオランダの都市のように地面そのものが新しいというわけでもない。Blockrandbebauung「街区型建築」という都市のなかに存在する枠組み、ルールを守るということによって、その建物は歴史的な都市の中での存在を保証される。一点を固定することで同時にヴォリュームのプロポーション、ファサード、マテリアルと納め方といった他の水準は、それぞれの建築家にゆだねられている。そのような気楽さ、自由度が、スイス・ドイツ語圏の建築に特徴的なファサードやマテリアルのさまざまな実験的試みを可能にしているのだろう。

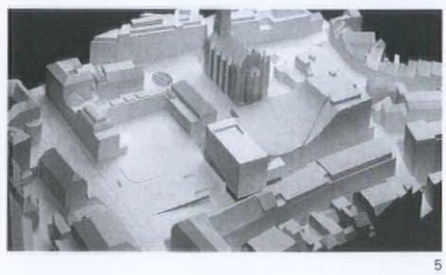
●くの・やすひろ／東京工業大学坂本研究室在籍、ETHチューリッヒ校（1997-98年）


1

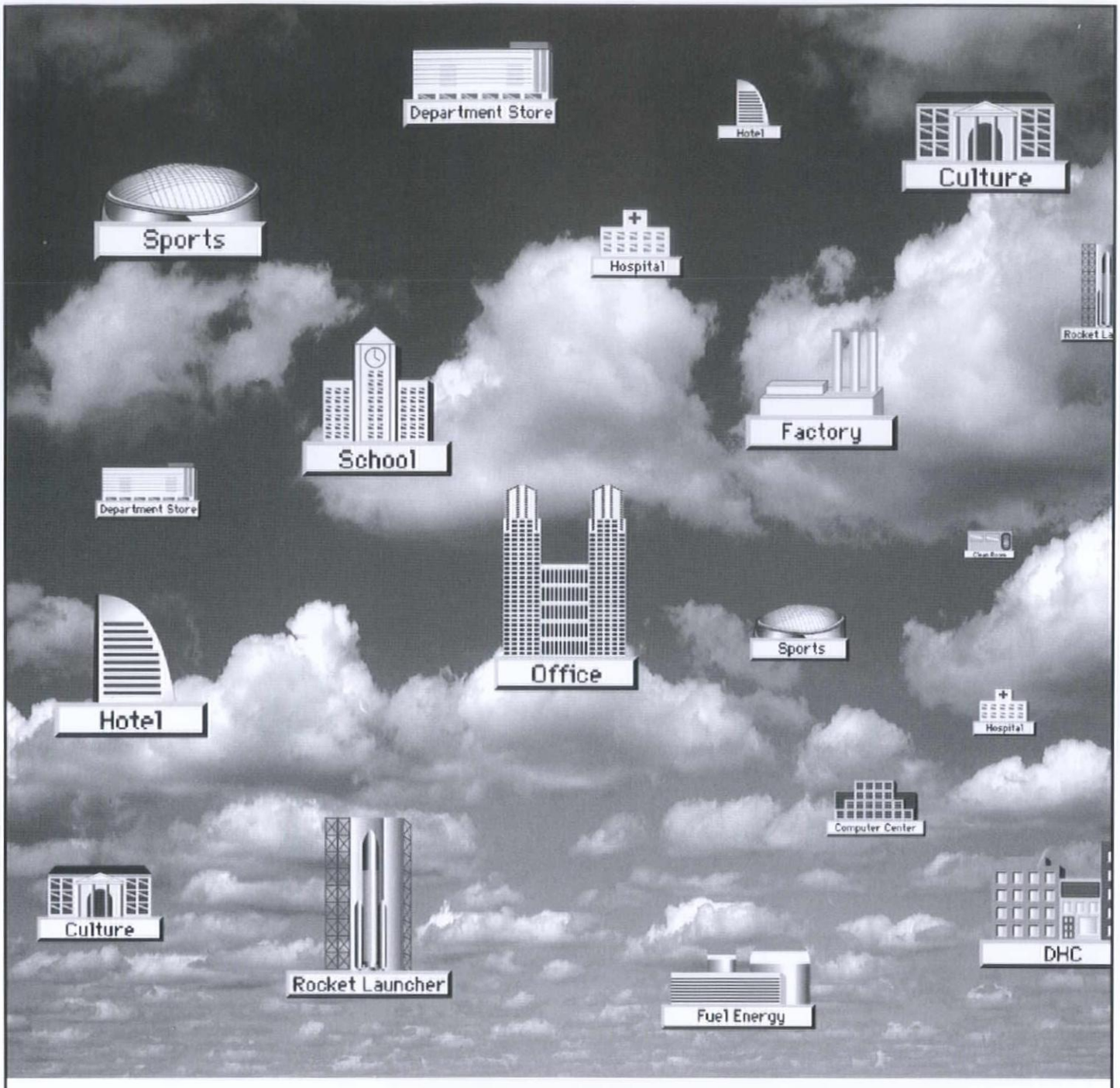

2


3


4


5

1：マイリ＆ペーター案
2：ディーナー＆ディーナー案
3：モルガー＆デゲロ案
4：ヤコブ・シュタイブ案
5：OMA案



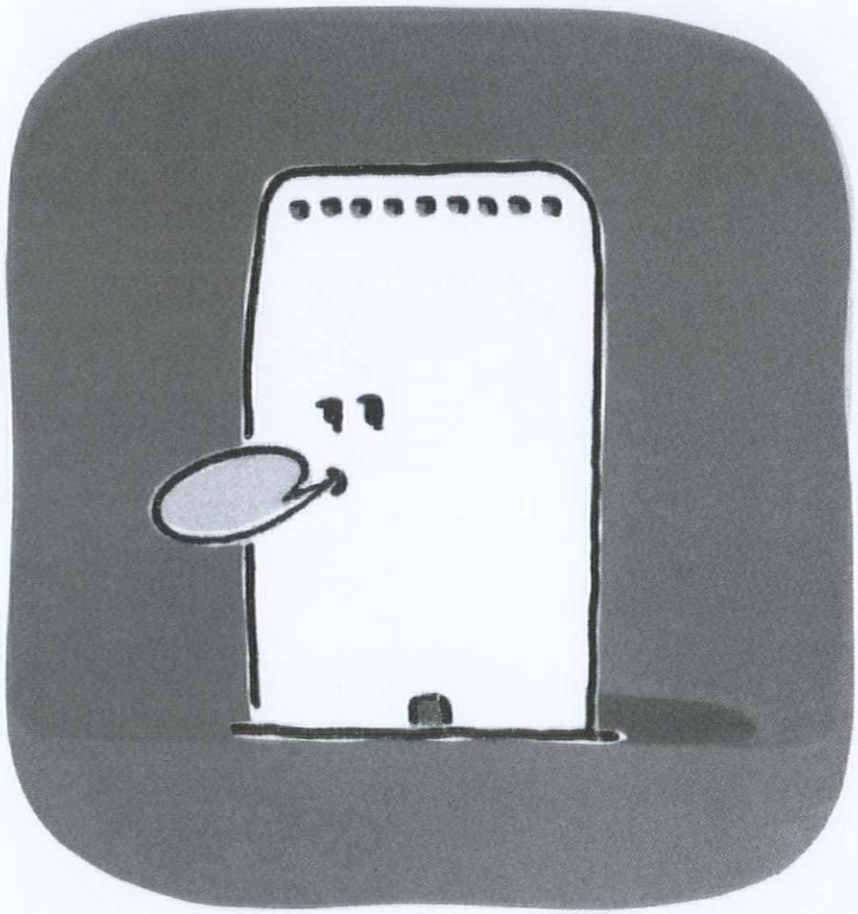
空気のメニュー。

オフィス、工場、学校、病院…。それぞれの建物には、もっとも適した空調システムがあります。
新菱冷熱は「さわやかな世界を創る」という思想のもとに、
用途に合わせたオーダーメイドの空調システムを、設計・施工しています。
バリエーション豊かな私たちの空気のメニューから、21世紀の新しい都市環境が始まります。

新菱冷熱
SHINRYO CORPORATION

本社：〒160-8510 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151(代)　　支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・大阪・富山・広島・福岡

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は
自然の呼吸に
支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。

山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド

東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

海外レポート

郊外化した香港

from Hong Kong 萬谷健志+鄧天斎

新空港が7月6日にオープンした。新空港から都心部までは、啓徳空港の場合と比べて、距離で30倍、金額で4倍、時間で2倍くらいになった。ターミナルビルは、ノーマン・フォスターのデザイン通りに機能している。飛行機を降りてからひたすらまっすぐ歩いていくうちに必要な手続きは全て終わり、そのままエアポート・エクスプレスのプラットフォームに出る。列車には車両ごとにスチュワーデスが付いている。ランタオ島の北岸を削った高速道路、香港初の吊り橋チンマーブリッジ、西九龍の新しい埋立地を通り、3本目の地下鉄トンネルでヴィクトリアハーバーをくぐって、23分で中環の香港ターミナルに着く。

空港の移転が象徴しているのは、80年代以降加速した香港の郊外化である。エアポート・エクスプレスのルートとなっているのは、ほとんど新しく開発されたエリアばかりで、車窓から見える光景は、かつて我々を惹き付けたアンチ西洋的秩序のスターとしての香港ではなく、清潔で健康的な、シンガポールのような香港である。九龍城砦、ネイザンロードの看板、アバディーンの水上生活、鳥カゴ状のイリーガル・バルコニーに覆い尽くされたファサードなどは、「伝統的街なみ」と呼ぶべきものになり、とっくに現実感を失なっていた。

居住人口を新界に移動させ、オフィスビルとショッピングセンターだけの都心をつくり、香港は、普通の大都市になろうと努力してきて、90年代になってそれが実を結んだ。中流階級がマジョリティとなり、ニュータウン世代のために大学の数は3倍に増えた。九龍城砦が取り壊されても、その断片は香港中にばらまかれ、逆に香港全部が九龍城砦になったという見方もあるが、香港を捉えようとする際に九龍城砦のイメージを援用することが、もう無理になったように思える。新空港がそれに完全に終止符を打った。

九龍城砦に代わる香港のスーパースターは、現在も続々と建てられ続けている新界の超高層住宅である。最近建てられているものは、40階から45階のタワーを数本ワンセットにした形式が多い。しかも開発地区が段々と遠のいていくので、都心から離れるほど住宅が高層化するという現象が起きる。こうしたニュータウンは、その人口密度において、実は九龍の最も高密な地区のそれと変わらない。香港のセンサスデータから居住人口と面積を拾って、ニュータウンのいくつかと油麻地西側の密度の高い地区とを比較してみると、ともに2000人/ha程度と等しかった。つまりユニットのサイズを少し大きくし建ぺい率を下げるかわりに、高さを4倍に引き伸ばしたものが、新界のニュータウン、すなわち「香港の郊外住宅」なのである。

都心部の人口密度が保存されたままの郊外住宅。しかし、それを購入し住んでいる人々のイメージのなかでは、それらのタワーは広々とした緑のなかに充分な間隔をおいて配置されているはずなのである。もちろん人口密度も都心部のどこよりも低くなくてはいけない。ディベロッパーの描く宣伝用のイメージや図面は、プロポーションや背景にいつも必ず偽りがあり、時には犯罪的とも思えるが、買い手となる人々の夢を自動記述しているのだと理解すれば、人々が住んでいる空間の、より正確な描写だといってもいいのかも知れない。実際に訪れてみると、こうしたニュータウンの空間には一種の解放感がある。最小2.3mの隣棟間隔で並ぶ45階建てのタワーのファサードは、基準階の立面を45回反復したもの以外の何でもない。そのファサードに囲まれたタウンセンターに立つと、香港が貧富の差を存在の根拠とする都市であることを忘れさせられそうになる。ここでは、個性とか自分らしさといった脅迫観念から解放されることすらできそうである。

もうひとつ注目したいのが、その設計者である香港の建築家である。コールハースは中国の公共住宅の設計者を、そのユーザーの数から、現在最も重要な建築家と呼んだ。そうだとすると、香港の建築家もまたそのひとりである。ニュータウンの住宅プランにはほとんどバリエーションがない。法規をクリアしつつ、最大の面積効率をみんなで追及すれば、おのずから「究極のプラン」へと修練せざるを得ない。そのプランは「香港」のライフスタイルをまとって、中国大陸に大量に輸出される。

こうした状況をみると、香港の建築家をシカゴ派の建築家と並べることができる。純粋なプロブレム・ソルビングであったものが、量的に巨大であるために、スタイルとなってしまう。現在は無名の香港の建築家も、将来の建築史では「香港派」という名前で呼ばれているかも知れない。

●まんたに・けんじ／OMA Asia
●テン・ティン・チャイ／American Design


天水圍（ティン・ソイ・ワイ）



ディベロッパーの宣伝用パース


元朗北部（ユンロン北部）

海外レポート

リスボンEXPO'98にみるポルトガル現代建築の動向

from Lisbon

戸室太一

現在、5月22日から9月30日までリスボンEXPO'98が、開かれている。92年のセビリア万博以来の一般博であるが、各国の展示パビリオンは大型施設内に集約され、全般にコンパクトな印象を受ける。今回のEXPOは、リスボン東側リバーフロントの再興をもくろんだ都市再開発事業をそのベースとしているため、博覧会の祝祭性より将来の計画に一層の重心が置かれているのである。このような中で、恒久的な施設として設計されている前述のサンティアゴ・カラトラバの〈東駅〉、アルヴァロ・シザの〈ポルトガル・パビリオン〉、そしてカリーリョ・ダ・グラッサの〈海の知識館〉の3つの作品には注目しておきたい。なかでも、シザの〈ポルトガル・パビリオン〉とグラッサの〈海の知識館〉は、会場の中心に据えられているドック脇にあり、間隔をとって互いに対峙している姿は、ポルトガル現代建築の様相を浮き彫りにしているように思える。

シザの〈ポルトガル・パビリオン〉では、展示スペースの設計にシザが最も信頼を寄せる建築家ソウト・デ・モウラが携わっているのに対し、グラッサの〈海の知識館〉の展示スペースの設計は、グラッサ同様リスボンに活動の拠点を置く、若い建築家集団ARXが行っている。ポルトガル・パビリオンは、将来への対応を踏まえ可塑性をもったプランニング、反復を基調としたデザインをしており、空間は素材と3次元的スケールの的確なバランスに基づいているものの、シンメトリカルな構成原理をその根底には有している。コンクリート薄板の大屋根は、「大勢の人々のための建築」という課題に対する解として導き出されたものであるが、決して匿名の個人を対象としているわけではない。シザの建築ではあくまで建築と接する個人個人がひとりの人間として、建築とどう向き合うかが問われているのである。

一方、グラッサの〈海の知識館〉は、直裁なヴォリュームのなかに、現実の喧噪から人々を徐々に引き離して、展示スペースの異次元へと誘うパティオの空間が成功している。ARXによる2次元の船舶の図面を3次元空間に焼き直した秀逸なプレゼンテーションと共に、人々は上下の感覚も方向性も持たない抽象的な空間のなかに投じられる。現実は、取捨され厳密な知の空間が構築されたなかで、人間の存在も科学や歴史の次元での抽象的存在へと置き換えられ、概念の尺度によってのみ測られる。ここには、素材と空間の抽象性が認められる。

ポルトガルでは、1974年の政治革命の後、ローコストの住宅や集合住宅といった居住環境の整備が緊急課題として取り上げられてくるなかで、フェルナンド・ターヴォラやシザ、ペドロ・ラマーリョといったポルトとその周辺で活動する建築家たちに対して、「School of Port」(ポルト派)という名称が与えられ、国内で大きな影響力を持つとともに、特にヨーロッパでは多くの関心が寄せられてきた。この名称自体はやや性急で、リスボンにおいてもマニュエル・タイーニャやゴンサーロ・ビルネといった建築家が、シザからの直接の影響を受けつつ、共にラショナリズムへの親近感を持つといった共通した立脚点で設計を行っていた。

またその一方で、リスボンを中心とする南と、ポルトを中心とする北では、気候風土が異なるように建築の様態も異にする。一国の中心としてのリスボンでは、情報の入手も早く体制順応型、楽天的で理想主義であるのに対して、ポルトは自立心が強くリベラルな土壌をもつものの、現実主義である。ポルトではシザやソウト・デ・モウラの他、アダルベルト・ディアス、パウロ・プロヴィデンシア、フランシスコ・ヴィエイラ・ダ・カンポスといった次世代においても、ポルト派の培ってきた現実との接点のなかで、いかに建築が成立するかという視点で追求がなされているのに対し、リスボンでは現代建築の一方にある建築の概念的な問いかけを志向した設計活動に重点が置かれ、カリーリョ・ダ・グラッサ、マニュエル・グラッサ、ARXらがその中心的な役割を果たしている。そしてこれらふたつの方向を、先に挙げたシザのポルトガル・パビリオンとグラッサの〈海の知識館〉が見せる対比のなかに明確に読み取ることができる。

振り返ってみれば、ポルトガル現代建築の歴史は、地域性や構法といった素材の持つ具体性と、それを近代の生産様式のなかに組み込む際に生じる抽象性の葛藤の歴史であり、具体性のなかに抽象性を織り込んでいく作業を通して、かつてのポルト派からシザにかけての建築が成立していた。抽象形態がいかに社会的具体性を持つかというういう点が、今後のポルトガルの次世代の建築家に課せられた大きな課題であるようだ。

●とむろ・たいち／建築家



1



2



3



4



5

1：アルヴァロ・シザ設計の〈ポルトガル・パビリオン〉
2：カリーリョ・ダ・グラッサ設計の〈海の知識館〉
3：パウロ・プロヴィデンシア設計の〈リスボン・サント・ドミンゴス修道院〉
4：フランシスコ・ヴィエイラ・ダ・カンポス設計のポルトの〈カフェ・ド・カイス〉
5：アダルベルト・ディアス設計の〈オフィールの集合住宅〉

先進の省エネカーテンウォール誕生

SHINNIKKEI NEXT STAGE

超越の壁 新世紀へ。

JR東日本本社ビルにも新日軽の技術が生かされています。



物件名／JR東日本本社ビル　設計監理／東日本旅客鉄道(株)、(株)日建設計、(株)ジェイアール東日本建築設計事務所共同企業体　施工／鹿島建設(株)、鉄建建設(株)、大成建設(株)、小田急建設(株)共同企業体

新時代のオフィス環境へ

人とビジネスとのふれあいを目指すオフィスタワーとして、新宿南口地区に新しく誕生した「JR東日本本社ビル」。
曲線フォルムが個性を主張する正面外観には、横ラインを強調した平面Rのカーテンウォールを使用。
快適なオフィス空間を実現するため、二重ガラスによるエアーフローシステムを応用しました。
内外二枚のガラスの間に室内空気を流すことで、窓面からの日射熱、貫流熱を減少させ、大幅な冷暖房負荷を削減。
このエアーフローシステムによって室内側窓部材の温度を室温に近づけ、
窓面からの輻射熱の低減やコールド・ドラフトの防止を可能とし、"居住空間"としてのオフィス環境を創造します。
意匠性はもちろん、省エネや快適な居住空間の確保など、優れた機能にも柔軟に対応できるカーテンウォール。
新時代にふさわしいオフィスタワーに、新日軽の先進技術が生かされています。

新日軽

新日軽株式会社　〒135-8511 東京都江東区木場2-7-23 高層ビル営業部 ☎03(3820)2208

森ビル・都市デザインコンペ'98

作品募集

http://www.cyber66.or.jp/98compe/

作品提出締切り／平成10年9月16日



課題

「全脳型都市」

人間の発想を、テクノロジーによって実現した世界が都市であるなら、それは人間の脳が外化してできた都市と言えるのではないでしょうか。それを、ここでは**大脳新皮質型都市**（Neo-Cortex-City）と呼びます。

脳は、爬虫類、哺乳類、人類という3層構造を持つと言われています。大脳新皮質／知性（人類の部分）が発達し、本能とよばれる生物的な欲求が抑圧され、新皮質だけが外化した結果、経済的、社会的、文化的活動に適しても**生物的／身体的条件にはあまり適合していない都市**となった、とも言えます。そのことが、さまざまな都市問題を生み出している、とも言えるかもしれません。未来の都市は、部分としての三層構造の脳が互いに連関を持ちながら、一個の全体としてのバランスの取れた複雑適応系の外化をめざすべきではないでしょうか。

Neo-Cortex-CityからWhole Brain Cityへ

脳は一つの複雑適応系とも考えられます。複雑適応系とは、環境のランダムな情報から、一定の規則性を発見し、それに自己を適応させ、同時に環境に働きかけて自己を生成しようとするシステムです。全体としての脳を構成する3層の脳は、互いに有機的な関連を持つ部分であり、同時に一つの全体としての複雑適応系と考えられます。それをここでは**全脳型都市**（Whole Brain City）とよびたい、と考えます。人間の生み出したコンピュータによって、**自己を生成しようとするシステムとしての都市**をコンペの課題とします。

隈 研吾 *隈研吾建築都市設計事務所*



一見難しい課題であるが、気分としては都市に対する提案であれば何でも可という軽いつもりである。ただし、単に都市のハードを提案したものよりは、都市のソフト、すなわち本来的に不可視であるはずの都市システムを可視化しようという意図が感じられるものを高く評価したい。

浜野保樹 *メディア教育開発センター助教授*



着られるコンピューター「ウェアラブル・コンピューター」が現実のものとなりつつある。しかし、衣装以上に建築は、人間と常にあるということでウェアラブルであり、建築こそ、ウェアラブル・コンピューターでなければならないだろう。

廣瀬通孝 東京大学工学部助教授



大型映像の導入、ネットワークインフラの整備などという話題が注目を集めるにつれて、建築設計や都市計画がマルチメディア技術と密接な関係を持ちつつある。両者が融合して作られる未来の建築・都市空間がどのようなものになるのか、斬新なアイデアを期待したい。

渡辺仁史 早稲田大学理工学部教授



人間の全く新しい知識の世界が、デジタル化によって実現しようとしています。そのようなサイバースペースを生きる人間にとっては、その知識を選択するための新しい感覚器官が必要です。どのような知覚を通して、どのような世界（都市）が見たかを評価したい。

審査委員

隈 研吾／隈研吾建築都市設計事務所
浜野保樹／メディア教育開発センター助教授
廣瀬通孝／東京大学工学部助教授
渡辺仁史／早稲田大学理工学部教授
森　稔／森ビル株式会社 代表取締役社長

賞金

最優秀賞：1点／100万円
優秀賞：3点程度／各30万円
特別賞：5点程度／各10万円相当の賞品

応募資格

空間デザイン全般に興味を持つ学生（大学生・大学院生・専門学校生・他）で、個人による応募の他、グループ、研究室単位での応募も可。

作品提出締切

平成10年9月16日

発表

「SD」1998年12月号誌上予定

主　　催：森ビル株式会社
共　　催：六本木六丁目計画・マルチメディア都市研究会
企画運営：アカデミーヒルズ　レモン画翠
後　　援：鹿島出版会　SD編集部

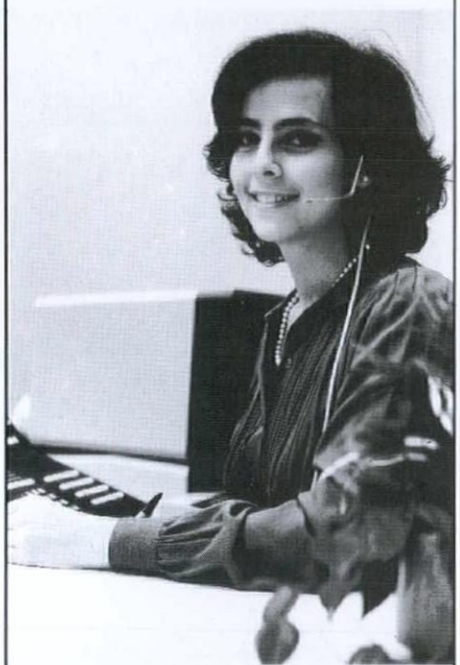
詳しくは、「森ビル・都市デザインコンペ'98」ホームページ（http://www.cyber66.or.jp/98compe/）をご覧いただくか、下記事務局までお問い合せください。

「森ビル・都市デザインコンペ'98事務局」
〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台1-5-5 レモンパート2ビル 2階 レモン画翠
TEL. 03-3291-9171　E-mail : compe98@cyber66.or.jp

MORI BUILDING URBAN DESIGN COMPETITION'98

まーるい地球を、まぁるくつつむ。
日立電線

情報とエネルギーのネットワークをつくる日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、
人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、
「私達の住む地球をまぁるくつつむ…」。日立電線は、いま、
快適で豊かなくらしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。
21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——
たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界で
ひとつの大きな役割を担っているもの——
それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 ☎東京(03)3216-1616

お知らせ

八重洲ブックセンター 開店20周年記念フェア開催

期間：1998年9月18日(金)～10月3日(土)
場所：八重洲ブックセンター本店
東京都中央区八重洲2-5-1
催事内容
ワイン本フェア(9/18～10/17)、21世紀へ向かう科学技術(9/12～10/2)、版画バックナンバーフェア(8/31～9/26)、芸術書在庫僅少本フェア(9/20～10/17)、海外美術書フェア(10/19～25)、他多数
問い合わせ：八重洲ブックセンター
Tel：03-3281-1811(代表)

第32回建築文化懸賞論文募集

課題：社会をレギュレートする建築
審査員：八束はじめ
応募資格：なし
応募規定：400字詰原稿用紙25枚以内、またはそれ相当のワープロ原稿(例：1行40字×250行以内)注釈も含む。原稿は未発表のものに限る。また応募原稿とは別に400字詰原稿用紙2枚以内(またはワープロ原稿800字以内)の梗概と、氏名(ふりがな)、住所、電話番号、年齢、勤務先または学校名、略歴を明記したものを添付。本誌2ページ以内に納まる図版などの添付は可(単色印刷が可能なもの)
応募締切：198年10月31日(土)当日消印有効
持参の場合は月曜から金曜の9:00～17:00まで
賞：下出賞1点50万円、佳作数点各10万円
応募・問い合わせ：彰国社「建築文化」編集部
〒160-0002東京都新宿区坂町25
Tel：03-3359-3231、Fax：03-3353-5391

安斎重男写真展 「ベルギーの空・マグリットの世界」

期間：1998年9月14日(月)～19日(水)
時間：10:00～17:00(初日は16:00まで)入場無料
会場：駐日ベルギー大使公邸
千代田区二番町5(有楽町線麹町駅より徒歩1分)
問い合わせ：ベルギー観光局　Tel：03-3582-9510

マレーシア・シンガポール 建築都市ワークショップ展示会

内容：若手建築家、学生14名によるワークショップの作品展示
期間：1998年9月3日(木)～9月15日(火)
会場：KOIZUMIライティングシアターイズム
Tel：03-5687-0126
時間：10:00～18:00　入場無料
参加予定建築家：ウイリアム・リム、タン・ガンピー、モック・ウェイ・ウェイ、トム・ヘネガン、藤木隆男、古市徹雄、連健夫、田島則行、柳原博史

都市・建築・デザインのウェブマガジン テレスコウェブ(telescoweb)発刊

内外の最新(おもしろ)建築・都市・デザイン情報満載のホームページ形式の雑誌を創刊。世界の街、そして建築・デザインの見どころ「都市ガイド」や、「セルフビルダー」(じぶんでシェルターを作る人)のページも充実。
URL：http://www.telescoweb.com/
問い合わせ：テレスコウェブ編集室: 建築・都市ワークショップ内　担当：鈴木、今藤
Tel：03-3407-4753

中米建築探検ツアー 「メキシコ・キューバ編」

メキシコでは、ルイス・バラガン、フェリックス・キャンデラらの作品やチェチェンの遺跡の訪問、カンクーンではリカルド・レゴレッタ設計のカミノ・レアルホテルに宿泊。キューバではリカルド・ボッロやロベルト・ゴッダルディの作品やヘミングウェイの家を見学。
期間：1998年11月21日(土)～11月29日(日)
募集人員：20名(最小催行人数15名)
随行講師：淵上正幸(建築ジャーナリスト)
旅行代金：389,000円
問い合わせ：海外企画　担当：相澤
Tel：03-3263-6685

第10回高松宮殿下記念世界文化賞 受賞者決定

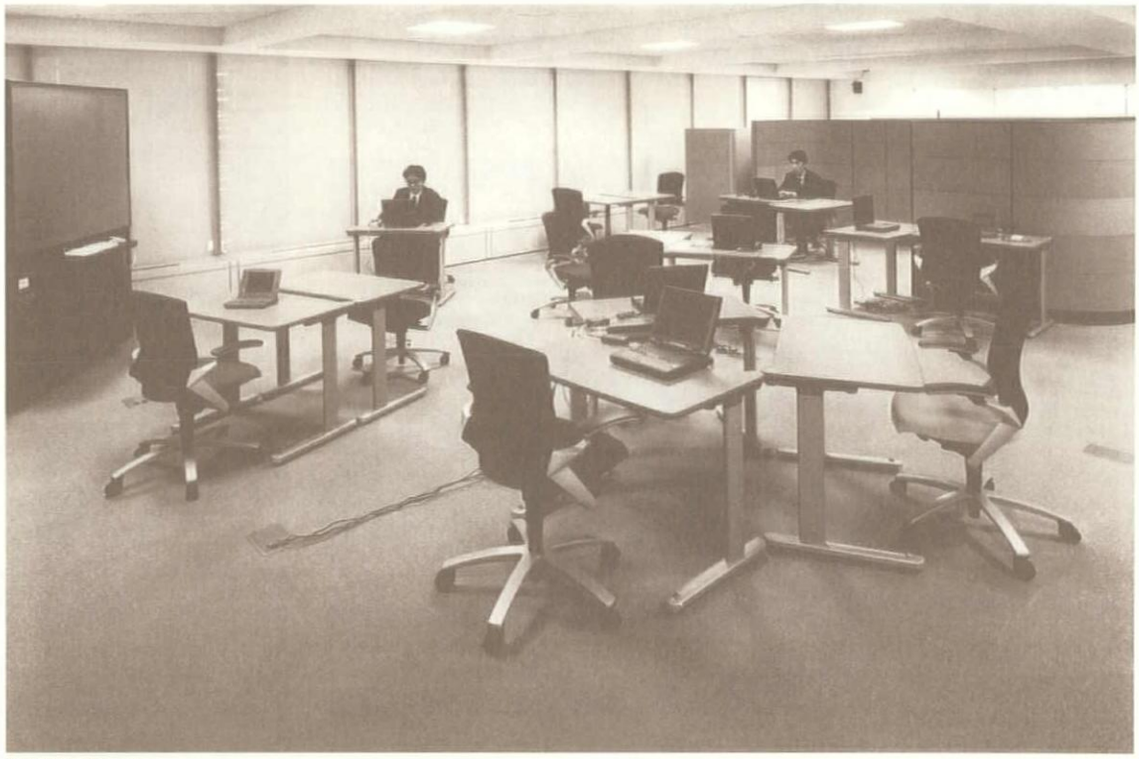
第10回高松宮殿下記念世界文化賞の受賞者が決定し、1998年7月9日にドイツ・ミュンヘン市のプリンツレゲンテン劇場で発表された。
絵画部門：ロバート・ラウシェンバーグ
彫刻部門：ダニ・カラヴァン
建築部門：アルバロ・シザ
音楽部門：ソフィア・グバイドゥーリナ
演劇・映像部門：リチャード・アッテンボロー
若手芸術家奨励団体：ポーランド国立映画テレビ演劇大学
問い合わせ：(財)日本美術協会　Tel：03-5251-2245

AXISビル2F「オーバーレブ」 企画展およびトークセッション

展示内容：10月12日～18日まで、ウー・バホリドリンをはじめとする若手インテリアデザイナーの製品の展示
トークセッション：10月12日16:00～18:00、ウー・バホリドリンの作品や若手デザイナーの活動を紹介
問い合わせ：アクシスパブリッシング
Tel：03-5572-0803

SD

10月号予告



NTT中央研修センター

9810

特集

オフィス環境の近未来

電子メディアの普及とそれにともなうネットワークの整備により、人々の生活は大きく変化している。オフィス空間においても、ノンテリトリアルなレイアウトの考え方から、SOHO(Small Office Home Office)やサテライトオフィスといった従来のオフィスのあり方そのものを問うところまでその影響は広がっている。本特集では、国内、海外の先端的オフィスの状況を対比的に紹介しながら、今後のオフィス環境の姿を考察する。

事例：

日本＝電通インタラクティブソリューションセンター、日本ヒューレットパッカードビジネスセンター、NTT中央研修センター、乃村工藝社商環境事業部、チューリッヒ・ダイレクト、他

海外＝DEGWロンドン新オフィス、ハマーウィンブラッド新オフィス、ホットワイアード・インタラクティブセンター、他

文：

仲隆介、小倉善明、岸本章弘、加藤雅士

失われた時と空間を求めて──京都町屋再生の手法

店舗付住宅として調和のある街並みの美を示してきた京町屋が徐々に失われつつある。こうした現状をふまえ、単に保存するということだけでなく、その歴史・文化を継承しつつ現代性のある建築空間として再生しようとする、京町屋再生研究会の活動を実践事例と共に紹介する。

事例＝橋弁慶山町会所、祇園望月、ミホプロジェクト、他

文＝宗田好史、長尾重武、野間光輪子、大谷孝彦、望月秀祐

対談＝野間光輪子×小島冨佐江

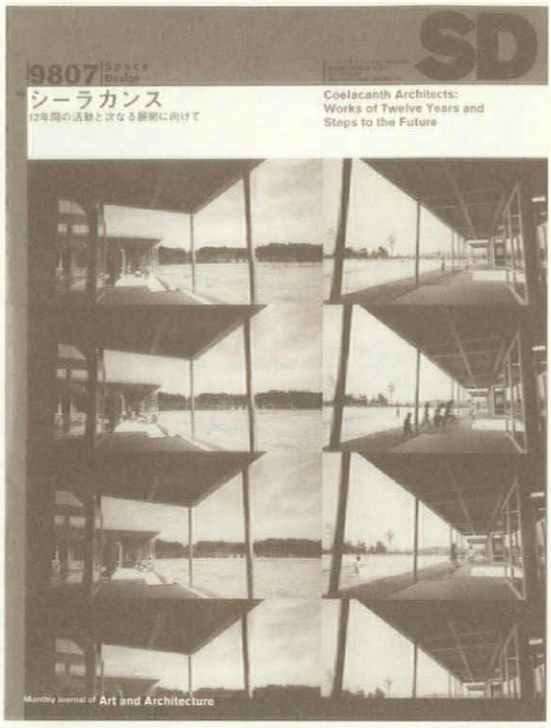
連載：

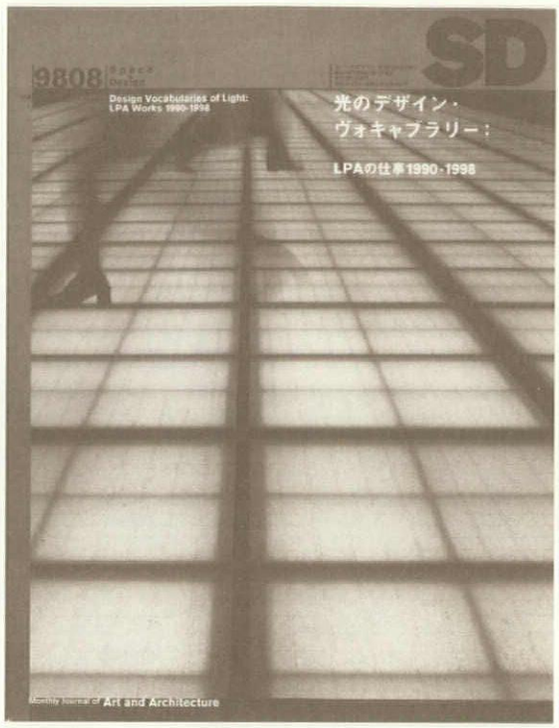
海外レポート：ニューヨーク、ミラノ、パリ

世界の現代美術館 13　太田泰人

森島紘史の起こし絵図──日本のかたち紙考 10／森島紘史

SD
バックナンバー





9807

特集

シーラカンス
12年間の活動と次なる展開に向けて

東京大学の原広司研究室の博士課程に在籍の6人が、パートナーシップというかたちをとりながら、1986年に「シーラカンス」を設立して早12年。彼等が20代の学生で事務所を設立し、そして6人という集団で設計するという形式は、建築界に新しい風を吹き込み、今の若い世代の建築家にも大きな影響を与えたと言えるだろう。近年は、パートナーシップという形式が変化しつつも、その作品はコンペで勝ち取った大規模の公共建築が増えてきている。

本特集では、彼等の12年間の建築活動の軌跡を、彼等の設計のテーマであり、設計手法の特徴とも言えるキーワード「アクティビティ」「スペース・ブロック」「モデリング」などを一つひとつクリアにし、またパートナーの建築に対するスタンスをインタビューによって明らかにしながら、最新作を含めた59作品を紹介する。

[作品紹介]
吉備高原小学校、大阪水上消防署、(仮称)外ヶ岡交流拠点施設、福岡市立博多小学校、スペースブロック上新庄、ハウス・ジャパン中間実証住宅-C棟、出雲市地域交流センター、(仮称)鴻巣市文化センター、山本邸、TSプロジェクト、西脇の住宅、愛知淑徳大学大学院棟、朝日新聞社秋田支局、千葉市立打瀬小学校、Art Hut SD、那須の別荘、氷室アパートメント、大阪国際平和センター、小松フォークリフト神戸工場、大阪ガスNEXT21 303住戸、他
[論文] 原広司、土居義岳
[インタビュー] 山本理顕
[パートナー8人へのインタビュー]
インタビュアー:西沢立衛

連載:
世界の現代美術館 11/丹下敏明
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考 7/森島紘史

特別定価=2,600円/本体2,476円

9808

特集

光のデザイン・ヴォキャブラリー
LPAの仕事1990-1998

これまで、主に商業空間の照明計画など限定された空間の照明法については記述されてきた。しかしこれは光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。

ハードな技術がある程度完成された照明は、その空間デザイン計画となるとまだ黎明期。この領域のパイオニア、LPA(ライティング・プランナーズ・アソシエイツ)は、現日本では数少ない、光デザイナー集団である。そんな彼らのデザイン流儀が、光空間を創造するときの重要な鍵となることにはまちがいない。

ここでは彼らのデザイン言語を40に厳選して紹介する。

第1章 コンセプト
ブルーモーメント「昼と夜の狭間にある青い時空は、照明デザインの原風景だ」、他
第2章 メソッド
光のベルト「歩いてみるまで分からない、光絨毯の踏み心地」、他
第3章 ディテール
定点照射「照明器具の完全消滅」、間接照明「光源と透過・反射材の組み合わせできまる間接照明のヴァリエーション」、他
第4章 アクティビティ
色鉛筆「わたしたちがつかう青い羅紗紙と色鉛筆について」、他

[論文] 磯崎新、面出薫
[座談会] 内藤廣+黒川勉+面出薫+東海林弘靖
[付録] LPA光辞典、LPA照明用語集

連載:
海外レポート:バルセロナ、ロンドン、サンフランシスコ
世界の現代美術館 12/水沢勉
森島紘史の起こし繪図——日本のかたち紙考 8/森島紘史

特別定価=2,500円/本体2,381円



SD別冊32号

スポーツのための空間——スポーツ施設の新しい風

日本設計＋SD編集部　　総頁数：180頁　予定価格：3800円（本体3619円）　発行予定：1998年9月中旬

スポーツを行い、楽しみ、観戦するための空間は、多くの課題を抱えている。

巨大化する競技イベントへの対応、利用頻度の向上を求めての多目的化、新たな魅力付加を求めての複合化、高度な観戦空間を求めての専用化、あるいは既存施設の再利用や機能の向上など。

また、高齢者、身体障害者、女性など、スポーツ参加層の急激な拡大や変化に対応することも早急に求められている。

本書では、そうした課題の解決に挑戦し、大きな成果をあげている最新事例を豊富に取り挙げ、詳しい解説を付し、今後のスポーツ施設の設計に明瞭な指針を与える内容としている。

第1部：スポーツの空間の新しい風
1：専用または共用
2：屋外または屋内
3：都心または郊外
4：複合化と多目的化
5：再生と改修
6：仮設と転用

第2部：最新事例紹介
海外：ベルリン・オリンピック自転車競技場及び水泳場、フランス競技場、ウィンブルドン新コート、2000年シドニーオリンピック公園、香港スタジアム、アムステルダム・アリーナ、アトランタブレーブズ新球場、オリオールパーク球場、バンク・ワン球場、シアトル・マリナーズ新球場、マディソン・スクエア・ガーデン改修、ミレニアム・ドーム、ナッシュビルアリーナ、ユナイテッドセンター、ユービック地下スポーツホール
国内：横浜国際総合競技場、武蔵野の森競技場、東京ドームシティ、大阪ドーム、西武ドーム球場、Jヴィレッジ、ツインリンクもてぎ、他全40例

第3部：空間の拡張と参加層の拡大
スポーツの空間の拡張：代用、自然、ヴァーチャルリアリティ、放送メディア
スポーツ参加層の拡大：簡易スポーツ、高齢者、身体障害者、女性

SD別冊

集合住宅原論の試み

黒沢　隆著
B5判　168頁　定価(本体3,800円＋税)

本書は，永年，研究者であり建築家として実践してきた著者が，集合住宅論を建築の社会的側面と計画原論との関連を軸に総合的に捉え直した，団地計画や住戸設計のための具体的かつ実践的な教科書であり，実務書。

[主要内容]

第１章　都市を生きる――集まって棲まうということ
第２章　郊外を生きる――人権の容器としての住まい
第３章　集合住宅を分類する――集合住宅の形式と立地
第４章　ファミリー住戸――80m²台３ＬＤＫは実現しうるか
第５章　ワンルーム住戸――単身者の住まいと生活
第６章　住戸から住棟へ――セミパブリックな領域
第７章　集合の契機――コミュニティあるいは共に住まうことのメリット
第８章　棟配置の課題――郊外立地ということ
第９章　都市の中の集合住宅――市街地立地ということ
第10章　大きすぎるソフトの課題
第11章　公共住宅から社会住宅へ
第12章　地価とは何か
第13章　メガロポリスに住んで

住宅建築のリノベーション

樫野紀元・三木哲・石本徳三郎・知久昭夫著
A5判　208頁　定価(本体3,300円＋税)

住宅建築をリニューアルするために，建物の診断方法から計画・工法までを解説。さらに，住環境の健全性向上，室内の耐震安全性確保，植栽の維持，そしてＳＩ住宅や高齢者のためのリニューアル方法を記述する。

[主要内容]

序　章　住宅リノベーション――21世紀建設産業の主役
第１章　既存建物の耐用性診断――耐用性診断の要点／劣化診断の要点／他
第２章　リノベーションによる住宅の長寿命化――住宅リノベーションの課題／劣化箇所の改修／健康性の向上／他
第３章　リノベーションを考慮した住宅づくり――住宅のライフサイクル・マネジメント／躯体骨組の高耐久化に関する基礎知識／他
第４章　価値を高めるリノベーション――歴史的価値をもつ住宅／人にやさしい住まいづくり
第５章　新住宅産業――サービス業としての住宅リノベーション／制度の見直し／多能工の時代／住宅設備の未来像

これからの家

――健康で快適な住まい――

快適住居研究会編著
四六判　208頁　定価(本体1,800円＋税)

住宅における健康及び快適とは何か，利用者に応えた設計仕様，省エネ型住宅，高機能住宅のあり方をテーマに，建設省建築研究所及び住宅メーカーの専門スタッフが執筆構成。現実の商品開発プロセスで得た内容で詳述。

[主要内容]

第１章　健康で快適な住まいとは――健康住宅の意味／住宅の空気と熱の環境／住宅の断熱と気密について／他
第２章　空気環境と熱環境に配慮すると住まいはこうなる――変わる住まい方／冷暖房から空気の調和へ／粉塵，外部からの騒音の遮断
第３章　低くなる冷暖房エネルギーと変わる空気・熱環境――冷暖房エネルギーとランニングコスト／変わる空気・熱環境
第４章　空気環境と熱環境に配慮した快適な住まいのために必要なこと――断熱化と気密化の事例／建築計画で必要なこと／空気環境と熱環境を良くするために必要なこと／他
第５章　環境とこれからの住宅――AWA方式の実例／自然エネルギー利用住宅とバリアフリー住宅／海外の事例

揺れを制する

小堀鐸二著
四六判　384頁　定価(本体2,500円＋税)

大学研究職で培われた構造振動理論の体系から，技術者及び科学者として研鑽し，今日の耐震・制震構造の領域と地位を確立。21世紀に向け自から各種媒体で語り綴られた思考・行動・論理の根幹を，文筆成果より収録。

[主要内容]

地震事始め――地震と五重の塔
学究時代を顧みて学なり難し・33年の回顧――若い日の私／私の中の棚橋先生／岳父を想う／塔の夢／他
実務家としてサイエンティストとして――私の超の技術論／教訓という名のあと追い研究／虚学のすすめ／他
地震にどう構えるか――人間の人間による人間のための耐震建築／耐震ということ／他
「制震」の時代を迎えて――揺れを制する／制震構造について／グローバル化を迎えた制震構造
小堀鐸二研究所を主催する――“無用の用”／技術開発の戦略と独創性／新しい時代に羽ばたく／新しい流れをつくる／研究開発と創造性(対 福井謙一氏)／他
21世紀に対処するために――超高層ビル：２つの強さ／新しい構造技術への展開／都市をどう守る（対・牧野昇氏)／他

アントニン・レーモンドの建築

三沢　浩著
A5判　248頁　定価(本体3,500円＋税)

汎世界的な「国際建築」ではなく，地域の気候と風土に根ざし，人々に愛され使われ続けるもの――それこそがレーモンドの考える「近代建築」であった。近代建築の失墜を，日本近代建築の巨匠を再考することで克服。

[主要内容]

第1章　「日本の」建築家
第2章　流浪の時代
第3章　スタイルの試行錯誤
第4章　黒い木造横板張りの近代住宅
第5章　運命の星
第6章　離日とアメリカ時代
第7章　「近代建築」展開への布石
第8章　「リーダイ」論争
第9章　戦後「近代建築」の展開
第10章　レーモンドの設計プロセス
第11章　群馬音楽センター
第12章　脱近代
第13章　レーモンドの現代的位置づけ

庭の楽しみ

――西洋の庭園二千年――

A.S.ジェイムズ＋O.ランカスター著　横山　正訳
四六判　200頁　定価(本体2,700円＋税)

古代ローマから中世，近代，現代に至る庭園のさまざまな様相を楽しいイラストとエッセイで紹介。文中に盛り込まれたさまざまなエピソードからヨーロッパにおける庭づくりと人々のかかわりが生き生きと伝わってくる。

[主要内容]

第1章　ローマ領ブリタニアの庭
第2章　修道院の庭
第3章　世俗の庭
第4章　チューダーとジャコビアン
第5章　旅行家と目利き
第6章　壮大なフランス様式
第7章　オランダ風の庭
第8章　風景式庭園
第9章　ガーデネスク
第10章　ハイ・ヴィクトリアン
第11章　牧師館の庭
第12章　いなか家の庭
第13章　ロンドンのスクエア
第14章　道すじの庭
第15章　サリー派
第16章　日本風の庭
第17章　郊外の庭
第18章　パティオ

建築とリアル

松畑　強著
四六判　240頁　定価（本体2,700円＋税）

若手建築家松畑強の初の評論集。建築や都市デザインを単体として考察するのではなく，広く経済や時々の政治情勢，国策や社会思潮の反映・接点として捉える。リアリティは建築においてどこに現れるのか。

[主要内容]

第1部　作品分析　批評と修辞／テイスト／サイトウィッツの幾何学／セカンドハウスの視線／透明なラビリンス／不確実性の写真=都市／ロジャースのタワー／電子メディア時代の景気のいい話／他

第2部　作家論「廃虚」・磯崎新論へ／モダニズムからモダニズムへ／Calihtenics・葉祥栄論へ／保守主義，近代主義，戦争／他

第3部　論考　機械美と古典主義，板垣鷹穂試論／アメリカ現代建築への仮説的背景／シンプリシチー／「廃虚」のエピステモロジー／ランドスケープの認識論・近代風景の起源をめぐって／他

同潤会のアパートメントとその時代

佐藤滋・高見澤邦郎・伊藤裕久・大月敏雄・真野洋介著
B5判　262頁　定価（本体3,300円＋税）

日本の近代集合住宅の嚆矢を築いた同潤会は，主に東京に豊かな敷地空間をもったアパートメントを建設した。本書は，同潤会の誕生した時代背景，そして代官山アパートを中心に全体計画，各住戸の平面計画，設備計画，そして払下げ後の増改築などを詳細に調査し，その建築や居住者の生活を記述する。

[主要内容]

同潤会アパートメントの時代
同潤会アパートメント：実践の軌跡
代官山アパートの計画とデザイン
検証・住戸計画
代官山アパートの住生活誌
代官山アパートの居住ストックの変容
新たなまちづくりに向けて

近代建築の巨匠アアルト生誕百年に適えた全三巻翻訳完結成る

各巻A4変型・ヨーラン・シルツ著　田中雅美・田中智子共訳

[最新刊] 白い机—円熟期3

[アルヴァ・アアルトの栄光と憂うつ]

336頁　定価（本体19,000円+税）

既刊の「白い机」一、二巻では、
1898～1939年までのアルヴァ・アアルトの建築家としての成長過程、
交友関係、仕事、合理主義との関わり、思想、作品などを、
本人が書いた記事や手紙や講演の草稿を交えながら紹介した。
本書第三巻は、戦争による激動期から、建築が栄えた平和な時代、
つまり彼の人生の中で最も実りの多い時代を経て、他界するまでを扱っている。
第二次世界大戦が勃発した1939年にはすでに世界的な名声を持つ建築家であり、
自国でも評価を得ていた。
彼の建築家としての道は、そのほとんどが輝かしい成功に彩られていたが、
数々の失望を味わったのも事実である。中でも一番痛手が大きかったのは、
ヘルシンキ中心地計画が紆余曲折の末、中止になったことだ。
しかし、だからといって創造意欲が萎えることなど決してなかった。
彼の精力、熱意、自信、社交性、カリスマ性は、どこへ行っても人々の心をつかんだ。
第三巻は、そんな革新的な建築家が迎えた、人生の絶頂期の栄光と苦悩のドキュメントである。

［主要内容］　戦場からの逃避／「オフィスA」の活動／アメリカがフィンランドにつくる町／スイスでの講話／きびしい現実／フィンランド継続戦争／スウェーデンでの果たせぬ夢／建築家協会会長として／再びアメリカへ／アルテク・センターとアイノ・インスティテュート／MITでの活動／妻・アイノの死／失意の底から起き上がる／世界は救えないのか／国際人／フィンランド・アカデミー／事務所の現状／自然,人間,科学技術／地域計画／フィンランドの心臓・ヘルシンキ中心地計画／名声が生む二つの側面／最晩年

白い机—若い時1

[アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想]

296頁　定価（本体9,500円+税）

本書は、アアルトの作品紹介といったものではなく、類い稀な天分をもった建築家の人間としての成長、行動、哲学、人生という面に光をあて、全人格と人生を浮き彫りにしようと試みられた評伝である。

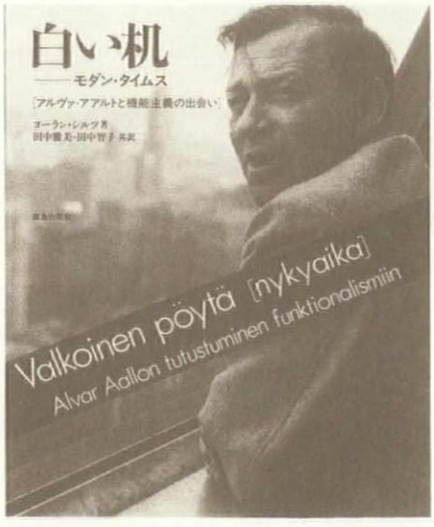


白い机—モダン・タイムス2

[アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い]

288頁　定価（本体14,300円+税）

1920年代後期から30年代にかけて、国際的な建築家として名を馳せたアルヴァ・アアルトの人生・思想・仕事について記述する。最近発見されたばかりのプランや図面も初めて紹介している。写真・図版等315点。



SD Space Design Back Issues

Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



9705 Afra & Tobia Scarpa and Benetton: They have worked together for about 30 years. Introducing the office building, warehouse, shops etc they designed. Text+Interview: Hiroyuki Toyota. **Pisa and the Works of Massimo Carmassi:** Casa Muti, Restoration of the Theatro G.verdi,etc ￥2,000



9706 Takahiko Yanagisawa: The Composition of Theatrical Space: Introduces receent works focusing on the elements. New National Theatre, Tokyo Opera City, etc. Text: Muneshige Nagatomo, Yoshiaki Ogura, Shouzo Motosugi, Junichi Kawamura Disucussion: Masato Kawamukai and Takahiko Yanagisawa **Swedish Good Design: Undecorated Form Design** ￥2,000



9707 Hong Kong 1997: The Accelerating City
Grasping the aspect of Hong Kong through visual works by artists and interview with architects. artists: Alan Chan, Tycoon Graphics, Satoshi Asakawa, Shin Egashira, etc. Supervision: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima, Hikaru Kinoshita. Text: Naonori Matsuda ￥2,000



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project ￥2,400



9709 A New Phase of Railway Station Space:
Introduces Railway Stations having additional value and tie with community such as JR Yabuki and JR Ohmagari. Also Introduces JR Kyoto widely noticed as International Competition. Text: Takayuki Miyabayasi etc. Talk: Tadanori Yokoo×Hiroshi Hara ¥2,000



9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. Text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening: Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ￥2,800



9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening commmittee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirotada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Lighit and Color: Glass Artsits of Czecho** ￥2,000



9801 SD Review 1982-96
16th anniversary retrospective of SD Review looks at entries later built, examines relation to and significance in the world of architecture, and considers future directions. Text: Fumihiko Maki, Hiroshi Hara, Youichi Iijima, Osamu Nakasuji, ect. Round-table discussion: Makoto Motokura, Ryoji Suzuki, Akira Kuryu, and Kazuhiro Kojima ￥2,800



9802 Transparency in Architecture and the City: Swiss German Architecture Explores the appeal of the Swiss German sphere through an understanding of the background of Swiss architectural works and the context in which they came into being. Architects introduced are Herzog & de Meuron, Gigon & Guyer, etc. Texts by Momoyo Kaijima, etc. ¥2,200



9803 Czech Cubist/Rondocubist Architecture: A Reappreciation of the Revolution: Featuring extant Cubist and Rondocubist architecture in Prague; original photos. **Hiaso Kohyama: Drawings and space:** introduces Hisao Kohyama's architectural space and handling of detail through the architect's own drawings. ￥2,000



9804 Versatile Architects of the New Generation: Introduces the works and creative activities of young architects in their thirties to portray a sense of the times: INTENTIONALLIES, MIKAN, etc.
Desktop Community
￥2,000



9805 The Cutting Edge in Space Design:
Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists:Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc.
House for Frida Kahlo and Diego Rivera:
Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern
￥2,000



9806 Landscape Creation Today: The Challenges for Landscape Architects: Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ￥3,000



9807 Coelacanth Architects: Traces their activities over twelve years, mainly through introduction of their works. Kibikougen Elementary School, Suijo Fire Station of Osaka City, Sotogaoka Exchange Forum, etc. Text: Hiroshi Hara, Yoshitake Doi. Interview: Riken Yamamoto ￥2,600



9808 Design Vocabularies of Light: LPA Works 1990-1998: Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende ￥2,500

SD

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

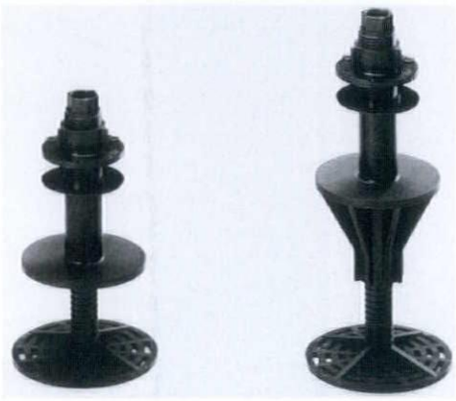
●

ころばし大引根太方式改良工法床支持脚

大引受けプラボルト

●

フクビ化学工業株式会社



フクビ化学工業㈱では，鉄骨住宅の床組み木材をコンクリート土台に固定するプラスチック製のボルト，大引き受けプラボルトを新発売した．土台と根太との間隔を20―65㎜範囲で調整する65型と，60―105㎜範囲で調整する105型がある．ボルトの材質はナイロン樹脂をガラス繊維で強化（特許出願中）したものである．

特長

①大引寸法は，H45～60㎜に対応する．
②コンクリート釘はボルト部にあらかじめ内蔵されている．
③上部よりレベル調整が可能なため，大引下部でレベル調整をする在来工法と比べ施工性に優れている．
④ハイブリッド強化樹脂製で，耐久性に優れている．
⑤飼モルタル（モルタルダンゴ詰め）などが不要な乾式工法である．
⑥在来工法と比べ施工時間が約半分に短縮され，トータルコストが削減できる．

価格

接着剤など付属部材込み，100個入り1セット
65型　42,600円
105型　48,000円

●

建築用さび止め塗料

ワンツーエポ

●

大日本塗料株式会社



大日本塗料㈱では，建築物の鉄部用さび止め塗料として，新たに一液形変性エポキシ樹脂系さび止め塗料，ワンツーエポを新発売した．

特長

①上塗り可能時間が2時間（20℃）と乾燥時間が圧倒的に短い．1 Day 2 Coatを可能にした．
②一液形なので従来の二液形エポキシ樹脂塗料と比べ刷毛，ローラー，エアレスでの作業性は良好である．
③付着性に優れた変性エポキシ樹脂と特殊防錆顔料で長期防錆性を発揮する．
④変性エポキシ樹脂の優れた付着性による下地適応性に加え，上塗適性も水系，合調，弱溶剤まで幅広い．
⑤現場で合調原色による調色ができる．
⑥一液形なので作業性がよく，塗面は平滑で吸い込みが少ないため上塗りの仕上がりが良好である．
⑦塗り重ね時間のインターバルが6ヶ月と長い．
⑧専用シンナーでなく，「塗料用シンナーA」で希釈できるマイルドな品質設計である．
⑨用途は，建屋鉄骨，架台，看板，手摺，鉄扉，シャッター，軽量鉄骨など．

価格

14,000円/16kg

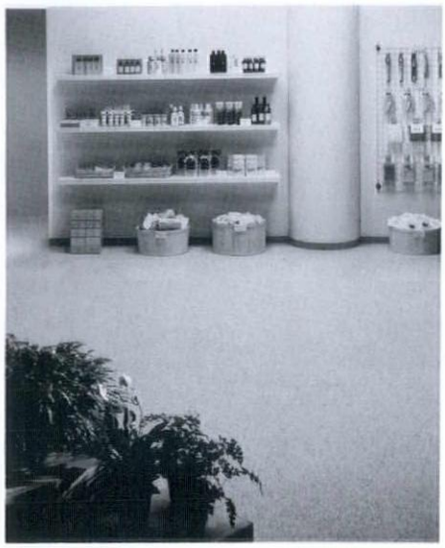
●

張床

ネオバザール，テラシエーナ，ブランシュ

●

株式会社タジマ



㈱タジマでは，新技術開発商品，インレイドSタイルシリーズにネオバザール・テラシエーナ・ブランシュを新発売した．同シリーズは，チップ造粒技術によって，多様でグレードの高いデザイン表現を可能にした．プリントラミネート商品に比べコストが抑えられ，しかも耐摩耗性にも優れている（0.6㎜表層）同社オリジナルのローコストハイバリュー商品である．

ネオバザール（写真タイプ）

食品スーパーやロードサイド店などの耐久性が重要視される店舗に適材な，リーズナブルな価格でデザイン性をあわせ持つている．テラゾー風のデザインで高級感を演出する．色数：9色．価格：4,900円/㎡．

テラシエーナ

テラコッタ風，素焼きタイル風イメージの床タイルである．南欧・サンタフェ風の空間演出に適材である．色数：9色．価格：5,500円/㎡．

ブランシュ

本石の風合いを持つ床タイルである．これからの内装トレンドカラーである「白」を中心とした色構成である．ローコストで高級感ある空間を演出する．色数：11色．価格：5,500円/㎡．

フクビ化学工業株式会社　開発本部
東京都品川区大井1丁目23号3番
〒140-8516　Tel　03-5742-6321

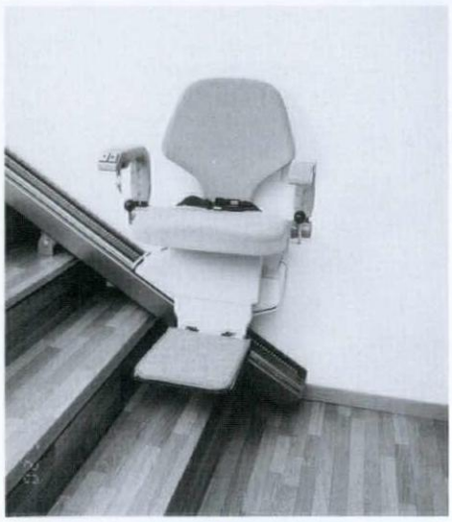
大日本塗料株式会社
大阪市此花区西九条6丁目1番124号
〒554-0012　Tel　06-466-6661

株式会社タジマ
東京都千代田区岩本町3丁目11番13号
〒101-8577　Tel　03-5821-7731

●
いす式階段昇降機

自由生活

●
クマリフト株式会社



クマリフト㈱では，お年寄りや障害者の動作や使い勝手を研究し使う人の立場で考えた，人に優しい設計の新型いす式階段昇降機，自由生活を新発売した．

特長

①オリジナルデザインで日本人にフィットさせることだけを考えた．
②大きな足置き台でより安心．　床面から足置き台までわずか6cmで乗り降りがスムーズ．　また上階でいすが90度回転し，乗り降りしやすい．
③座面を跳ね上げると，ひじ掛けも足置き台も同時に折りたためる，ワンアクション，コンパクト収納．
④安心して乗れる，スムーズ滑らか運転・停止のインバータ制御．　消費電力を370Wから200W(当社比)に低減し，省エネ効果を発揮．
⑤静かな家庭に馴染む小さな運転音．
⑥シートは，6色のカラーバリエーション．
⑦大きく見やすい操作押しボタンで操作性良く，手を離せば止まる押し続け方式なので安心．(左右選択)．
⑧スタート時に優しいアラーム音にて知らせる．
⑨着座センサーにより，いすに座っていない限り運転されない安心設計．
⑩障害物感知センサー付きで自動停止する．

クマリフト株式会社
大阪市西区京町堀1丁目12番20号
〒550-0003　Tel　06-445-1011

●
椅子張

デコレーター・ファブリックスVOL.2

●
株式会社サンゲツ



㈱サンゲツでは，約4年ぶりに椅子張の新見本帳，デコレーター・ファブリックスVOL.2（121柄646色）を発表し，新発売した．　新柄80柄443色：約66%，輸入品43柄165色：約36%．

特長

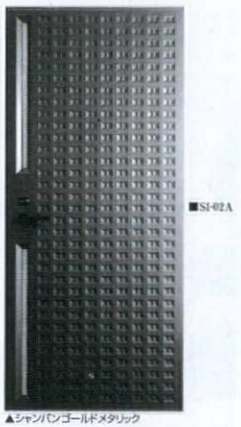
①多くの施工例写真と，大きさを検証した張り生地でイメージがつかみやすく，商品を選ぶ人の立場にたった見本帳構成である．　耐久性を★印で表示した．
②ホームユース用のニーズに対応し，一般家庭で使いやすいナチュラル，シンプル，カジュアルな柄行・色彩の海外商品を充実させた．
③新たに色彩別に統一感のある商品を集めたコーディネーションシリーズを提案している．
④ホテルや公共施設などのコントラクトユースで強く求められている機能面（強度，メンテナンス性，抗菌性，防汚性）や価格面（ビニルの価格は織物の約半分）に対応する商品として，意匠性の高いビニル製の商品を多数開発した．
⑤スーパーソフトレザーの新発売．　本皮調のソフトな感触．　適度な滑りにくさがあるため，快適な座り心地．　優れた耐久性．
⑥抗菌商品の充実．

株式会社サンゲツ
名古屋市西区幅下1丁目4番1号
〒451-8575　Tel　052-564-3314

●
玄関ドア

クレアーS

●
東洋シヤッター株式会社



▲シャンパンゴールドメタリック

東洋シヤッター㈱では，高級感のあるデザインと多彩な機能性を標準装備するスチール製玄関ドア，クレアーSを新発売した．　同製品は，スチールをプレスでエンボス加工し，メタリック調の焼付塗装を施した表情豊かなデザインと，防火・遮音・気密などの機能を兼ね備えた贅沢な玄関ドアである．　3種類のエンボス（押型成形）パターンにフラッシュタイプとスリット窓タイプの2タイプがあり，合計6種類の表面デザインがある．　サイズは，W800×H1,900㎜とW850×H2,000㎜の2種類．　扉本体カラーは，グレーメタリック，ブラウニッシュメタリック，シャンパンゴールドメタリック，ロゼメタリックの4つのバリエーション．　また，耐震仕様品も用意した．

特長

①フラッシュタイプは，建築基準法を満たす甲種防火戸認定品である．　また，スリット窓タイプも網入りガラス6.8㎜で甲種防火戸耐火試験に合格した．
②一般的な軽量玄関ドアのペーパーハニカム構造とは異なり，フラッシュドア構造で扉内部にグラスウールを充填し，T－3等級の遮音性能を実現した．
③戸先の形状を合じゃくり設計とし，防犯性を高める構造となっている．

東洋シヤッター株式会社
大阪市中央区南新町1丁目2番10号
〒540-0024　Tel　06-943-6491

FRIENDS OF EARTH

美しい星だから、次の世代にそのまま残したい――川本はそう考えます。





環境技術で未来をひらく――

川本工業(株)

●本社－〒231-0026 横浜市中区寿町2丁目5番地の1 ☎045(662)2021

●営業種目－ 空調・衛生工事、電気工事、土木工事、水処理・公害防止工事

電気設備工事一式

鈴木電業株式会社

代表取締役社長　鈴木宗雄

〒253－0045 茅ヶ崎市十間坂1－8－1

☎ 0467(85)3241～3

FAX 0467(83)4969

衛生・空調工事

株式会社 川合工業所

代表取締役　高橋賢二

〒254-0024 平塚市馬入本町２－４
電話　0463(21)0674

衛生・空調工事

豊正工業株式会社

代表取締役　中村　正親

〒220-0055 横浜市西区浜松町12－29
電話　045(241)5115

衛生・空調工事

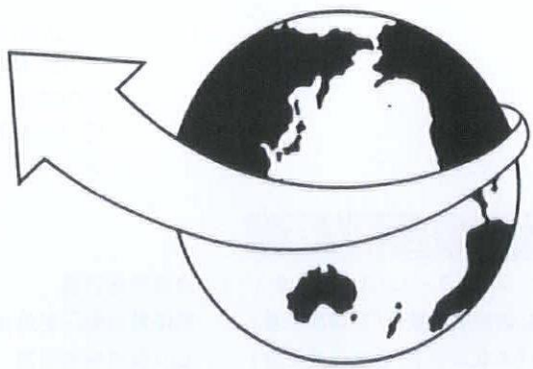
株式会社 鈴木商会

取締役社長　鈴木溢也

〒230-0051 横浜市鶴見区鶴見中央2丁目5番4号
電話　045(501)0441

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。

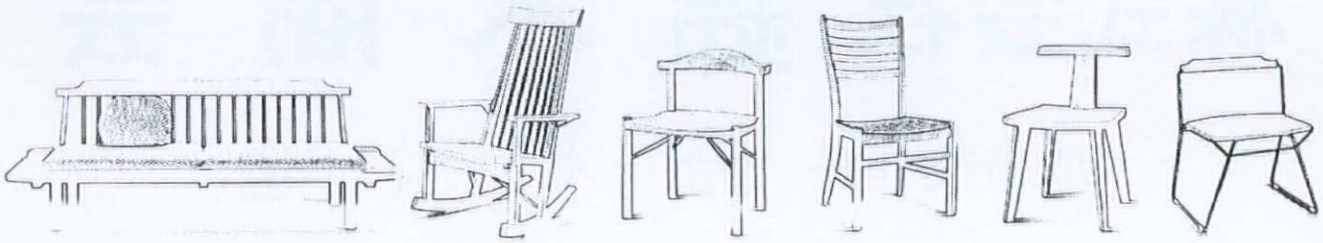


●営業品目
空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工

株式会社朝日工業社

本社・東京支社　〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7　電話 03(3434)5711
大阪支社　〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59　電話 06(302)2273
支店　北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

quiet furniture



有限会社 木曽三岳奥村設計所

本　社　〒397-0101 長野県木曽郡三岳村黒沢6317
東京事務所　〒176-0023 東京都練馬区中村北3-16-19
Phone 0120-59-1113　Facsimile 0264-46-1112

木製家具　特注家具設計製作　造作家具　特殊建築木材及び床材　建築への漆の施工　照明器具などの設計から製作のお手伝いをしております。家具製品カタログ下記までご請求ください。

N 日章工業株式会社

●本　　社 〒101-0047 東京都千代田区内神田３－11－７(日立神田別館) ☎03-3254-3000
●大阪支店 〒541-0043 大阪市中央区高麗橋２－４－６(大正不動産ビル６階) ☎06-201-5704
●仙台営業所 〒980-0021 仙台市青葉区中央３－２－27(日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所ＯＡシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品
エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備
自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器
パーソナルコンピューター
ワードプロセッサー
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品
AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア
ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建設商品
クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

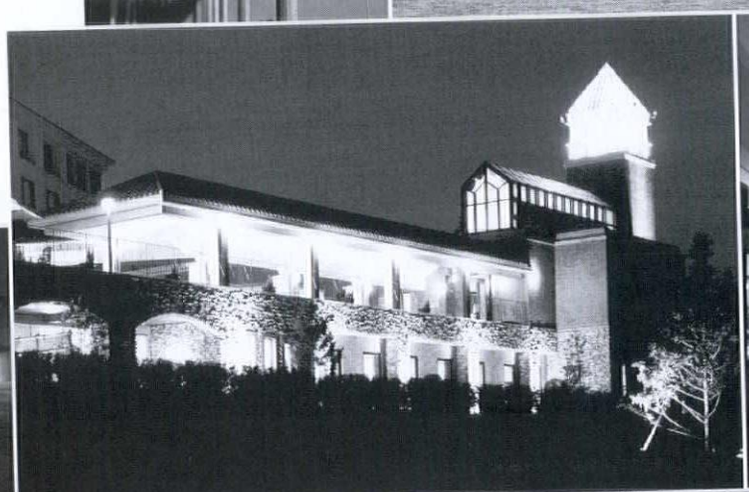
表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。

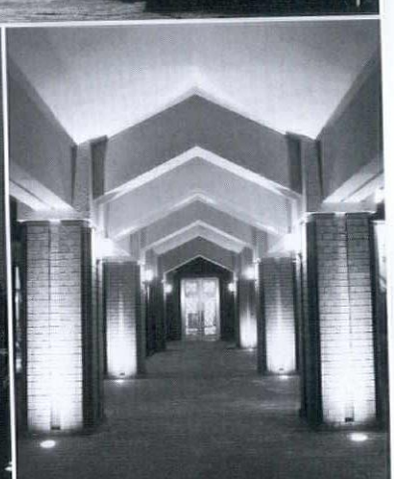


















フルーツパーク富士屋ホテル（山梨）

yamada

山田照明株式会社

本　　社／ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11 TEL.03-3253-5161
横浜支社／ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL.022-267-1630
札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL.011-811-2215
広島営業所 〒730-0865 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119
大阪支社 〒577-0006 東大阪市楠根 2-2-6 TEL.0 6-745-6811
北関東営業所 〒370-0851 高崎市上中居町 51-1 TEL.0273-26-4111
鹿児島営業所 〒890-0055 鹿児島市上荒田町 23-10 TEL.099-258-0031
福岡支社 〒810-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL.092-414-8531
名古屋事務所 〒461-0001 名古屋市東区泉1-21-35 TEL.052-963-8411
宇都宮事務所 〒321-0971 宇都宮市海道町 818-2 TEL.0286-60-1381

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（362）6515
FAX06（365）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX03(3818)1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06（231）4548
FAX06（227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247㈹
FAX（3552）8249

●中外

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（379）1791

東京――東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411

名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

ア　㈱朝日工業社――A17
カ　㈱関電工――表2
鹿島――A4・A5
軽井沢ホテル鹿島ノ森――A6
川本工業㈱――A15
㈱川合工業所――A16
キ　㈲木曾三岳奥村設計所――A18
㈱きんでん――116
ク　栗原工業㈱――A11
サ　三建設備工業㈱――A10
三機工業㈱――125
シ　新菱冷熱工業㈱――129
新日軽㈱――133
ス　鈴木電業㈱――A15
㈱鈴木商会――A17
タ　大興物産㈱――A8
大栄電気㈱――A10
ト　東光電気工事㈱――A1
㈱トーエネック――A11
東洋熱工業㈱――130
ナ　中立電気㈱――A9
ニ　日新工業㈱――A3
㈱西原衛生工業所――A12
日章工業㈱――A18
ヒ　㈱日立製作所――表4
日立電線㈱――136
ホ　ホテルイースト21東京――A7
豊正工業㈱――A16
マ　松下電器産業㈱――A2
ミ　三菱電機㈱――109
ヤ　山田照明㈱――A20
ロ　ロンシール工業㈱――表3
ワ　YKKアーキテクチュラルプロダクツ㈱―126